

# 都野原田遺跡

県営担い手育成基盤整備事業久住町都野  
東部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ



2001.3

久住町教育委員会  
大分県教育委員会

## 序 文

久住町は九州の最高峰である久住山、大船山の南に広がる自然環境に恵まれた美しい高原の町であります。山々から派生する多くの小川は小倉峠を分水嶺としはなる川、大分川・大野川へと流れ、太古より多くの恵みを与えてきました。また、歴史的には古代から豊後と肥後を結ぶ幹線として非常に重要な役割をはたしてきた地域であります。

こうした久住町で平成6年度から農業の活性化、大規模化を目的とした担い手育成基盤整備事業が開始され、それに伴い多くの埋蔵文化財が発見されました。遺跡保存の困難な地区については大規模な発掘調査を実施することになり、多くの成果を得ることができました。

殊に、本報告書の原田遺跡からは古墳時代前期を中心とした住居跡群（約300基）や集団墓が検出され、その内部からは全国的にも類例のない半島系土器をはじめ石銅や鉄剣が出土しました。また、遺跡の周辺からはほぼ同時期の支配層の墓域と考えられる仏原千人塚古墳群が検出され、全国的に注目を集めました。久住町では、この地域全体の拠点集落が良好な状態で検出された重要性から約6割を盛土保存し、本遺跡を後世まで伝えることとしました。遺跡保存は一部しか出来ませんが、本書が文化保護の理解を深める資料また学術資料として多くの人々に広く活用されることを望む次第であります。

終わりに、初期の試掘調査の段階から本調査・報告書の刊行に至るまでご指導ご協力をいただいた大分県教育庁文化課の皆様をはじめ関係各機関、厳しい天候の中で発掘調査を手伝っていただいた各地区の方々にお礼申し上げます。

平成13年3月10日

久住町教育委員会

教育長 志賀長生

## 例 言

- 1、本書は、平成8年度県営担い手育成基盤整備事業都野東部地区に伴い実施した都野原田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は大分県農政部の委託を受け久住町教育委員会が実施し、大分県教育庁文化課及び竹田・直入地方振興局の協力を得た。
- 3、遺物の整理と報告書の作成は久住町教育委員会の委託を受け、平成9～12年度に大分県文化課文化財資料室で行った。
- 4、遺跡・遺構の実測と写真撮影は調査担当者の宮内の他、坂本・田中・渡部・橋原・樺浦・辻出・小沢・相良・是田・吉田・若杉・吉岡・今垣屋・佐藤・長浜があたり、堀 優子（大分県立歴史博物館）の協力を得た。
- 5、遺物整理は大分県文化課文化財資料室で実施し、実測と製図は宮内の他、坂本・佐藤があたり、遺物の撮影は友岡信彦（大分県文化課）があたった。
- 6、本書で使用した方位は全て磁北である。原則として竪穴住居跡は1/60、竊は1/20、土器は1/3で大形品は1/4、製埴土器は1/2、石器は1/4または1/8、鉄器は2/3の縮尺とした。
- 7、本書の執筆・編集は宮内が行った。
- 8、出土遺物は久住町教育委員会で保管している。

# 目 次

<b>第Ⅰ章 序章</b>	
1、調査の経緯	1
2、調査組織の構成	2
3、遺跡の立地と環境	4
<b>第Ⅱ章 調査</b>	
第1節 調査の概要	9
第2節 縄文時代の遺物	13
第3節 弥生時代～古墳時代の遺構と土器	17
(1) A区	17
(2) B区	174
(3) C区	193
(4) 集団墓	206
(5) 甕棺墓	211
(6) 条溝	216
(7) 土坑	220
(8) 掘立柱建物	221
(9) 遺構出土の石製品・石器	223
10 遺構出土の鉄器	230
11 A区未調査の堅穴採取土器	235
第4節 中世の遺構と遺物	251
<b>第Ⅲ章 総括</b>	
1、堅穴の変遷	259



# 挿 図 目 次

第1回	久住町東部の遺跡と都野原国道跡の位置	7	第70回	同	出土土器	70
第2回	都野原田遺跡A区遺構配置図	10	第71回	32号竪穴実測図		71
第3回	都野原田遺跡と周辺の遺跡	11	第72回	同	出土土器1	72
第4回	縄文晩一弥生前期土器1	14	第73回	同	2	73
第5回	同	15	第74回	同	3	74
第6回	同	16	第75回	33号竪穴実測図		75
第7回	1号竪穴実測図	17	第76回	同	出土土器	75
第8回	同	17	第77回	34A・B号竪穴実測図		76
第9回	2号竪穴実測図	18	第78回	同	出土土器	77
第10回	同	19	第79回	35号竪穴実測図		78
第11回	同	20	第80回	同	出土土器	78
第12回	3号竪穴実測図	21	第81回	36号竪穴実測図		79
第13回	同	22	第82回	同	出土土器	79
第14回	4号竪穴実測図	23	第83回	37号竪穴実測図		80
第15回	同	24	第84回	同	出土土器1	81
第16回	同	25	第85回	同	2	81
第17回	同	26	第86回	38号竪穴実測図		82
第18回	5号竪穴実測図	27	第87回	同	出土土器	85
第19回	同	27	第88回	39号竪穴出土土器		86
第20回	6号竪穴実測図	28	第89回	39号竪穴実測図		87
第21回	同	29	第90回	40号竪穴実測図		88
第22回	同	30	第91回	同	出土土器	88
第23回	7号竪穴実測図	31	第92回	41号竪穴実測図		89
第24回	同	32	第93回	同	出土土器1	90
第25回	8号竪穴実測図	33	第94回	同	2	91
第26回	9号竪穴実測図	34	第95回	同	3	92
第27回	8・9号竪穴出土土器	35	第96回	同	4	93
第28回	10号竪穴実測図	36	第97回	42号竪穴実測図		94
第29回	同	37	第98回	同	出土土器	95
第30回	同	38	第99回	43号竪穴実測図		96
第31回	11号竪穴実測図	39	第100回	同	出土土器	97
第32回	同	39	第101回	44号竪穴実測図		98
第33回	12号竪穴出土土器	39	第102回	同	出土土器1	99
第34回	12号竪穴実測図	39	第103回	同	2	100
第35回	13号竪穴実測図	40	第104回	同	3	101
第36回	同	41	第105回	45号竪穴実測図		102
第37回	14号竪穴実測図	42	第106回	同	出土土器	103
第38回	同	43	第107回	46号竪穴実測図		104
第39回	15号竪穴実測図	44	第108回	同	出土土器1	105
第40回	同	45	第109回	同	2	106
第41回	同	46	第110回	47号竪穴実測図		107
第42回	16号竪穴実測図	47	第111回	同	出土土器1	108
第43回	同	48	第112回	同	2	109
第44回	17号竪穴実測図	49	第113回	48号竪穴実測図		110
第45回	同	49	第114回	同	出土土器	111
第46回	18号竪穴実測図	50	第115回	49号竪穴実測図		112
第47回	同	51	第116回	同	出土土器1	113
第48回	19号竪穴実測図	52	第117回	同	2	114
第49回	同	53	第118回	50号竪穴実測図		115
第50回	20号竪穴実測図	54	第119回	同	出土土器	116
第51回	同	55	第120回	51号竪穴実測図		117
第52回	21号竪穴実測図	56	第121回	同	出土土器	118
第53回	同	57	第122回	52号竪穴実測図		119
第54回	22号竪穴実測図	57	第123回	同	出土土器	120
第55回	同	58	第124回	53号竪穴実測図		121
第56回	同	59	第125回	同	出土土器	122
第57回	23・24号竪穴実測図	60	第126回	54号竪穴実測図		123
第58回	同	61	第127回	同	出土土器1	124
第59回	25号竪穴実測図	62	第128回	同	2	125
第60回	同	63	第129回	55号竪穴実測図		126
第61回	26号竪穴実測図	64	第130回	同	出土土器	125
第62回	同	64	第131回	56号竪穴実測図		126
第63回	27号竪穴実測図	65	第132回	同	出土土器	127
第64回	28号竪穴実測図	66	第133回	57号竪穴実測図		128
第65回	29号竪穴実測図	66	第134回	同	出土土器	129
第66回	30号竪穴実測図	67	第135回	63号竪穴実測図		130
第67回	30号竪穴出土土器1	68	第136回	同	出土土器	131
第68回	同	69	第137回	77号竪穴実測図		131
第69回	31号竪穴実測図	70	第138回	100号竪穴実測図		133

第139回	100号堅穴	出上土器 1	135
第140回	同	2	136
第141回	115号堅穴実測回		137
第142回	同	出上土器	137
第143回	171号堅穴出土土器		138
第144回	171号堅穴実測回		139
第145回	172号堅穴実測回		141
第146回	同	出上土器	143
第147回	174号堅穴実測回		144
第148回	同	出上土器	144
第149回	175号堅穴実測回		145
第150回	同	出上土器	145
第151回	176号堅穴実測回		146
第152回	同	出上土器	146
第153回	201号堅穴実測回		147
第154回	同	出上土器	147
第155回	202号堅穴実測回		148
第156回	同	出上土器 1	149
第157回	同	2	150
第158回	同	3	151
第159回	209号堅穴実測回		152
第160回	同	1	153
第161回	同	2	154
第162回	210号堅穴実測回		154
第163回	同	出上土器	155
第164回	211号堅穴実測回		156
第165回	同	出上土器	156
第166回	212号堅穴実測回		157
第167回	同	出上土器 1	158
第168回	同	2	159
第169回	213・214号堅穴実測回		160
第170回	213号堅穴出土土器 1		161
第171回	213・214号堅穴出土土器		162
第172回	215号堅穴実測回		163
第173回	同	出上土器 1	164
第174回	同	2	165
第175回	216A・B号堅穴実測回		166
第176回	216A号堅穴出土土器		167
第177回	216B号堅穴出土土器		168
第178回	217号堅穴実測回		169
第179回	同	出上土器	169
第180回	218号堅穴実測回		169
第181回	同	出上土器	170
第182回	219号堅穴実測回		171
第183回	同	出上土器	172
第184回	220号堅穴実測回		173
第185回	同	出上土器	173
第186回	B区遺構配置回		174
第187回	251号堅穴実測回		175
第188回	同	出上土器	176
第189回	252号堅穴実測回		177
第190回	同	出上土器 1	178
第191回	同	2	179
第192回	253号堅穴実測回		179
第193回	同	出上土器	180
第194回	254号堅穴実測回		181
第195回	同	出上土器	182
第196回	255・256号堅穴実測回		183
第197回	255号堅穴出土土器		184
第198回	256号堅穴出土土器 1		185
第199回	同	2	186
第200回	257号堅穴実測回		187
第201回	同	出上土器	188
第202回	258号堅穴実測回		189
第203回	同	出上土器	189
第204回	259号堅穴実測回		190
第205回	260号堅穴実測回		190
第206回	同	出上土器	191
第207回	261号堅穴実測回		191
第208回	同	出上土器	191
第209回	262号堅穴実測回		192
第210回	同	出上土器	192

第211回	C区遺構配置回		193
第212回	263号堅穴実測回		194
第213回	同	出上土器 1	194
第214回	同	2	195
第215回	266号堅穴実測回		196
第216回	同	出上土器	197
第217回	267号堅穴実測回		197
第218回	同	出上土器	198
第219回	268号堅穴実測回		199
第220回	269号堅穴実測回		199
第221回	同	出上土器	200
第222回	270号堅穴実測回		200
第223回	同	出上土器	201
第224回	271号堅穴実測回		202
第225回	同	出上土器	203
第226回	272号堅穴実測回		203
第227回	273号堅穴実測回		204
第228回	同	出上土器	205
第229回	A区集団分布回		207
第230回	1～3号墓実測回		209
第231回	17号・18号・22号墓実測回		210
第232回	1・2・17号墓出土土器		210
第233回	1号小児壺棺実測回		211
第234回	2号小児壺棺実測回		211
第235回	3号小児壺棺実測回		212
第236回	4号小児壺棺実測回		212
第237回	1・2号小児壺棺実測回		213・214
第238回	3・4号小児壺棺実測回		215
第239回	条溝の位置		216
第240回	朱清実測回		217
第241回	朱清出土土器 1		218
第242回	同	2	219
第243回	1・2号土坑実測回		220
第244回	3号土坑実測回		220
第245回	同	出上土器	221
第246回	掘建柱建物の分布回		221
第247回	掘建柱建物 1～7 実測回		222
第248回	遺構出土土器 1		223
第249回	同	2	226
第250回	同	3	227
第251回	同	4	228
第252回	同	5	229
第253回	遺構出土土器 1		232
第254回	同	2	233
第255回	同	3	234
第256回	A区堅穴採取土器 1		236
第257回	土器採取堅穴の位置 1		237
第258回	A区堅穴採取土器 2		237
第259回	同	3	238
第260回	同	4	239
第261回	土器採取堅穴の位置 2		240
第262回	A区堅穴採取土器 5		241
第263回	同	6	242
第264回	同	7	243
第265回	A区堅穴採取土器 8		244
第266回	同	9	245
第267回	同	10	246
第268回	土器採取堅穴の位置 3		247
第269回	A区堅穴採取土器 11		248
第270回	同	12	249
第271回	同	13	250
第272回	中世遺構の位置		251
第273回	中世遺構 1 実測回		251
第274回	中世遺構 2 実測回		252
第275回	中世遺構 3 実測回		253
第276回	中世遺構 3 出土土器		253
第277回	中世遺構 3 出土土器		254
第278回	堅穴の要速回 1		258
第279回	同	2	260
第280回	同	3	263

## 図 版 目 次

- トビラ 都野原田遺跡・仏原千人塚古墳群・原田第Ⅲ遺跡と久住山系  
P.L.1 都野原田遺跡全景  
P.L.2 同、A区集団墓全景  
P.L.3 100号竪穴と周辺の遺構、40～55号竪穴  
P.L.4 都野原田遺跡全景  
P.L.5 薄雪の遺跡と久住山系、1号竪穴完掘状況、2号竪穴遺物出土状況  
P.L.6 2号竪穴遺物出土状況、同、同カヤ?検出状況  
P.L.7 2号竪穴完掘状況、3号竪穴完掘状況、4号竪穴遺物出土状況  
P.L.8 4号竪穴遺物出土状況、4号竪穴完掘状況、5号竪穴完掘状況  
P.L.9 6号竪穴遺物出土状況、同、6号竪穴完掘状況  
P.L.10 7号竪穴完掘状況、8号竪穴完掘状況、9号竪穴完掘状況  
P.L.11 10号竪穴遺物出土状況、同、10号竪穴完掘状況  
P.L.12 11・12号竪穴完掘状況、13号竪穴完掘状況、14号竪穴遺物出土状況  
P.L.13 14号竪穴遺物出土状況、15号竪穴遺物出土状況、同  
P.L.14 15号竪穴完掘状況、16号竪穴遺物出土状況、17号竪穴完掘状況  
P.L.15 18号竪穴遺物出土状況、同完掘状況、19号竪穴遺物出土状況  
P.L.16 19号竪穴鉄線出土状況、同完掘状況、20号遺物出土状況  
P.L.17 20号竪穴完掘状況、21号竪穴完掘状況、22号竪穴遺物出土状況  
P.L.18 22号竪穴完掘状況、23・24号竪穴遺物出土状況、24号竪穴小刀出土状況  
P.L.19 20・22～24号竪穴完掘状況、25号竪穴遺物出土状況、同完掘状況  
P.L.20 26号竪穴完掘状況、27・28号竪穴完掘状況、30号竪穴遺物出土状況  
P.L.21 30号遺物出土状況、同、同完掘状況  
P.L.22 31号竪穴完掘状況、32号竪穴遺物出土状況、同  
P.L.23 32号竪穴遺物出土状況、同完掘状況、33号竪穴完掘状況  
P.L.24 34A・B号竪穴遺物出土状況、34A号竪穴石剣出土状況、34A・B号完掘状況  
P.L.25 35号竪穴遺物出土状況、同完掘状況、36号竪穴完掘状況  
P.L.26 37号竪穴完掘状況、38号竪穴完掘状況、39号竪穴完掘状況  
P.L.27 41号竪穴遺物出土状況、同、42号竪穴遺物出土状況  
P.L.28 42号竪穴完掘状況、43号竪穴遺物出土状況、同完掘状況  
P.L.29 44号竪穴完掘状況、45・46・47号竪穴遺物出土状況、47号遺物出土状況  
P.L.30 45・46・47号竪穴完掘状況、48号竪穴完掘状況、49号竪穴遺物出土状況  
P.L.31 49号竪穴遺物出土状況、同完掘状況、50・51号竪穴遺物出土状況  
P.L.32 50号竪穴柱穴内土器検出状況、50号竪穴完掘状況、51号竪穴遺物出土状況  
P.L.33 51号竪穴完掘状況、52号竪穴完掘状況、53号竪穴土層  
P.L.34 53号竪穴完掘状況、54号竪穴遺物出土状況、同  
P.L.35 54号竪穴完掘状況、55号竪穴遺物出土状況、同完掘状況  
P.L.36 56号竪穴遺物出土状況、同鉄線出土状況、同完掘状況  
P.L.37 57号竪穴完掘状況、63号竪穴完掘状況、77号竪穴完掘状況  
P.L.38 100号竪穴遺物出土状況、同小丸底甕出土状況、同出入口と柱穴  
P.L.39 100号竪穴出入口、同完掘状況、115号竪穴完掘状況  
P.L.40 171号竪穴完掘状況、同上坑遺物出土状況、172号竪穴完掘状況  
P.L.41 174・175号竪穴完掘状況、176号完掘状況、201号竪穴遺物出土状況  
P.L.42 202号竪穴遺物出土状況、同、201・202号完掘状況  
P.L.43 209・210号竪穴遺物出土状況、209号遺物出土状況、209・210号完掘状況  
P.L.44 211号竪穴遺物出土状況、同石甕出土状況、211号完掘状況  
P.L.45 212号竪穴石出土状況、同、212号完掘状況  
P.L.46 213・214号竪穴石出土状況、同完掘状況、215号竪穴完掘状況  
P.L.47 216A・B号遺物出土状況、同上層、同完掘状況  
P.L.48 217号竪穴完掘状況、218号遺物出土状況、同完掘状況  
P.L.49 219号竪穴遺物出土状況、同主柱穴内土器検出状況、同完掘状況  
P.L.50 220号竪穴完掘状況、251号竪穴完掘状況、252号竪穴完掘状況  
P.L.51 253号竪穴完掘状況、254号竪穴完掘状況、255・256号竪穴完掘状況

- P L 52 257号竖穴完掘状况、258号竖穴完掘状况、259号竖穴完掘状况  
P L 53 260号竖穴完掘状况、261・262号竖穴完掘状况、建物3と100号竖穴の周辺  
P L 54 265号竖穴遺物出土状况、同完掘状况、266号竖穴完掘状况  
P L 55 267号竖穴完掘状况、268号竖穴完掘状况、269号竖穴完掘状况  
P L 56 270号竖穴完掘状况、271号竖穴完掘状况、272号竖穴完掘状况  
P L 57 273号竖穴完掘状况、条溝検出状况、条溝完掘状况  
P L 58 集団墓全景  
P L 59 1・2号木棺墓完掘状况、1号木棺墓完掘状况、同鉄剣出土状况  
P L 60 2号木棺墓完掘状况、13号木棺墓完掘状况、同鉄剣出土状况  
P L 61 1号小児甕棺検出状况、2号小児甕棺検出状况、4号小児甕棺検出状况  
P L 62 1号竖穴出土土器、2号竖穴出土土器  
P L 63 3号竖穴出土土器、4号竖穴出土土器  
P L 64 4号竖穴出土土器、5号竖穴出土土器  
P L 65 6号竖穴出土土器  
P L 66 7号竖穴出土土器、10号竖穴出土土器  
P L 67 11号竖穴出土土器、12号竖穴出土土器、13号竖穴出土土器  
P L 68 14号竖穴出土土器、15号竖穴出土土器  
P L 69 16号竖穴出土土器、17号竖穴出土土器、18号竖穴出土土器  
P L 70 19号竖穴出土土器、20号竖穴出土土器  
P L 71 21号竖穴出土土器、22号竖穴出土土器  
P L 72 23号竖穴出土土器、24号竖穴出土土器、25号竖穴出土土器  
P L 73 25号竖穴出土土器、26号竖穴出土土器、30号竖穴出土土器  
P L 74 31号竖穴出土土器、32号竖穴出土土器  
P L 75 32号竖穴出土土器、33号竖穴出土土器、34号竖穴出土土器  
P L 76 35号竖穴出土土器、36号竖穴出土土器、37号竖穴出土土器  
P L 77 38号竖穴出土土器、39号竖穴出土土器、41号竖穴出土土器  
P L 78 41号竖穴出土土器  
P L 79 41号竖穴出土土器、42号竖穴出土土器  
P L 80 43号竖穴出土土器、44号竖穴出土土器  
P L 81 44号竖穴出土土器、45号竖穴出土土器  
P L 82 45号竖穴出土土器、46号竖穴出土土器  
P L 83 47号竖穴出土土器  
P L 84 48号竖穴出土土器、49号竖穴出土土器、50号竖穴出土土器  
P L 85 51号竖穴出土土器、52号竖穴出土土器  
P L 86 53号竖穴出土土器、54号竖穴出土土器、55号竖穴出土土器  
P L 87 56号竖穴出土土器、57号竖穴出土土器、63号竖穴出土土器  
P L 88 100号竖穴出土土器、115号竖穴出土土器  
P L 89 171号竖穴出土土器、172号竖穴出土土器  
P L 90 174号竖穴出土土器、175号竖穴出土土器、176号竖穴出土土器、201号竖穴出土土器  
P L 91 202号竖穴出土土器  
P L 92 209号竖穴出土土器、210号竖穴出土土器  
P L 93 211号竖穴出土土器、212号竖穴出土土器、213号竖穴出土土器  
P L 94 213号竖穴出土土器  
P L 95 214号竖穴出土土器、215号竖穴出土土器・輪羽口、216A号竖穴出土土器  
P L 96 216B号竖穴出土土器、218号竖穴出土土器、219号竖穴出土土器  
P L 97 251号竖穴出土土器、252号竖穴出土土器  
P L 98 253号竖穴出土土器、254号竖穴出土土器、255号竖穴出土土器  
P L 99 256号竖穴出土土器、257号竖穴出土土器  
P L 100 261号竖穴出土土器、262号竖穴出土土器、265号竖穴出土土器、266号竖穴出土土器  
P L 101 267号竖穴出土土器、270号竖穴出土土器、271号竖穴出土土器、273号竖穴出土土器  
P L 102 条溝出土土器、1号小児甕棺、3号小児甕棺、2号小児甕棺、4号小児甕棺  
P L 103 各竖穴出土鉄器、同石器  
P L 104 各竖穴出土石器、同勾玉・管玉、34A号竖穴出土石銅、25号竖穴出土石銅

# 第 I 章 序 章

---

## 第I章 序 章

### 1、調査の経緯

直人郡久住町は、大分県の南西の内陸部に位置し、九州本島最高峰である久住山・人船山等の南麓から阿蘇外輪山の北東の一角を占める。町内は、ほぼ中央を北西から南東に延びる小倉峠を分水嶺に大分川支流の芦川水系と大野川支流の稲葉川水系に大きく二分される。水田は町の南部地域の各水系に展開しているが、複雑で起伏の多い地形から不整形な圃田や追田が卓越している。圃田の整備も県下の他地域に比べ遅れていたが、平成5年度から農業基盤の整備と中核農家育成等を目的とした県営担い手育成基盤整備事業部野東部地区の計画が町内の大字仏原・右氏の一帯で策定・実施されることとなった。

この事業の区画は約1haの大規模水田の基盤整備を標準とし、全幅7mの基幹道路やその支線道路の敷設等、本地域有史以来最大の大規模開発事業であった。また、平成6年度から開始された同事業都野西部地区と併せ、年間50haを超える圃田整備が数年間にわたり計画されることとなった。これは、時の大きな政治問題であった米の部分輸入自由化（ガットウルグアイラウンド）の合意に伴い増加された農業基盤整備関係予算の配分に起因するものである。この開発に伴う埋蔵文化財の分布・試掘調査の結果、当初の予想を大幅に覆す遺跡の存在が確認され、圃田整備事業と遺跡の保存・保護との調整が緊急の問題として浮上した。この為、大分県文化課では関係各機関との調整・協議や本調査の実施にあたり全面的協力と指導を行なうこととなった。

平成6年度は大字仏原の石田遺跡と市第I遺跡の調査が実施された。石田遺跡からは7世紀末頃の大形掘立柱建物・竪穴住居跡や、石井入口遺跡に次ぎ県下2例目の小型韓鐘が弥生後期初頃の住居跡から出土し、市第I遺跡からは平安前期の竪穴の上面から銅鏡が出土し、各方面の注目を集めると共にこの地域の重要性が明らかとなり始めた。平成7年度は約86haが工事の対象面積となり、その中で23箇所において遺跡の存在が試掘調査により確認され、協議の結果その内の約半数の11遺跡については工法変更による保存処置が採られた。しかしながら、記録保存の本調査が実施されたのは大字右氏の板切第I～IV遺跡、大字仏原の市第II～IV遺跡・尾首遺跡・小原田遺跡・仏原第I～III遺跡の計12遺跡を数え、その総調査面積は27,860㎡に及んだ。これらの遺跡は弥生終末から古墳前期を中心とする板切第II～IV遺跡・市第IV遺跡・奈良～平安時代を主とする尾首遺跡・市第II遺跡、中～近世を主とする小原田遺跡・仏原第I～III遺跡に大きく分けられる。また、平成7年3月末には都野原田遺跡の南端部を緊急調査することとなり、約10基の住居跡を中心とする遺構が検出されたが、これを除く各遺跡の報告書は既に刊行されている。

平成8年度の工事は大字右氏・仏原の約51haが対象となり、予定地の試掘調査と保存協議の結果、計8遺跡で総面積65,350㎡に及ぶ県下でも類のない大規模調査が実施されることとなった。その中で注目を集めた遺跡としては、弥生中期から古墳時代中期の田入部全域の拠点集落跡と考えられる都野原田遺跡と、その南東に隣接し古墳時代前期前半に造営された前方後方墳・前方後円墳各1基を中心とする仏原千人塚古墳群がある。これに加え、都野原田遺跡と谷を挟み東側に位置し弥生中～後期を中心とする時期の集落跡である都野原田第III遺跡・トグウ遺跡・板切第V遺跡・上屋敷遺跡、古墳時代後期から奈良時代の小集落跡である市第V遺跡、多数の掘立柱建物が出発され中世の支配層の屋敷と推定される小路遺跡などの発掘調査が行われた。

都野原田遺跡の調査は平成8年5月中旬に開始し12月下旬に終了するまでの8カ月の期間を要した。また、同年9月からは原田第III遺跡と仏原千人塚古墳群の本調査も並行して実施することとなり、3遺跡の調査総面積は4.8haに及んだ。

都野原田遺跡の調査は、重機による表土除去作業と並行しながら人力による遺構検出作業を行ったが、水田運営に伴う割平は比較的小範囲に留まり丘陵のほぼ全域に竪穴住居跡等の遺構が分布することが判明したのは8月末であった。全長約400m、最大幅約150mの不整形円形を呈する調査区（約3.5ha）からは弥生中期から古墳



時代の堅穴約250基、木棺墓50基、掘立柱建物7棟、小児嬰棺墓3基、集落の北限を画する溝1条が検出され、この他に古代から中世の溝（用水路）2条、堅穴2基、土壇や多数の柱穴・土坑が確認された。未調査地区を含めると堅穴の総数は300基を超えることは確実であり、弥生後期から古墳時代の集落跡としては県下最大規模の一つであると共に、廃絶時の状況が非常に良く保ち集落の内部構造やその変遷等の集落を巡る諸問題の解明に第一級の資料となり得る。また、調査区内からは縄文晩期終末から弥生前期の土器等も出土し集落遺跡としての命脈も長い。内部調査を行った堅穴遺構は約100基・木棺墓6基に留まるが、各堅穴の検出面に現れた大形土器片等はほぼ全て採取し、約半数の堅穴の所属時期は把握可能である。

原田第三遺跡からは弥生中期から古墳前期に及ぶ住居跡30数棟に加え木棺墓39基を主とする遺構が検出されたが、その中心は弥生後期の所家であり木棺墓の殆どもこの時期に営まれたものと思われる。木棺墓は特定の墓域を形成せず、住居跡の周辺に点在し一部は住居跡と重複し、その頭位は一定しないこと等の特徴が看取される。さらに、内部構造も都野原田遺跡や仏原千人塚古墳群の集団墓と異にするものが主体を占め、これまで内部部で不明であった弥生時代後期の集落と墓の実態の一端が初めて把握されただけでなく、時代の変化を現す遺跡としてもその重要性は高い。

仏原千人塚古墳群からは、本地域初めての前方後方墳1基・前方後円墳1基を主とし、木棺・石棺墓計50基、堅穴住居跡等6基などの遺構が検出された。2基の古墳の中では前方後方墳が先行するが、いずれも前期前半代に置かれるものであり、大分川流域の前期古墳としては最古に位置づけられると共に、周辺に集団墓と墓守りのイエと考えられる住居跡を伴うものとしても絶好の情報・資料を提供するものである。

このように次々と重要な発見が続く新開等のマスコミも大々的に報道することとなり、各遺跡の取り扱いが緊急の問題として浮上した。また、県文化財保護審議会委員や市民団体など多方面からの遺跡保存の要望が出された。この為、調査期間・経費の見直しの問題と共に遺跡保存の協議が再度持たれた。その結果、関係各機関の協力と地元地権者の同意を得、都野原田遺跡の集団墓を含む約2haの範囲と仏原千人塚古墳群の全域については、幸運にも工法変更による保存処置が採られることとなった。この間、10月6日には現地説明会を開催した他、町議会文教委員会や地元小・中学生及び文化財関係者を始め見学希望の団体には随時随時の説明会を持った。このような経過を経て各遺跡の調査は数多くの成果と共に無事終了したが、これは地元作業員の皆様を始め関係各位・各機関のご協力・ご支援の賜物であり、深甚の感謝を申し上げます。

## 2、調査組織の構成

調査主体 久住町教育委員会

調査地区 久住町大字仏原

調査期間 都野原田遺跡 (平成8年5月20日～12月25日)

調査指導 横山 浩一 (日本考古学協会会長 現福岡市博物館顧問)  
 賀川 光夫 (大分県文化財保護審議会会長 現別府大学名誉教授)  
 後藤 宗俊 (県文化財保護審議会委員 別府大学教授)  
 小田富士雄 ( 同 福岡大学教授)  
 甲元 眞之 (熊本大学教授)  
 下條 信行 (愛媛大学教授)  
 田中 良之 (九州大学教授)  
 武末 純 (福岡大学助教授 現教授)  
 溝口 孝司 (九州大学助教授)  
 坂本 嘉弘 (大分市歴史資料館主幹兼学芸係長 現大分県文化課主幹)

調査員 清水 宗昭 (大分県文化課主幹兼埋蔵文化財第一係長 現参事兼課長補佐)  
 宮内 克己 ( 同埋蔵文化財第一係主査 現大分県立歴史博物館主幹研究員 調査担当)  
 田中 裕介 ( 同 主任 現主査)  
 渡辺 作司 ( 同 嘱託)、橋本 幸治 ( 同 嘱託)  
 棟浦 幸徳 (久住町教育委員会社会教育課 嘱託 現主任)、楊原 嘉明 ( 同 嘱託)

調査事務 豊津 大乗 (久住町教育委員会 教育長、平成6～10年度)  
 志賀 長生 ( 同 、平成11～ )  
 内柳 勇 (久住町教育委員会社会教育課長、平成8年度)  
 竹下 善治 ( 同 、平成9～ )  
 麻生 宗洋 ( 同 社会教育係長、平成8～10年度)  
 後藤 光博 ( 同 同 、平成11～ )

調査補助 辻川淳一郎 (九州大学大学院生)、小沢佳憲 ( 同 )、是田 敦 (福岡大学大学院生)、吉田和彦 (奈良大学大学院生)、若杉竜太 (熊本大学大学院生)、佐藤勇二 (別府大学生)、今塩屋武行 (福岡大学生)、相良大輔 ( 同 )、長浜弘幸 (奈良大学生)、吉岡和哉 (熊本大学生)

作業員 伊藤睦一、伊藤須美子、吉野正臣、吉野文子、吉野千恵子、藤山ユキエ、志藤秀信、岡 栄子、石河勝見、岩田日出子、佐東ツルエ、首藤豊子、福沢整子、阿部ヒデア子、阿部勇治、森高秋男、齋藤千代子、広瀬貴美子、馬場百合子、吉竹松美、大塚スミ子、竹ノスマ子、西村優子、原尻初江、原尻市子、菊地光吉、如法寺文比古、岩屋ミエ子、成安ヤス子、大久保弘子、成安アキ子、成安秋美、成安トキ子、後藤美代子、後藤フジ子、後藤典子、大津ツユ子、工藤美恵、後藤幸重、西藤秀夫、内田一代、清水 三月、清水紀子、清水由美子、若山キヨ子、足立信子、大久保節子、大久保芳子、松尾利恵美、工藤慎子、松尾千代美、衛藤芳美、本田和子、小沢スミエ、小沢津江、阿南辰子、御谷孝子、倉橋照美、倉橋千恵子、倉橋山人、倉橋十四子、田辺敏子、城井美重子、渡辺トヨ子 (順不同) の皆さん

調査協力 石野博信 (徳島文理大学教授)、西谷 正 (九州大学教授)、岸本義彦 (文化庁)、木村幾多郎 (大分県歴史資料館長)、平尾 胖 (竹田市文化財課長)、金 宰賢 (九州大学助手)、大分県農政部農村整備課、同竹田地方振興局耕地課、久住町建設課、大分県教育庁文化課



### 3、遺跡の立地と環境

#### (1) 自然環境

各遺跡の所在する久住町は、九州の屋根と称される国立公園の一部にも指定されている久住山・大船山等からなる九重連山（標高約1,780m）の南側に展開する高原と山地の町である。その東は直入郡直入町と、西は熊本県阿蘇郡南小国町と、南は竹田市と、北は玖珠郡九重町と大分県庄内町と各々接し、肥後藩の参勤交代道路であった肥後往還と竹田・日田を結ぶ日田往還の交差点にあたり、古来より九州島の東西南北を結ぶ内陸交通の要衝を占める。

町内の地質は、九重火山群と阿蘇火山から噴出した火山灰・火砕流等の火山噴出物によって厚く覆われている。その中で、比較的平坦な丘陵地にはローム層を始めアカホヤ層、九重火山群起源の各種火山灰層、阿蘇のクロボク層等が層位的に堆積するが、九重火山群の火山灰層は7枚を数えるものの一部を除きその噴出年代や分布は明確ではない。また、当地域の気候は、夏季は涼しく冬季は厳寒でその気温差が大きい典型的な山地型に属する。町の中心部である久住の年間平均気温（1973年）は12.9℃で大分市に比べ約3℃低く、12月から2月の冬場の平均気温は2～4℃余りやや低いが九重山系北側の飯田高原よりは温和である。その年間降水量は1993<sup>2)</sup>と県下でもやや多いが、九重山系北側は約2500<sup>3)</sup>もの多雨地域にあたり、これらの雨水は山麓に無数の湧水を生じさせ、第一級河川である大分川と大野川の源流の一画を形成する。

その植生は山地・高原・集落周辺の各々により様相が異なり、山地の代表的植物としては「大船山のミヤマキリシマ群落」や「久住山のコケモモ群落」が広く知られ国指定天然記念物として保護されており、黒岳一帯はブナ・オヒョウ・ミズナラ等の原生林に覆われ、九州で唯一のイヌワシの営巣地としても貴重である。山裾や高原には数1haに及ぶ広大なススキの群集・草地等が、集落とその周辺は農耕地とスギやヒノキ等の人工林が卓越する。このような多様な自然環境の中で、町内では農業・牧畜・林業・観光が基幹産業として営まれ、最近では登山者や温泉客のみならず、マラソン・駅伝やラグビーの合宿地としても知られる。町の人口約4千人の主体を占める農家で稲作を主としながら畜産・雑草・施設野菜・花卉栽培等の複合経営が活発に行われ、1戸当たりの経営規模も県平均を上回る。

#### (2) 歴史的環境

昭和59年発行の「久住町誌」によると、旧石器～古墳時代の遺跡として計30箇所が知られ主要遺物の紹介もなされているが、発掘調査に基づくものは縄文後期のコウゴ-松遺跡と古墳中期の湯ノ上古墳の2例に止まる。その後、平成4年現在の周知遺跡を示した「大分県遺跡地図」には計46箇所が登録されている。これらの遺跡の大半は弥生から古墳時代の遺跡であり、当地域の先史時代から中世に至る間には考古学上の空白期間が多かったことにも因り、その歴史的位置も単なる山間地として等閑視されていた感があった。しかしながら、近年の圃場整備に伴う調査により30箇所を超える各時代の遺跡の存在が確認され、遺跡の規模・性格や出土遺物の質の高さからもこの地域の重要性は高まりつつある。

久住町における考古学調査の第一歩は、昭和40年に実施された大字宍氏に所在する湯ノ上古墳の調査に始まる。地元中学生によって石棺の存在が確認され、急遽遺跡保存のための調査が計画された。古墳は直径約21mの円墳と思われ、主体部は2基の箱式石棺であったが1基は戦前に盗掘を受け石棺材のみ残る。調査された2号石棺からは人骨片と巻貝製貝輪<sup>4)</sup>、刀子等が出土し、石棺の構造等から5世紀代の造営と推定されている。また、古墳の立地や周辺の地名から「牧」との関連を指摘している点は注目される。その後、昭和48年には大字久住において町営グラウンドの建設に伴うコウゴ-松遺跡の発掘調査が行われた。並木式など若干の中期土器を除き、その主体は瀬戸内系の中津・福山KⅡ式と九州在来の阿高式系土器と小池原上層式、両者の折衷系であり本遺跡上の一群を標識とするコウゴ-松式土器等からなる。これらは、他地域との関係や磨石縄文土器の在り地への影響とその受容を示す資料としても重要であり、県下における縄文時代後期前葉の代表的遺跡として広く知られる。

この他、旧石器時代の遺物としては大字白丹の赤土板遺跡で刮片尖頭器と刮片が、縄文時代では大字白丹の寺原遺跡で早期の押型土器や大宇根木の柚木遺跡で後期の鐘崎式土器等が『久住町誌』に紹介されている。また、弥生～古墳時代の遺跡や資料では、大字有氏の有氏遺跡、小城原遺跡、塔ノ原遺跡、石原遺跡、内畑遺跡、納池遺跡、小竹古墳、須崎石棺・横穴墓等の存在が知られていた。この中では、大字久住の建宮遺跡出土の銅戈や石原遺跡の弥生前～中期の石剣等や伝承ではあるが小竹横穴出土の甲冑など注目される資料もある。しかしながら、各遺跡の規模・構造など実態は久しく不明のままであった。

その後、平成6年度以降新たに発見された遺跡の中に旧石器時代に属するものは無い。縄文時代の遺物も少なく石田遺跡や七里田遺跡で後・晩期の土器が若干出土しているほか、隣接する直人町の河岸段丘部に立地する前田Ⅲ遺跡・三反田遺跡・日向塚遺跡・横枕遺跡等で早～晩期に至る各時期の資料の出土が認められるが、全体的に遺物の量はあまり多くなく比較的小規模な遺跡が多い。弥生時代前～中期前半の住居跡も未検出ではあるものの、石田遺跡・市第Ⅲ遺跡・板切第Ⅲ遺跡・原田遺跡などにおいて刻目突帯文土器や下城式土器等が一定量出土しており、弥生時代の比較的早い段階から水稲農耕文化の当地への進出と拡散及び定着が窺える。そして、中期以降には数棟の竪穴住居からなる集落跡の存在が都野原田遺跡・原田第Ⅲ遺跡・小城原遺跡・トグウ遺跡・上屋敷遺跡等で確認されている他、平成11年度に調査が行われた大字久住の脇遺跡では中期後半の竪穴約20基が検出され、この段階から地域の中心的集落が出現していることが判明した。これとはほぼ同様の現象は後期中頃まで続くようであり、都野原田遺跡・原田第Ⅲ遺跡や小城原遺跡等では引き続き中心的集落として存続し、後期後半からは竪穴の数が増加すると共に一部には木棺墓が作られるようである。

弥生時代後期末から古墳時代前期の集落遺跡には、板切第Ⅱ遺跡を中心とする板切遺跡群（第Ⅱ～Ⅴ）・市第Ⅳ遺跡・上城遺跡・花立遺跡・上屋敷遺跡・三反田遺跡等と前述の3遺跡がある。この中で、弥生後期以降の中心的集落跡と思われる小城原遺跡や原田第Ⅲ遺跡では規模が縮小する傾向があり、これとは逆に都野原田遺跡では明らかに竪穴の増加と集落の規模拡大が認められ、一時期数十棟からなる大規模拠点集落へと発達するものと思われる。その後、古墳時代中期になると台地・丘陵上に立地する集落遺跡は急激にその姿を消すようであり、都野原田遺跡で若干検出されている以外に当該期の竪穴は全く認められない。

一方、弥生時代後期後半と推定される墓は原田第Ⅲ遺跡において木棺墓20基余りが検出されているが、その規模・構造や副葬品等に明確な格差は殆ど認められず、2基1対が単位をなすようであるが明確な墓域は無く各単位の方位も一定しない。これに対し、古墳時代前期の墳墓には、都野原田遺跡において約50基からなる集団墓（木棺墓）が、小城原遺跡では木棺墓10数基と石棺墓1基が、トグウ遺跡では木棺墓10数基が、各々集落の縁辺部分に墓域として形成されている。また、仏原千人塚古墳群では前方後方墳1基と前方後円墳1基に、集団墓（約50基）と首長墳の墓守りのイエと考えられる住居跡4基が検出されている。これらの集団墓の方位はほぼ一定し、墓域の形成などにも強い規制を見ることが可能であり、高塚墳と併せて古墳時代の社会（階層）構造の一端が良好に反映されていると言える。さらに、中期の所産と考えられる湯ノ上古墳に隣接し、前期中頃の中原方周溝濠が存在することも明らかとなり、各集落遺跡とこれに伴う墳墓の存在が物語るように古墳時代においては、本地域が旧日人部の奥津城であったことが判明した。

古墳時代中期から後期に営まれた集落跡としてその概要が判明するものはなく、都野原田遺跡で住居跡数基が認められた他、市第Ⅴ遺跡で住居跡1基が検出されているに過ぎない。この時期以降の集落は、市川谷部の河岸段丘とその周辺に数棟ずつ点在するようである。そして、この現象は次の飛鳥時代から平安時代になると明瞭となり、市第Ⅰ遺跡で住居跡2基、同第Ⅲ遺跡で2～3基と掘立柱建物1棟、同第Ⅴ遺跡で住居跡3基、尾首遺跡では2基が検出されている。これらの遺跡は典型的な小規模点在タイプと言えるが、これと全く対照的な集落跡に中殿遺跡がある。市川の谷の入り口に近い中殿遺跡からは、7世紀末頃から平安時代前期の竪穴住居跡計42基が南側に突き出した小規模な河岸段丘部2箇所に別れ確認され、特にB地区の竪穴は集中度の高さで重複が激しいことから地勢的重要性が窺われる。この遺跡と市川を隔て対岸に存在する石田遺跡からは7世紀末から奈良時

代初期頃の堅穴住居跡4基、やや大形の掘立柱建物4棟、2×2間の小形掘立柱建物2棟とこれらの遺構を区画すると考えられる小溝等が検出されている。これらは堅穴住居2基・大形建物2棟・小形建物1棟がセットとなり、連続する2時期に営まれた可能性が強く「評」等の公的施設の一環であると想定されよう。また、平成9年度に調査された上城遺跡においても円田遺跡と同様の奈良時代後半から平安時代前期に属するやや大形の掘立柱建物2棟が確認されているが、この中の1棟の柱穴から「海老杖礎」が出土し、これらの掘立柱建物が「評」または「郡」等の施設である「倉」の一部を構成するものである可能性が強く浮上した。

これらに加え、市第1遺跡出土の銅碗蓋や墨書土器（大・家）、尾首遺跡の黒書土器（神長又は郷長・山）と刺書土器（大）や各遺跡から出土している製塩土器等は、球摩郷にあたる当地域が旧直入郡の中心的位置を占めていたことを示すと共に、郡内に置かれた「駅」と「牧」の存在を考慮すれば、古代においてもここを掌握することが九州内部の治世においても重要であったことが窺われよう。そして、「豊後国風土記」や「日本書紀」に記されている景行天皇の土師縣征討説話とこれに伴う行宮（宮廻野→郡野）の設置や、直入郡の擬大領藤原の娘が嵯峨天皇の内侍となり天草崩御の後に当地に帰り恩賜の品を擬山陵に祀り奉仕したことに始まるとされる宮廻野神社の社伝など、朝廷や豊後国府及び太宰府との浅からぬ関係を示す記録や伝承が決して根柢のないことではないことを、最近の検出された各遺跡と出土資料が物語りつつある。

中世においても朽網郷は同郡領であり、「豊後国図因帳」によればその地頭職に朽網宗親の名があるが、宗親が在地勢力である大神氏系であるのか大友初代の養父である中原親能の系譜を引くとされる古庄氏系なのか、それを示す確実な史料はないようである。この朽網氏の系統は大友氏の加判衆として築えていたようであるが、永正年間に起きた朽網親満の乱で途絶え、その後は大友一族の入田氏が継ぐものの、烏津氏の豊後役人の後に大友義統により滅ぼされる。

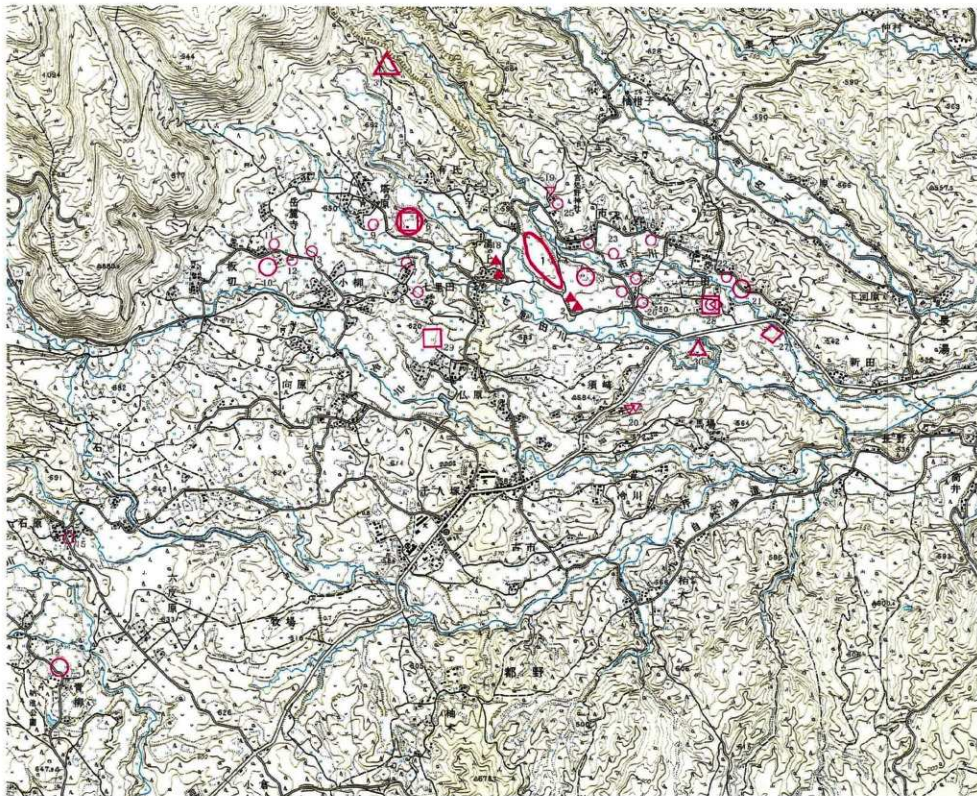
この間の遺跡としては、L・コ字状に巡らされた2条の溝の内外に30数棟の掘立柱建物が計画的に配された上城遺跡がまず第一にあげられよう。建物群は主屋と考えられる両面庇の大形建物の他各種の付属施設に加え、馬屋とも推定される2×7～12間の長大な建物も数棟認められる。建物の多くは鎌倉～室町期に比定されるが、当該期の一般の集落跡とはその規模・構造ともに隔絶していることから地頭クラスの館と見做されようか。次に挙げられるのが、80数棟の建物群とその東を区切る大溝（幅約6m、深さ約2m）等の遺構や、中国産法花壺・華南三彩・タイ産褐輪蓋等の他京郡系土師質土器が出土した小路遺跡（A・B・C地区）である。この中でB地区には63棟の建物が集中し、面積50mを越える大形建物が多いことや方一間ほどの規模を有することから地方領主層（朽網氏）の館跡と想定されている。その始まりは15世紀後半代であり、16世紀中頃までは盛行したと考えられている。

また、小城原遺跡においても戦国期の領主層の屋敷跡と思われる遺構が検出・確認されている他、朽網氏の城である山野城の一部についても林道の開設に伴う調査がなされた。山野城跡と向側を絶壁に面された丘陵上に位置し、尾根の自然地形を加工した大規模な堀切り4条や土塁等により守られた堅固な山城であると同時に、当地から珠珠田方面に通じる交通の要衝地にある。

注1、久住町誌、1974 久住町  
 2、賀川光夫・島飼孝好「湯ノ上古墳」1969 久住町教育委員会  
 3、賀川光夫他「コウゴ一松遺跡調査報告」1974 久住町教育委員会  
 4、高橋信武他「横枕B遺跡・前田遺跡」1989 直入町教育委員会  
 5、渋谷忠章他「三反田遺跡発掘調査概報」1974 直入町教育委員会  
 6、高橋信武他「横枕遺跡・日向塚遺跡」1988 直入町教育委員会  
 7、注6と同じ  
 8、宮内克己・高橋信武「取切遺跡群（第I～V）・小原山遺跡」1999 久住町教育委員会  
 9、榎浦幸則「市第IV遺跡・トグラ遺跡・花立遺跡」2000

久住町教育委員会  
 10、注9と同じ  
 11、後藤一重他「小路遺跡・上屋敷遺跡」2000 久住町教育委員会  
 12、注9と同じ  
 13、宮内克己・高橋信武他「市第I遺跡・石田遺跡」1996 久住町教育委員会  
 14、高橋信武他「市第II遺跡・市第III遺跡・仏原第I～III遺跡」1997 久住町教育委員会  
 15、高橋信武他「尾首遺跡・市第I遺跡」1998 久住町教育委員会  
 16、注15と同じ  
 17、宮内克己「山野城跡」1995 久住町教育委員会。及び注1文献

1. 都野原田遺跡
2. 仏原千人塚古墳群
3. 原田第Ⅲ遺跡
4. トグウ遺跡
5. 花立遺跡
6. 小城原遺跡
7. 七里出遺跡
8. 上原敷遺跡
9. 尾根遺跡
10. 板切第Ⅱ遺跡
11. 板切第Ⅲ遺跡
12. 板切第Ⅳ遺跡
13. 板切第Ⅴ遺跡
14. 脇遺跡
15. 石原遺跡
16. 市第Ⅳ遺跡
17. 湯ノ上古墳
18. 中原方形周溝墓
19. 小竹横穴墓
20. 須崎横穴墓群・石棺
21. 中殿A遺跡
22. 中殿B遺跡
23. 市第Ⅲ遺跡
24. 市第Ⅴ遺跡
25. 市第Ⅰ遺跡
26. 尾首遺跡
27. 石田遺跡
28. 上城遺跡
29. 小路遺跡
30. 三船城跡
31. 山野城跡



第1図 久住町東部の遺跡と都野原田遺跡の位置

## 第Ⅱ章 調 査

---



## 第二章 調査

### 第1節 遺跡の立地と調査の概要

本遺跡は久住町大字仏原字原田に所在し、その西北に屹立する九重山系から南東に派生する丘陵上に営まれた集落遺跡である。東西方向を大分川支流である芹川水系の市川と七里田川に画された丘陵の上面は、比較的平坦な緩斜面をなし最大幅約150m、全長約400mの細長い楕円状を呈し、標高は565～575mを測る。その西北部の境界は尾根根となり、南東部は浅い谷により分断されており、独立性のやや強く周囲の見通しにも優れた地形であり、集落を営む上での諸要因をほぼ満たしていると言える。本丘陵の先端から一段下がり南東に伸びる小規模な尾根部に古墳時代前期前半の仏原千人塚古墳群が、東側のやや浅い谷を隔てた小丘陵上に弥生後期を中心とする集落跡である原田第Ⅲ遺跡が位置する。また、西側の谷を隔て約200mの尾根部に混ノ上古墳と中原方形周溝墓が、市川を隔てた丘陵の先端付近に小竹横穴墓が形成される等、集落と墳墓がまさに指野の間に集中して所在することも県下において他に類例を見ない。

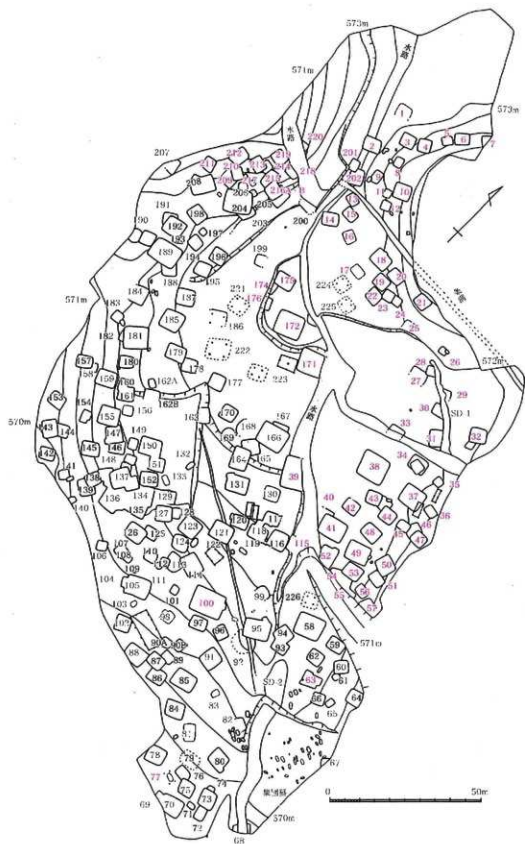
弥生時代中期から古墳時代中期に至る各時期の住居跡等の堅穴遺構が丘陵上面のほぼ全域（A・B・C区）に展開し、全体調査面積約35,000m<sup>2</sup>の中で確認された堅穴遺構は250基を数えるが未調査部分や水田遺構により失われた部分を勘案すると全体では350基を越える大規模集落遺跡である。また、集落内部の集団墓地として弥生時代終末から古墳時代前期の木棺墓50基が確認されたことも重要な成果であり、これに加え小児壺棺墓4基・竪立柱建物7棟、集落の西北限界を画する溝（条溝）1条と土坑・柱穴等が多数検出された。その他に、A区では古代から中世の用水路と思われる溝2条や、C区では中世の堅穴遺構2基などの遺構も認められる。

堅穴遺構の中で内部の調査を実施したのはA区の約3割とB・C区の計97基であるが、A区の各堅穴の上面で検出された土器人形片については殆ど採取しており、遺構の約5割の時期比定は可能である。この中で弥生時代前半と思われる円形プランのものや中期後半の隅丸長方形を呈し内側に突出部をもつもの等は全体で13基と数が少なく、2～3基がA区のほぼ中央部やC区等に距離をおきながら点在する。また、弥生後期前半から後半に属する堅穴もやや少なく、全体でも10基以内と思われる。堅穴の約8割は長方形プランを呈し弥生時代終末から古墳時代前期の所産と考えられ、それ以前の小規模分散型の集落から中・大規模集落への集住は時代の変化とも軌を一にする。また、堅穴の1辺は2～12mを測るが、この時期に一般的な大・中・小に加え、1辺8mを越える特大規模の堅穴5基がA区のほぼ中央付近に点在し注目された。各堅穴覆土の土層観察から、夷後の自然堆積と考えられるものはほぼ皆無であり、その全てが埋め戻されたと理解されると共にその各過程において土器等を用いた祭祀が行われたであろうことを示す。

集団墓は遺跡の中央にあたるA区の南東部に位置し、直径約30mのほぼ円形の範囲に成人墓2基を基本的単位とし、これに小児墓4～10基がゆるやかな3つの群を形成しながら展開するが、頭位がほぼ東西方向に一定する他に明確な規則性は取られない。しかし、その内部に堅穴は設けられず周辺の堅穴も集団墓を取り巻くように分布することから、墓域として確立されていたと考えられる。その規模から成人墓と考えられる組合わせ式の木棺墓25基、小児墓と考えられる木棺墓18基、そのいずれか判別が困難なものの7基の構成であり、内部の調査を実施した7基の成人墓の中で3基から鉄剣が出土した。

条溝は北西部の丘陵緩れ部分に沿って設けられているが、幅約1.5m、深さ約0.4mとやや浅く大規模なものではない。尾根を分断するようにほぼ東西に走るが、西側の一部は開田時の削平と水路により残存しない。その間隙は弥生時代後期後半と考えられるが、古墳時代前期初頭頃にはその機能を失うようであり、溝の外側に堅穴が形成される。一方、条溝の北幅約100mに位置する大塚遺跡の調査が平成10年度に行われ、新たに尾根部を断り切る溝が存在する事が判明した。その規模は一回り大きく、尾根のピークには出入口と考えられる陸橋部や欄干等も検出され、本遺跡は二重の条溝により画されていたことが判明した。

本遺跡からは後述するように縄文時代終末から中世に至る各時期の遺物が出土しているが、主体となるのは弥生時代前半～古墳時代前期の各遺構出土の土器・鉄器・石器・装身具等である。これらの遺物は大部分県下のみならず、他地域との広い交流や繋がりを示すが、中でも堅穴出土の石銅2点と半島系土器は特に注目される。



第2図 都野原田遺跡A区遺構配置図



第3図 都野原遺跡と周辺の遺跡 (1/2千)



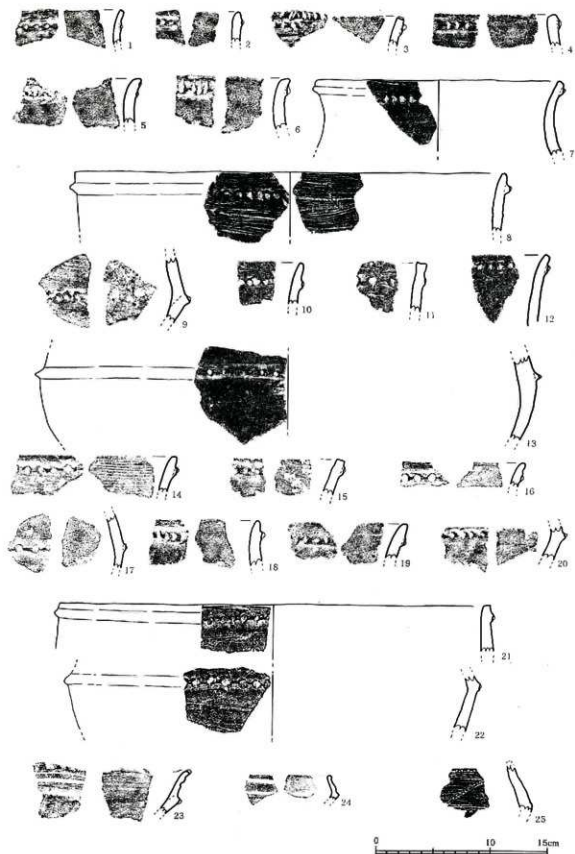
## 第2節 縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物（第4～6図）

縄文時代晩期末から弥生前期の遺物は、A区北側尾根の東西にある谷部周辺に多く集まる。谷部東側では条溝より北の2・4・6・10号竪穴や南側の17・18・22号の各竪穴から若干検出されているが、いずれも小片であり埋戻しの際に混入したものと思われる。西側谷部分では水路より南側の218・219号から204・209・211号竪穴の間に包含層が存在していたと考えられる。出土器にも比較的大形の破片が認められるが、竪穴の形成や水田化に伴う閉平のため包含層は部分的に残るに過ぎない。また、37・39・47号等からも少量出土している。

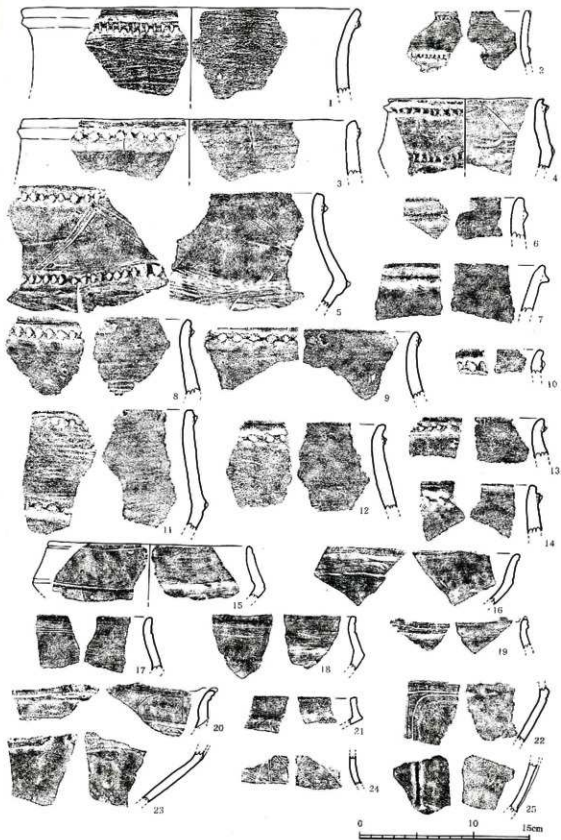
第4図はA区東半部分の各竪穴出土の刻目突帯文土器とこれに伴うと思われる浅鉢である。1～6は小片のため口縁部の傾きを明確にし難い深鉢のI口縁部で、いずれも口縁部の下位に1条の刻目突帯を巡らす。1は器壁がやや薄い小形の深鉢か、3はI胴部に刻目を加え、5はI口縁部外側とその下に刺突状の刻目を施す。1・2は2号竪穴、3・4は3号竪穴、5・6は4号竪穴出土。7・8は6号竪穴出土のI口縁部片で、7のI口縁部は外反して閉き器面はナデによる調整。8のI口縁部はほぼ直立し条痕は板状工具による。9は胴部の屈曲部分に刻目を加えるもので10号竪穴出土。10～12は18号竪穴出土のI口縁部で、13は同竪穴出土の弥生前期の帯の胴部片と考えられるもの。14～17は22号出土のI口縁部片と胴部片で、14は板状工具による条痕調整によるが他はナデを主とする。18は37号、19・20は39号出土。21・22は47号出土のI口縁部と胴部片。23～25は精製浅鉢のI口縁部で、23はI口縁部と屈曲部にリボン状の突起を付すもの。25は半杖竹管状工具による横走沈線+刺突文をI口縁部直下と屈曲部に施し、同様の文様を両沈線の間に半円状に描くものであまり類例を見ない。23は2号、24は22号、25は14号竪穴出土。

第5・6図は209～219号竪穴とその周辺の包含層出土の代表例を示した。第5図1～5・8～14は1条刻目突帯文のI口縁部で、1はI口縁部が外反してやや外に開くが他は内傾するものが多い。2はI口縁部外側に刻目を加え、4・5・11は胴屈曲部に刻目が認められる。5はI口縁部と胴部の刻目の間に2条の平行沈線による連続山形文を描く。これらの器面は横方向の条痕又はナデによるが、条痕の原形は板状工具と思われる。1は210号竪穴、2・3は212号、4・5は215号出土で、この他は包含層出土。6・7も包含層出土でI口縁部の下位に貼付突帯のみを巡らせる上管生B式。6の外側は条痕調整が残る他はナデによる。15～25はこれらに伴うと考えられる精製浅鉢である。15・17～19はI口縁部が内傾する浅鉢であり、19はI口縁部端部に低いリボン状突起を付す。I口縁部と屈曲部にやや浅い沈線1～2条を施す。16・20は狭く外に開くI口縁部から屈曲してそのまま底部に至る浅鉢で、I口縁部と屈曲部にやや浅い沈線を巡らす。20はI口縁部の四方にリボン状突起を付すものと思われる。21はI口縁部の立ち上がりやや短い無文の浅鉢。22は胴部下半に沈線によるT字状の文様を描くもので、東日本系と考えられ九州では類例に乏しい。23も九州在来とは異なるもので胴部の屈曲部に隆帯を横に貼付するが、欠損のため全体の文様構成は不明。24は浅鉢I口縁部の下位又は小形碗の頸部と考えられるもので、半杖竹管状工具を用いた2条の沈線により窓枠状の直線文とその内部に弧文を描く。25は縦方向の隆帯の下に横方向の隆帯を付すものでこれも外来系と思われる。15は215号、17・20・24は214号、他は包含層出土。

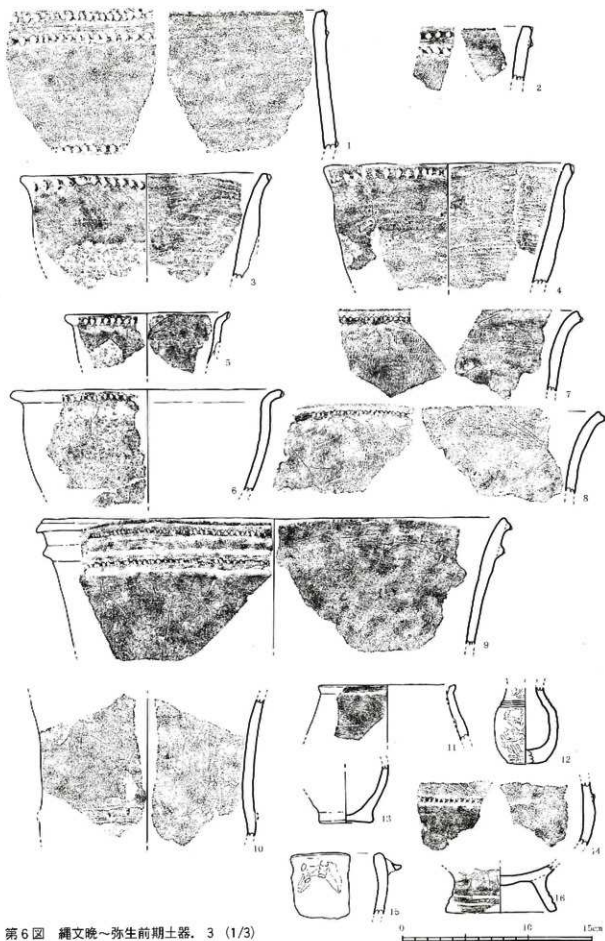
第6図1・2は刻目突帯文土器に後続する弥生前期の突帯文土器と考えられ、I口縁部外側にも刻目を加え内外面はナデ調整による。3・4は外反気味に開くI口縁部からそのままほぼ底部に続く甕で、I口縁部外側に刻目を施すもの。外面はナデ、内面は条痕調整による。5・6は如意状口縁を呈する甕で器面はナデ調整を主とする。7～10は外面縦方向のハケ調整の甕で、7・8のI口縁部内面は横のハケにより9・10はミガキによる調整。これらは一方平式から下志村式に相当する。11～14は刻目突帯文土器から弥生前期の甕である。12・13は小形甕で、12の肩部には浅い沈線を施す。14は肩部に刻目突帯を巡らせ、その上位に重環文を描く。15は甕のI口縁部片で耳状の把手を貼付し、その内部に2本の孔を縦に穿つ。これも類例乏しく弥生中前期半に下る可能性もある。16は浅鉢の脚部と思われ、脚端付近に2条の沈線を施す。以上の土器で1・6・14は215号、3・12は213号、15は443号、他は包含層出土。



第4図 縄文晩～弥生前期土器。1 (1/3)



第5図 縄文晩～弥生前期土器。2 (1/3)



第6図 縄文晩～弥生前期土器. 3 (1/3)

### 第3節 弥生時代～古墳時代の遺構と出土土器

#### (1)A区

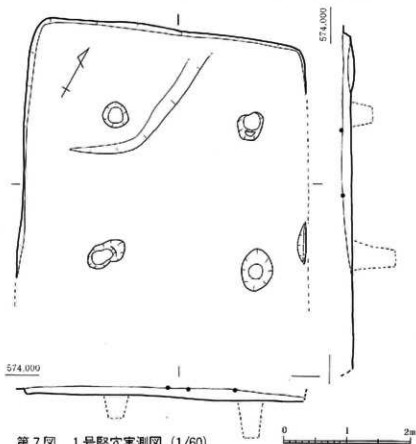
A区は本遺跡の北半部分にあたり全長約300m、最大幅約150mの南北に長い不整形円状の地形をなす。検出された竪穴は230基を数えるが、内部調査を実施した竪穴は尾根より東側の1～57・63号、77号、100号、115号、中心部の171～176号（173号は欠番）、西側谷部の201・202号、209～220号の計83基である（第2図）。

#### 1号竪穴（第7図）

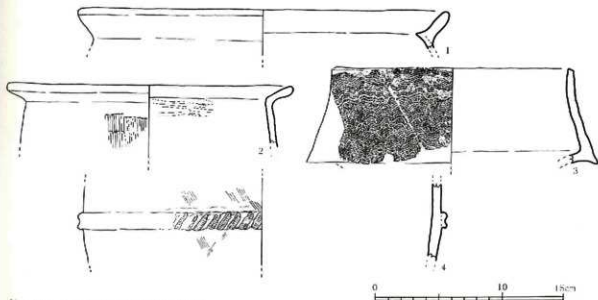
調査区の最も北側中程に位置し、遺構の東半は削平により床面付近まで失われる。北側辺（短辺）4.4m、西

側辺（長辺）は現存長4.1mを測るが主柱穴の位置から5.1m程に復元され、復元床面積は約21m<sup>2</sup>。主柱穴は4本で、内2本には抜き取り痕跡が認められ、主軸方位はN-65°-E。出土遺物も少なく、第8図に示す程度である。

第8図1は黒髪式の、2は口縁部が屈曲し外に開く壺の口縁部片で、1は金雲母を含む。これらは本遺構に混入したものである。3は複合口縁壺の口縁部で、やや内傾し長く延びる口縁部の外側全面に櫛歯状文を下から上方に広がる。4は同様の壺の胴部で、中程に帯状の刻目突帯を巡らす。3・4の在地系土器からすれば、本遺構は古墳前期前半代に置かれよう。



第7図 1号竪穴実測図 (1/60)



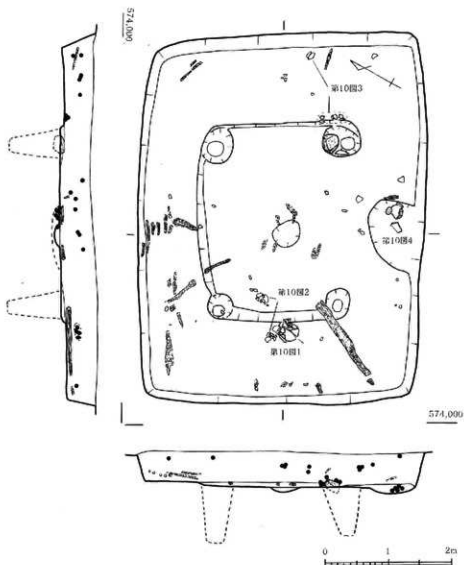
第8図 1号竪穴出土土器 (1/3)

## 2号竪穴（第9回）

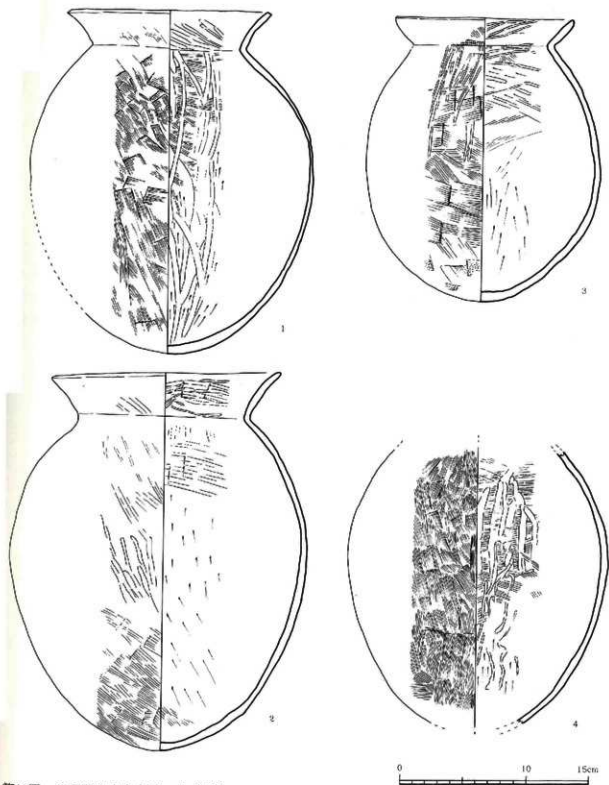
1号の南側約10m、尾根の頂部付近に位置する竪穴であり、短辺約4.4m、長辺約5.6mの東西に長い長方形プランを呈する。検出面より床面までは約0.5mと遺存状態は良好であり、廃絶後の埋め戻しとこれに伴う土器祭祀や焼却の状況を良く示す。床面積は23.1㎡と中形の規模であり、4本支柱穴の軸方位はN-64°-Eと1号とはほぼ平行する。支柱穴の外側は、南側を除き1段（5cm前後）高くなり三方にやや低いベッド状遺構が巡り、南側辺の中程には壁に接し長軸約1m、深さ0.1mの半円状土坑が設けられる。また、ほぼ中央部に直径約0.4m、深さ約0.1mの不整形凹形を呈する跡があるが、壁溝は巡らされていない。

竪穴廃絶に先立つ内部の諸設備や建築部材の撤去の後に竪穴の周囲の土手の一部埋戻しが行われたと考えられるが、その範囲はベッド状遺構周辺に留まり壁際のやや低い三角状の堆積層が形成される。その後、支柱の抜き取りと南東部の支柱内部に台石が埋め込まれる。そして、これと同時に又は当初に南壁側土坑内部に壘1個体をほぼ半分に分割し埋置く。その後、家屋の残存部材に火を放つ。竪穴内部に崩落した部材は垂木等の屋根材を主とし中央より西側に比較的多く残るが、空白部は土器祭祀を実施する前の片付けにより持ち出されたと考えられる。この段階で壘

3個体（第10回1～3）や小型土器2個体（第11回7・8）などを用いた祭祀が行われ、壘は一部を打ち欠き内部に放置する。そして、本格的に埋戻されるがこの土層には土器の小片が比較的多く含まれると共に祭祀行為に関わったと思われる鉄器（4点）の投棄もなされている。

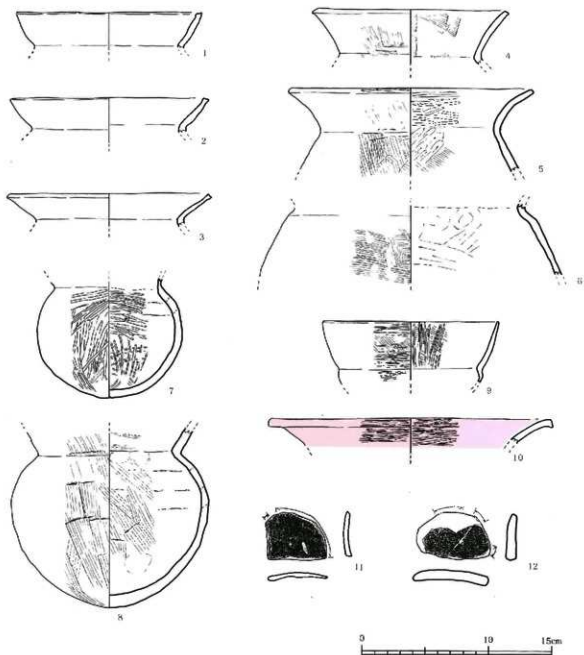


第9図 2号竪穴実測図（1/60）



第10図 2号竪穴出土土器。1 (1/3)

第10図1は口径15.8cm、器高27cm、胴部最大径22.5cmの甕、口縁部は外反しながら開き胴部は球形に近く膨らみ丸底の底部に至る。外面は斜め方向のハケ、内面はケズリーハケ→ミガキによる調整。西側の尚主柱穴の中間付近から出土。2も同様の器形を呈するほぼ完形の甕で、11径約18cm・器高29.8cmと1よりやや大きい。口縁部内面と胴部外面はハケのち複雑なミガキ、胴部内面はケズリののち一部ハケを加える。3は口径が14.2cm、器



第11図 2号整穴出土土器。2 (1/3)

高22.4cmとやや小形の甕で、調整も類似するが胴部外面に横方向のハケを加える。以上の甕はスヤコケが付着する。4は土境内出土の甕である。これらの甕の中で2は少量の、4はやや多くの金雲母を含むが、いずれも在来系の土器である。第11図1～3は口縁部の開きがより直線的で肩部の処理がやや異なる外来系又はその影響の強い甕の口縁部で、いずれも金雲母を少々含む。4～6は在来系甕の口縁部と胴部。7は小型甕または鉢の胴部で内外ともハケののちやや丁寧なミガキによる調整。8は口縁部を欠く小型の鉢、内外面とも縦方向のハケを主とする調整。9は胴部下半を欠く小型丸底甕で胴部の張りがやや弱い器壁は薄く丁寧な造りである。器面はハケののち外面横方向のミガキ、内面は縦方向のミガキによる調整。10は内外面ともミガキののち赤色顔料を塗る鉢の口縁部。11・12は上器片加工のメンコである。

以上の土器は、第10図の甕胴部の球形化や完全な丸底化及び内面のヘラケズリ手法等から古墳時代前期中頃の典型的資料と言えよう。

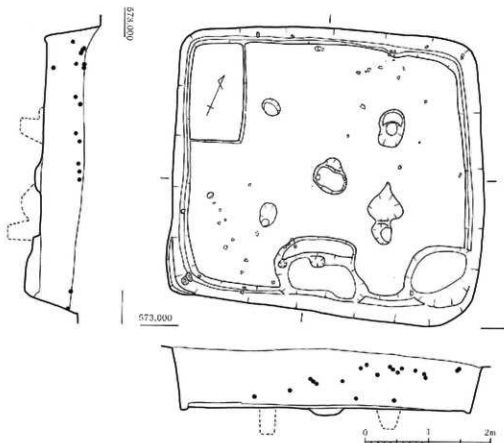


### 3号竪穴 (第12図)

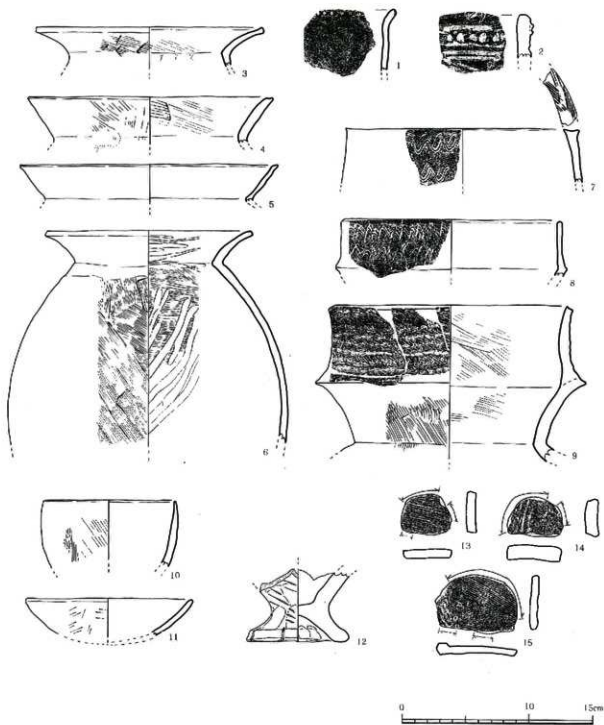
1号竪穴の南東約5mの谷部に位置し、短辺4.2~4.4m、長辺4.6~4.8mの東西方向に長い長方形プランを呈する。検出面から床面までは0.6~0.9mとやや深く、壁溝はほぼ全周しその床面積は16.53㎡である。4本支柱穴の主軸方位はN-72°-Eであり、1号とはほぼ並行する。東側2本の支柱穴は抜き取り痕跡を良好に示す。中央に長軸約0.5m、深さ約0.1m余りの浅い凹跡と考えられる楕円状土坑が設けられ、南壁側中央には長軸約1.3m、短軸約1mの2段掘りの土坑が付されるがその内部には小形ピット2が掘り込まれる。これよりやや小規模の土坑が南東隅にも認められ、西北隅部には1.6×0.9mの長方形で高さ0.05mのベッド状遺構が配置される。竈・窯の惣製塩土器が出しているがいずれも埋上りへ上層に含まれ、比較的小片が多く明らかに施作に伴う土器祭祀を示すものは認められなかった。

第13図1・2は弥生前期の甕口縁部片で混入したと考えられるもの。3~15は木造構の廃絶時期を示す遺物であり、3・6は口縁部が外反しながらやや大きく開く在来系の甕。内外面とも斜め方向のハケを主とする調整であるが、6の内面にはやや雑なミガキを加える。5はやや内湾気味に外に開く口縁部で、器壁がやや薄いこと等から外来系と考えられる。7~9は口縁部がほぼ直立するかわずかに内傾する複合口縁部で、外面に2~3段の櫛歯状文を施す。7は口縁部端面取りによる平坦面を作り出し羽状文を描く、他に傾倒は乏しい。9はハケを主調整とし胎土には石英が少量含まれる。10は外面にやや荒いハケを施す小形鉢と思われるもの。11は口径13.3cmを測る小形の碗で、外面はケズリによる調整。12は外面にタタキ調整の製塩土器で、石英粒を多く含む移入品。13~15は土器片を利用したメンコで周辺は打欠きと研磨により半円形に仕上げられる。

これらの土器は6・9の特徴から古墳前期前葉に置かれるが、その中でもやや新しい時期と思われる。



第12図 3号竪穴実測図 (1/60)



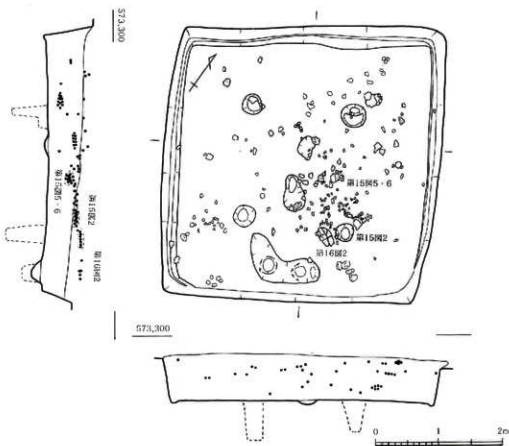
第13图 3号竖穴出土土器 (12.1/2.他1/3)

#### 4号竪穴（第14図）

3号の東側に隣接し、1辺5.0～5.3mのはほぼ方形に近いプランを呈する竪穴であり、検出面から床面まで最も深い北壁付近で約0.7mを測る。階層は南壁のみならず床面積は15.21㎡と小形で、ほぼ中央とその南側に不定形の凹部と思われる浅い土坑二つが設けられる。4本主柱の主軸方位はN-57°-Eで北東部主柱穴には抜き取りに伴う掘込みがある。また、南壁に接しこれと並行する位置に土坑と3本の柱穴が中心よりやや西側に掘られているが、他の土坑とはやや様相を異にし出入り口の施設の可能性が考えられよう。遺物は埋土の中～上層に集中し、完形に近い第15図2等の土器は壑穴埋戻しの最終段階で甕・鉢等をを用いた祭祀が行われ、土器は破砕のち投棄されたと推定されよう。本遺構の時期は第15～17図に示した土器から弥生終末から古墳初期に置かれる。

第15図1は屈曲してやや外に開く口縁部からあまり張らない胴部に続く粗製甕で、内外面とも細かい斜め方向のハケ調整を主とし、胴部のやや上位に櫛溝波状文とこれと同じ工具による沈線文を施す。胎土に灰色粒等の砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。2～8は口縁部が外反しながらやや大きく開き、やや長胴の胴部を付す甕である。内外面とも縦・斜め方向のハケによる調整を主とするが、2の胴部内面はケズリのちミガキとなり、5・6・8の内面には粗いミガキを加える。口径は17～22cmを測り、5・6は同一個体と思われる。2と3には金雲母が、6には石英が含まれるが、他は在地系の角閃石・灰色粒等による。第16図1・2も同様の器形と調整による甕で、1には金雲母が少量含まれる。第16図3～6は大小の複合口縁甕である。3・4は内傾する口縁部の立ち上がりやや短く、3は外面のほぼ全面に櫛溝波状文を施した小形の甕。5・6の口縁部はやや長く伸び、6の外面は櫛溝波状文を除く部分に赤色顔料を塗り、いずれも少量の金雲母を含む。7・8は口縁部がわずかに外に開きやや肩の張った胴部に続く短頸甕で、8の胴部外面にはタタキが認められる。9は斜めに開く口縁部の断面が三角形に肥厚する肥後系の甕である。10・11は甕の、12は甕の底部。

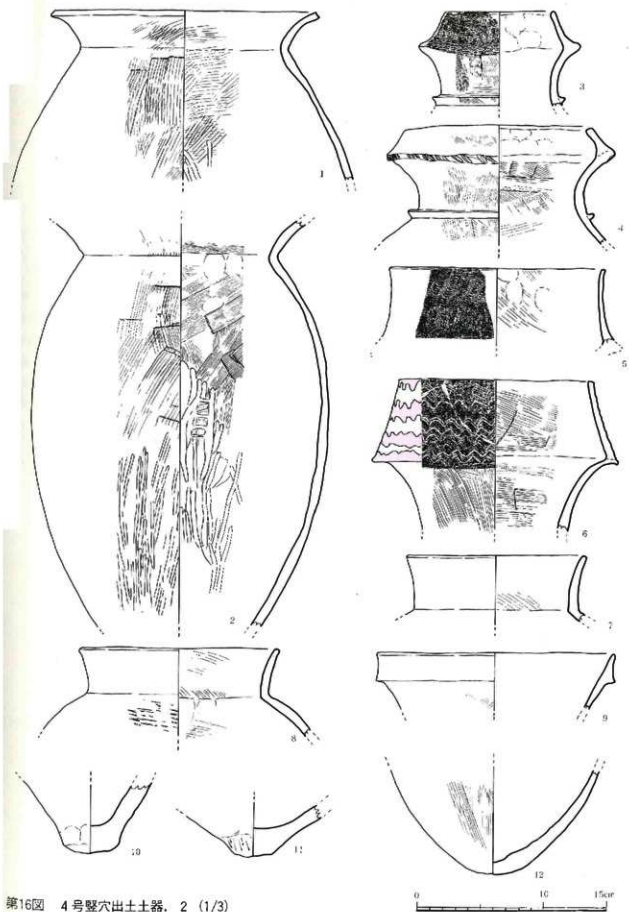
第17図1は内外面に赤色顔料を塗った鉢、2は脚付鉢で脚部の四方に3個1組の円形小孔を穿つ。4・5はやや器高の深い碗、6～8は高坏の破片で、6は直線的に開く口縁部、7は坏部が2段に屈曲し、8は長脚の脚部。この中で2・7には金雲母が少し含まれる。9は甕の底部と考えられるもので外面はケズリによる調整。10～19は土器片を加工した大小のメンコ。



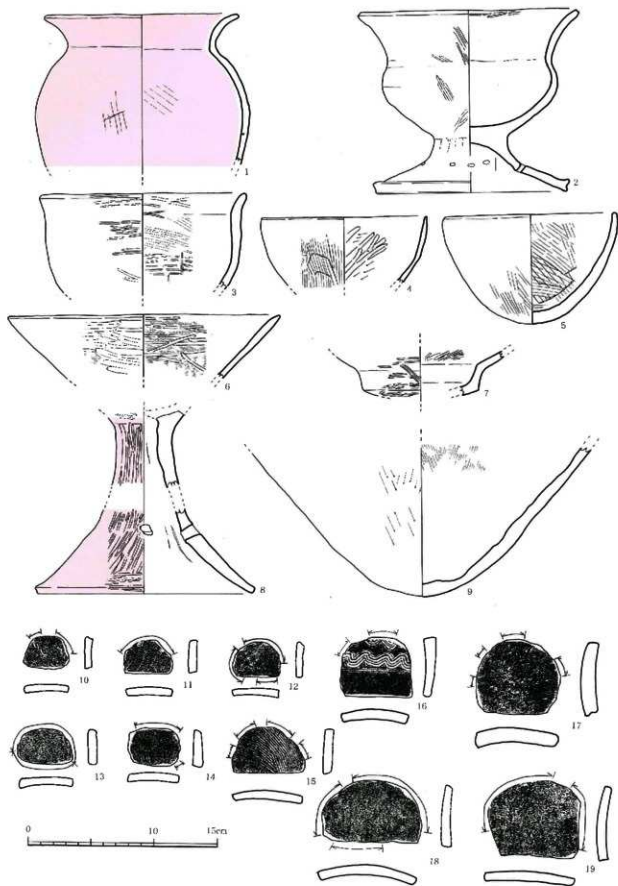
第14図 4号竪穴実測図 (1/60)



第15图 4号竖穴出土土器。1 (1/3)



第16图 4号竖穴出土土器。2 (1/3)

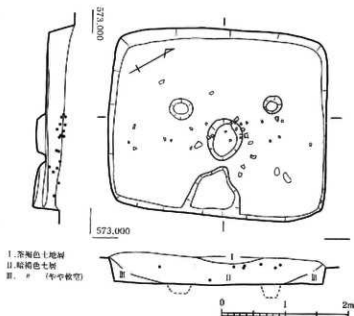


第17图 4号竖穴出土土器. 3 (1/3)

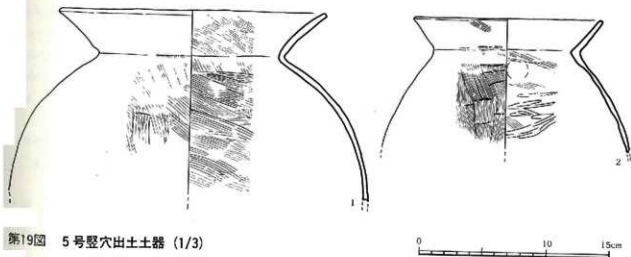
### 5号竪穴 (第18回)

4号の東北約5mに位置し短辺約2.8m、長辺約3.4mを測る小形長方形の竪穴である。主柱穴は中心よりやや西に寄った所に2本設けられるが、やや浅く一般の住居跡とは性格が異なると考えられる。方位はN-26°-Eとやや北に振るが等高線にはほぼ並行し、床面積は8.91㎡。中央やや東側に長軸約0.7m、深さ約0.2mの楕円形土坑があり、その東側には壁と接する舌状の土坑が設けられる他は付属施設を持たない。出土遺物は埋土と理解される第2層に含まれるが、その量は少なく特別な状況を示すものは無い。

第19図1は外反して開く口縁部から屈曲しやや大きく張り出す胴部に続く甕で、内外面とも縦・斜め方向のハケによる調整。口径21.3cmを測る大形品で胎土に角閃石や白色粒を含む。2は口縁部がやや直線的に外に開き、胴部は卵球形に張り出すと思われる甕で、内面はハケのちやや雑なミガキを加える。これらの甕からすれば本遺構は古墳前期中頃に置かれよう。



第18図 5号竪穴実測図 (1/60)

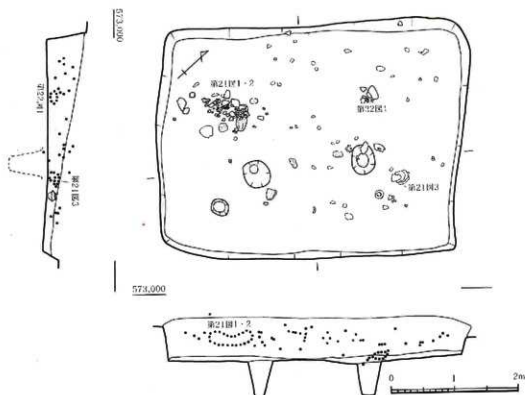


第19図 5号竪穴出土土器 (1/3)

### 6号竪穴 (第20回)

5号の北側に接して形成されているが重複関係は無く、それ以前の古墳前期前葉に営まれた遺構である。短辺は3.6m、長辺4.6~4.8mのやや小形の長方形を呈し、床面積は15.75㎡である。検出面から床面までの深さは西壁付近で約0.6m、東壁側辺では約0.2mと遺構の東半部分は削平を受ける。主柱穴2本は中心より東側寄りに設けられ、伊跡や土坑及び壁溝等の施設は確認されなかった。北西部の複合口縁甕2個体(第21図1・2)や甕等からなる遺物集中部分を始め、内部から比較的多量の遺物が出土しているが大半は埋土中~下層に含まれる。遺物の出土状況から、竪穴埋戻しの当初と途中の2段階における土器を用いた祭祀行為の存在が想定される。

第21図1はほぼ定形の複合口縁甕で口径17.2cm、器高43.4cm、胴部最大径27.5cmを測る中形の甕である。口縁



第20図 6号竪穴実測図 (1/60)

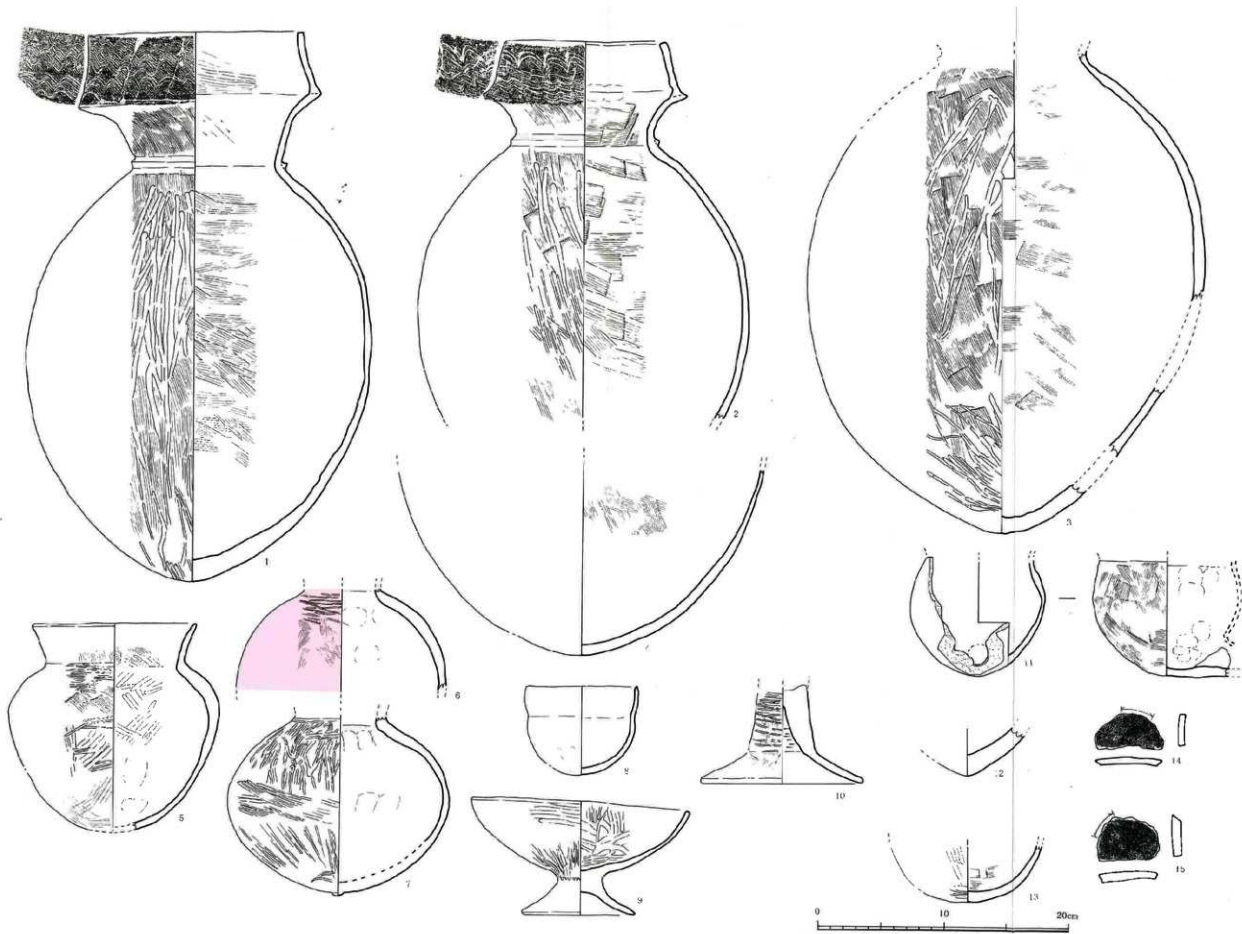
部はやや内傾しながら立上がり、頸部で屈曲し卵球形の胴部に続き丸底の底部に至る器形をなす。口縁部には3段の櫛描波状文を下から上に丁寧に描き、頸部と胴部の境に三角形の突帯を巡らす。外面は斜・縦方向のハケのち胴部には縦方向のミガキを加え、内面は斜め・横方向のハケによる調整。胎土にやや多くの灰色粒と角閃石や赤色粒を含み、淡い茶褐色を呈する。2もほぼ同様の複合口縁壺であるが、口径12.8cmと一回り小さい。口縁部の内傾もやや強く、二段の櫛描波状文は上から下にやや雑に施し、器面調整や胎土にも大差はない。3・4も同様の複合口縁壺の胴部と底部で、3は胴部最大径が31.3cmとやや大きく、4の胎土には金雲母を含む。5は口径13cm、器高17cm余りの小形の短頸壺であり、内外面ともハケのちミガキを加える。6・7は長頸壺の胴部で6は外面に赤色顔料を塗り、7の底部は短く円形に突出する。8は口径8.8cm、器高7cmを測る小形丸底の鉢、9はミガキによる仕上げの脚付の碗。10は高杯の脚部で、筒状の脚柱部から緩く屈曲し外に開く裾部に続く。

11は小形の鉢に筒状の注口部を付したと思われる注口土器であるが、底部に接する注口部分はその下部が残存するのみで全体の器形は不明。内面はユビオサエ、外面は斜め方向のハケによる調整。12は尖底に近い甕の底部、13は丸底を呈する鉢の底部。14・15は土器片利用のメンコである。

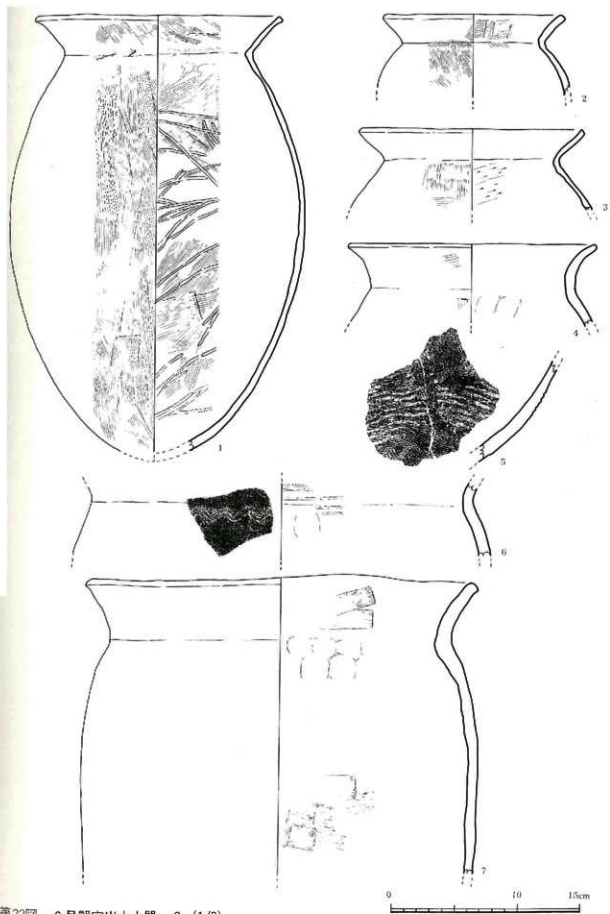
第22図1はほぼ直線的に外に開く口縁部から卵球形の胴部に続き、底部は尖底気味の丸底と思われる甕。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケのち一部やや粗いミガキを加える。口径19.5cm、推定器高35.2cmを測り、角閃石や赤色粒を含み暗～赤褐色を呈する在地系土器である。2は鉢の胴部から口縁部片で、甕に比べやや肩の張る胴部をもつ。3は胴部内面にハラケズリを施す外来系甕で、本例のみ定期的にやや新しく後世の混入と判断される。4は口縁部が外反しながら開く在地系の甕、5は外面の調整がタタキのちハケによる外来系甕の胴部。6は胴部に櫛描波状文を施し、7は胴部の張り出しの弱い無文の粗製甕で、いずれも胎土に灰色粒や角閃石を多く含む。

これらの土器は、ほぼ定形に近い複合口縁壺や甕・長頸壺などから古墳前期前葉に比定されよう。





第21图 6号竖穴出土土器. 1 (1/3)



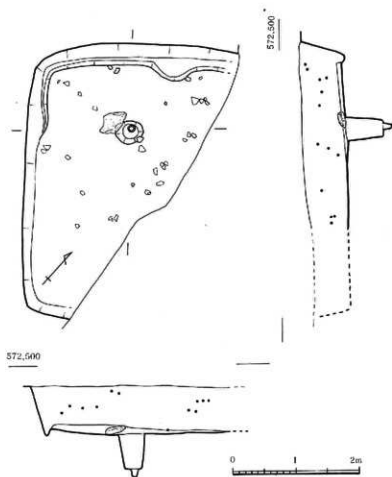
第22图 6号竖穴出土土器. 2 (1/3)

### 7号壑穴（第23図）

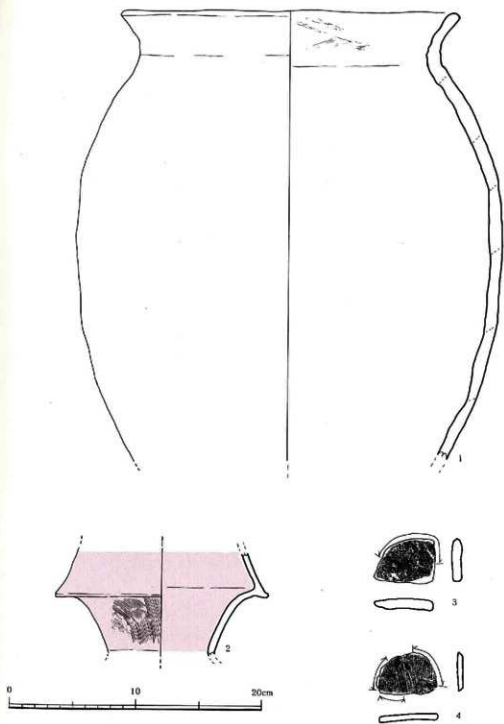
6号の北東約5mに位置し、東半部分は調査区の外に続くため詳細は不明である。西側辺約4.2m、北側辺の現存長約3.2mを測るが、3～6号壑穴の主軸方向や地形から東西方向に長い長方形を呈する可能性が強い。検出面から床面までは約0.7mと深く、壁溝は北側周辺に巡り全周しない。支柱は4本と思われるが、確認されたのは北西部のみである。この支柱穴は2段掘りとなり、掘方上面に台石が検出されたことから抜き取られたと考えられる。炉跡や土坑等の施設は確認出来なかったが中規模の住居跡と推定されよう。また、出土土器の殆どは埋上中～上層に含まれ、完形品や特別な出土状況を示すものは認められなかったが、第24図1に示した粗製甕は壑穴の中央部や北側のやや広い範囲に分布していた。

第24図1は口径27cm、胴部最大径34cm余りの中形の粗製甕で、僅かに外反しながら開く口縁部から緩く締まる頸部に続き、胴部の膨らむ器形を示す。内外面ともナデに近い細かいハケによる調整を主とし、胎土に角閃石や灰色粒等をやや多く含み、暗茶褐色を呈する。2は内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ複合口縁甕であり、口縁部外面はナデ、頸部は斜め方向のハケによる調整ののち、内外面に赤色顔料を塗る。3・4は甕等の胴部片を加工したメンコ。

本遺構は、やや胴部の張る粗製甕の器形からすれば古墳時代前期中頃に近い時期の所産と考えられよう。



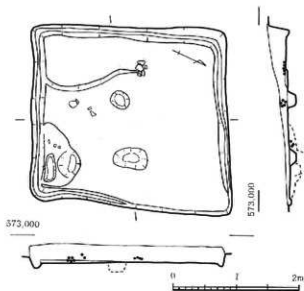
第23図 7号壑穴実測図 (1/60)



第24图 7号竖穴出土土器 (1/3)

### 8号竪穴 (第25図)

3号の南側約4mに位置する小形方形の竪穴で、東西辺約2.8m、南北辺約3.1mの僅かに東西に長いプランを呈する。検出面から床面まで0.05~0.25cm、壁落は東側辺の北半部分のみ廻らない。床面積は7㎡と最小の部類に入り、主柱2本の柱穴もやや浅く主軸方位はN-37°-E。跡跡は確認されず、南東隅部分の不定形土坑や南西部のやや低い高まりも明確なベッド状をなさないことなど一般の住居跡とは異なる。出土遺物も少ないが第27図8-1はほぼ床面直上からの出土で、この土器からすれば古墳前期前葉に置かれる。



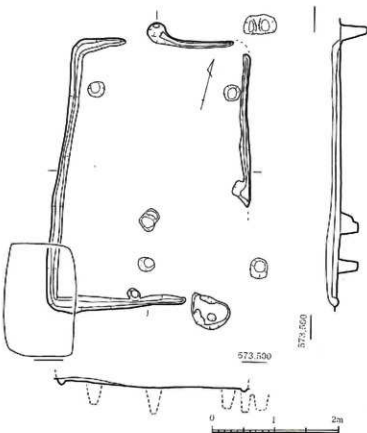
第25図 8号竪穴実測図 (1/60)

第27図8-1は丸底の底部から僅かに屑の張る胴部に寄り、頸部で屈曲し斜め上方に開く口縁部を付す小形の鉢。内面は各方向のミガキ、外面の調整は縦方向のミガキを中心とするが底部付近にはケズリが残る。8-2は弥生中期の黒雲式土器で混入したものと。

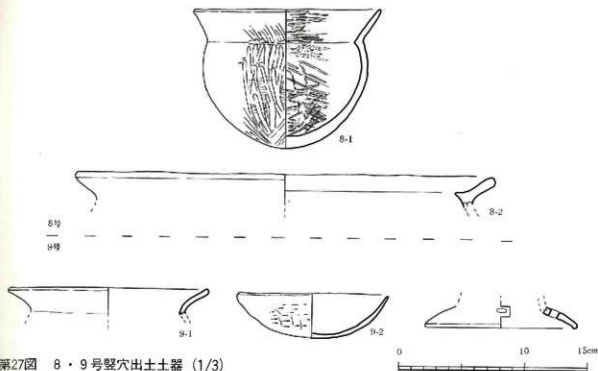
### 9号竪穴 (第26図)

8号の南西約5mに位置する小形の竪穴である。ほぼ床面まで削平を受け、壁溝も部分的に途切れるが長辺約4.3m、短辺約2.9mの南北に長い長方形プランに復元される。南西隅付近は竪穴廃絶ののち長方形土坑により切れ、南東コーナー部分も不定形土坑や削平により消失する。主柱は南北の2本と思われるが断定は出来ない。南北2本の場合の主軸方位はN-13°-W。出土遺物も少ないが古墳前期前葉の時期か。

第27図9-1は外反しながら開く甕の口縁部。9-2は口径12cm、器高4.5cmの椀で外面下半はケズリによる調整。9-3は高坏の脚裾部、裾部はやや内反しながら外に張り出す。



第26図 9号竪穴実測図 (1/60)



第27図 8・9号竪穴出土土器 (1/3)

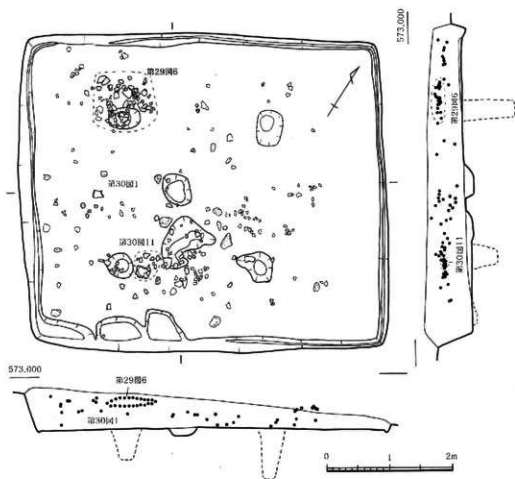
#### 10号竪穴 (第28図)

9号の東側約5m、谷地形のほぼ中央に設けられた長辺約5.7m、短辺約4.9mの東西方向に長い長方形竪穴である。東半部分は削平を受け壁際に検出面から床面までは約0.1mと浅いが、西壁周辺では約0.5mの深さを測る。壁溝はほぼ全周し、床面積は24.84㎡と中程度の規模を有する。4本の支柱はいずれも柱の抜き取りが行われたと考えらる痕跡を残す。主軸方位はN-60°-Eで8号とほぼ並行する。中央やや西寄りに長軸約0.5m、深さ約0.2mの塚跡と考えられる土坑があり、その南東に接し不定形のやや浅い土坑が設けられる。また、南西部の壁際にも長軸0.7・0.6mの浅い土坑が連続して造られており、壁溝はこの部分で途切れる。

土器等の遺物は埋土の中層にはほとんど含まれ、北西部の支柱の上位と南側支柱間に集中箇所が認められる。第29図6の複合口縁壺は北西部に破砕された状況で出土し頸部から上を欠く、これは埋戻しのほぼ最終段階で行われた祭祀に使用されたものが。

第29図1-4は花糸系の甕で調整はハケを主とし1の内面はミガキを施す。5は粗製甕の口縁部。6はやや不安定な平底から大きく張り出した胴部に続く複合口縁壺で頸部から上を欠く。胴部のやや上位に帯状の刻目突帯を巡らし、頸部との境にも断面：角形の突帯を貼付する。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整であるが器面の剥落した部分が多い。胴部の突帯から上には赤色顔料を縦棒状に塗り、その間にも一部彩文を加えている。胎土に灰色粒・赤色粒、角閃石等が含まれた在地系土器である。

第30図1はほぼ直立する口縁部から反転しながら縮まる頸部に続き、胴部は大きく張る複合口縁壺。口縁部にやや複雑な2段の櫛指波状文を上から施し、頸部に断面が竹形に近い突帯を巡らす。内面はハケ、外面頸部は縦方向のミガキによる調整であるが胴部は器面剥落のため不明。2は複合口縁壺の頸部から胴部上半部分、外面は縦方向のハケ調整のち赤色顔料を塗る。3は口径28.2cmを測る高杯の口縁部であり、口縁部は外反しながらやや長く延びる。外面は一部ズリののちミガキにより、内面はハケののちミガキによる調整。4はやや小形の高杯底部で底部はやや丸みを帯び、外面は横方向のミガキによる調整。5は長脚を架すと思われる高杯の裾部で、外面の調整は縦方向のハケにより内面はハケののちやや粗いミガキを加える。6・7はやや器高の高い甕で、外面はいずれもハケ調整、内面はミガキにより7は外面と口縁部内側に赤色顔料を塗る。8は口径14.1cmのやや小

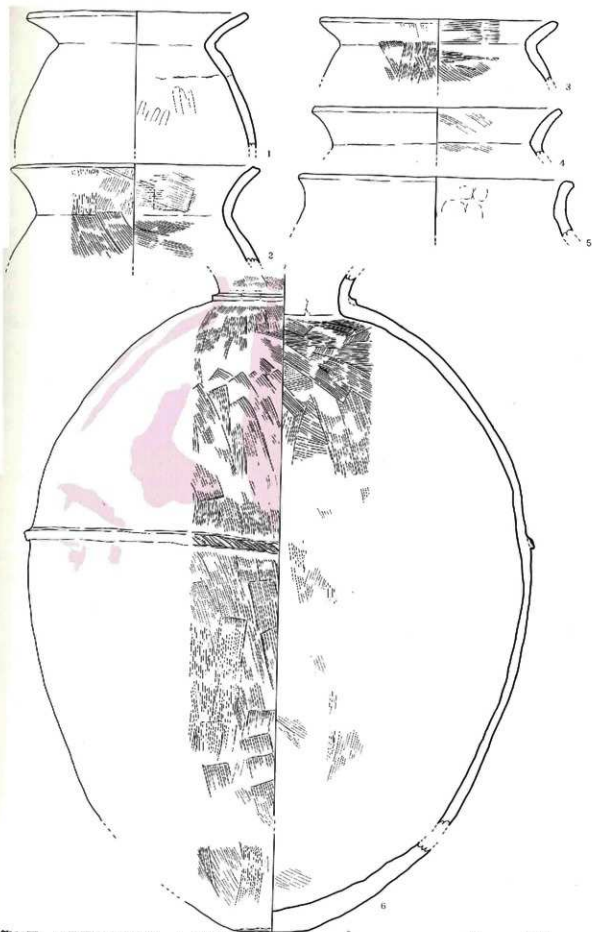


第28図 10号竪穴実測図 (1/60)

形の脚付き鉢、外面はハケ調整のち胴部にミガキを施す。9は鉢の底部と考えられるもので短い脚部を付す。10は長頸壺の胴部と思われ、内外面とも斜め方向のハケのちやや複雑なミガキを加える。

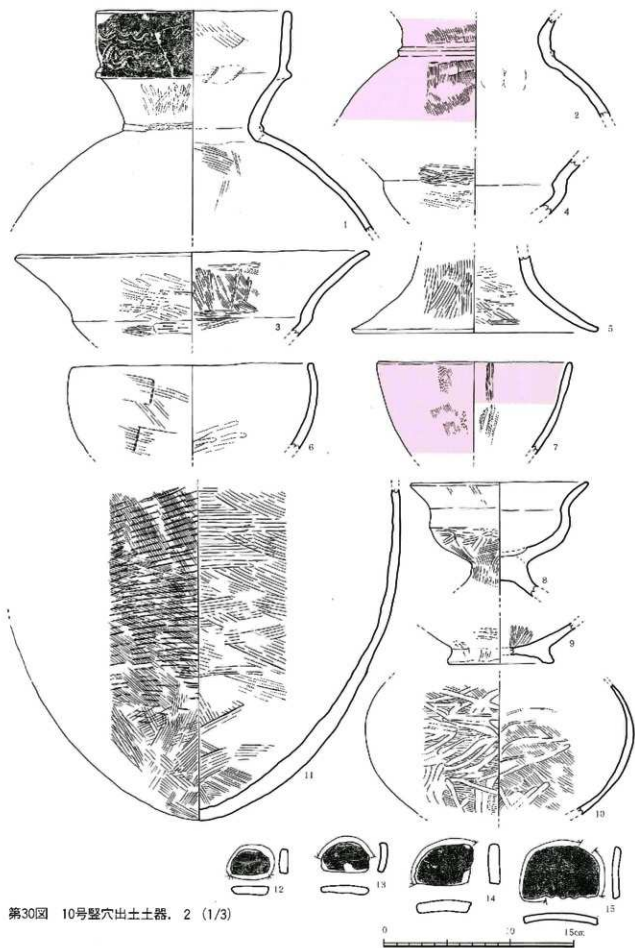
第30図11は卵球形の胴部から丸底の底部に至る甕の胴下半部で、外面は右上がりの平行タタキのちハケを施し、内面は斜め方向のハケによる調整。12~15は土器片加工品、12は周辺のほぼ全面を磨き、15は縁に一部刻み目を加えたもの。以上の土器の中で明らかに外来系と判断されるものは無く、その大半は在地産と思われる。

これらの土器は古墳時代前期前葉に比定され、本遺構の時期もここに置かれよう。



第29图 10号竖穴出土土器. 1 (1/3)



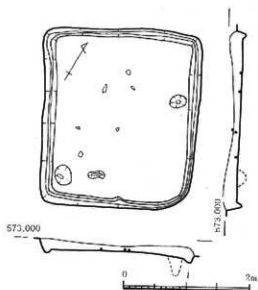


第30图 10号竖穴出土土器。2 (1/3)

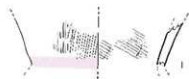
### 11号竪穴 (第31図)

10号の南西部に近接する小形の長方形竪穴遺構で、削平のため検出面から床面までは約0.1～0.2mと浅く遺存状態は良くない。長辺2.8m、短辺2.5mを測り、壁溝は全周するが主柱穴と見做される柱穴は確認出来ず、内部にはやや浅い柱穴状のピット二つが検出された他に灰跡や土坑等の施設も設けられていない。床面積は5.25㎡と最も小さく、一般の住居跡とは性格が異なる。出土遺物も少なく図示可能な土器は第32図の2点のみである。

1は複合口縁帯の頸部で、2はやや小形の高杯の坏部片で内外面ともミガキによる調整。この高杯からすれば、本遺構の時期は古墳前期中頃に置かれる。



第31図 11号竪穴実測図 (1/60)



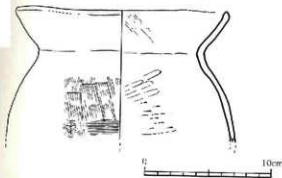
第32図 11号竪穴出土土器 (1/3)



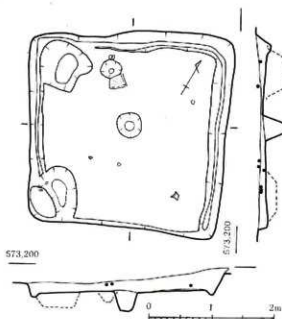
### 12号竪穴 (第34図)

11号の南側に隣接し、1辺3～3.2mの小形方形のプランを呈する。この竪穴も削平を受けるもののほぼ中央の柱穴が主柱穴と考えられる。西南と西北の両隅付近に不定形土坑が認められ、その間と東側壁から北朝鮮には壁溝が掘られている。床面積は7.15㎡と小さくこれも住居とは異なる遺構と言えよう。

出土遺物も少ないが、第33図の壺胴部の調整が縦ハケののち横ハケを加えていること等から古墳時代前期後半の所産と考える。



第33図 12号竪穴出土土器 (1/3)



第34図 12号竪穴実測図 (1/60)

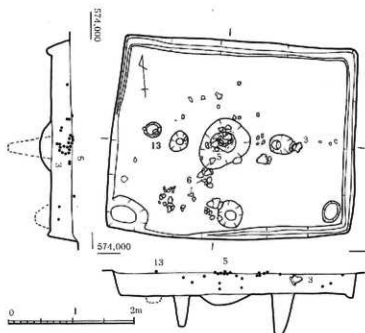
### 13号竪穴 (第35図)

遺跡の北を区切る条溝が尾根のピークに至る部分の南側に接する竪穴で、長辺3.7~3.9m、短辺2.9~3.1mの長方形をなす。規模はやや小さいが検出面から床面までの深さは約0.3mと残りは比較的良好である。竪溝は南西コーナー付近で途切れ、床面積は9.8㎡。中央部に長軸約0.9m、深さ約0.2mの楕円形に近い炉跡があり、その東西に2本の支柱穴が設けられ方位はN-85°-W。南側長辺の中心と両側にやや小形の楕円形土坑三つが各々認められるが、南西の土坑は長軸約0.6m、深さ約0.4mとしっかりしている。堯を中心とする土器の多くは遺構検出面ややそのやや下位からの出土であり、第36図3~6・13は竪穴埋戻しのほぼ最後に行われた祭祀に使用され、その後に底部や脚部等を打欠いて埋置かれたことを物語る。

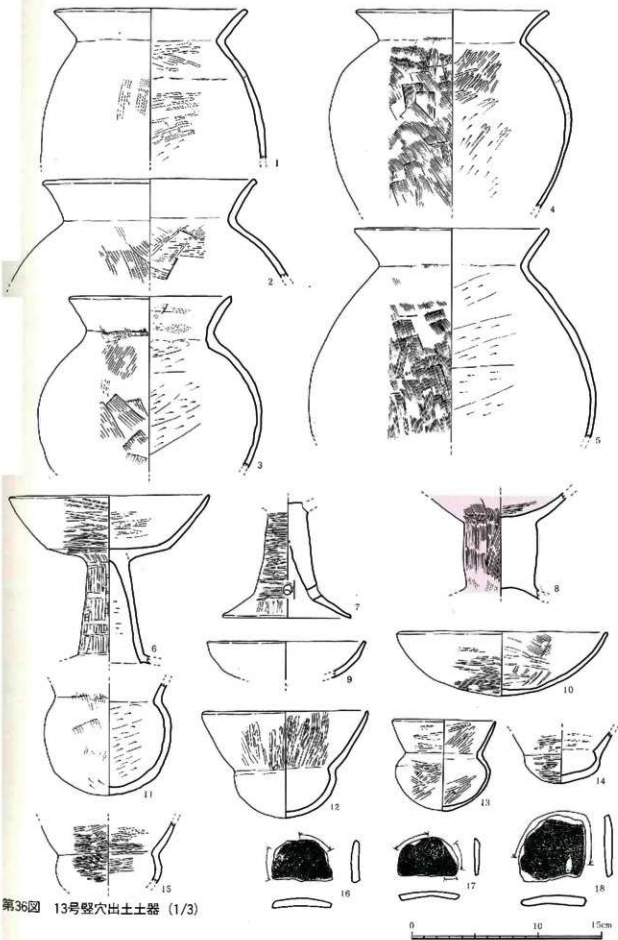
第36図1はほぼ直線的に外に開く口縁部からあまり張らない胴部に続く甕。外面はハケとナデにより、内面胴部はヘラケズリののちやや粗なミガキを施す。2は僅かに外反しながら開く口縁部にやや肩の張る胴部を付す甕で、内外面ともハケ調整によるが、胴部内面には部分的にミガキを加える。3はやや小形の甕でほぼ球形の胴部から緩く外反して開く口縁部に至る。外面は斜め方向のハケ、胴部内面は右上がりのヘラケズリによる調整であるが器壁はやや厚い。4は外反してやや強く開く口縁部に肩の張る胴部を持つ甕。外面は縦・斜め方向のハケ、内面はヘラケズリののち上半部分にハケとミガキを施す。5はほぼ直線的に外に開く口縁部からやや下影れの胴部に続く甕である。胴部外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリのまま。1~4は在地又は在来系土器で、5は胎土にやや多くの石英を含むことから大分川下流地域からの移入土器か。

6は僅かに内湾しながら開く口縁部から屈曲しほぼ平坦な坏底部に至り、筒状の脚柱部に続く高坏。外面と坏部内面は横・縦方向のミガキ、脚部内面はケズリによる調整。7は筒状に近い脚部から屈曲してやや短く外に張る裾部に続く高坏の脚部で、四方に小孔を穿つ。8は円柱状の脚部を持つ高坏で外面と坏部内面に赤色顔料を塗る。9・10は中小の碗で、10は丸底をなし口径16.8cm・器高5.1cm。11は小型の甕で内面はヘラケズリによる。12は口径13.2cm、器高8.4cmを測る小型丸底甕で口縁部はやや長く開き、胴部の張りは弱い。口縁部の両面は縦方向のミガキにより、胴部はナデを主調整とする。13はほぼ定形の小型丸底甕でやや立ち上りの短い口縁部に球形に近い胴部を付す。口径8.2cm・器高7.2cmを測り、内外面ともミガキを主とする調整。14・15も小型丸底甕でいずれも調整はミガキによる。16~17は上器片加工品。

これらの土器からすれば本遺構は、古墳時代前期中頃でも後半に近い時期の所産と考えられる。



第35図 13号竪穴実測図 (1/60)



第36图 13号竖穴出土土器 (1/3)

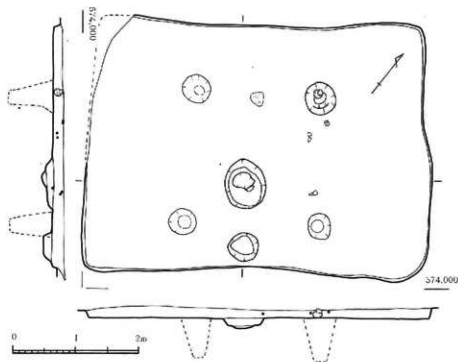
### 14号壜穴（第37図）

13号壜穴の南約6m、丘陵の頂部付近に位置する長方形プランの壜穴であるが、全体に削平を受けると共に西北隅付近は水路により消失する。南側長辺約5.4m、東側短辺約4.1mを測り、床面積は24.9㎡に復元される中規模の住居跡である。検出面から床面までは0.1~0.2mとやや残りが良くないが、ほぼ完形の長頸壜が注目すべき状態で出土している。4本主柱の主軸方位はN-43°-Eではほぼ同時期の4号等と近い。各主柱間の中心よりやや南側に長軸約0.8m、深さ0.2mの2段掘りで楕円状を呈する炉跡が認められ、南側壁際中程に接し直径0.5mの不整形の上坑が設けられる。この他、壁溝やベッド状遺構などの施設は無い。

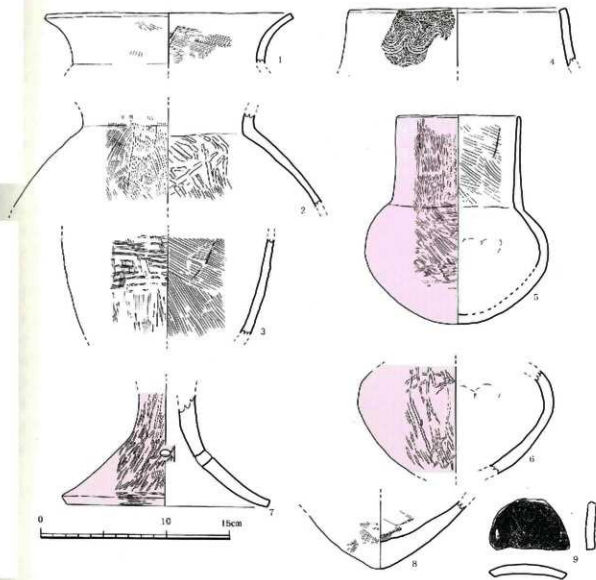
東北部主柱穴には抜き取りの痕跡が確認され、その後に柱穴を埋め上面に口縁部を一部打ち欠く長頸壜1個体（第38図5）を正置する。本例は壜穴廃絶祭祀の中でも、埋戻しの前に主柱を対象として行われる祭祀の典型例の一つに挙げられる。この他の出土器に特別な状況を示すものは観察されず、いずれも埋土中に含まれることから埋戻しの際に混入したものと思われる。

第38図1は外反しながらやや大きく開く甕の口縁部で、内外面ともハケのち横ナデによる調整。胎上には角閃石や金雲母を多く含み、11径は18.8cmを測る。2は甕の頸部から胴部上半が残り、外面は縦方向のハケで内面はハケのちやや丁寧なミガキを施す。1と同様の胎十からなり、淡灰褐色を呈する。3はやや長胴の甕の胴下半部、外面は左上がりのタタキのち縦方向のハケを加え、内面は斜め方向のハケによる調整。胎上には角閃石や赤・灰色粒が含まれる。4は複合口縁部の1縁部でやや内傾する口縁部の外面に2段の櫛描波状文を上からやや丁寧に描く。

5は口径10cm、器高16.2cmの長頸壜で、ほぼ直立して延びる口縁部から俵球形に張り出す胴部に寄り、底部は丸底となる。外面の頸部は縦方向の丁寧なミガキ、胴部は斜め・横方向のミガキによる調整であるが底部周辺は使用により器面が磨減る。頸部内面は斜め方向のハケ、胴部はオサエとナデにより調整する。口縁部の一部は欠く他は完全に残り、11唇部から外面全体に赤色顔料を塗る。胎上には灰・赤色粒等が含まれ、在地産と思われる。6も長頸壜の胴部片と考えられ、外面は縦方向のミガキのち赤色顔料を塗る。7は長脚を呈すると思われる高



第37図 14号壜穴実測図（1/60）



第38図 14号竪穴出土土器 (1/3)

坏の脚部で、裾部は緩く反転しながら外に張る。三方に円形の小孔を設け、外面はハケ→縦方向のミガキのち顔料を塗る。6・7の胎土は5とはほぼ同様である。8は尖底に近い甕の底部で、9は土器片加工品。

これらの土器は弥生後期終末～古墳初め頃に置かれ、本遺構の時期もここに属する。

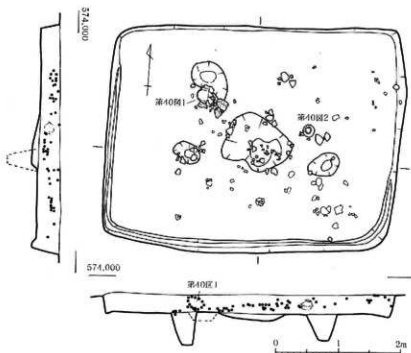
15号竪穴（第39図）

13号と14号の間に位置する竪穴で、長辺4.6m・短辺3.5m・深さ約0.3mの東西に長い長方形プランを示す。西～南側壁に沿い壁溝が掘り込まれるが全周せず、床面積は14.52㎡と小形の部屋に入る。2本支柱の柱穴は中心よりやや南に片寄った所に掘り込まれ、心心距離は2.2mとやや間隔を置き、方位はN-88°-Eでいずれも抜き取り痕跡が認められる。支柱穴の中心に長軸約1.1m、深さ約0.1mの不整形の炉跡があり、その北西にやや浅いピットが認められるが通常の土坑の位置と異なる。このピットの上部からほぼ完形の複合口縁壺（第41図1）や、頸部から口縁部がほぼ完全に残る壺（同2）を倒立させた状態で出土し、その他の土器も埋土の中位に集中することから埋戻しの途中において壺や甕を用いた魔絶祭祀が行われたことを示す。

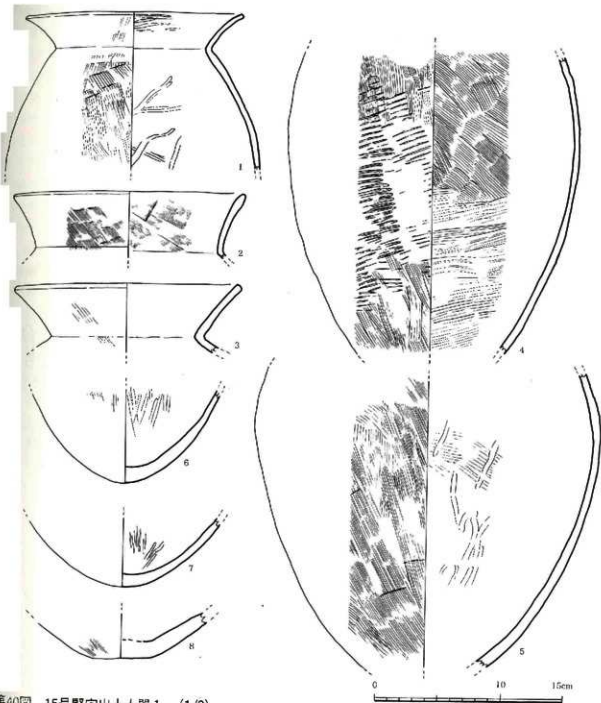
第40図1は口縁部が外反しながら開く甕で胴部の下半を欠く、外面は縦方向のハケで内面はナデののちミガキを加える。口径19.5cmを測り、胎上にやや多くの金堂母や角閃石・赤色粒を含み明茶褐色を呈する。2・3は短頸壺の口縁部と思われるものでハケののちナデによる調整。4は内面斜め方向のハケ、外面右上がりのタタキののち縦方向のハケを加える長胴の甕胴部。5は内外面ともハケののち一部やや粗いミガキを加える壺の胴部と思われるもの。6・7は丸底を早する甕又は壺の底部で、8は壺の底部でやや不安定な平底となる。

第41図1は外反してやや外に開く口縁部から屈曲し短く締まる頸部に至り、胴部はやや長めの卵球形に近く、底部は丸底の複合口縁壺。頸部の突帯は無く、口縁から頸部外面は横ナデ、胴部は縦方向のハケののちミガキ、内面も斜めのハケに雑なミガキを加える。口径15.8cm、器高39.1cm、胴部最大径26cmの中形壺で、口縁部の形態は肥後系壺の影響を受けるが胎土等は在来系と同様。2は内傾する口縁部からやや強く締まる頸部に続く複合口縁壺で、口縁から頸部はほぼ完全に残り意識的に取り外したと考えられるもの。1は頸部に2段の櫛歯波状文を下から描き、頸部との境にややシャープな三角形突帯を貼付する。調整は内外面ともハケを主とし、角閃石等を多く含む在地系土器。3は口径13.2cm、器高4.7cmとやや小形の椀であり、内面はハケにより外面はミガキを主とする。4はやや長胴の甕の胴部下半部と思われるもので底部は平底気味の丸底。外面縦方向のハケにより内面は斜めの細かいハケとミガキによる調整である。

5～8は研磨により整形した土器片加工品。9・10は弥生中期後半の壺の口縁部と胴部で混入したものと思われる。



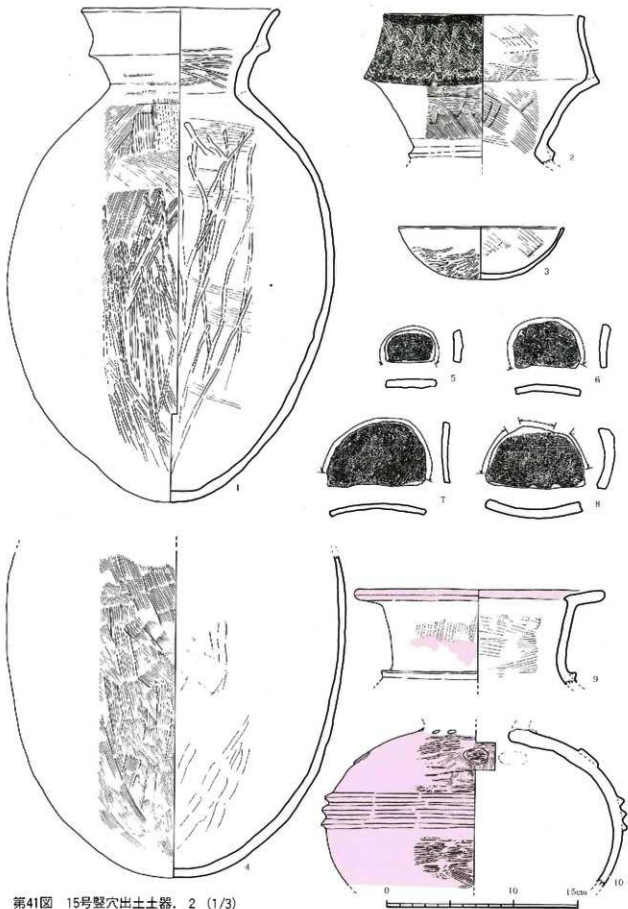
第39図 15号竪穴実測図（1/60）



第40図 15号壺穴出土土器1. (1/3)

これらの土器は、底部の丸底化や長刷の胴部及び内面にヘラケズリが見られず器壁がやや厚い等の特徴から一部の混入品を除き、古墳時代前期前葉頃におかれよう。





第41图 15号竖穴出土土器。2 (1/3)

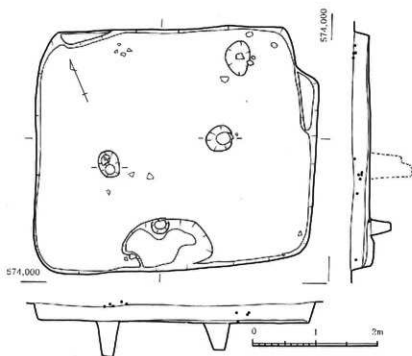
### 16号竪穴（第42図）

14号の東側約8mに位置する2本主柱の竪穴で、主軸方位はN-83°-Wと古墳前期中葉の13号とはほぼ一致しこれと同時代の遺構である。長辺4～4.4m、短辺3.6～3.8mの長方形をなし床面積は14.76㎡。南側中央の壁に接し長軸1.4m・深さ約0.1mの不整楕円状土坑が設けられ、内部には直径約0.3m・深さ0.4mのピットが伴う。この他、北東部に浅い小形の土坑があるが跡跡や壁溝等は検出されず、通常の住居跡とはやや性格を異にする。

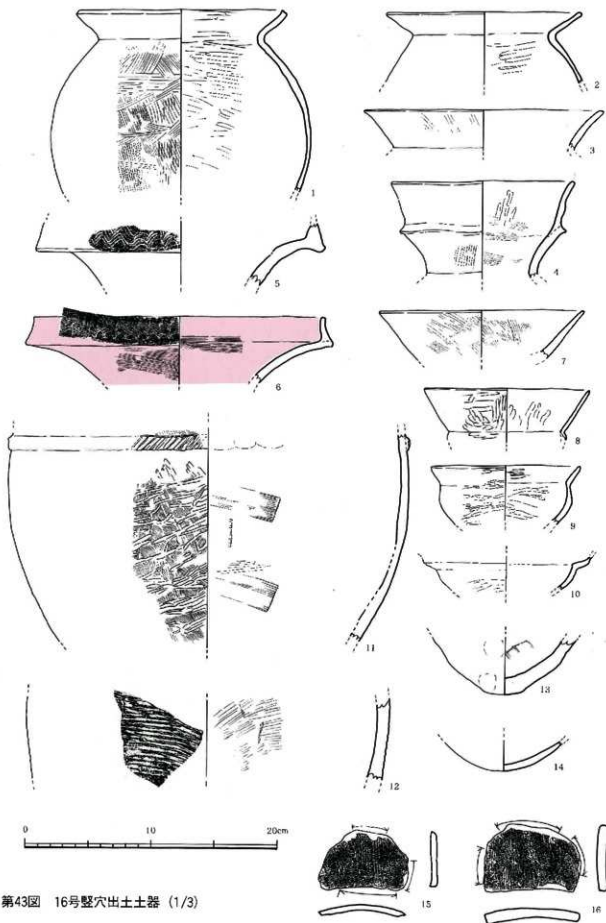
主柱2本は抜き取られた後に埋戻されたと判断され、北西部と東側壁の段や突出部はその際に形成されたものと見做される。遺物の殆どは埋土の中～上位からの出土であり土器等を用いた魔絶に伴う祭祀行為は確認出来なかった。

第43図1は口縁部がやや内湾気味に外に開き、頸部で屈曲し球形の胴部に続く甕。外面は縦方向のハケのち横ハケを加え、内面はケズリののち一部ミガキを施すもので布留式甕を比較的良く模倣した在地又は当地城周辺で製作された甕。口径6.8cmを測り、胎上にやや多くの角閃石と少量の金雲母・赤色粒を含み灰褐色を呈する。2は口縁部の開きがやや強く、端部を丸く仕上げた甕で、3はやや外反しながら開く類の口縁部。4は小形の複合口縁甕で胴部から底部を欠く。1は口縁部はやや外に反転しながら立ち上がり頸部の縮まりも直線的になる。5も複合口縁甕で頸から口縁部下平が残り、口縁部に櫛播波状文を施すもの。6は高環の口縁部周辺の破片と考えられ、やや立ち上がりの低い口縁部に櫛播波状文を施したのち器面全体に赤色顔料を塗る。7も高環の口縁部片であり、内外面とも斜め方向のハケを主とする調整。8は内外面ともやや雑なミガキによる小型丸底甕、8も同様の調整による小形鉢。9は口縁部が二重に屈曲する小形の鉢で、底部周辺はケズリのまま放置する。10は大形の複合口縁甕の胴部片で中程に帯状の刻目突帯を巡らし、外面はハケののちミガキを加える。11は外面左上がりのタタキによる甕の胴部。12・13は粗製甕と小形土器の底部。14・15は土器片加工品。

以上の土器の中で6・12等は前時期の混入と考えられるが、1～4・7～9・10など主要な土器は古墳時代前期中葉に比定されよう。



第42図 16号竪穴実測図（1/60）

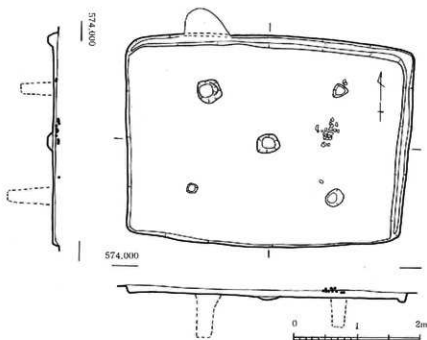


第43图 16号竖穴出土土器 (1/3)

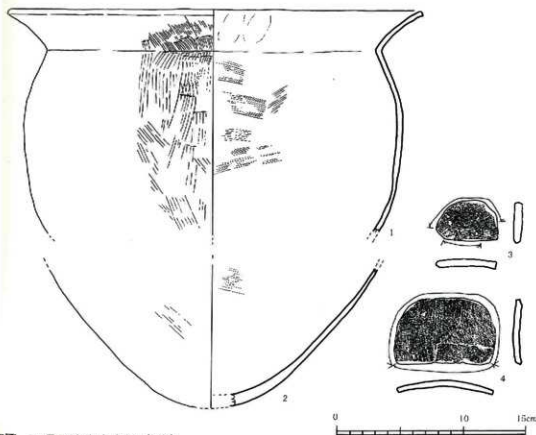
### 17号竪穴 (第44図)

16号の東南約8mに位置するが、全体に剛平を受け検出面から床面までは5~10cmと浅く北側辺の一部も後世の土坑により失われる。長辺4.4~4.6m・短辺3.1mの長方形をなし、床面積は12.6㎡と小形に属する。主柱は4本でその方位はN-88°-Wで15号と同じくほぼ磁北と直交する。中央部に長軸約0.4m、深さ約0.1mと浅い楕円状の伊跡があり、北・東の壁に沿って壁溝が掘り込まれている。主柱穴の中で北西部と南東部の二つは抜き取られたと判断され、遺物は東側主柱穴2本の中間にまとめて出土している。いずれも細片であるが大形の鉢と甕各1個体を使用した祭祀が埋戻しの前に行われた可能性を示し、古墳時代前期前半に置かれよう。

第45図1は口径33cm余りの大形の鉢で内外面ともハケを主調整とし、胎土に灰・白色粒を多く含む地産である。2は複合口縁甕の底部周辺と考えられるもので石炭を多く含む移入品。3・4は土器片加工品。



第44図 17号竪穴実測図 (1/60)

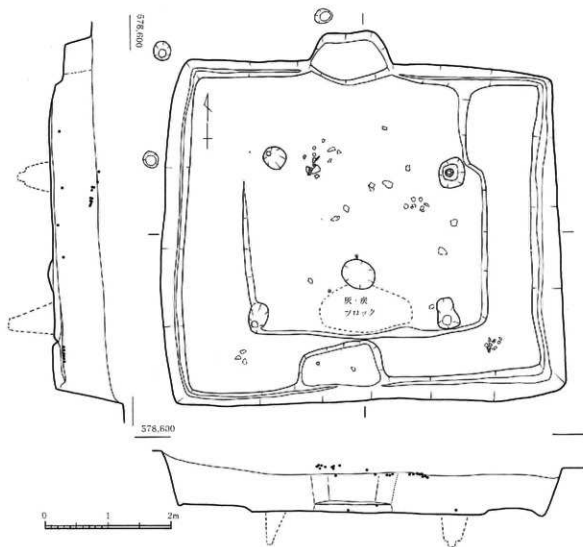


第45図 17号竪穴出土土器 (1/3)

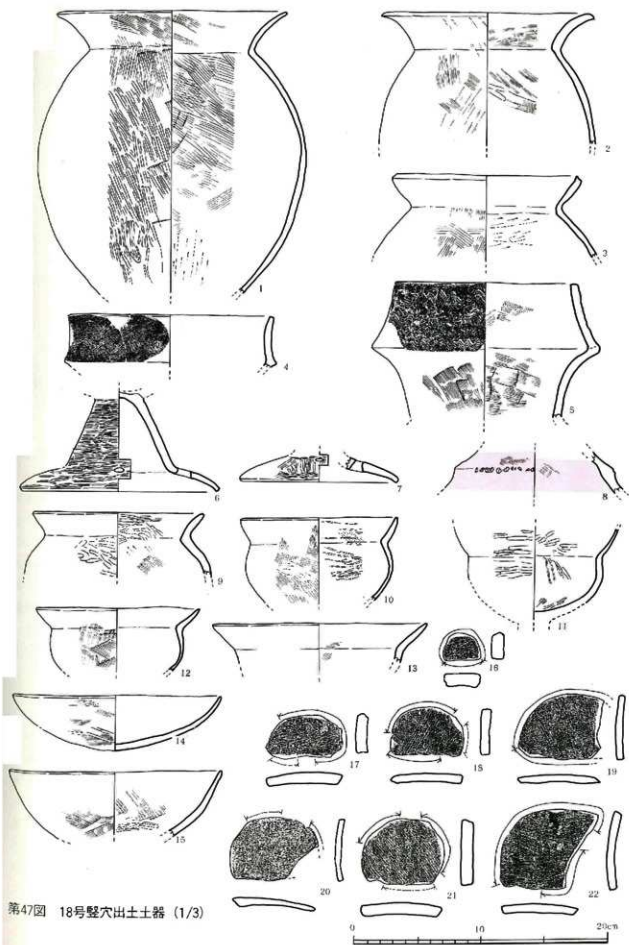
18号竪穴 (第46図)

17号の北側約5mの緩斜面に形成された中規模の住居跡で、その東側に近接し5基の竪穴が相互を意識しながら集中する。東西辺5.9~6.2m、南北辺5.0~5.4mの東西に長い長方形プランを示し、北側辺の中部に基部幅約1.4m、先端幅約0.8m、長さ0.5mの出入口と思われる台形状の突出部が設けられ、竪穴の床面より約0.1m高い所で段をなし増溝はこの部分で途切れる。検出面から床面までは約0.45~1mで南半部分の遺存状態は特に良く、床面積は24.85㎡。ベッド状遺構が出入口の東側から北西コーナー部分を除く三方に回り、幅約0.6~1mで高さ約0.1mとやや低く、東北隅付近は内側に張り出す。4本の主柱穴は廃絶時に全て抜き取られており、主軸方位はN-89°-E。直径約0.5mの不整形形の跡は中央やや南寄りに位置し、その南側には炭化物のブロックが認められる。土坑は南側ベッド状遺構の中央やや西寄りに設けられ、長辺約1.3m・幅約0.5m・深さ約0.1mの長方形に近い形態をなす。遺物は一部を除き埋土の上部に多く出土し、古墳前期中頃に置かれる。

第47図1は丸みを帯びた卵球形の胴部に外反しながらやや大きく外に開く口縁部を付す在地系甕で、胴部内面の下位はケズリを残す。2も在地系の甕で胴部の張りが弱いもの。3は口縁部がやや短く直線的に開く甕で、胴部内面はヘラケズリによる布留式を模倣したもの。4は小形の、5は中形の複合口縁壺の口縁部で櫛掻波状文を施す。6・7は裾部が内反しながら外に張る高杯の脚部で外面は丁寧なミガキによる調整。8は裾部が屈曲する高杯の脚部で内外面に赤色顔料を塗る。9~13は各種の小形鉢で11には脚部を付す。14・15は碗、16~22は大小の土器片加工品。以上の土器の中で検出面出土の3の甕を除く他は古墳前期中頃に占く置かれよう。



第46図 18号竪穴実測図 (1/60)



第47图 18号竖穴出土土器 (1/3)

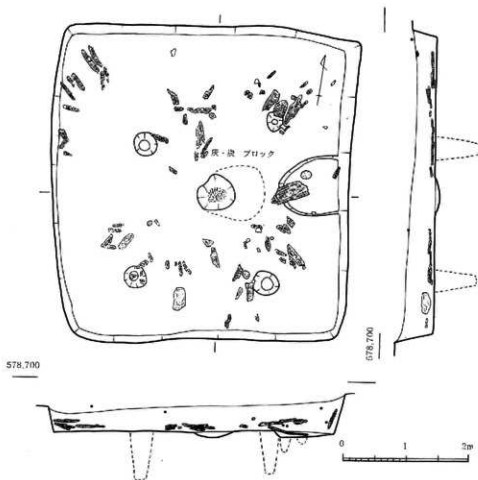
### 19号竪穴（第48回）

18・20号の南側に接するが重複しない遺構で長辺4.8～5.0m、短辺4.5～4.8mの方形に近いプランを呈する。壕溝は設けられず床面積は21.15㎡と中規模に属し、4本主柱の東北部の柱穴がやや北に寄る位置にある。主軸方位はN-82°-E、中央やや東寄りに直径0.5m・深さ0.2mの不整形円の炉跡があり、東側壁際土坑との間には炭化物と灰が分布する。土坑は基部幅0.9m、長さ1mの舌状をなし、中央よりやや北に浅いピットを伴う。

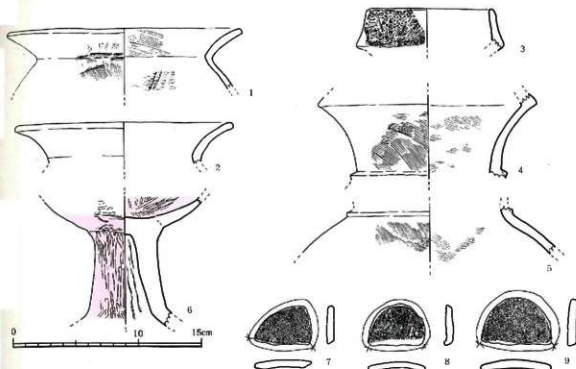
主柱には抜き取りの痕跡が認められ、床面より僅かに浮いた所に多くの炭化材が検出された。その大半は丸みを帯び垂木材と推定されるが梁・桁等の主要部材は出土せず、土坑内部の平板な炭化材が口立つ程度である。また、北西部の炭化材など消失直後の状態をほぼ保つものの出土状況と土層の観察から、本遺構は内部の片付けと主要部材の撤去が行われた後に焼却と埋戻しがなされたと考えられる。しかし、魔絶に関わる祭祀を示す遺物は確認されなかった。

第49図1は甕又は鉢の口縁部周辺と思われるもので、内外面ともハケを主とする調整。2は在来系甕の口縁部で横ナデによる。3は外面にやや雑な櫛描波状文を施す小形の複合口縁甕で、口縁部は内傾し口径は9.6cm。4・5は複合口縁甕の頭部と胴部片でいずれもハケを主調整とする。6は高坏の胴部片で、坏底部は丸みをもち脚部は筒状をなし、ミガキのち赤色顔料を塗る。7～9は土器片加工品。

これらの土器は時期決定の明確な根拠としてはやや小片であるが、弥生後期後葉に比定されよう。



第48図 19号竪穴実測図 (1/60)



第49図 19号竪穴出土土器 (1/3)

#### 20号竪穴 (第50図)

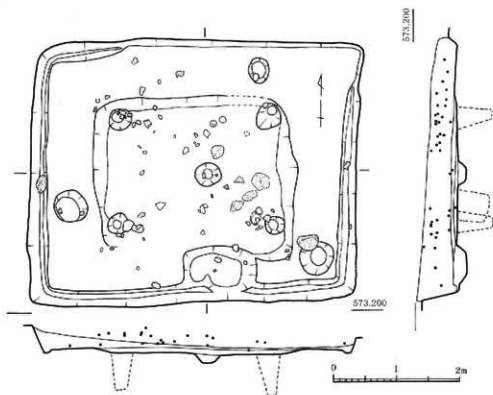
18号の東側に隣接しその後には営まれたと考えられる住居跡で、4本支柱の方位もN-87°-Eとほぼ平行する。本遺構を含め周辺の竪穴は北側の条溝を意識し、溝と平行しながら営まれている。長辺5.2m、短辺約4.2mの長方形を呈し、西側部分は検出面から床面まで約0.7mと良く残るが東半部分は削平により床面近くまで失う。中心部分に直径0.4m・深さ0.15mの円形の炉跡があり、南側壁際には長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.2m余りのやや大形の楕円状土坑が配置される。また、この土坑から西側の壁際を除く部分の支柱穴の外側には上面幅約0.8m、高さ5cm前後のベッド状遺構がコギ状に設けられ、壁溝は北側で途切れる。その他、南西隅部分と西側ベッド状遺構のやや南寄りに直径・深さとも約0.5mの円形土坑が認められる。

支柱の内2本は抜き取られ、その後には埋戻されたと考えられるが、人形土器片や大形礫は土上の中位に多く出土した。第51図1に示した甕は南西部と南東部の各支柱穴のやや上位から出土したものが接合し、埋戻しの途中における土器祭祀に使用された可能性がある。

第51図1は口径16.4cm、器高23cm、胴部最大径20.6cmを測る甕で、ほぼ直線的に斜め上へ開く口縁部から屈曲し球形に張る胴部と底部に至る器形をなす。口縁部と胴部外面はハケ、胴部内面は左上がりのヘラケズリによる調整。胎土に外來要素は見られず、暗茶褐色を呈し使用によるススとコゲが付着する。2は口縁部が緩く外反しながら開く在地系甕の口縁部。3はやや外反して開く口縁部から屈曲して締まる頸部に至り、球形に近く張り出すと思われる胴部に続く複合口縁部で、頸部突起の一部を短く取下せる。器面は斜め・横方向のハケを主とするが、口縁部周辺にはミガキを加える。石英をやや多く含む移入土器で黄~暗褐色を呈する。4は3に比べ口縁部の屈曲と頸部の締まりが更に弱くなる甕、胴部内面はヘラケズリによる調整で二重口縁部を模倣した在地系と思われるもの。5はほぼ球形の胴部から削平してやや外へ開く口縁部を有する無頸甕で、胴部内面はハケののち粗いミガキを加える。6も甕の胴部と考えられるもので、外面は縦・横方向のハケにより内面は右上がりのヘラケズリ。

7・8は高杯の杯部で、杯底部はやや低平となる。いずれもやや雑なミガキを主とする調整。9・10は高杯の

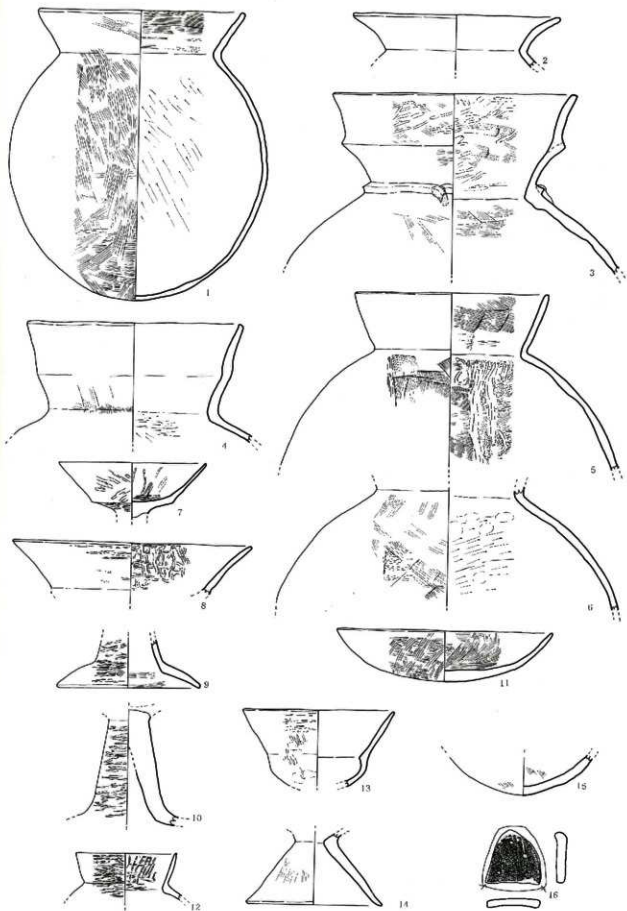




第50図 20号竪穴実測図 (1/60)

脚部で、9の裾部分は内反気味に外に張る。11は内外面ともハケ調整による椀で口径は17.2cm、器高4cm。12は小形の短頸甕、13は小型丸底甕でいずれも外面はミガキによる調整で、赤褐色を呈し丁寧な造りである。14は器台の脚部で孔を設けるもの。15は甕又は甕の底部で、丸底を呈する。16は甕の頸部付近を加工したメンコ。

これらの上器は、1・3の壺と甕の特徴等から古墳時代前期中葉に属せよう。



第51圖 20号豎穴出土土器 (1/3)

0 10 15cm

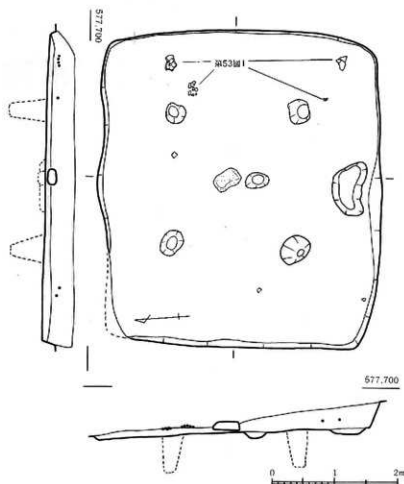
### 21号竪穴（第52図）

20号の東側約8mの谷部にほぼ平行し形成された住居跡で、長辺約5m・短辺約4.5mの長方形に近いプランをなす。北辺部分は床面付近まで削平されているが、南側壁周辺の検出面からの深さは約0.4mと比較的良く残る。主柱は4本で主軸方位はN-86°-Wと18・20号の方位とはほぼ同じで、床面積は20.16㎡。跡は中央やや南に位置し、長軸約0.35m・深さ約0.1mの楕円状を呈する。南側側中央には壁面より僅かに離れ長軸約0.9m、深さ約0.1mとやや浅い不定形土坑があるが、ベッド状遺構や壁溝は設けられない。

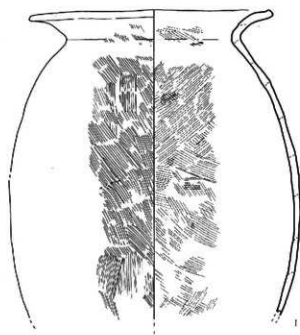
主柱穴にはいずれも抜き取り痕跡が認められ、炉跡北側の台石や東側両主柱穴と東側壁の間で数箇所に別れ出土した甕（第53図1）は本格的埋戻しに先立ち実施された祭祀に関わる遺物である。甕は破壊され口縁部周辺のブロック1箇所と胴部片のブロック2箇所に分割されるが、底部周辺は出土せず別の遺構に投棄された可能性が高いものと思われる。

第53図1は口縁部が大きく反転しながら開き端部を丸く仕上げる甕でやや長削の胴部に続く。外面はタキののち斜め方向の丁重なハケを施し、内外面にはススやコケが付着し煮炊されたことを示す。口径19cmを測り、胎土に白・灰色粒を多く含む在地産。2・3も同様の器形を呈すると思われる甕の口縁部で、4は無顔面の頸部片と考えられるもの。5は高坏の坏部片で内外面ともハケを主とする潤整。

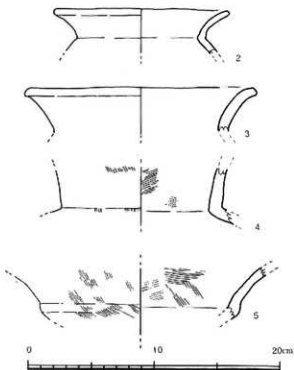
本遺構の時期は甕の特徴からすれば弥生後期後葉に置かれる。



第52図 21号竪穴実測図（1/60）

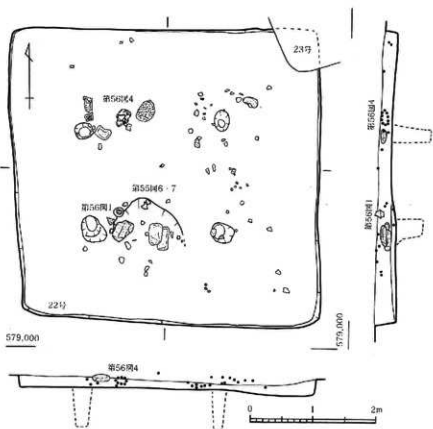


第53図 21号竪穴出土土器 (1/3)

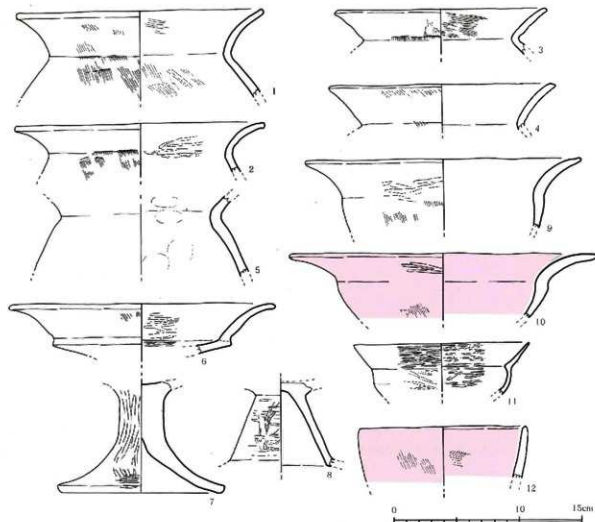


22号竪穴 (第54図)

19号の南東に接し北東隅部分を23号により切られる。1辺4.6~4.9mの方形に近い平面形をなし、復原床面積は21.6㎡。全体に削平を受け床面までは約0.1~0.2mとやや浅く、燧溝は設けられていない。4本主柱の主軸方位はN-88°-Eで周辺の竪穴と同じく規制が窺われる。北側2本の主柱穴中間の床面は火熱を受け焼上化して



第54図 22号竪穴実測図 (1/60)

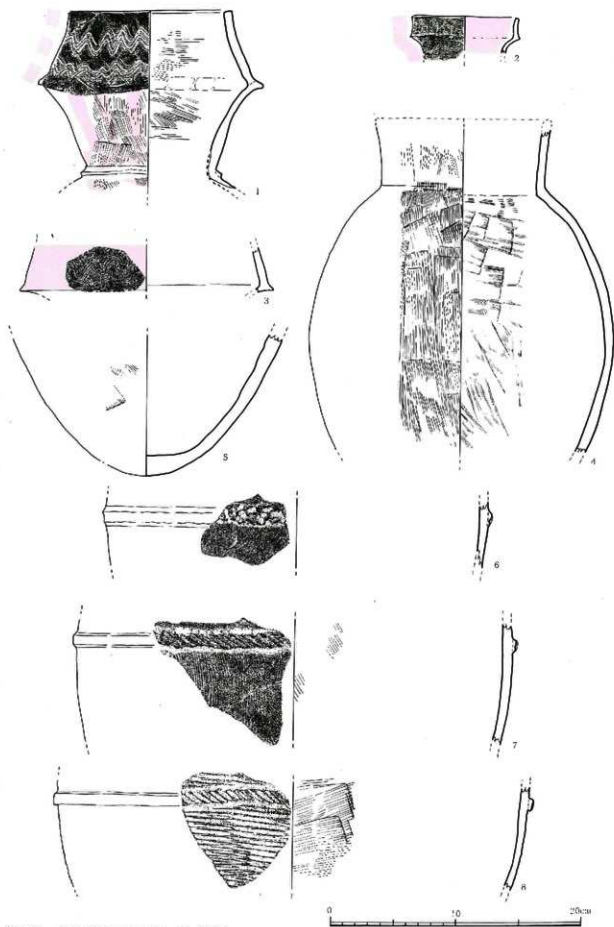


第55図 22号竪穴出土土器. 1 (1/3)

おり、掘り込みはないか?として機能したものか。また、南側2支柱の間には半円状の落ち込みが認められ、上部には高坏脚部・複合口縁垂の縁頸部から口縁部を取り外し倒立させた土器等や人頭人の襟3点などが集中する。これらの遺物床面より0.1~0.2m余り浮いた位置からの出土である。従って竪穴の廃絶過程は、支柱の抜き取りと部材の撤去→周囲の土手の埋戻し→複合口縁垂(第56図1)・直口壺(同4)・高坏(第55図7・8)等を用いた祭祀行為→使用土器の破壊と投棄→全面的埋戻し、と考えられる。弥生終末~古墳初期の所産である。

第55図1・2は反転しながら開く堇の口縁部片で、器面調整はハケを主とするが2の内面には一部ミガキを加える。3・4はより直線的に開く堇I口縁部片で、5は堇の胴部上半部で張り出しのやや弱いもの。6・7は同一個体と考えられる高坏の坏部と脚部。口縁部は反転しながらやや長く開き、坏底部との境で強く屈曲し明確な後をもつ。脚部外面は縦方向のミガキ、坏部内面は横方向のミガキを主とし、胎上に角閃石・灰色粒等を含む在地産である。8は短脚の高坏の脚柱部で、外面は縦のち横方向のミガキによる調整。9・10は大きく反転して開く口縁部から丸くやや深い坏底部に至る高坏の坏部で、10は赤色顔料を塗る。11は口縁部がやや短く斜め上方に開く丸底の小形鉢で内外面ともやや丁寧なミガキによる調整。12はやや深い碗で赤色顔料を内外面に塗布する。

第56図1は倒立埋置された複合I口縁垂の頸部から口縁部で、胴部から丁寧に取り外されて置かれたと考えられる。内外面の調整はハケを中心とし、口縁部に2段の櫛波状文を描き空白部に顔料を塗る。頸部や胴部にも顔料を帯状に縦方向に塗る。2は小形の複合I口縁垂と思われるものでI口縁部と頸部に櫛波状文を施し内外面に顔料を塗る。3はI口縁部に櫛波状文を描いたのち顔料を全面に塗布する。4はI口縁部と胴部下半を欠く直口壺で胎土に金雲母を多く含む搬入品。6~8は張り出しの弱い複合口縁垂の胴部で、8の外面はタタキによる。



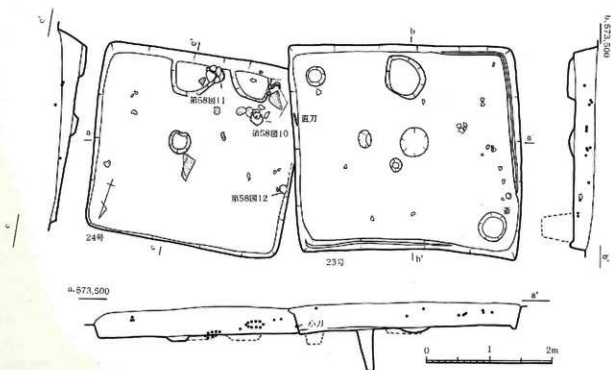
第56图 22号竖穴出土土器. 2 (1/3)

23・24号竪穴（第57図）

19・20号の東側に接し2基重複する小形竪穴であり、古墳前期中葉の23号が前期前葉の24号の南西の一部を切つて営まれている。その配置は先行する3基の竪穴を意識し、重複も必要最小限に留めている。

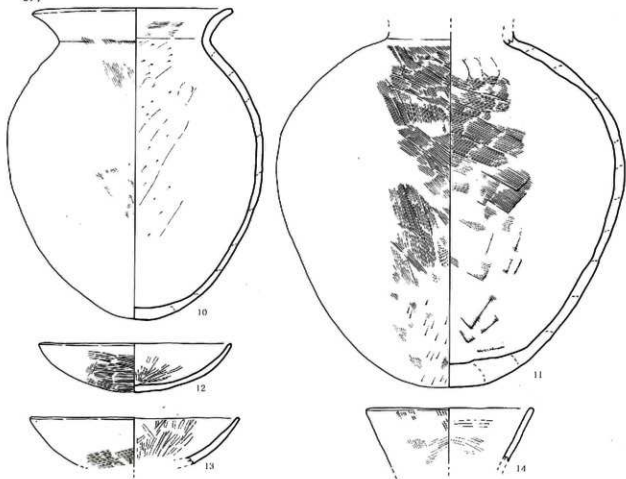
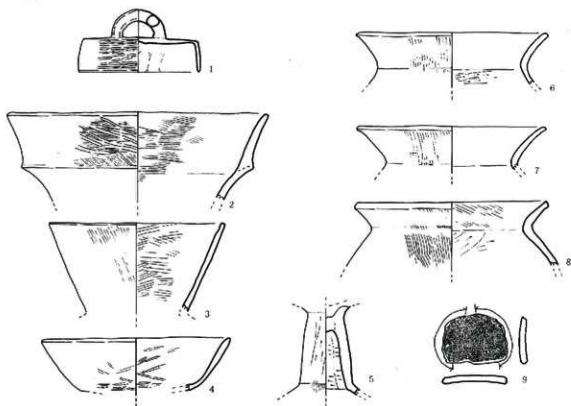
23号は長さ3.5～3.6m、短辺3.3～3.4mと僅かに東西に長い長方形プランを呈し床面積は9.9㎡。ほぼ中央部に直径0.5m・深さ0.1mの円形の炉跡が、その南側の壁際寄りに直径0.7m・深さ0.1mの不整形形の土坑、北西隅部分に直径・深さ共に0.5mのやや深い円形の土坑が設けられる。支柱は炉跡の東側のやや深い1本のみと考えられる。壁溝は北側の一部と南西部に部分的に認められ、全体に一般的住居跡と構造を異にする。出土遺物にも注目されるものとして半島系土器（蓋）と直刀があり、東西の壁際の中位から出土し埋戻しの当初段階において置かれたものか。第58図1は朝鮮半島の瓦質土器蓋を模倣した土師器の蓋で平坦な天井部から直角に近く屈折し下垂する口縁部に続く。天井部の中央に直径1cm程の半円環状を呈する鈕を付し、表面を丁寧なミガキにより仕上げる。器壁3mm前後と薄く、石英や長石を若干含むが精良な胎土による搬入品である。2は口縁部がやや外に開く複合口縁蓋、3はハケとナデによる調整の長頸蓋。4・5は高坏の坏部と脚部片。6～8は甕の口縁部片で、6・7は口縁部が反転して開く在地系、8は外来系を模したもの。9は土器片加工品。

24号竪穴は1辺3m余りの方形に近いプランをなすが南西隅周辺を23号により失い、復原床面積は8.4㎡。ほぼ中央に直径0.4m・深さ0.1mの不整形形の炉跡が、南側中央部の壁に接し基部幅約0.8m・長さ0.5m余りのやや浅い土坑がある。その西側にも不定形の土坑が認められるが支柱穴と壁溝は設けられない。出土遺物の中で第58図10に示した甕は大きく二分され不定形土坑の周辺から、11は蓋の胴部を縦に半裁した状態で舌状土坑から、12の腕は口縁部の一部を欠き西側壁際からの出土。蓋は埋戻しの前の、甕と椀は埋戻しの途中における祭祀に用いられたものか。10は口径15.6cm・器高24.6cmを測り、緩く反転しながら開く口縁部に卵球形の胴部を付す在地系甕。外面底部周辺はケズリとナデ、他は斜め方向のハケをナデ消す。胴部内面は右上がりケズリによるが、全体に器壁はやや厚く不十分なものとなる。11はやや肩の張る胴部から不安定でやや厚い平底気味の丸底に続く蓋で頸部から上を欠く。内外面ともハケを主とするが外面底部付近はケズリのちハケを施す。12と13は腕で内面はミガキ、外面はハケによる調整。14は長頸帯の口縁部片。

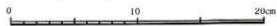


第57図 23・24号竪穴実測図 (1/60)





第58图 23·24号竖穴出土土器 (1/3)



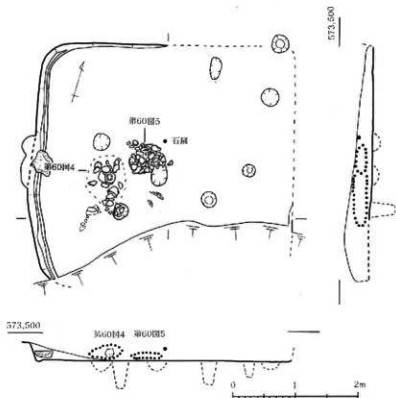
25号竪穴 (第59回)

21号の南側約5mに位置するが水田化に伴い東半部分は床面付近まで削平され、支柱穴から南側は壁を始め床面も大きく掘削されている。現存南北辺の長さは約3.6m、東西辺約1.8mであるが、支柱穴の位置や僅かに残存する東側壁から復原すると4×4.2mの方形に近いプランを呈するものと思われる。2本支柱の柱穴は中心より南に寄り心軸距離は1.5m、方位はN-68°-Eと10号竪穴と近い。炬燵はほぼ中央部にあり、長軸0.35mの楕円形で深さは0.1mと浅い。西側壁際には壁溝が設けられるが北・東側には無く、土坑等の有無も不明であるが一般的な住居跡とは異なる施設である可能性が高い。出土遺物は遺構の西部部に多いが、その中でも注目される石剣は中央部検出面からの出土。第60回4・5に示した複合口縁壺や6の鉢は、竪穴の西側の2箇所の遺物集中部から出土したもので、壺はいずれも口縁部付近を欠損し胴部も破砕されている。これらは竪穴の埋戻しに先立つ祭祀に使用された後に破壊されて置かれ、石剣は埋戻しの途中で投棄されたものか。

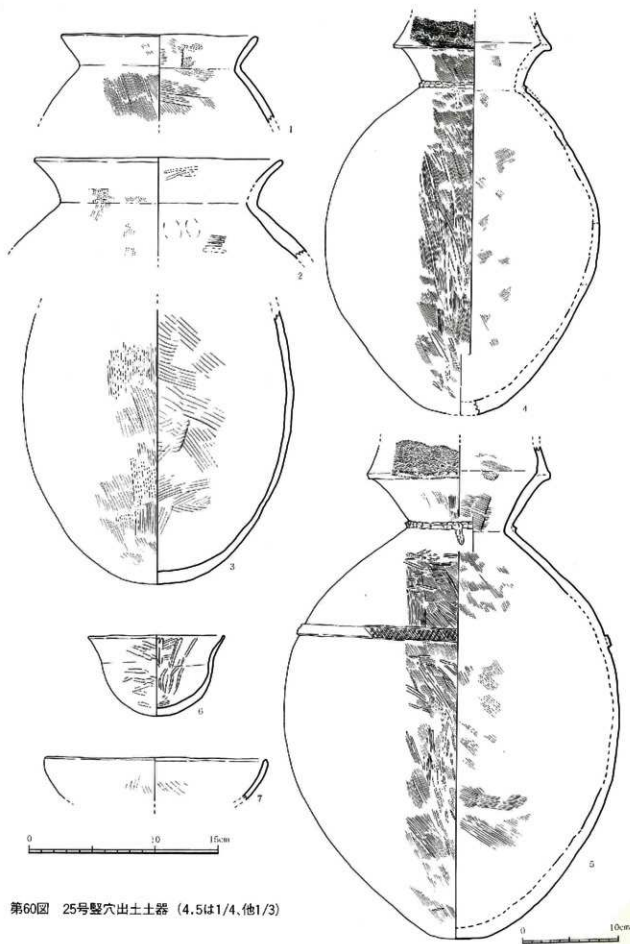
第60回1・2は在地系の甕の口縁部片で、内外ともハケを主とする調整。3は甕の胴部で、丸底の底部からやや長胴の胴部に続く。外面は縦方向の、内面は斜め方向のハケによる。

4は丸底に近い底部から中位に最大径をもち肩のあまり張らない胴部に続き、頸部で屈曲しやや内反しながら立ち上がる口縁部にいたる複合口縁壺。口縁部に2段のやや複雑な櫛播波状文を施し、頸部には三角形突帯をつまみ上げにより巡らし一端を下垂させるが、下垂部は剝離する。口縁部上半を丁寧に打欠き底部も残存しない。外面の調整は縦方向のハケのちやや粗いミガキを加え、内面の器壁の大半は剝落するがハケによる調整である。胎上に角閃石や門・灰色粒を多く含む在地産。5も口縁部付近を欠く大形の複合口縁壺で、内反しながらやや長く延びる口縁部から屈曲し直線的に締まる頸部に至り、胴部は卵球形に膨らみ平底気味の丸底となる。胴部のやや上位にベルト状の刻目突帯を巡らし、口縁部2段の櫛播波状は丁寧に施す。胎上に石英をやや多く含み、造りの入念な搬入品と思われるもの。6は完形の小形丸底鉢で内外面ミガキによるが、内面に一部ハケが残る。7は碗の口縁部片でハケのちナデによる調整。

本竪穴は、これらの土器から古墳時代前期前葉に比定されよう。



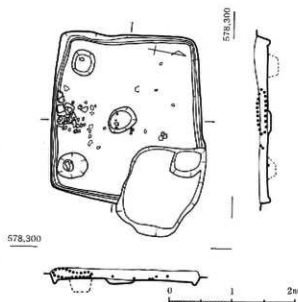
第59回 25号竪穴実測図 (1/60)



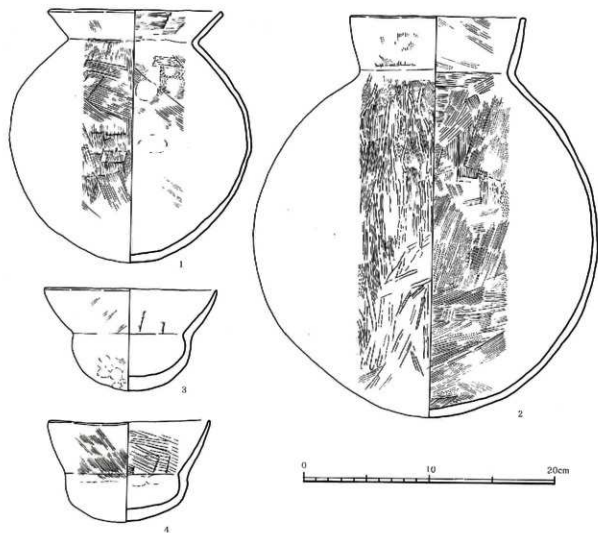
第60图 25号竖穴出土土器 (4.5±1/4, 他1/3)

### 26号竪穴（第61図）

25号の東側約11mに位置する小形の竪穴で、北東部を後世の上坑により切られると共に全体に削平を受け遺存状態は良くない。長辺約2.6m、短辺約2.3mの長方形に近いプランをなし、検出面から床面までは約0.15mと浅い。壁溝は全周すると考えられ、復原床面積は約5㎡で本遺跡最小規模となる。中央に長軸0.5mの浅い枡跡と思われる楕円状上坑があり、南側の両コーナーには直径0.4・0.5mの円形の上坑が配されるが支柱穴やその他の施設は認められず、これも住居跡とは性格を異にする。南側中央部の壁に接し第62図1～4に示した土器が集中して出土したが、これらはいずれも埋戻しに先立つ祭祀に使用され、破壊の後に投棄されたと考えられる。この他に鉄器と石製品各1点が出土している。



第61図 26号竪穴実測図 (1/60)



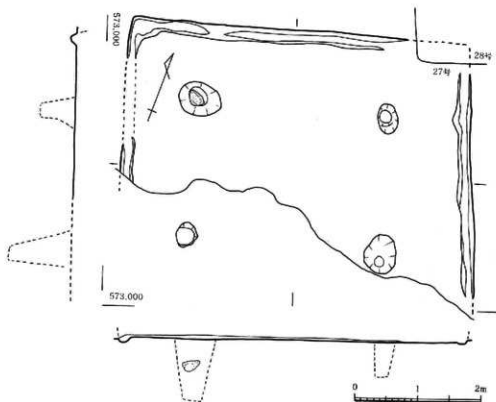
第62図 26号竪穴出土土器 (1/3)

第62図 1は直線的に開く口縁部が頸部で屈曲し、ほぼ球形に張り出す胴部に至る甕。外面は縦方向のハケのち肩部に横方向のハケを加え、内面はハケとナデによる調整である。口径13.8cm・器高20cm・胴部最大径19.3cmを測り、ススとコゲが付着する。2は口径約14cm・器高31.7cm・胴部最大径27.4cmの無頸蓋で、僅かに外に開く口縁部から反転し球形の胴部に続く。外面は縦方向のハケに粗いミガキを加え、内面は縦・横方向のハケによる調整。3・4は小型丸底甕でいずれもやや内反しながら外に開く口縁部に丸底の胴部を付したも。器面はハケとナデにより、器壁がやや厚い。3は口径14cm・器高8.1cm、4は口径12.9cm・器高7.9cmを測る。

これらの上器は古墳時代前期中頃に比定され、本遺構の時期もここに置かれる。

#### 27号竪穴（第63図）

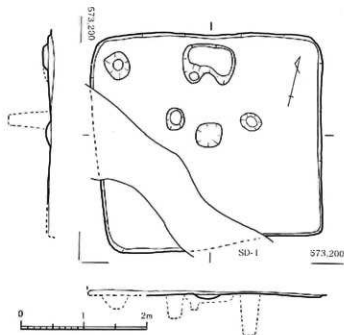
26号の南側約10mにあり北東コーナー部分を28号により切られると共に、ほぼ床面に至るまで耕作による削平と攪乱を受け南側から西側にかけては約4割が消失する。残存する3辺の壁溝から長辺約5.6m、短辺約5mの東西に長い長方形プランに復元される。推定床面積は約20㎡、4本主柱の主軸方位はN-76°-E。壁溝はほぼ全周すると思われるが、刳跡や土坑等の施設の有無については不明である。西北部主柱穴には柱の抜き取り痕跡が認められ、その後に台石状の礎が投げ込まれている。出土遺物が殆ど無いため、所属時期も明らかではない。



第63図 27号竪穴実測図 (1/60)

### 28号竪穴 (第64図)

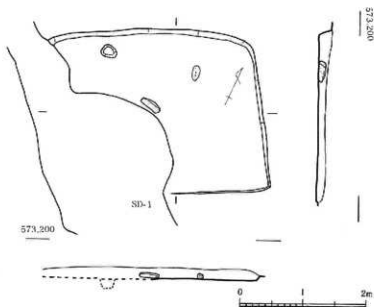
27号と一部重複する遺構であり、全体的に削平されていると共に西から南側の中程を古代の溝(SD-1)の掘削により失う。長辺3.6m、短辺3.2mの隅丸長方形をなし、復原床面積は10.88㎡と小形の竪穴である。ほぼ中央に直径0.4m・深さ0.1mを測る円形の柱跡があり、そのやや北寄りに2本の柱穴が設けられる。心軸距離は1.2mと短く、主軸方位はN-79°-Eで27号と平行し近接する時期の所産と思われる。北側中央の壁際より僅かに露れ、長軸0.8m余りの不定形土坑があり、南西部にはやや浅いピットが掘り込まれる。また、北西隅付近にも直径0.4mの柱穴状の上坑が認められるが、壁溝は認められない。出土遺物はほぼ皆無で、時期は不明。



第64図 28号竪穴実測図 (1/60)

### 29号竪穴 (第65図)

28号の南西約5mに位置するが、本遺構も西南部をSD-1により大きく切られる。また、削平も激しくその規模や内部施設については不明な所が多い。現存東西辺約3.3m、南北辺約2.5m、検出面より床面まで約0.1mを測るが、支柱・カ跡・壁溝・土坑等の施設については不明。中央部とその北東に台石状の礎が検出された他に遺物の出土は認められなかった。従って、所属時期及び住居跡か否かについても断定し難い。



第65図 29号竪穴実測図 (1/60)

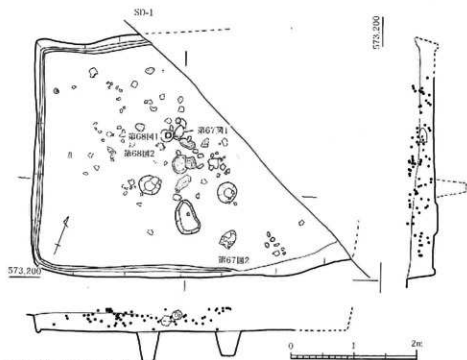
### 30号竪穴（第66図）

29号の南側約4mにあり木遣構もまたSD-1によりその北東部は消失する。南側(長辺)現存長5.2m、短辺3.6mを測り、中心より大きく南側に寄った位置に2本の支柱穴が設けられる。心心距離は1.3mと近接し、その中央と南側壁の間に長軸0.5mの浅い楕円状の炉跡が認められる。主軸方位はN-74°-Eで近辺の27・28号に近い。壁溝は南側の中程で途切れ全周しない。埋土の中へ上位から多量の遺物が出土したが、中でもほぼ完形の甕2個体(第67図1・2)を横転させたものや、頸部から上を取り外し倒立させた甕(第68図2)、及び定形に近い鉢(第68図5)などは埋戻しの途中における祭祀に使用されたと考えられる。第67図1の甕は煮炊きに使われた痕跡と共に内部には一部赤色顔料が残存しており、顔料の容器として転用された可能性が高い。

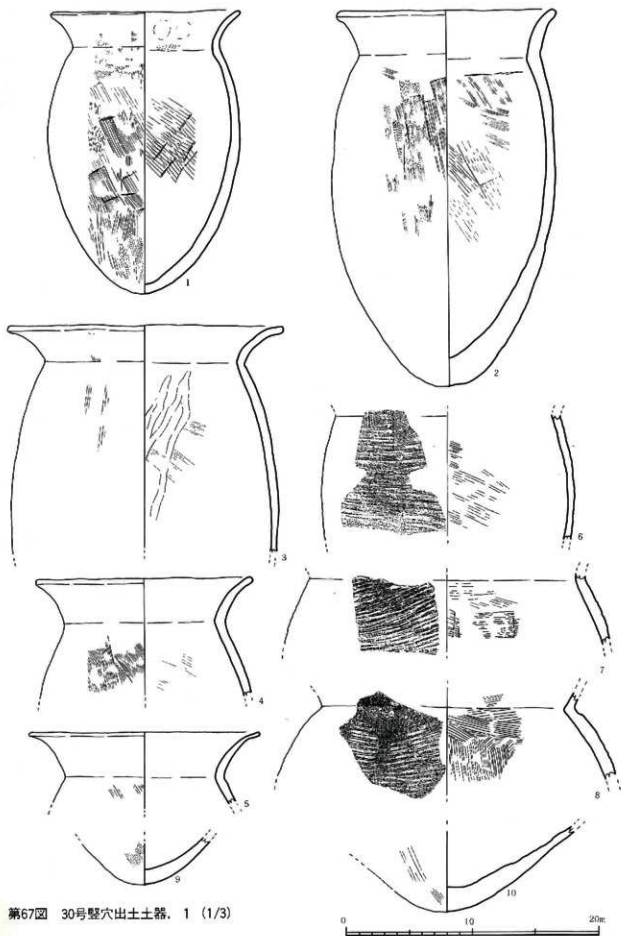
第67図1は口径14.9cm、器高22.4cmの小形の甕で、緩く外反して開く口縁部から屈曲し張りの弱い長胴の胴部に続き、底部は尖底気味の丸底となる。内外面とも縦・斜め方向のハケによる調整で、胎土に角閃石等を多く含む在地産。2も同様の器形を呈するもので口径17.4cm、器高29.8cmと中形に入る甕。器壁がやや厚く、特に底部は厚みを増しやや不安定となる。調整や胎土に大きな差異はなく、煮炊きに使われた跡を残す。3は口径21.3cmとやや大形の甕で胴部下半を欠く。口縁部の開きがより強く、内面に部分的ミガキを加える。4と5は中形の甕の口縁部片で、4には金雲母が少量含まれる。6～8は外面にタタキが認められる甕胴部片で、6を除きやや厚の張る器形となる。胎土等は在地系と大差はなく、当地域におけるタタキ手法の出現期を示す資料である。9・10は甕又は壺の底部で尖底に近いもの。

第68図1は口縁部外面に2段の飾描波状文を丁寧に描く複合口縁甕で、胎土に金雲母をやや多く含む搬入品と思われる。2は在地の胎土による複合口縁甕で胴部から打欠きにより外されたもの。口縁部はやや強く内傾し、頸部に三角形突帯を巡らすが文様は施されない。3は複合口縁甕の胴部上半、外面はハケのち縦方向のミガキを部分的に加える。4は口径33.5cmを測るやや大形の高坏坏部、外反しながら大きく開く口縁部にやや低平な坏底部を付し、長脚の脚部に続くものと思われる。内外面とも縦方向のミガキを丁寧に施す。5は口径11.8cm、器高15.2cmを測る鉢、外面は縦方向のハケで内面はハケのち粗いミガキで外面と口縁部内側に顔料を塗る。6はやや小形の土器片加工品。

これらの土器は弥生後期後葉に比定され、木遣構もここに置かれる。

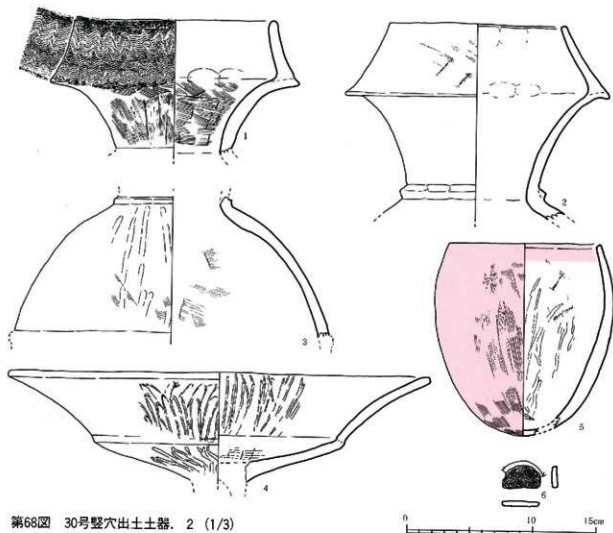


第66図 30号竪穴実測図 (1/60)



第67圖 30号竖穴出土土器。1 (1/3)





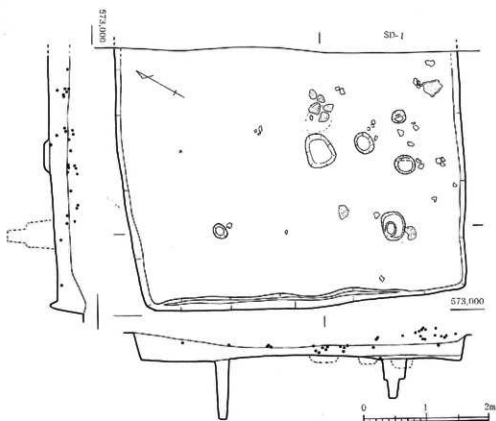
第68図 30号壜穴出土土器。2 (1/3)

### 31号壜穴 (第69図)

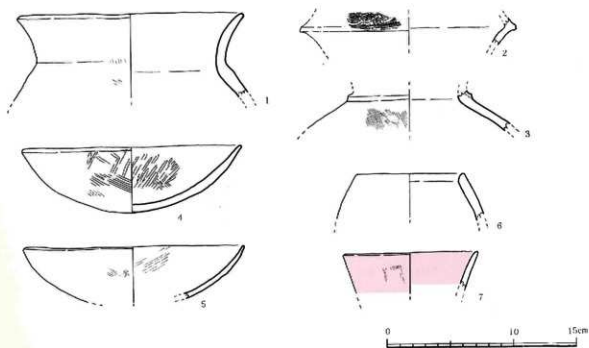
30号の南東約5mにあるが、これもSD-1により切られ遺構全体の約4割を失う。東西方向の長方形プランを呈することは確実であるが、現存長辺は約4.2m、短辺約5.2mで中規模の住居跡と考えられる。主柱穴は4本と思われるが西側の2本のみ検出し、西南部主柱穴には抜き取りの跡が認められる。中央やや南西寄りに楕円状の炉跡があり、その東側に接し灰や炭化物が分布する。炉跡の長軸は約0.5mで深さ約0.1mと浅い。この南側に三つのピットは規模が小さい浅いもので、機能や性格については明らかにし難い。

遺物は比較的少なく、鉄器1点以外は埋土の中～上層から小破片として出土し廃絶に伴う祭祀を示す資料は検出されなかった。第70図1は緩く反転して開く口縁部を有する甕で、胴部は長胴と思われる。外面に一部ハケが残るがナデを主とする調整。2は複合口縁部の1縁部片、3は胴部から頸部の破片である。4は口径17cm、器高5.2cmを測る丸底の碗であり、内外面ともハケのちミガキを加える。5も同様の器形の碗で口径は17.2cm。6は口縁部が内傾する鉢で、7は長頸部の1縁部片で両面に赤色顔料を塗る。以上の土器の胎土は在地系が多いが、4にはやや多めの石英と少量の金雲母が含まれる。

時期決定の手掛かりとなる有力な資料がやや乏しいが、出土土器は弥生終末頃に編年されよう。



第69图 31号竖穴实测图 (1/60)



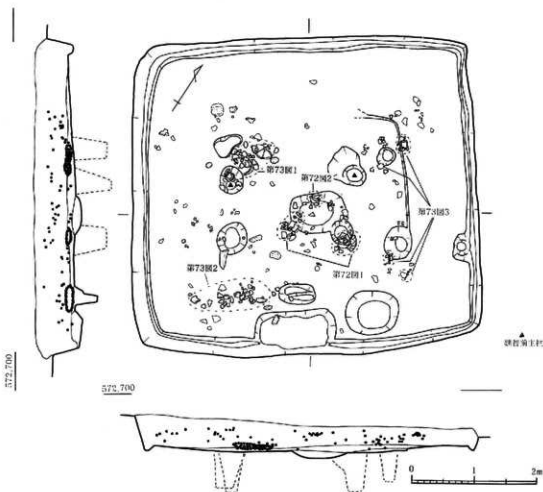
第70图 31号竖穴出土土器 (1/3)

### 32号竪穴 (第71図)

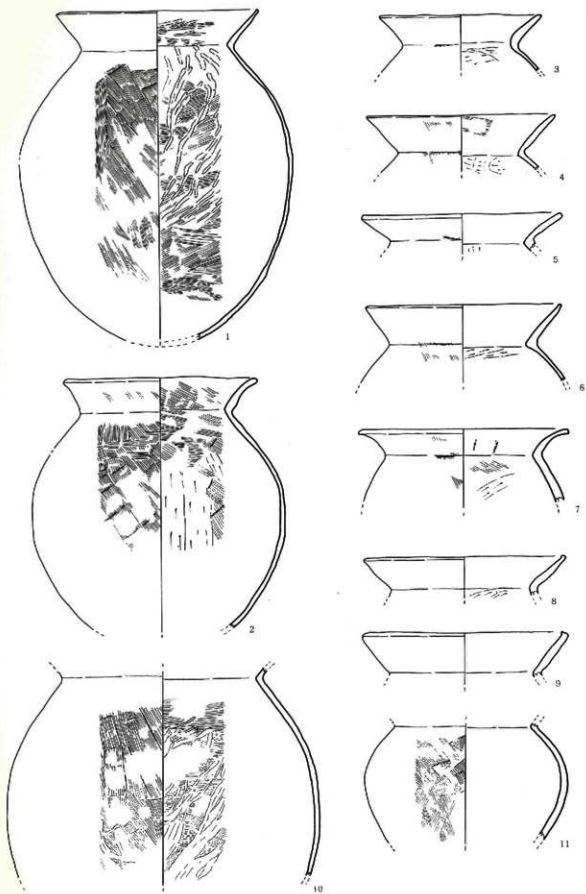
30・31号の東約8m、A区の東端部に位置する長方形プランの竪穴である。長辺5.3~5.5m、短辺4.6~4.8mを測り、検出面から床面までは0.2~0.6mで東側は削平のためやや浅い。主柱穴と思われる柱穴は6本検出されたが、当初は2本主柱であり拡張に伴い4本に変更されたと判断される。東側のベッド状の段は最初の竪穴の壁である可能性が強く、南側壁際中央の大形楕円形土坑に近接する小形の土坑もこれに伴うものと考えられる。4本主柱の方位はN-58°-Eであり、壁溝が全周し床面積は22.5㎡の中形に含まれる。中央やや南寄りに長軸1m・短軸0.6m・深さ0.15mの楕円形が溝が、その東側にも長軸0.8m・短軸0.7m・深さ0.7mのやや深い円形に近い土坑が配される。内部からは甕を主とし多量の土器が出土しているが、第73図1・2の粗製甕は床面に密着した状態で、第72図1・2の甕と第73図3の複合口縁甕は床面よりやや浮き分割された出土状況を示す。これらは埋戻しに先立つ祭祀と埋戻しの途中における祭祀行為に起因すると考えられる。

第72図1は卵球形の胴部から屈出しほぼ直線的に外に開く口縁部に続く甕で、外面はハケを主とするが内面はケズリをハケとミガキにより消す。2は球形に近い胴部に外反して開く口縁部を付す甕、外面は縦方向のハケのち横のハケを一部加え、内面はケズリのちハケを施す。1・2とも在地の胎土により、煮炊きに使用されている。3~7は前記の甕と同様の器形を示す甕の口縁部片で内面のヘラケズリが頸部に及ぶもの。8・9は外來系甕を模したと考えられるもので、10・11は大小の甕の胴部。

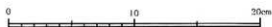
第73図1は口径24.5cm・器高39cmを測る粗製甕で、繰く反転して開く口縁部から卵球形に張り出す胴部に続き底部はやや厚い丸底を呈する。器面は非常に細かいハケとナデによる調整。2は同様の口縁部から殆ど張らない

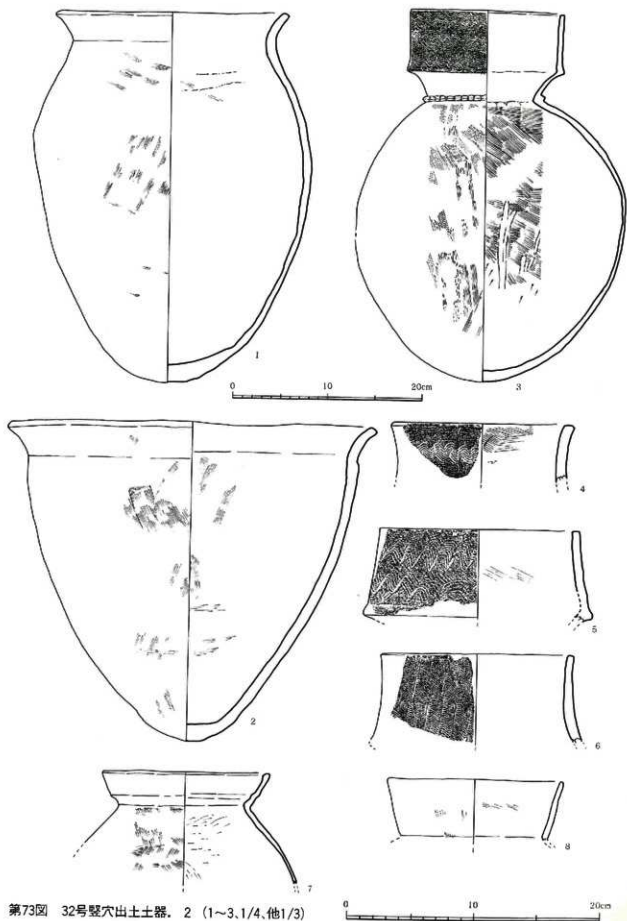


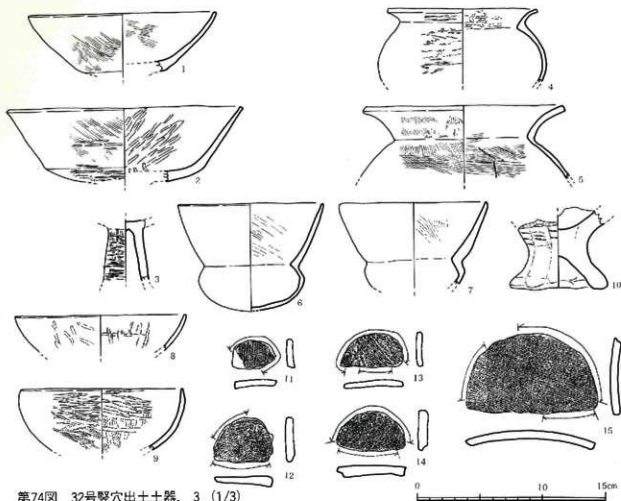
第71図 32号竪穴実測図 (1/60)



第72图 32号竖穴出土土器。1 (1/3)







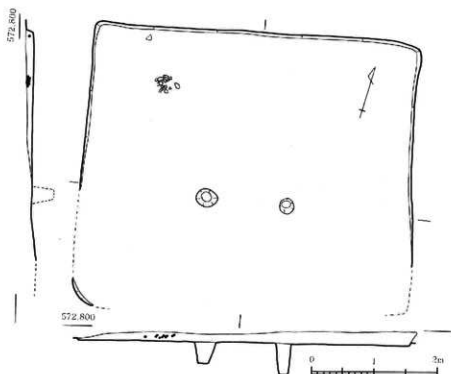
第74図 32号竈穴出土土器。3 (1/3)

胴部に至るもので、口径38cm・器高33.2cm。いずれも胎土に角閃石や白・灰色粒を多く含む。3はほぼ直立する口縁部から反転して締まる頸部に至り、球形に近く張り出す胴部と丸底の底部を付す複合口縁壺。口縁部には3段の柳摺波状文を丁寧に施し、頸部に突帯を巡らす。口径16.3cm・器高39.3cmを測り内外面ともハケを主調整とする在地系土器である。4～6も同様の器形を呈する複合口縁壺の口縁部片、7は山陰系の二重口縁壺を模倣したもので、8は無頸壺の口縁部片。第74図1は口縁部が内湾気味に外に開く高環の坏部、2はほぼ直線的に開くもの。3は高環の脚柱部で縦方向のミガキのち横のミガキを加える。4・5は外反して開く口縁部がやや強く屈曲し球形の胴部に続く鉢。6・7はハケとナアを主調整とする小型丸底壺。8はタタキ整形の製塩土器底部で石英粒を非常に多く含む。9・10は碗でいずれもミガキによる仕上げであるが、9はより丁寧な造りとなる。これらの土器の胎土に金雲母や石英を僅かに含むものがあるが、在地とその近辺の製作と見做されるものが殆どである。10～15は大小の土器片加工品。

これらの土器の中でほぼ定形の壺・壺の特徴から、本遺構は古墳前期中葉に営まれたと考えられる。

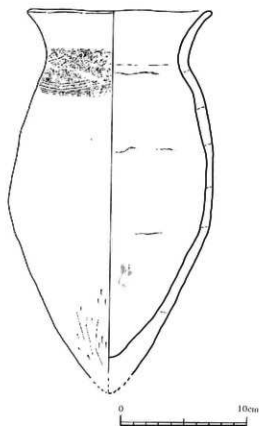
### 33号竈穴 (第75図)

31号の西側約10mに位置するが開田時の削平等により遺構の南側は消滅し、北半部分が僅かに残るのみとなる。最も残りの良い北壁で検出面から床面まで約0.15mであり、南半部分は南西コーナーの痕跡が残るに過ぎない。長辺5.2m、短辺約4.5mの東西方向の長方形プランを呈し、復原床面積は22.4㎡。主柱は中心よりやや南側に寄る位置に2本形成(N-79°-E)され、心心距離は1.3mを測る。炉跡や土坑及び壁溝の存在は確認されなかった。出土遺物も非常に少ないが、西北部から第76図に示した壺の破片がまとまって検出された。この土器はほぼ完形に復原され、竈穴の煙突しに先立つ祭祀に使用された後に破壊されて置かれたと考えられる。



第75図 33号壑穴実測図 (1/60)

第76図は口径15cm、推定器高30cmの粗製甕、緩く反転し斜めに開く口縁部からあまり張らない長胴の胴部に続き、底部は尖底に近い形態をなすものと思われる。頸部外面に4条前後の櫛掻波状文と直線文を荒く施し、内外面ともナデと非常に細かいハケによる調整であるが、外面底部周辺はケズリによる。他の粗製甕と同じく胎土に角閃石等の砂粒をやや多く含み、暗茶褐色を呈し弥生後期後葉に比定される。



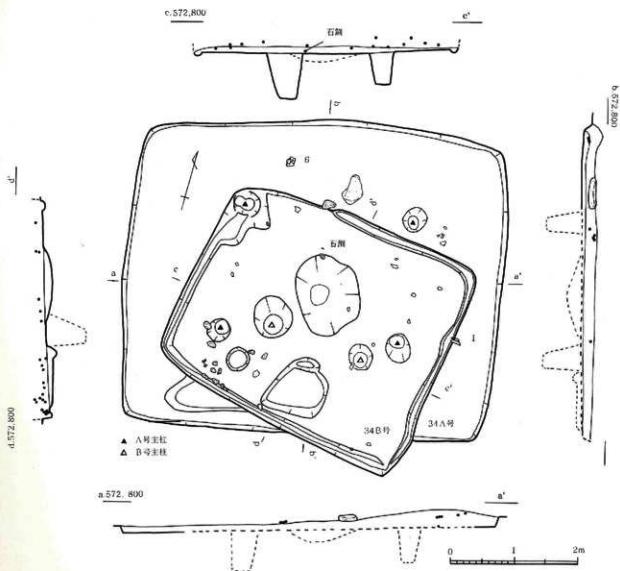
第76図 33号壑穴出土土器 (1/3)

### 34A・B号竪穴（第77図）

31号の南約5mにあり2基の竪穴がほぼ完全に重複する。削平が激しいこともあり検出時点ではB号がA号を切り形成されたと推定されその順に掘り下げ作られたが、その後の検討の結果逆である可能性が高いことが判明した。出土遺物の大半もA号に伴うと考えられ、本遺跡2例目となった石銅片の時期もA号の属する占墳前期中葉に置かれる。

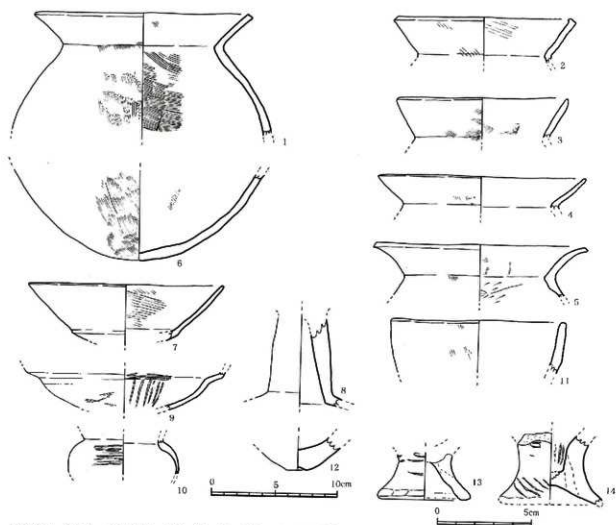
34A号は長辺約6m、短辺約4.9mの東西方向の長方形をなし、床面積は27.26㎡と中規模の住居跡である。4本の支柱はいずれも抜き取り痕跡が各柱穴に認められ、主軸方位は $N-80^{\circ}-E$ 。中央部に長軸約1.3m・短軸1m、深さ約0.2mの不整形凹形跡があり、南壁側の2段掘りの土坑も付属施設と思われる。石銅片跡の北側からの出土で、製塩土器2点も含め埋戻しの前にこれらを投棄する祭祀が執り行われたと考えられる。

34B号は長辺4.2m、短辺3.4m余りの長方形を呈し、床面積は12.48㎡と小形の竪穴である。中心よりやや南側に2本の柱穴を設け、主軸方位は $N-6^{\circ}-W$ でA号とは明らかに異なる。中心距離は1.5mを測るが、抜き取りにより当初の掘方より規模が大きくなる。壁溝は北西部で途切れ、炉跡等の施設についても明確ではない。



第77図 34A・B号竪穴実測図 (1/60)





第78図 34A・B号出土土器 (1~12、1/3・13・14、1/2)

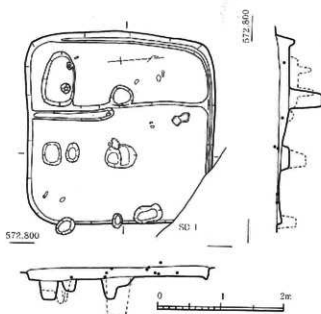
第78図1は直線的に外に開く口縁部が頸部で屈曲しほぼ球形に張り出すと思われる胴部に続く甕で、内外面ともハケを主とする。2~5も甕の口縁部片、2は布留式を模したもので口縁端部内側が突出する。5は口縁部が反転し開く在地系で胴部内面ヘラケズリによる調紋。6は丸底を呈する甕の底部であり胎土に大粒の石英を含む。7はやや小形の高杯の杯部で8は脚柱部。9は口縁部が二重に屈曲する鉢でやや粗いミガキを加える。10は小型丸底甕の胴部と考えられるもので、11は碗の口縁部片。12は外側が僅かに窪む甕の底部。13・14は胎土に多量の石英と結晶片岩を含む製磁土器底部で海部周辺からの搬入品と考えられ、14の底部内側は粘土充填部が剥落した可能性があるもの。

以上の上器の中で34A号に伴うことが確実なものは1・6の2点に過ぎないが、12を除く他の土器もA号に帰属すると考えられ、これらは古墳前期中葉に比定されよう。12は弥生後期終末~古墳初に編年されるものであり、34B号の時期もここに置かれる可能性が高い。

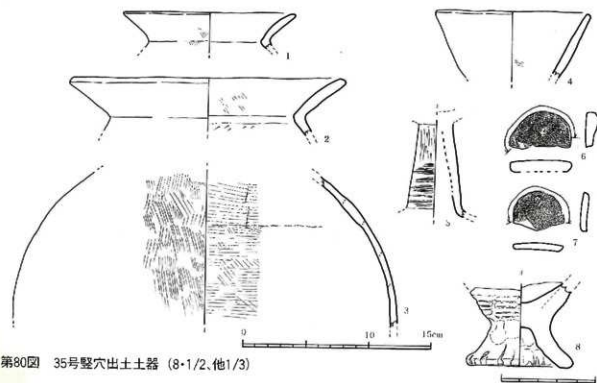
### 35号竪穴 (第79図)

34の東側約4mに位置する小形の竪穴で1辺3mの隅丸方形のプランを呈する。これも全体に削平を受けると共に、東北コーナー部分はSD-1により切られ遺存しない。壁溝は北・西側のみ巡り、復原床面積は7.56㎡。主柱穴と考えられる深い柱穴2木が中心部に認められ、東側は抜き取りと思われる。主軸方位はN-10°-W。西側壁に平行し幅約1mの低いベッド状遺構があり、その南半は小溝により区画される。南西隅付近には長軸0.9m・短軸0.5m、深さ0.2m余りの楕円形土坑が設けられ、その内部には小ピット二つが掘り込まれる。この他南側中程の柱穴なども本遺構に伴う可能性はあるが、一般的な住居跡とは異なる施設と考えられる。出土遺物の中には製塩土器も含まれるが特異な状況を示さない。

第80図1・2はやや反転し開く壺の口縁部で2の割部内面はヘラケズリによる調整。3は球形に近く張り出す壺の胴部で外面は縦方向、内面は横方向のハケによる。4は小形の壺の口縁部で、5は高坏の脚部。8は海部産と思われる製塩土器脚部。6・7は土器片加工品。これらの土器は古墳前期中葉に置かれよう。



第79図 35号竪穴実測図 (1/60)



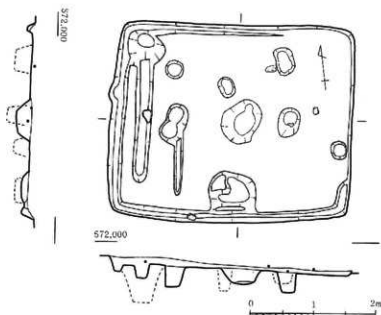
第80図 35号竪穴出土土器 (8-1/2、他1/3)

### 36号竪穴 (第81図)

35号の南約5m、調査区の中央東端部に位置する小形長方形の竪穴である。長辺約3.8m、短辺約3mを測り、床面積は10.1㎡。検出面から床面まで深い所で約0.1mと削平のため残りが良くない。中心部分に不整形の炉跡があり、その東西に2本の主柱穴が設けられ方位はN-81°-W。壁溝は東壁側で途切れ全周せず、南側中央の壁際に2段掘りの土坑が、西北隅部にもやや深いU形形状の上坑がある。主柱穴には抜き取りの痕跡が認められ、西側主柱から南側に直線的に延びる小溝は壁の手前で終息する。また西北部の上坑からもこの小溝や壁溝と平行する溝が掘られているが、これらの溝の性格・機能については明らかにし難いが他の住居跡とは異なる施設と考えられよう。遺物は非常に少なく図示可能なものは2点に過ぎず、廃絶祭祀を示すものも認められなかった。

第82図1は差の頸部から胴部の破片で、頸部に強く屈曲しやや大きく張る胴部に続くものと思われる。内外面ともハケを主とする調整であるが、内面はケズリのちハケを施す。2は口径12.2cmを測る碗の口縁部片、ハケとナデによる調整。

これらの上器から時期を判断するのはやや躊躇するが、古墳時代前期中頃～後半に比定して大過ないであろう。



第81図 36号竪穴実測図 (1/60)

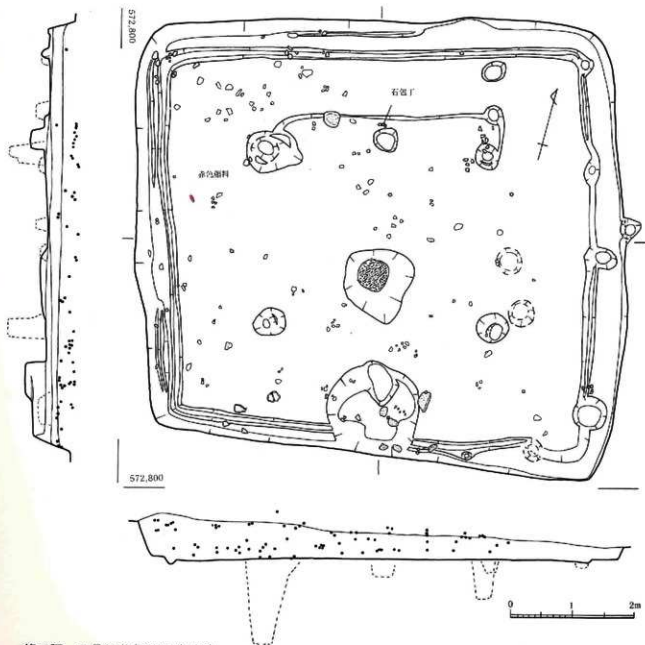


第82図 36号竪穴出土土器 (1/3)

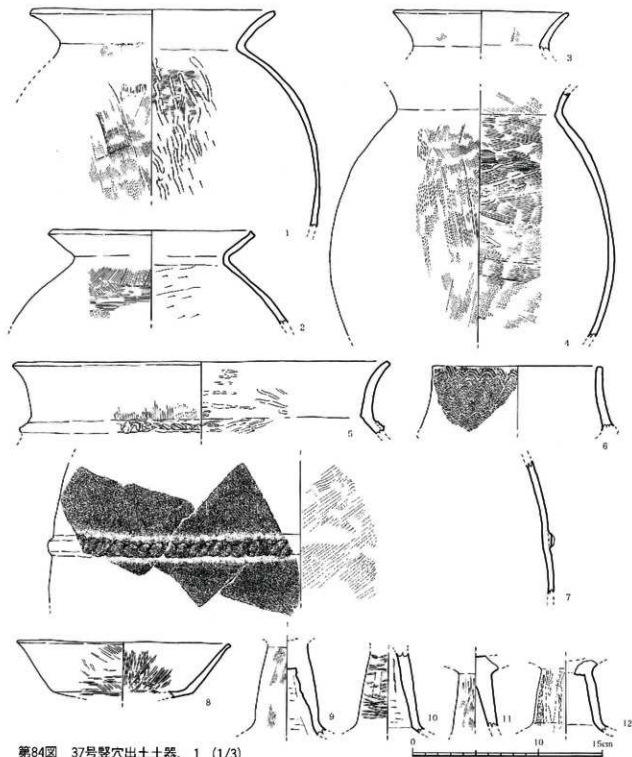
### 37号竪穴 (第83図)

36号の西約2m、34号の南約5mに位置する中形の住居跡である。長辺7.4~7.7m、短辺6.4~7.1mの台形に近い長方形をなし壁溝が一部二重に設けられるが、これは当初より0.3~0.6m余り拡張した結果であり床面積は46.72㎡。本遺構も全体的に削平を受け、東南部は掘立柱建物と重複する。4本の主柱穴は抜取り痕跡を残し、主軸方位はN-77°-E。中央やや南に長軸1.2m、深さ0.1mの不定形で大きい炉跡があり、内部床面は焼土化する。南側壁の中央部に2段掘りやや深い大形土坑が設けられ、北側の2本の主柱穴から北側壁の間は低いベッド状の高まりが認められる。出土土器は小片が多く特異な状況を示さないが、鉄器4点と土器片加工品29点の出土はこれらが呪絶祭祀に使用された可能性を強く示唆する。

第84図1はほぼ球形の割部から頭部で屈曲し反転しながら開く口縁部に続く在来系莞であり、割部外面は縦方向のハケにより内面はヘラケズリ→一部ハケ→やや粗いミガキによる調整。2は直線的に外に開く口縁端部内側を短く突出させる布留式系莞、胴部内面は右上がりのヘラケズリで外面は縦ハケに横ハケを加える。搬入品と思



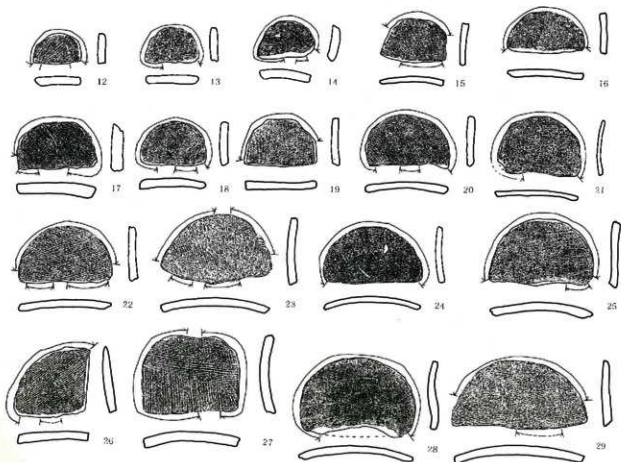
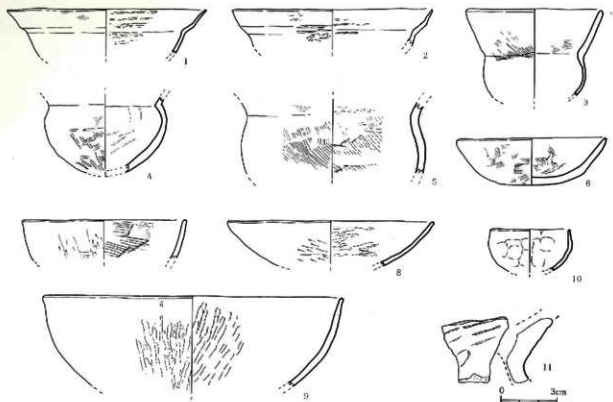
第83図 37号竪穴実測図 (1/60)



第84図 37号竪穴出土土器。1 (1/3)

われるが産地は特定し難い。3は1と同様の甕口縁部、4は甕の胴部でやや張りが弱く、金雲母を多く含む。5は口縁部の開きが弱く頸部に刻目突帯を巡らす在来系甕の口縁部。6は複合口縁甕の口縁部ではほぼ全面に柳壺波状文を施し、7は同様の甕の胴部。8～12は高坏の坏部と脚部。第85図1・2は口縁部が二重に折れ曲がる鉢で赤褐色を呈し搬入品か。3・4は小型丸底甕で、5は鉢又は小形の壺の胴部。6～9は大小の碗、10はミニチュア土器の碗。11は製埴上器底部片であり、12～29は各種の上器片加工品の代表的なものを示した。

これらの土器から本遺構は、古墳前期中葉の所産と考える。



第85图 37号竖穴出土土器。2 (1/3)

0 10 15cm

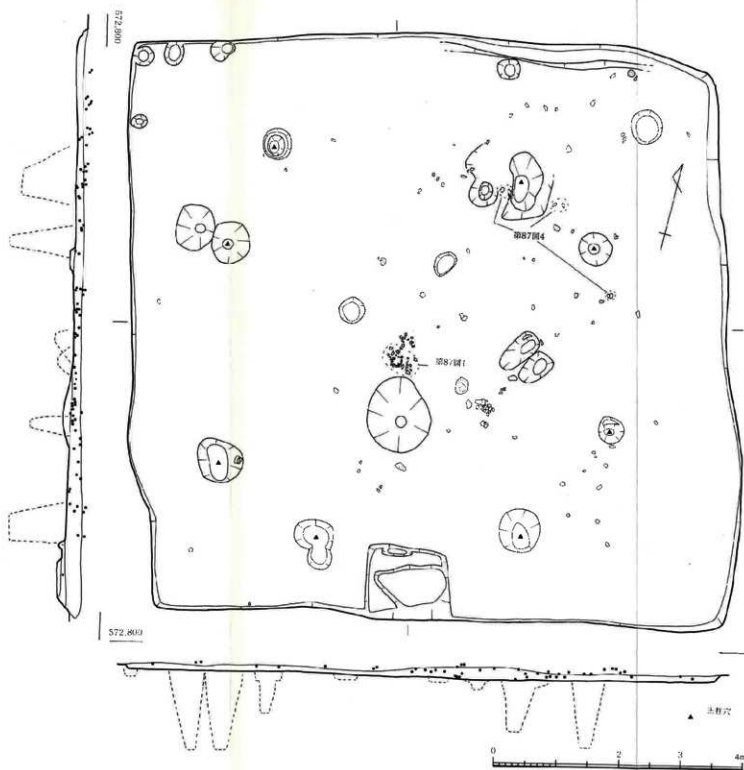
38号竪穴（第86回）

37号の西側約7m、A区の中心部よりやや東に位置する特大規模の竪穴である。長さ（東西）9.2～9.6m、短辺9mの方形に近いプランをなし、検出面から床面までは0.1m前後と全体に深く削平を受ける。中でも西側壁の周辺は床面近くまで削平が及び、本来の立ち上がりは0.5m余り外側である可能性がある。壁溝は巡らず、現状の床面積は84.8㎡と本遺跡では39号に次ぐ2番目の規模を有する。主柱穴は2本・対を四方に配した8本であり、北側の二対の主柱間の各々の心軸距離は南側に比べ約0.3～0.4m狭くなる。各主柱穴の掘り方全てに抜き取り痕が観察され、柱間間隔の広い南北方向が主軸とした場合、方位はN-71°-Eとなる。中央南側に長軸1.2m、短軸1mの楕円形を呈し深さ0.1m余りの皿状の跡がある。南側壁の中心に接し長辺1.4m、短辺約1mの平面が長方形で内部が2段掘りの土坑が認められる。この他の施設については明らかではないが、その規模を除き一般的住居跡の構造と大差はないと言えよう。

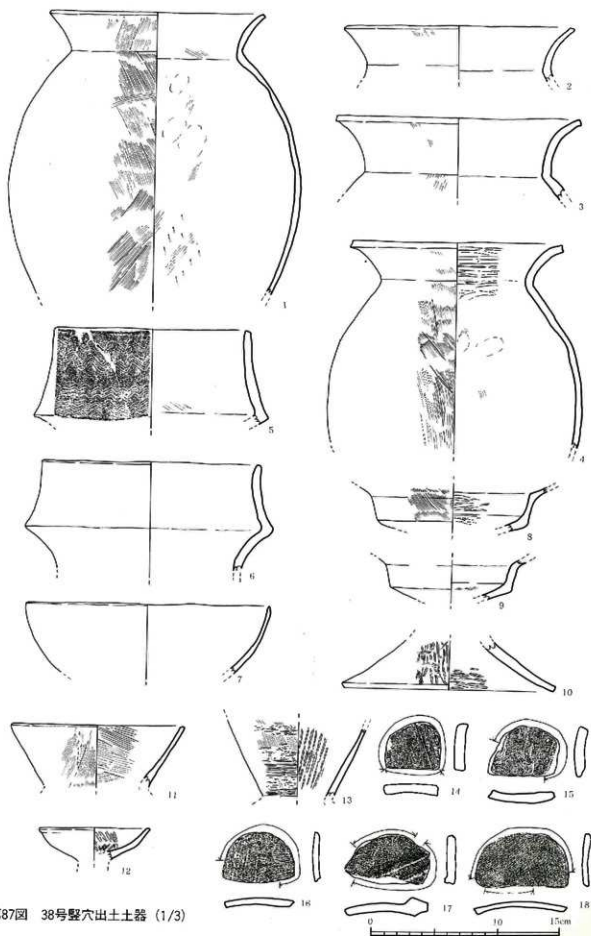
出土土器は細片化したものが多いが、竪穴の北側の土器群と東北部主柱穴の周辺から出土した第87回1と4の壺2個体は埋戻しに充立つ祭祀に用いられた後に破砕・投棄されたと考えられる。また、ほぼ床面に接し出土した鉄器4点もその可能性を残す。

第87回1は縦く外反して湾く口縁部から屈曲し卵球形に近い腹部に続く在来系で、外面は縦方向のハケにより内面はケズリのちハケとナデによる調整。2～4も同様の器形を呈する壺であり、4の口縁部内面はミガキをやや丁寧に加える。5・6は口縁部がやや内傾しながら立ち上がる複合口縁部の口縁部で、5の外面には2段の櫛歯状文を丁寧に施し、6は無文のまま放置する。7は口径18.8cmを測るやや大形の甗。8・9は埴底部がやや強く屈曲する高坏の坏部、10はその脚部と考えられるもの。11・12は長須壺の口縁から頸部片であり、12はハケのちミガキを加える。13は器台の受部で、14～18は土器片加工品。

これらの土器は古墳時代前期前葉でも中頃に近い時期に比定され、本遺構もここに属する。



第86回 38号竪穴実測図 (1/60)



第87图 38号窖穴出土土器 (1/3)

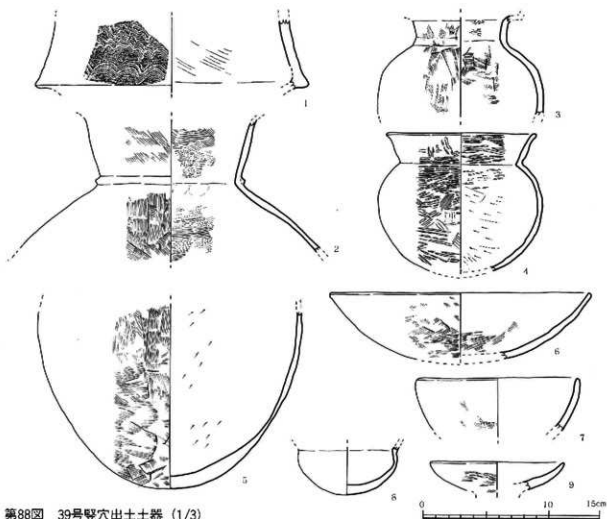


39号竪穴（第89図）

A区の中央部のやや南側に位置する特大規模の竪穴であるが、東・南側を水路と水田造成時の土取りにより失い全体の約6割が残る。西側辺（長辺）10.8m、現存の北側辺（短辺）長4.6mで復原長は約10mの長方形プランを示すものと考えられ、復原床面積は105㎡と本遺跡最大である。主柱は中央のついで四方に2本・対配置した8本を合わせた9本と考えられ、これらの柱穴は他の柱穴に比べより深くほぼ同一レベルを保つ。また、西側を除く各組の柱穴の間にも主柱穴よりやや浅い柱穴が設けられるが、これらは補助的存在と思われる。柱間間隔のより広い東西方向を主軸とした場合、方位はN-69°-Eとなり前述の38号と近い。

中心部の主柱穴の南側に長軸0.9・0.7mの二つのやや浅い楕円状の土坑は炉跡と考えられ、北西部には内部に第88図4に示した土器を割り置くピットがある。この他のピットについては性格・機能は明らかではないが、各主柱や補助柱を抜き取った後、竪穴廃絶に伴う祭祀に使用された土器が先のピットに置かれたと推定される。また、床面に接し出した鉄器4点も祭祀に関わる可能性がある。

第88図1は外面に櫛播波状文を施す複合口縁壺の口縁部片。2は複合口縁壺の頸部から胴部片で内外ともハケを主とする調整。3は口縁部を欠くが山陰系二重口縁壺と考えられるもので、やや外に傾く頸部に球形に張り出す胴部を付し、内外面とも細かいハケを主調整とする。4は小形の鉢で外面はハケのちミガキ、胴部内面はヘラケズリのち一部ミガキを加える。5は甕又は壺の底部で、6・7は大小の碗。8は小型丸底壺の底部で、9は小型器台の受部と思われるもの。これらの土器から本遺構は古墳前期中葉に置かれよう。



第88図 39号竪穴出土土器（1/3）

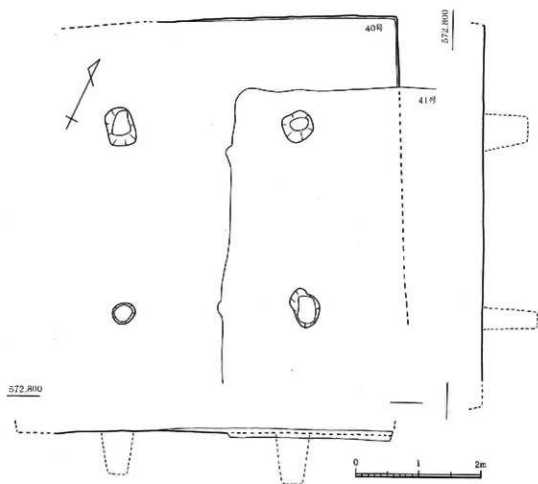


第89图 37号竖穴实测图 (1/60)

#### 40号竪穴（第90図）

39号の東南約10mに位置し41号と重複する。本遺構が先行するがほぼ床面に至るまで削平を受け、南・西側壁とその周辺は完全に消失する。また、東半部分は41号に切られ東北コーナー付近が残るのみとなる。主柱穴4本の位置から復原した場合、長辺約6.2m、短辺約5.9mの長方形となり、推定床面積は35㎡。主柱3本は抜き取りと思われる痕跡が認められ、主軸方位はN-64°-E。

本遺構に伴う出土遺物は非常に少なく、僅かに北西部主柱穴から第91図に示した土器が検出されたのみである。これは緩く外反して広く壺の口縁部で、胴部は長胴を呈するものと思われる在地系土器で弥生後期末葉から終末に比定される。従って、本竪穴の時期もここに置かれる。



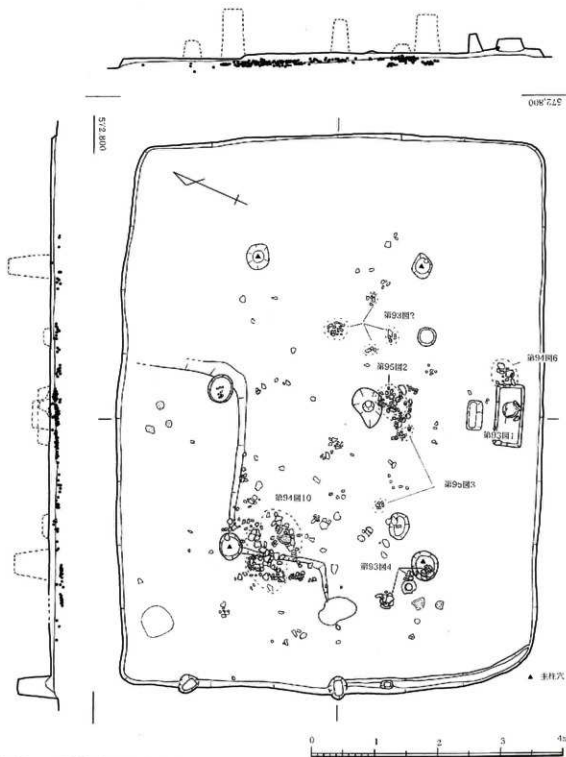
第90図 40号竪穴実測図（1/60）



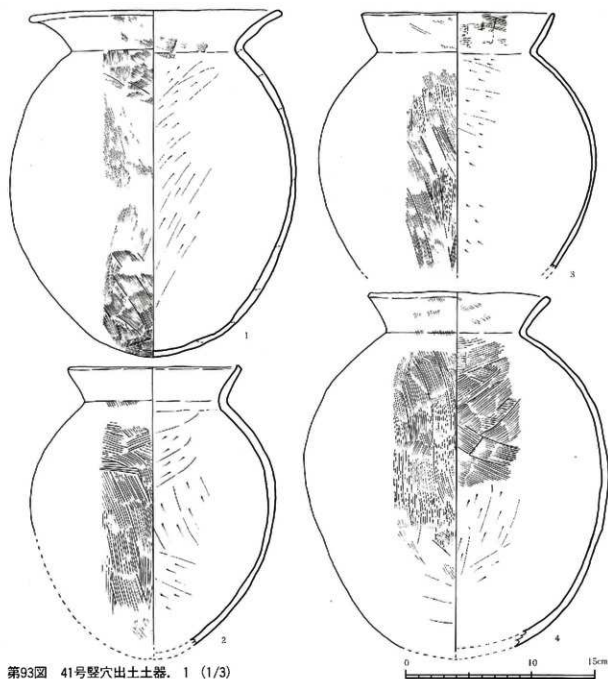
第91図 40号竪穴出土土器（1/3）

#### 41号竪穴 (第92図)

40号の東部を切り営まれた人形の竪穴であり、長辺8.3~8.9m・短辺6.5~6.8mの長方形プランをなすが削平のため検出面から床面までは約0.1mと浅い。壁溝は西側壁の南半のみに設けられ床面積は56.1㎡を測り、北西部に逆L字状のやや低いベッド状遺構があるが不明確な蓋りとなる。4本土柱であるが東西方向の柱間間隔は中心距離で4.6mとかなり長くなり、主軸方位はN-71°-E。中心よりやや南側に不定形の跡があり、南側壁の近くに大小2基の並行する長方形土坑が設けられている。大形の上坑は長さ1m、幅0.45m、深さ0.2mを測り、



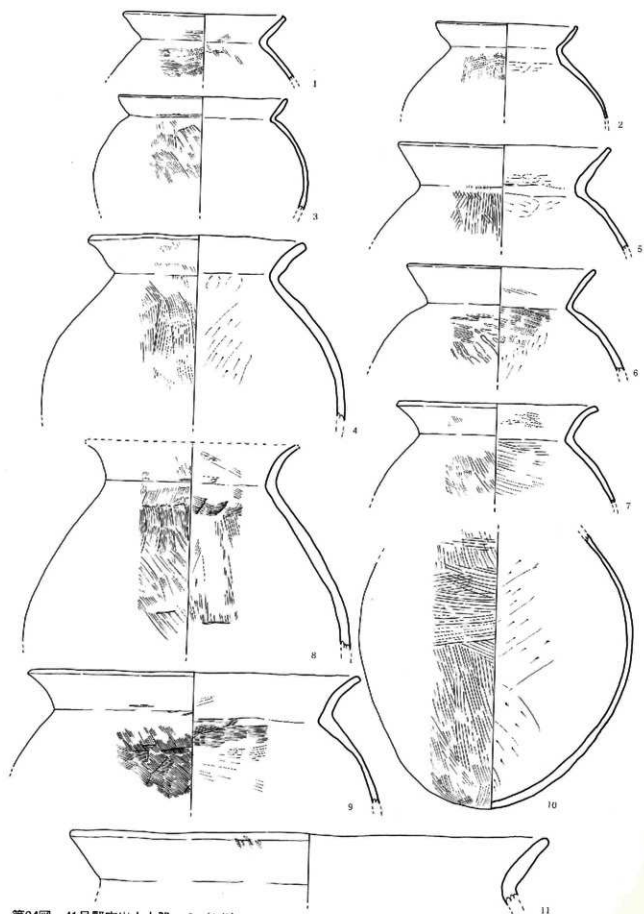
第92図 41号竪穴実測図 (1/60)



第93図 41号竪穴出土土器。1 (1/3)

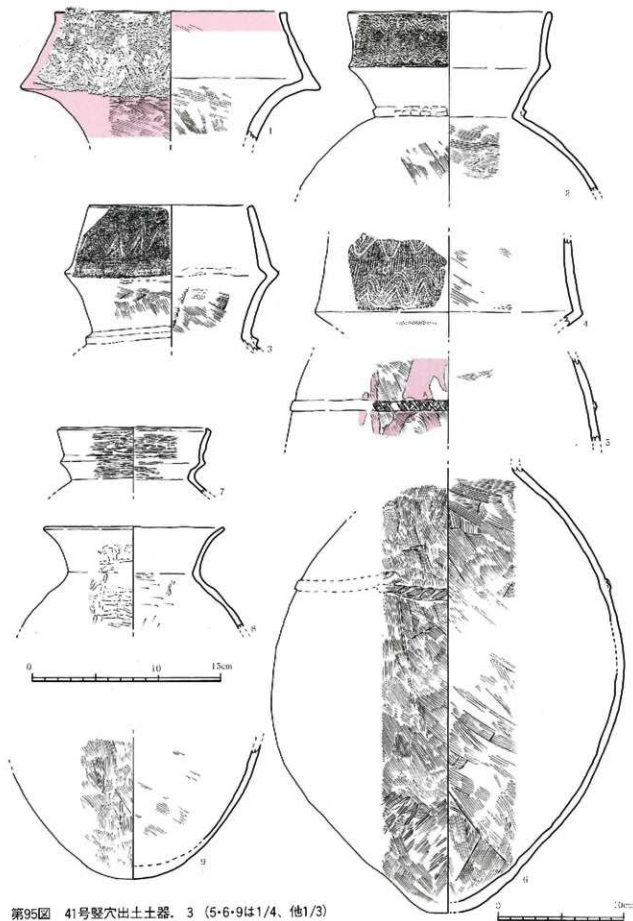
内部の床面より浮いた位置にはほぼ完形の甕1個体(第93図1)が横転した状態で出土した。土坑の東側にはL縁部を欠き破砕された甕(第94図10)が出土している。小形の土坑は長さ0.5m、幅0.25m、深さ0.3mの規模をもつが遺物は認められなかった。この2基は他の土坑と異なり明確な長方形をなし床面も平坦であることから、人骨等は検出されていないものの屋内土壌腐の可能性がある。その他の遺物も床面よりやや浮き、炉跡の南側と西側の両支柱穴周辺に集中箇所が認められ、本格的埋戻しの前に甕・壺・高坏等を使用した祭祀が想定される。

第93図1は底部から胴部が卵球形を呈し、口縁部は僅かに外反しながら開く土坑出土の甕。外面は縦方向のハケにより胴部内面は右上がりケズリ、口径19.8cm・器高27.7cm。2は開きの弱い口縁部の頸部内面を僅かに肥厚させる甕で胴部は卵球形を呈し、外面に縦方向のハケのち一部横のハケを加える。中央やや東側の4箇所別れて出土。3はやや内傾気味に外に開く口縁部に球形の胴部を付す甕で、外面は縦方向のハケにより内面は左上がりのケズリ。炉跡の南西部の2箇所から出土。4は内面ヘラケズリのち上半部にハケを施す甕で胴部はやや胃の張った卵球形を呈する。南西部支柱穴周辺の3箇所別れて出土。これらの甕は2に石英がやや多く含まれるが、

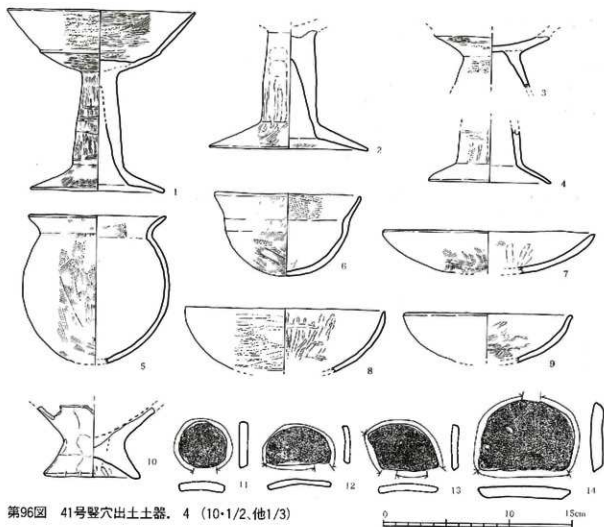


第94图 41号竖穴出土土器, 2 (1/3)

0 10cm 15cm



第95図 41号竪穴出土土器。3 (5・6・9は1/4、他1/3)



第96図 41号竪穴出土土器。4 (10・1/2.他1/3)

他は在来系と思われる。

第94図1・2は布留式甕を模倣したもので、外面は縦方向のハケに横のハケを一部加える。3～7は在来系の甕で前述の甕とほぼ同様の器形・調整を示すが、3は口縁部の延びがやや短い。8は肩の張りがやや弱く、9はこれとは逆に張りの強いもの。3・6・8は胎上に金雲母を含む。10は土坑東側より出土した甕の胴部で外面の中位に横のハケをやや広く加える。11は粗製甕の口縁部片。第95図1は口縁部が反転しながら内傾する複合口縁甕。2はほぼ直立する口縁部と球形に近く張り出す胴部をもつ複合口縁甕で、炉跡の南側より出土。3は直線的に内傾する口縁部を付す複合口縁甕で、4は口縁部の延びが大きくなるもの。5・6は複合口縁甕の胴部片と底部から肩部の大形破片、6は北西部主柱の南側からまとまって出土した大形の甕で胴部は球形に張り、貼付突起はシャープさを欠く。7は山陰系二重口縁甕の口縁部片で内外とも丁寧なミガキによる仕上げ。8は無頸甕の口縁部で外面はミガキによる調整で、胴部内面はケズリによる。9は甕の底部で丸底をなすもの。

第96図1はやや低平な坏底部からほぼ直線的に外に開く口縁部に至る高帯で、筒状の脚部から屈曲し短く外に張る横帯をもつ。ミガキを主とするが胴部はハケのまま放置する。2も同様の器形を呈すると思われる高帯の脚部で、3は脚部の開きがやや大きくなる。5は小形の鉢で内面は丁寧なナデによる調整。6も小形丸底の鉢で口縁部が屈折して開くもの。7～9は大小の碗。10は石英と結晶片岩を多く含む製塩土器底部。11～14は土器片加工品で、11はほぼ円形を呈する。

以上の土器の中で第95図1は弥生後期後葉に属し40号から混入した可能性があるが、その他については古墳前期中葉に比定され本遺構の時期もここに置かれる。



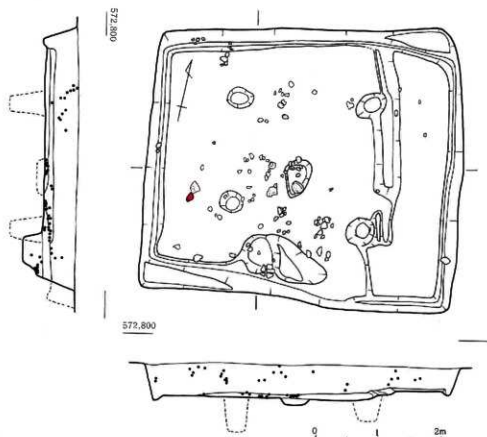
#### 42号竪穴（第97図）

41号の東約5mに位置する台形に近い長方形の住居跡である。長辺4.8～5.0m、短辺4.1～4.5mを測り壁溝はほぼ全周する。東側壁に平行し一部2段掘りで幅約1mのベッド状遺構が設けられ、床面積は16.28㎡と小形の規模に属する。4本支柱の方位はN-80°-E、各支柱穴には柱の抜き取り痕跡が認められる。支柱穴のほぼ中央に長軸0.6m、深さ0.1mの不整形の炉跡があり、南側壁のやや西寄りに不定形で2段掘りの土坑が配される。

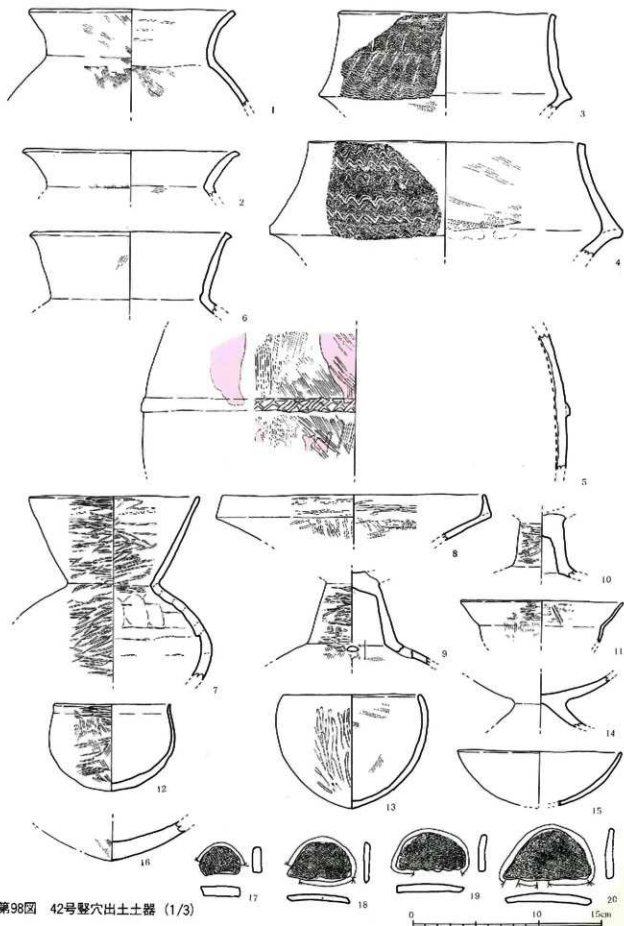
出土土器は比較的小片が多く、竪穴の廃絶祭祀に伴う土器等の確認は出来なかった。しかし、南西部の床面に小範囲ではあるが赤色顔料の分布が認められ、何らかの祭祀行為の存在を示唆する。また、甕・壺・高坏など各種の土器が検出され時期決定は十分可能である。

第98図1は縦く外反して開く甕の口縁部で頸部の締まりはやや弱く、長胴の胴部に絞くと考えられる。内外面ともハケとナデを主とする調整で、金雲母と角閃石をやや多く含む。2も甕の口縁部片で開きのより強いもの。3・4は口縁部がやや反転しながら内傾する複合口縁甕で、外面に櫛溝波状文を丁寧に施す。5はこれらの胴部で赤色顔料を用い文様を描く。以上の甕は角閃石に加え金雲母を少々含む米系土器。6は無頸甕の口縁部片で、7はやや丁寧なミガキを施す長頸甕。8は口縁部が短く内傾する高坏の坏部、9・10は高坏の脚部でやや短脚となるもの。11は口縁部が屈折し外に開く小形の鉢、器壁は薄く丁寧な造りである。12は口縁部が短く外に開く小形の鉢、13は内傾する口縁部から尖底気味の底部に至る鉢。14は脚付鉢と思われるもので、15は丸底を呈する碗。16は尖底に近い甕の底部。17～20は大小の土器片加工品で、19には刻みを加える。

これらの土器は弥生終末～古墳初頃に置かれ、木造構もここに属する。



第97図 42号竪穴実測図（1/60）



第98图 42号竖穴出土土器 (1/3)

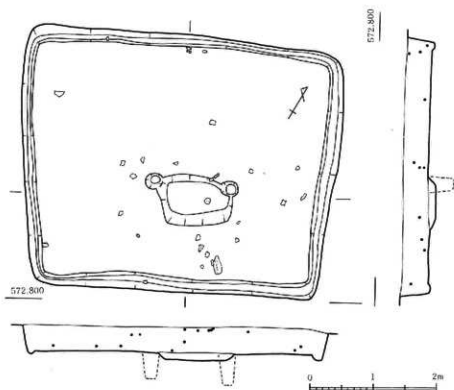
43号竪穴 (第99図)

42号の東北約4mにあり長辺4.6~5.1m、短辺3.9~4.1mの長方形プランをなす。検出面から床面までは0.4m余りと比較的遺存状態は良く、壁溝が全周し床面積は16.2㎡を測る小規模竪穴である。中心よりやや南寄りについて二つの主柱穴が設けられ、中心距離は1.2mと近接する。主軸方位は $N-65^{\circ}-E$ で、両主柱穴の間から南側に長軸1.1m、幅0.8m、深さ0.1mの楕円状の炉跡と思われる浅い土坑が配置されるが、この他の付属施設は認められなかった。その規模と内部施設の少なから住居とは異なる性格が考えられよう。

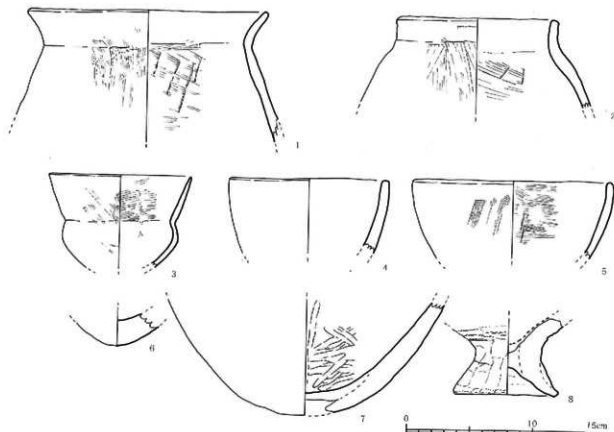
本遺構に伴う遺物は全体に少なく土器も小片が殆どであり出土状況にも変化は観察されなかったが、製塩土器1点が出土している。

第100図1は外に続く開口縁部から締まりの弱い頸部に続き、胴部は肩の張り出さない甕である。1は径19cmを測り、内外面ともハケを主とする調整。2は短く直立する口縁部からやや肩の張る胴部に続く甕で、調整は1と同様であるが器壁がやや厚く、口径は13cmと小形。3は口縁部がほぼ直線的に斜め上方に開く小型丸底甕であり、口径11.3cmを測りハケとナデによる調整。4・5は小形の甕で、6は尖底気味の丸底を早し甕の底部と思われるもの。7は内面にミガキを施す甕の底部では丸底をなす。8は外面にタタキと指汗痕を残す製塩土器の底部で、内面の器面は解離し胎上に石英・角閃石・長石・赤色粒等の砂粒を多く含む。

これらの土器はやや時期幅が認められるが、3の小型丸底甕からすれば本遺構は古墳時代前期中葉に位置付けられよう。



第99図 43竪穴実測図 (1/60)



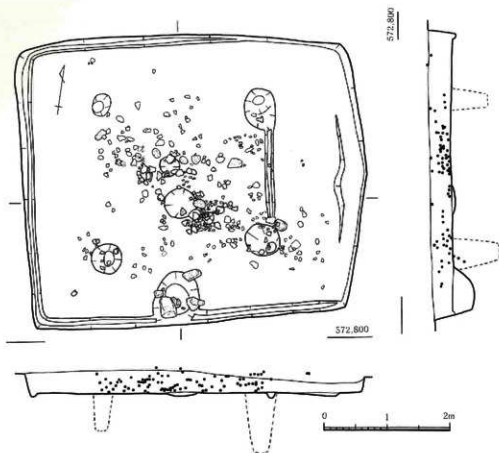
第100図 43号竪穴出土土器（8は1/2、他1/3）

#### 44号竪穴（第101図）

43号の東約3m、37号の南約5mに位置し、長辺5.0～5.3m・短辺4.2～4.6mの長方形を呈するが東側辺の中程がやや外に張り出し、その内側床面にはこれと平行する段差が設けられていることから出入口と考えられる。壁溝は東側が北側の一部には作られず、床面積は21.42㎡と中規模に入る。4本支柱の支柱穴の中で北西部を除き抜き取りが認められ、方位はN-81°-E。中央よりやや南側に直径0.5mの浅い円形の炉跡があり、その南側壁に接し長軸0.8m・深さ0.4mの楕円状土坑が配置される。土坑内部や周辺からは大形の礫4点が検出され、何らかの祭祀行為の存在を窺わせる。また、東側支柱穴二つの間を結ぶ小溝が設けられるが、仕切りを目的としたものかその他の用途かは明らかではない。

内部からは多量の土器を中心とする遺物が出土した。甕・無頸壺・複合口縁壺を始め長頸壺・小型丸底壺・高坏・鉢・器台・椀等が認められるが、完形品は小型丸底壺1個体のみであった。甕や無頸壺の大形土器片は主に炉跡の東側から、高坏は東北部支柱穴の上位や炉跡の北西部周辺から検出されており、第103図1・2の壺は床面直上からでその他は埋土の中位に集中する傾向が認められる。壁際周辺からの遺物の出土が少ないことは、最初にこの一帯が埋められたことを示し、その後各種の土器を用いた祭祀が実行される。そして使用された土器類の破壊と内部への部分的投棄が行われたと考えられる。

第102図1～3は布留式系甕で器壁がやや薄く、1の胴部は縦ハケのち横ハケを部分的に加える。1・2は金雲母を多く含む搬入品、3は当地域周辺で製作されたものか。4・5は1縁部が縦く外反しながら圓く甕で胴部は球形形又はやや長胴となる。いずれも器面は斜め方向のハケを主とし、4は金雲母をやや多く含むが5は角閃石や灰色粒等からなる在地産。6・7は1縁部の開きが直線的となる甕で、6には金雲母が多く含まれる。7の胴部外面はタタキのちハケによる調整で胎土は5と同様である。8～9は複合口縁壺の口縁から頸部片、いずれ



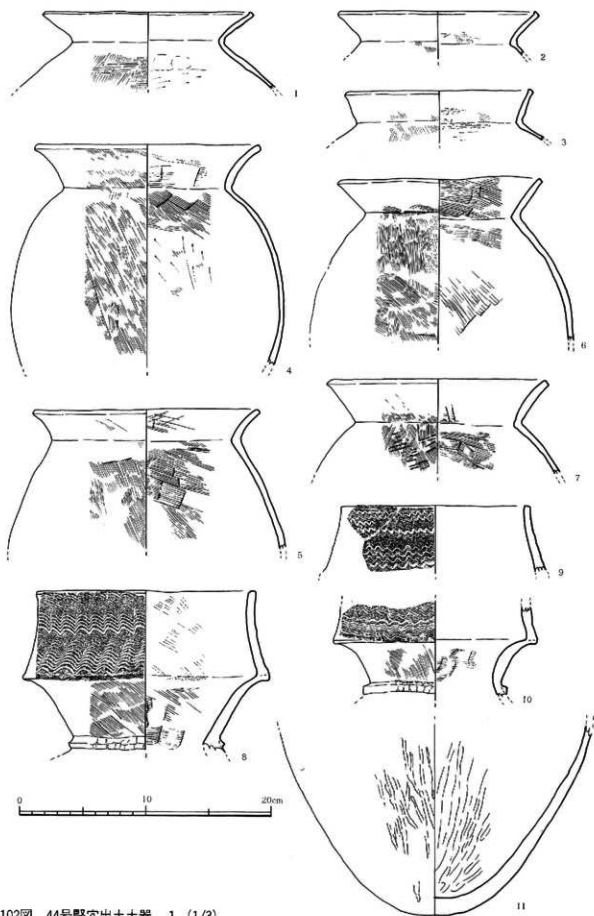
第101図 44号竪穴実測図 (1/60)

もやや内傾する口縁部の外面に櫛歯波状文を比較的丁寧に施す在地系。11は複合口縁壺の胴部下半と考えられるもので、底部はやや不安定な丸底をなし内外面ともミガキを加える。

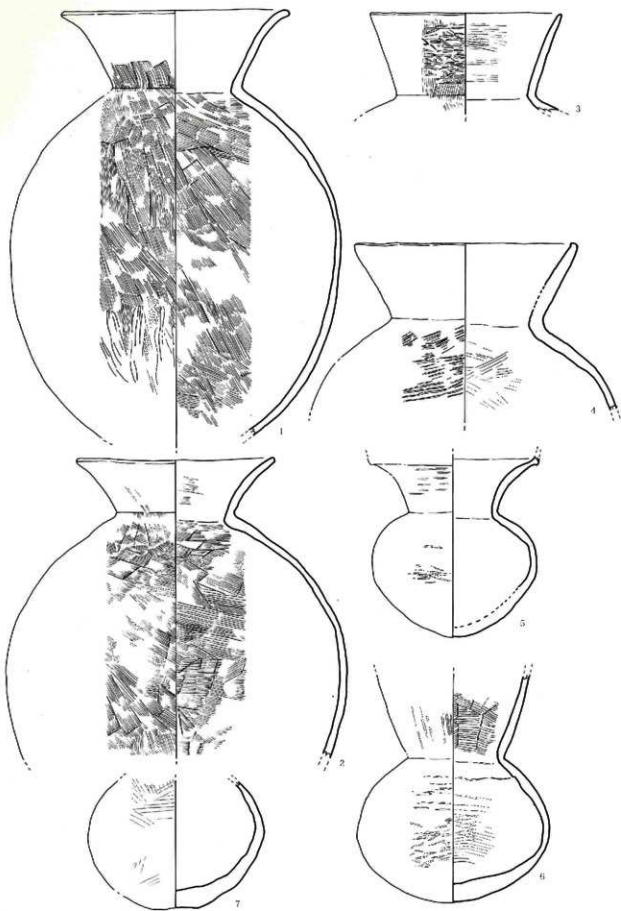
第103図1は反転しながら長く開く口縁部に非球形の胴部を付す無頸壺で、口縁部周辺は横ナデにより他は斜め方向のハケを主とするが胴部下半にはミガキを一部加える。2も同様の器形をなすが口縁部の開きと胴部の張り方がより強いもの。3・4は口縁部の立ち上がりが直線的となる無頸壺である。3の外面はハケのちミガキ、4の胴部はタタキによる調整。これらの壺の胎土には角閃石や赤色・灰色粒等が主に含まれる。5は小形の複合口縁壺、6は長頸壺と思われるものでいずれも底部は丸底となる。

第104図1は脛部に段をもち、口縁部は屈折し短く直立する坏部を付す高坏。坏部は横方向の、脚部は縦方向のミガキを主調整とする。2はやや長く外に開く口縁部から屈曲し低く平らな坏底部に至り、やや短脚の脚柱部は反転して外に張り出す脛部に続く脚部が付される高坏。外面はハケによるが、坏部内面はハケのち縦方向のミガキを丁寧に施す。1径23.4cm、器高15.4cmを測る。3・4も2と同様の器形を示すと思われる高坏で、5は四方に円孔を穿つ脚部。6は口縁部を外に短く屈折させる脚付鉢で、6は屈曲して開く口縁部をもつ脚付鉢。8は小型丸底の鉢で器壁が薄い移入品。9は完形の小型丸底壺で口縁部の開きやや強いもの。1径13.1cm、器高8.6cmを測る。10は外面にミガキを施す在地系の小形鉢で、11は脚部の三方に円孔を施す器台。12・13は碗で14・15は土器片加工品。

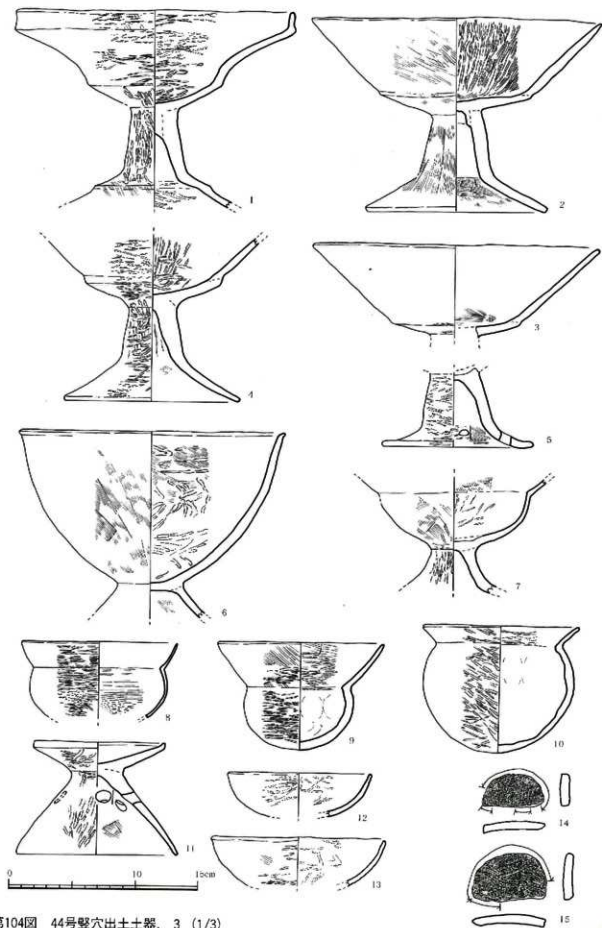
これらの土器の中で壺や無頸壺は胴部はまだやや長いことや一部タタキを施すこと、複合口縁壺の口縁部も直立せず延びが不十分であること等から、古墳前期前葉でも中頃に近い時期に比定されよう。



第102图 44号整穴出土土器, 1 (1/3)



第103图 44号竖穴出土土器. 2 (1/3)



第104图 44号竖穴出土土器。3 (1/3)

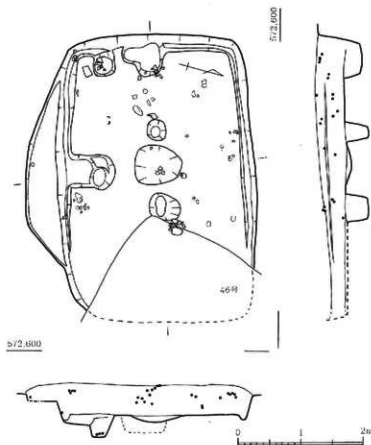


#### 45号竪穴 (第105図)

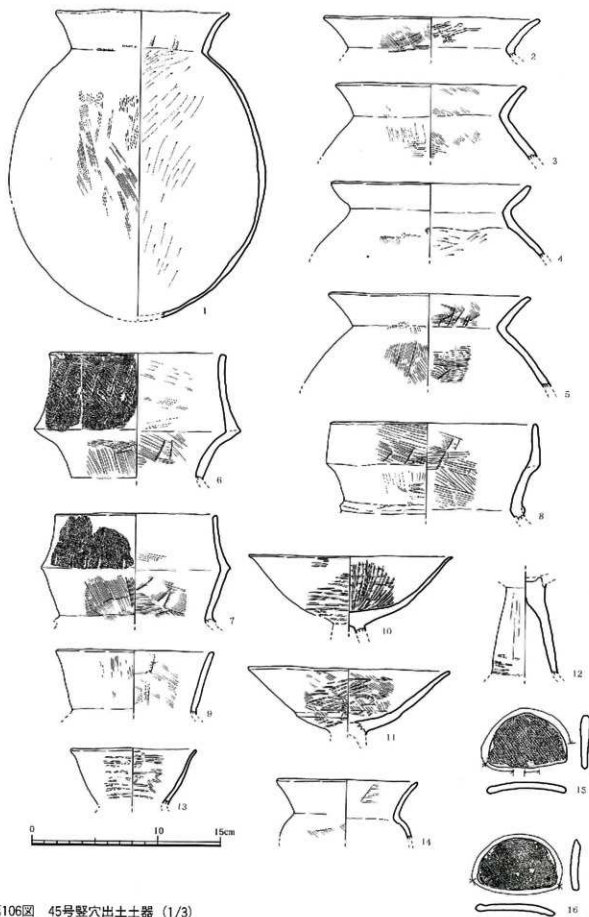
44号の東側約2mにあり、46号を切って営まれた小形長方形の遺構である。検出時点では先後関係を逆に捉えていたが同時に内部調査を実施した結果、46号より床面の浅い本遺構と47号が後出することが判明した。このため東側壁周辺は調査により失ってしまった。短辺(南北)3.0m、復原長辺4.5mを測り、南側壁は弧状の浅い張り出しが認められるがこの部分は埋戻しの土取跡である可能性が高い。ほぼ中軸線上に中心距離1.2mの主柱穴2本が設けられ、方位はN-73°-E。崖溝は東側壁の手前で途切れ、復原床面積は11.34㎡。両主柱穴の間に長軸0.5m、深さ0.1mの不整形を呈する知跡があり、その南側に壁と接する不定形土坑がある。また、西側壁の中央部とその南側にもやや深い土坑が認められる。東側主柱穴には柱の抜き取り痕跡が観察され、主柱穴の東側の床面に接し第106図1に示した甕が出土している。竪穴の施絶祭祀に伴うと判断される土器はこの1点のみで、この他の土器は小片が多く出土位置も埋土の中心から上位が殆どである。

第106図1は外反しながら緩く外に開く口縁部に卵球形の胴部を付す甕で、底部周辺を欠くが定形に近い。外面は縦方向のハケとナデにより胴部内面は右上がりのヘラケズリによる調整。胎上に角閃石を多く含む地帯で、口径14cm、推定器高24.8cm。2~5もこれと器形に大差はないと思われる甕の口縁部片であるが、4は外来系甕を模したもので口縁部外側がやや肥厚し、5は金雲母が多く含まれる。6・7は僅かに内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ複合1線壺で口縁部全体に勝橋波状文を施す。8は立ち上がりの短い複合口縁壺でハケを主調整とするが、外面には非常に粗いミガキを加える。9は無頸壺の口縁部。10・11は高杯の杯部で屈曲が弱く、10の内面は縦方向のミガキを丁寧に加える。12はこれらの脚部で筒状の脚柱部をなす。13は小形壺の口縁部、13は小形の鉢、15・16は土器片加工品。

以上の土器から本竪穴の時期は古墳前期中葉に置かれる。



第105図 45号竪穴実測図 (1/60)



第106图 45号竖穴出土土器 (1/3)

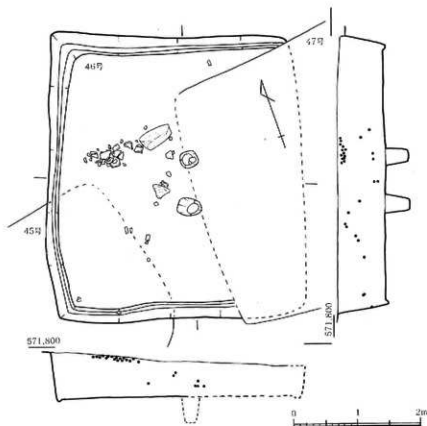
#### 46号竪穴 (第107図)

45・47号と重複するが両者に先行する竪穴で主軸方位も大きく異なる。45号の掘り込みは約0.2mと浅く床面まで及ばないが、47号の掘削は深く東半部分の床面は残存しない。長辺(南北)4.5m、短辺(東西)3.8mの長方形をなし、検出面から床面まで深い部分で0.8mを測る。東側の階層は遺存しないが全周すると思われ、復原床面積は13.26㎡と小規模である。2本主柱の柱穴の中心距離は0.8mとやや狭く方位はN-15°-E。伊跡・土坑等の施設の有無については不明である。

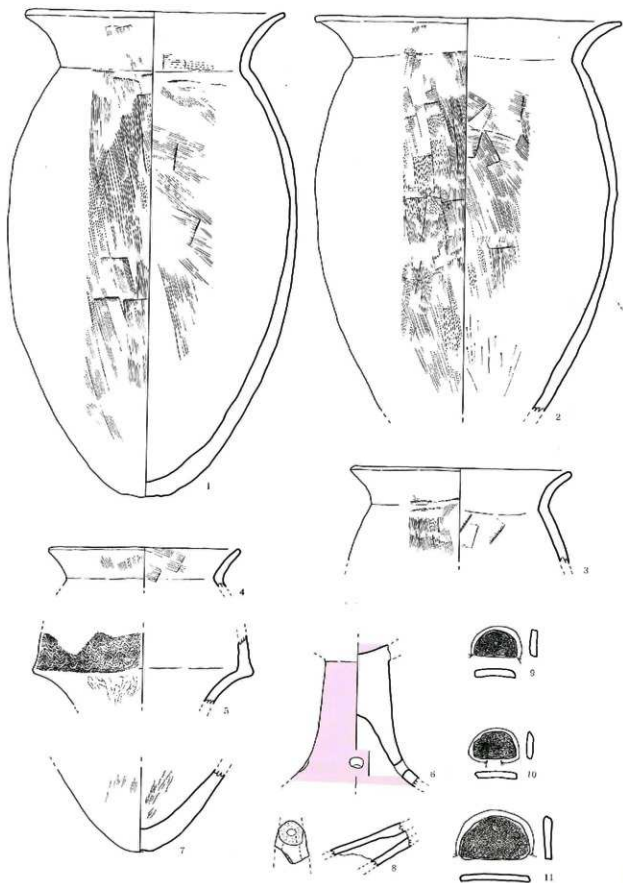
出土遺物は埋土の中～上位に多く含まれるが、第108図1・2や第109図2・3に示した甕は主に西側の土器片集中部から出土したもので、竪穴埋戻しの最終段階における祭祀に用いられた後に破壊され置かれたものと考えられる。また、粗製甕の胴部下半は別の遺構に投棄されたものと見られる。

第108図1は平底気味の丸底を呈する底部からやや張りの弱い長胴の胴部に続き、頸部で屈曲し緩く反転して開く口縁部に至る甕、外面は縦方向のハケで内面は斜めのハケを主調整とする。口径20.6cm、器高38.4cmを測り、角閃石や灰色粒・金雲母を多く含む。2も同様の器形をなすが口縁部の開きがより強いもので、内面の胴部下半はケズリによる調整であり角閃石・灰色粒を含む在地産。両者ともスズヤコゲが付着する。3・4もほぼ同じ器形・調整を呈するやや小形の甕の口縁部片。5は複合口縁甕の口縁から頸部片で、6はやや長脚の高杯の脚柱部。7は僅かに上底を呈する甕の底部。8は注口土器の注口部であるが確実に本遺構に伴うものか否かは不明である。9～11は土器片加工品。第109図1～3はやや大形の粗製甕で1には突帯はないが、2・3の頸部には断面三角形のT字状突帯を巡らす。器面調整はナデと思われるが、2の内面には非常に細かいハケが認められる。いずれも胎土に角閃石・灰色粒等を多く含み、暗茶褐色を呈する。

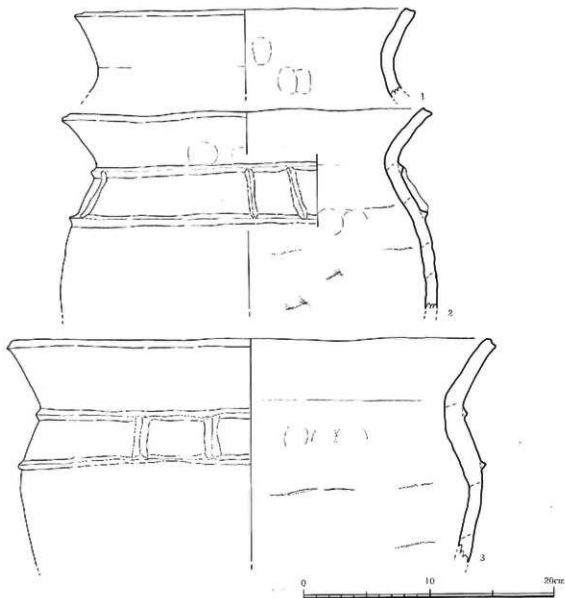
これらの土器は弥生時代後期後葉に編年されるものであり、本遺構もここに置かれる。



第107図 46号竪穴実測図 (1/60)



第108图 46号竖穴出土土器。1 (1/3)



第109図 46号竪穴出土土器。2 (1/3)

#### 47号竪穴 (第110図)

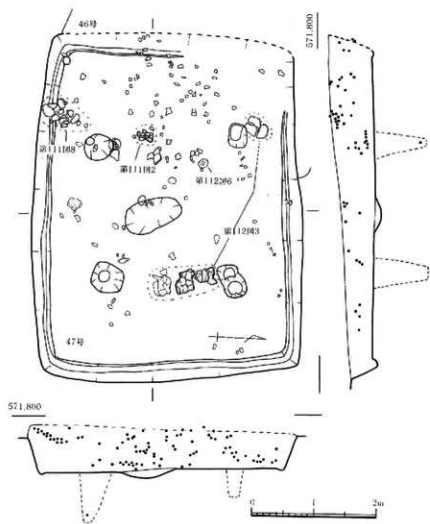
46号の東部を切って管まれた住居跡であるが、検出時の先後関係は明確ではなかったため同時に内部調査を行った。従って、西側辺の掘方ラインは推定によるが長辺 (東西) 約5.5m、短辺 (南北) 4.2mの長方形を呈し、壁溝は西北部で途切れ復原床面積は17.25㎡。4本土柱の主軸方位はN-81°-Eと44号と同じである。各土柱穴には抜き取り跡が認められ、南西部土柱穴からは第111図3に示した甕 (破片) が検出された。中央部に長軸0.9m、深さ0.1mの長楕円状の炉跡があるが、その他の内部施設は設けられていない。

内部からは多量の土器を中心とする遺物が埋土の中へ上位にかけ出土したが、床面に接する人形土器片としては第111図8に示した複合1線壺胴部がある。胴の肩部から上を欠損するもので東側の両土柱穴間からと北西部土柱穴の北側の2箇所に分れ、前者はほぼ床面直上から後者は10数cm浮き出土した。また、第112図6の完形の小形壺と第111図1・2の甕は埋土の中位から、第111図8の完形に復原された複合1線壺は南西部の検出面から内部に落とし込まれた状態で検出された。これらの大形土器や南西部土柱穴内出土の土器片から本竪穴の焼絶を

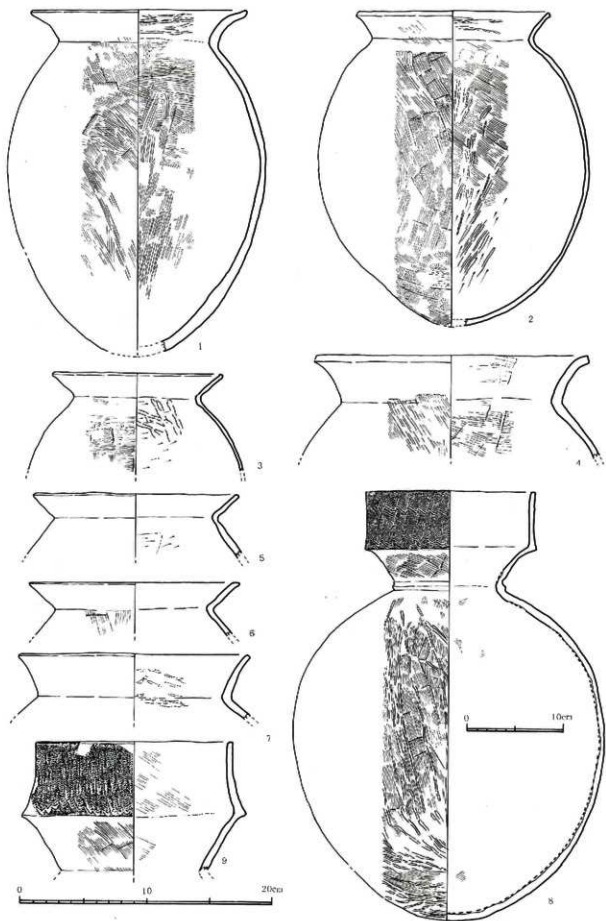
廻る祭祀は、支柱の抜き取りと土器片の埋納及び大形複合口縁壺の破壊と内部への部分的投棄、埋戻し途中における小形壺・甕・複合口縁壺等の投棄の二つの経過を経たものと考えられる。

第111図1は反転し大きく外に開く口縁部にやや長胴気味の卵球形胴部を付す甕で、内外面ともハケを主調整とするが口縁部内面にはミガキを加える。口径17.2cm、推定器高27.6cm。2はほぼ直線的に外に開く口縁部から球形に近く張り出す胴部をもつ甕で、胴部内面はケズリー・ハケー粗いミガキによる調整。口径15.5cm、器高25cmを測る。胎上はいずれも在地系と思われる。3は布留式系の甕で上半部分を約1/2に打ち欠き、胴部外面は横ハケ、内面はケズリのちミガキを加える。金雲母や石英を多く含む移入品。4～7も甕の口縁部片で5は金雲母を、6は石英を多く含む搬入品の可能性が高い。8は直立する口縁部からやや強く締まる頸部に続き、胴部はほぼ球形に張り出す複合口縁壺、口縁部には櫛描波状文を丁寧に施し胴部との境に三角形突帯を巡らす。胴部内面は器面が全体に剥落するが、外面は縦方向のハケにミガキを加える。口径18.2cm、器高45.4cmの中形甕。9も同様の甕の口縁部から頸部に櫛描波状文はやや荒い。第112図1・2も複合口縁壺の口縁部片で、1は短く直立し2はやや内傾するもの。3は大形の複合口縁壺の胴部で、卵球形の胴部のやや上位にベルト状の刻目突帯を巡らし両端を交差させる。4・5は小型丸底甕で5は内外面ともやや丁寧なミガキによる。6は偏球形の胴部をもつ完形の小型長頸甕で口径10.6cm、器高14.2cmを測る。7・8はやや雑なミガキを加える甕で、9は土器片加工品。10～13は製塩土器の底部で、本遺跡では最多でありいずれも石英粒を多く含む。

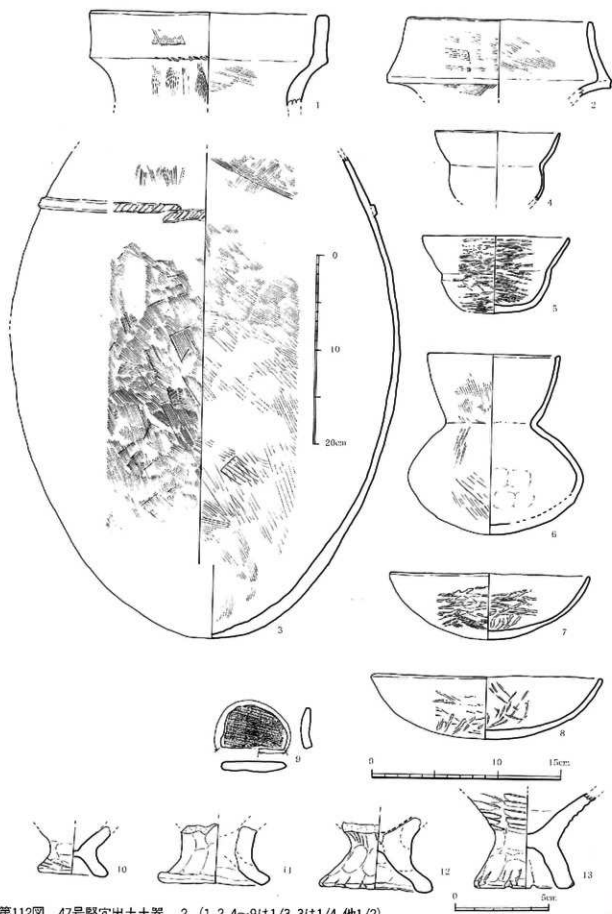
以上の土器は古墳時代前期中葉に比定されるものが殆どであり、本住居跡の時期もここに置かれる。



第110図 47号竪穴実測図 (1/60)



第111図 47号竪穴出土土器。1 (8は1/4.他1/3)



第112图 47号竖穴出土土器。2 (1.2.4~9)≠1/3, 3≠1/4, 他1/2)

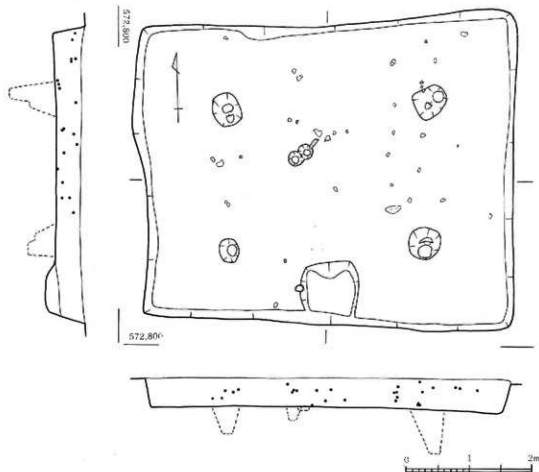


#### 48号竪穴（第113図）

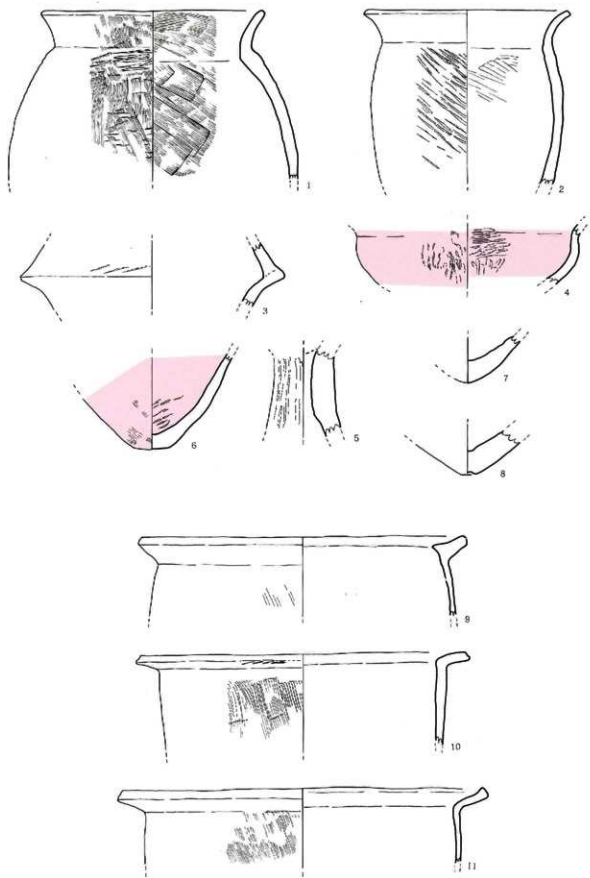
44号の南側約5mに位置し、長辺5.9m・短辺4.6～5.1mの台形に近い長方形をなす。検出面から床面までは約0.5mと遺存状況は比較的良好である。床面積は24.08㎡と中規模の竪穴に入り、4本支柱でその主軸方位はN-88°-Wとほぼ東西を向く。主柱穴の3本には柱の抜き取り痕跡が認められ、南側壁の中央に接し長軸0.8m、深さ0.2m余りの不定形土坑があるが、壕溝やベッド状遺構は無く竈の存在も不明である。埋土の中～下層に含まれる土器の多くは小片であるが、土坑の西側肩部からは第114図2に示した壺の大形片が検出された。

第114図1は長胴を呈すると思われる胴部から頸部で屈曲し緩く外に開く口縁部に続く甕で、外面はタタキのち縦ハケを加える。器壁がやや厚く胎土に角閃石、赤・灰色粒を含む在地系土器。2は同じく在地系のやや小形の甕で外面は左上がりのタタキのまま放置する。3は複合口縁壺の口縁部から頸部片、口縁部はやや強く内傾する。4は高環の坏底部片であり、内外面ともミガキの後に赤色顔料を塗る。5は高環の脚柱部で、6は僅かに丸底を呈する甕の底部。7は尖底気味の丸底をなし、8は底部外側が僅かに窪む甕の底部である。9～11は木遺構に混入した弥生中期の各種の甕。

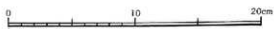
以上の土器の中で混入と思われるものを除く他は弥生後期後葉に置かれ、木塚穴の時期もここに属する。



第113図 48号竪穴実測図 (1/60)



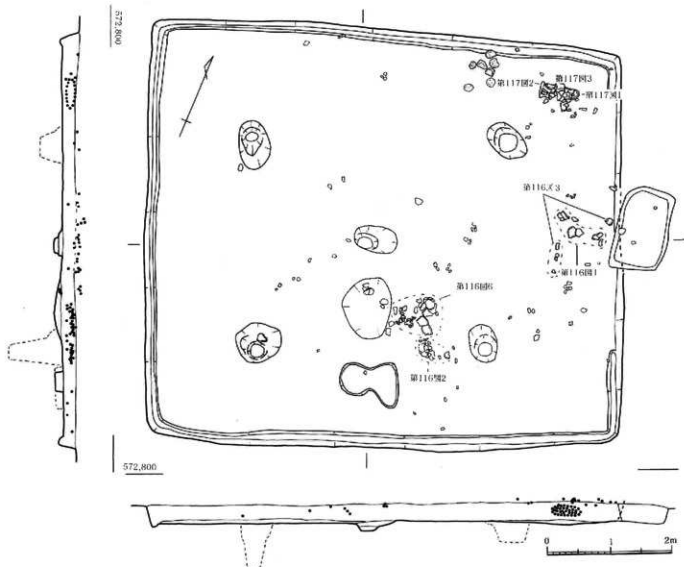
第114图 48号竖穴出土土器 (1/3)



#### 49号竪穴 (第115図)

48号の南側に隣接する中形の竪穴で東側辺の中央を後世の上坑により失う。長辺7.5m、短辺6.2~6.6mの長方形を呈し、検出面から床面までは0.3m前後で床面積は47.25㎡。壁溝は東壁側の隅コーナー付近で終息することから、東側に出入口が設置されていた可能性が高い。4本支柱の各柱穴は抜き取りにより変形し、主軸方位はN-68°-Eで西側にある41号等と近い。ほぼ中央部とその南側に楕円状の竪跡と思われる大小2基の土坑があり、その内部や周辺には炭化物が分布する。この他、中央部南壁寄りに長軸1.0mの瓢状の上坑が設けられる。出土遺物の大半は床面よりやや上位で検出され、大形の竪跡の東側2箇所の上器集中部から第116図2・6の甕が、東北隅付近の集中部からは第117図1~3に示した粗製甕と甕2個体が、東壁側中央からも第116図1・3の甕の大形破片が出土している。これらの土器は竪穴の廃絶祭祀に伴うと考えられ、第116図6は接合の結果完形となったが他は口縁部や胴部に欠損部が認められ、破壊後に投棄されたものと推定されよう。

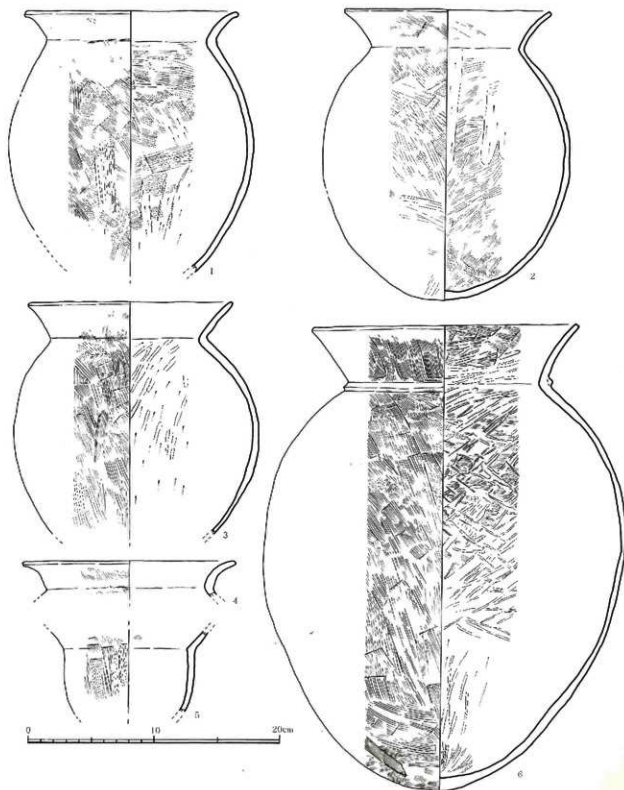
第116図1は口縁部が緩く反転し球形に近い胴部をもつ甕で、外面は斜・縦方向のハケにより胴部内面はヘラケズリのち斜めのハケによる調整。2・3も同様の器形を示すが2の胴部内面はハケのちヘラケズリを部分的に加え、3の内面はヘラケズリのちミガキを施す。1は在地系の胎上によるが、2・3は石英をやや多く含む。4は口縁部の固きがやや強く、5は小形の甕の胴部片。6は口径21.2cm・器高36.8cmを測る完形の甕で、球形の胴部にやや長く延びる口縁部を付す。胎上は1と同じく角閃石や赤・灰色粒を含み、胴部内面の調整はヘラケズ



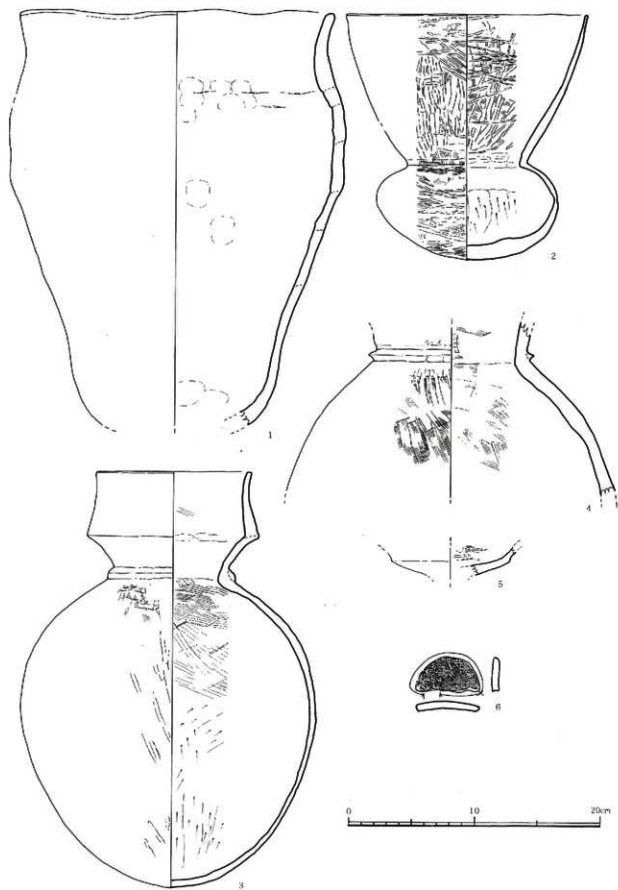
第115図 49号竪穴実測図 (1/60)

リ→ハケ→ミガキの順による。第117図1は口縁部の開きの弱い粗製甕。2は偏球形の胴部をもつ長頸壺で、胴部内面はケズリによるが他はハケのち丁寧なミガキによる。3はほぼ直立する口縁部とやや肩の張った球形の胴部をもつ複合口縁壺で頸部に低い突帯を巡らす。4は複合口縁壺の胴部片で、5は高杯の杯部片。

これらの土器は古墳時代前期中葉に比定され、本住居跡の時期もここに置かれる。



第116図 49号竪穴出土土器. 1 (1/3)

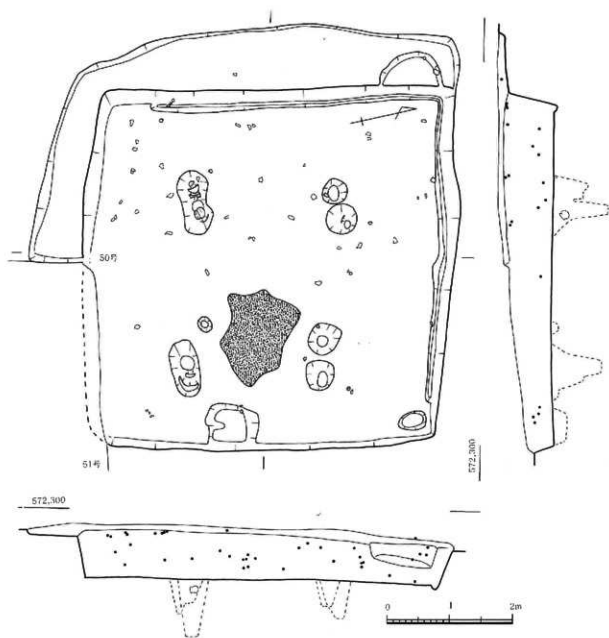


第117图 49号竖穴出土土器。2 (1/3)

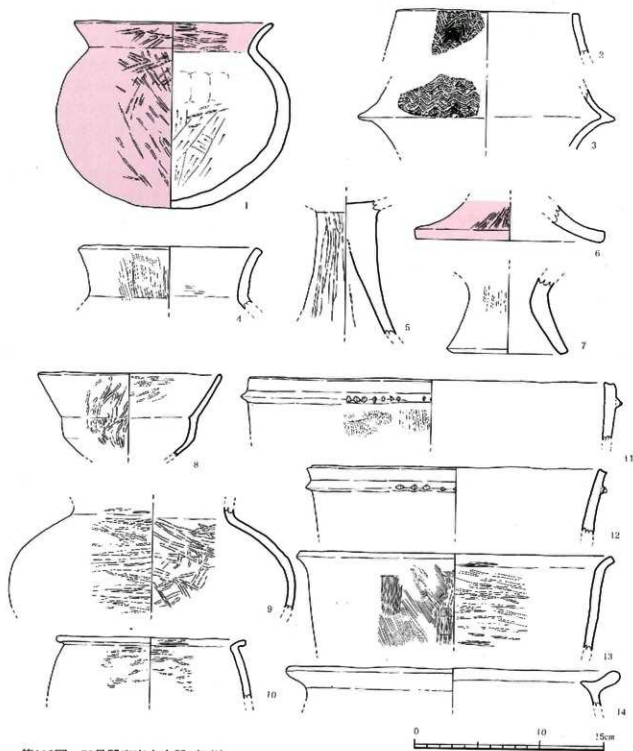
### 50号竪穴 (第118図)

49号の東側約4mにあり南東隅部付近を51号により切られる。長辺5.6m、短辺5.4mの方形に近い長方形をなし、西側辺が南側辺の一部にかけて廻る段差はベッド状遺構ではなく埋戻しに伴う土取跡の可能性が高い。また、北西隅部に重複する上坑は後世の所産で本遺構に伴うものではない。検出面より床面まで0.8~0.5mとやや深く、壁溝は北・西側の2辺のみ巡らされ床面積は28.6㎡の中規模の住居跡である。4本主柱で建て替えが認められ、各主柱穴には抜き取り跡が認められるが南西部内側の柱穴の内部から第119図1の完形鉢が検出された。主軸方位はN-16°-Wで、葺の掘り込みはないが中央東側に炭・灰のブロックが認められる。

出土遺物は全体に少ないが、第119図1は1径15.8cm、器高14.8cmを測る完形の鉢。外面と口縁部内面はやや荒いミガキにより、胴部内面はケズリを加えるが器壁はやや厚い。角閃石や灰色粒を多く含み、口縁部と外面に赤色顔料を塗る。2・3は櫛溝波状文を施す複合口縁蓋の口縁部片で、3はやや強く屈曲する。4は無頸壺の口



第118図 50号竪穴実測図 (1/60)



第119図 50号竪穴出土土器 (1/3)

縁部で5は高坏の脚柱部。6は鉢の脚部で顔料を塗り、7は肥後系甕の脚部。これらは胎土からいずれも在地の土器と思われる。

8は北西部の土坑から出土した小型丸底甕で木竪穴に伴うものではない。また、9～14は埋灰しの段階で混入したと考えられる弥生前期～中期の各種土器。

本遺構の時期は1～7の土器から弥生後期終末頃に置かれる。

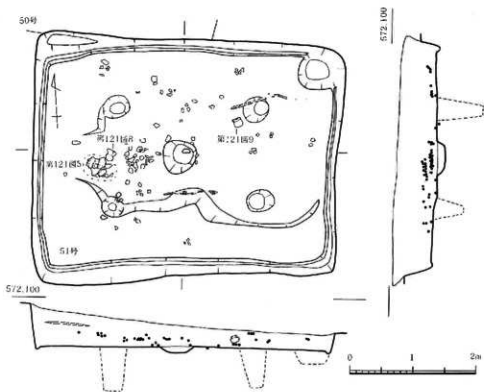
### 51号竪穴（第120図）

50号の南東部に接する長方形の竪穴で長辺4.9m、短辺3.6～4.0m、検出面より床面までは約0.3～0.7mを測る。壁溝は東北隅の上坑部分以外は全周し、床面積は18.9m<sup>2</sup>と小規模竪穴である。4本支柱の主軸方位はほぼ東西方向のN-6°-E、各支柱は抜き取りと思われる跡が残る。中心部に直径約0.5m、深さ0.15mの円形に近い凹跡があり、東北隅には直径約0.6m、深さ約0.2mの円形に近い上坑が設けられる。南側と西側の一部には低い段が形成されるが、明確なベッド状遺構とは異なる。

遺物は埋土の中へ下位に多く、東北部支柱穴の掘方のやや上位に底部を僅かに欠損する完形の鉢1個体が、跡の西側からは完形の小形長頸壺と胴部下半を欠く複合口縁壺の破片がまとめて出土した。これらは本格的な埋戻しの前に行われた祭祀に使用され、鉢と複合口縁壺は破壊を経て投棄されたものと考えられる。

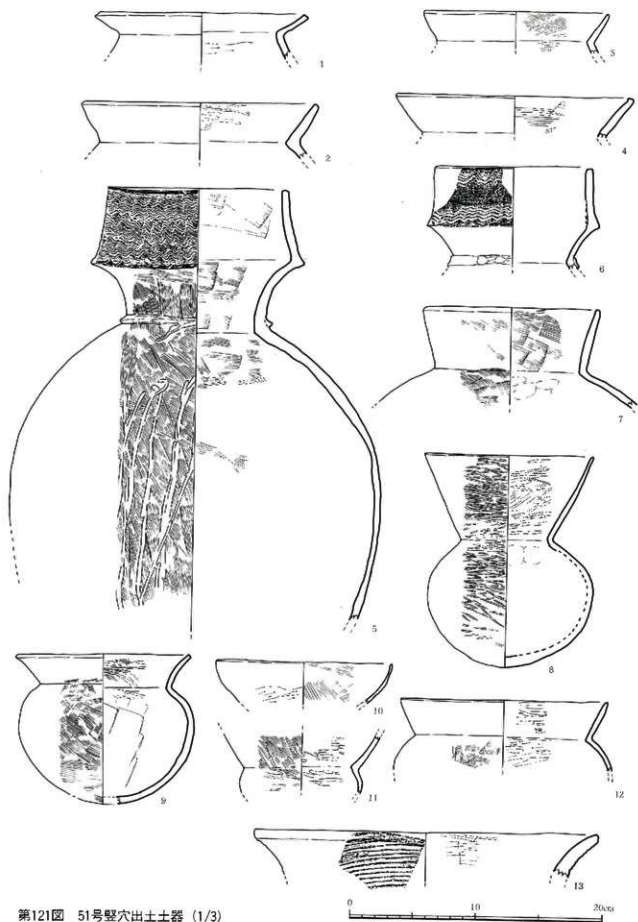
第121図1～4は壺の口縁部片で、1・2は外来系の特長をもつ。5は胴部下半を欠く複合口縁壺で、反転しながら内傾し立ち上がる口縁部の外面全体に櫛播波状文を下から上に丁寧に描く。頸部と胴部の境に断面三角形の突帯を巡らし、その端部を下垂させる。胴部は卵球形に張り出し、縦方向のハケに疎らなミガキを加える。6は口縁部に2段の櫛播波状文を施すやや小形の複合口縁壺で、頸部の突帯は低平となる。7は肩の張る胴部から屈曲し直線的に斜め上方に開く口縁部に至る無頸壺。8は口径13.4cm、器高16.8cmを測る完形の小形長頸壺で、外面から口縁部内面は横方向のミガキを丁寧に施す。底部は亦変し胴部から口縁部にかけてスガが付着し、底部内面にもコゲが認められる。9はやや肩の張った球形の胴部に緩く反転し開く口縁部を付す小形の鉢、底部を若干欠き口径13.5cm、器高11.9cm。10は底部周辺にケズリ調整の椀で、11は小型丸底壺。12は口縁部が直線的に開く鉢で、内面の調整はミガキを主とするもの。13はタタキが口縁部に至る甕で、50号竪穴からの混入と考えられるものである。

これらの土器は13を除き古墳時代前期前葉でも中頃に近い時期と考えられ、木造構もここに属する。



第120図 51号竪穴実測図 (1/60)





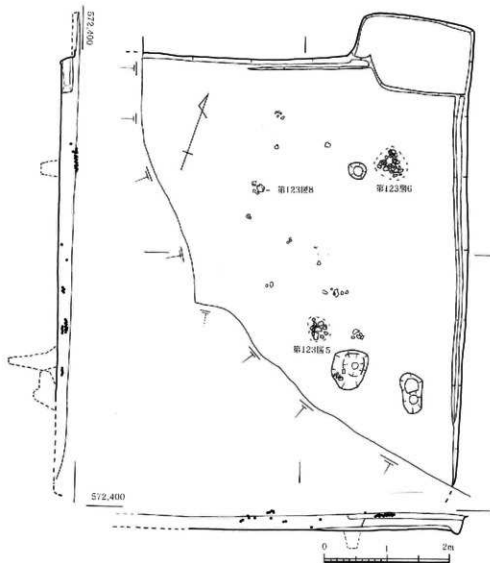
第121圖 51号豎穴出土土器 (1/3)

### 52号壑穴（第122図）

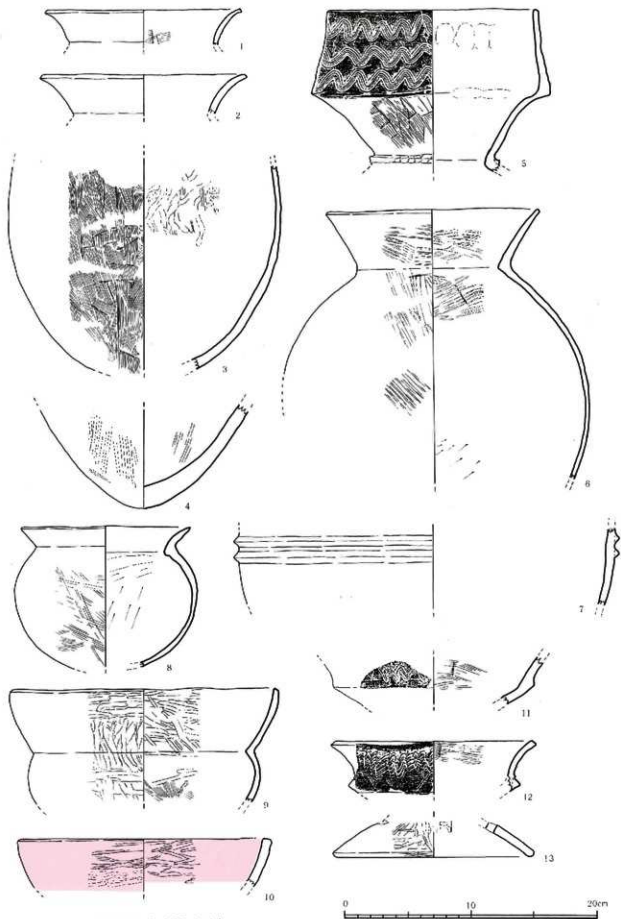
41号壑穴の南約3mに位置するが、遺構の西～南側は水田に伴う水路等により失われる。また、全体に削平を受け検出面から床面までは約0.2m余りと遺存状態は良くない。現存東西辺の長さは5.2m、南北辺長6.6mを測り、東北隅部に1.8×0.5mの突出部が設けられる。この部分は床面より1段上がり壁溝はここで終息することから出入口と考えられよう。東側の二つの主柱穴の位置から4本主柱と判断され、東南部主柱穴には抜き取りの跡が認められる。遺構の残りの態さにもかかわらず遺物は比較的豊富であり、東北部主柱穴の東側から第123図6に示した壺がまとまって出土し、東南部主柱穴の周辺からも3・5の上器等が検出されている。これらの土器は本格的な埴土に先立つ祭祀に使用されたものと見られる。

第123図1・2は壺の口縁部で緩く外反し開くもの。3・4は壺の胴下半部と底部であり、いずれもやや長割を呈すると思われる。5はやや内傾する口縁部外面に3段の櫛播波状文を丁寧に描く複合口縁壺で、6は外面ハケのちナダ、内面はケズリとハケによる無頸壺。7は複合口縁壺の胴部片で2条の赤帯を巡らすもの。8は口縁部が緩く外に開く小形の鉢で外面の調整はハケ、胴部内面はケズリによる。9は口縁部がやや内反しながら外に開く鉢で内外面ともミガキを主とする。10は内外面に顔料を塗る碗、11～13は高杯の杯部と脚部片。

これらの土器は古墳時代前期前葉に比定されよう。



第122図 52号壑穴実測図 (1/60)



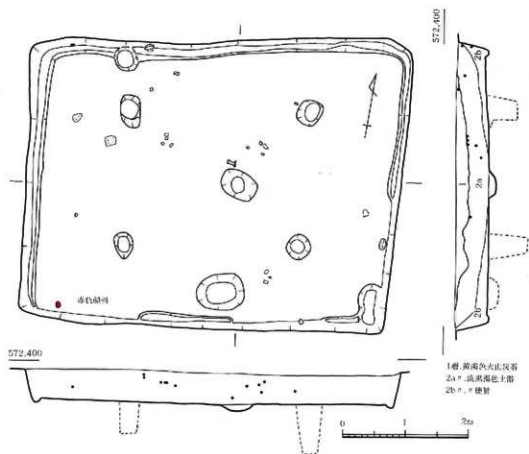
第123图 52号雙穴出土土器 (1/3)

### 53号竪穴（第124図）

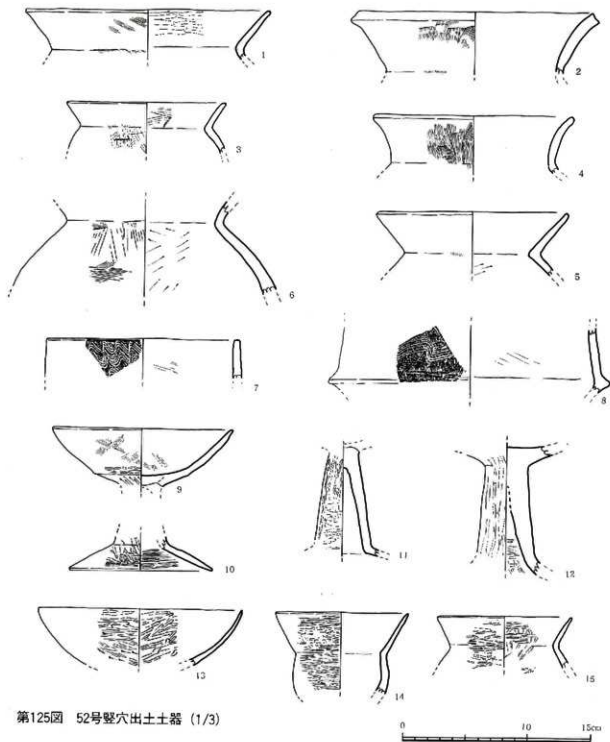
52号の東側、49号の南側に隣接する位置にあり、54・55号を切って営まれた住居跡である。長辺約5.9m、短辺約4.6mの長方形プランを呈し、床面までは約0.5mと残りは良い。壁溝は西側壁から北側と東側の北半と南側の中央付近に掘込まれており、床面積は19.35㎡を測る。内部の7層は2層に大別され、1層は遺物を殆ど含まない黄灰色の火山灰層で、2層は上器等を含む黒褐色の埋土層である。主柱は4本で方位はN-81°-E、各主柱穴には抜き取り痕跡が認められる。中央やや東寄りに長軸0.6m、短軸0.45m、深さ0.1m余りの楕円状か跡があり、南側壁の中程に壁とは接しない楕円形の上坑が設けられる。また、南西隅付近の床面には赤色顔料の付着が認められた。出土土器に完形品は無く比較的小片が多く、特異な状況を示すものは観察されなかった。

第125図1は直線的に外に開く堦の口縁部片、外面は斜め方向のハケのち横ナテ、内面は比較的丁寧なミガキによる仕上げ。2も堦の口縁部片でやや緩く外反しながら開き、器壁がやや厚いもの。3は小形の堦の口縁部片であり、口縁部の開きは直線的となる。4は外反しながらやや長く延びる口縁部をもち、5は直線的に延びるもの。これらの胎上はいずれも角閃石や灰・赤色靨等を含み在地系と考えられる。6は堦の胴部片で、内面はヘラケズリにより外面は縦方向のハケのち横のハケを加える。7は小形の複合口縁部の口縁部片で、ほぼ直立する口縁部外面に髹漆波状文を施す。8も複合口縁部の口縁部分で外面に波状文を描く。

9は口径14cmを測る高坏の坏部で脚部との接合部から遊離する。屈曲部より上はハケのち一部ミガキを加え、下位はケズリのち一部ミガキによる調整。10は高坏の胴部で内外面ともミガキによる。11・12は脚柱部でいずれも外面は縦方向のミガキを主とする。13は口径16.2cmの椀で内外ともやや「狭なミガキによるが、外面の底部周



第124図 53号竪穴実測図 (1/60)



第125図 52号竪穴出土土器 (1/3)

辺にはケズリが残る。14は胴部の張りやや弱い小型丸底甕で外面は丁寧なミガキによる調整。15も小形甕と考えられるものでミガキはやや雑となる。高坏や小形土器の胎土も堇とほぼ同様である。

これらの土器は古墳時代前期中葉から後葉にかかる時期と考えられ、本遺構の時期もここに置かれる。

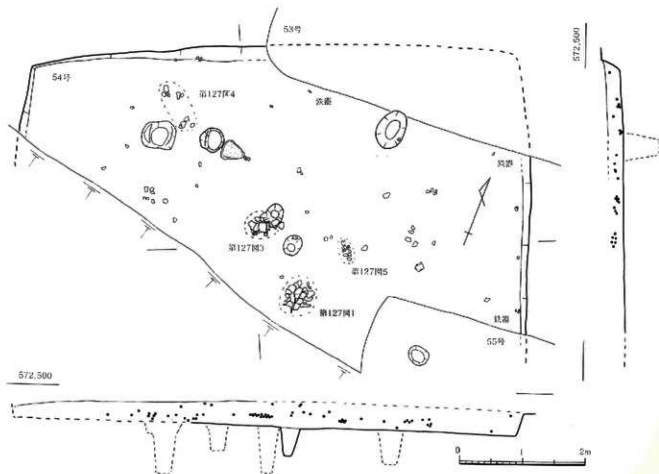
#### 54号竪穴（第126図）

53・55号と重複するが両者に先行し営まれた遺構である。南側から西側にかけては農道により消失し、東北部と南東部は53・55号により失われる。この為、全体のプランや詳細については明らかではないが、主柱穴の位置等から長辺（東西）約8m・短辺約6.5mの長方形に復原されよう。4本主柱穴の西南部を除く柱穴は確認され、主軸方位はN-28°-E。中央部に近接するやや深い2本の柱穴があるが、いずれも本遺構に伴うか否かは断定し難い。壁溝は確認されず伊跡や上坑等の施設については不明であるが、内部からは3点の鉄器を含む比較的多くの遺物が出土している。その中で第127図1～5に図示した甕4個体は床面よりやや浮いた状態で纏まって出土し、竪穴の廃絶祭祀に使用されたものと考えられる。

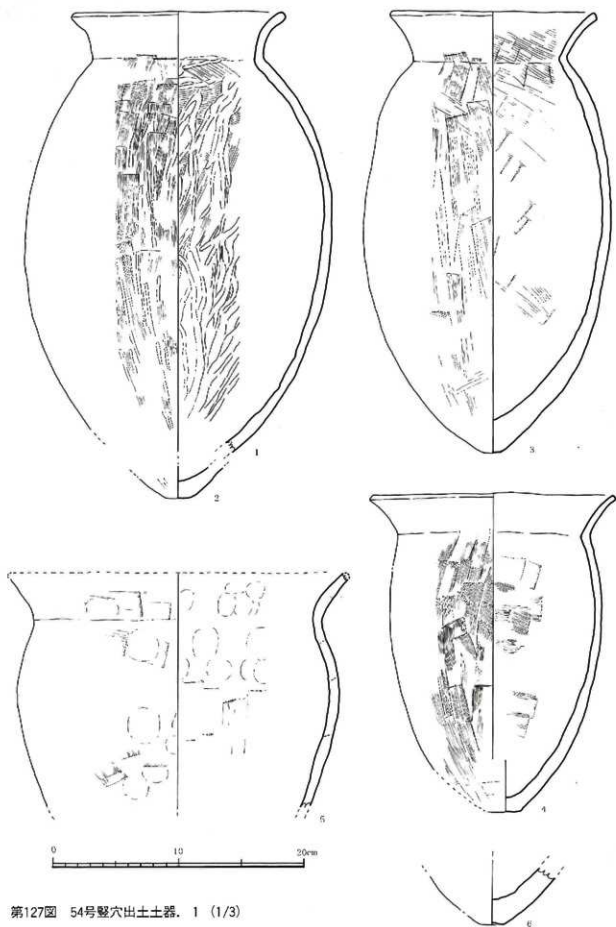
第127図1は中央南側から出土した甕で、同一個体と判断される2の底部は3に示した土器群と共に検出された。小さな平底を呈する底部からやや膨らみのある長胴の胴部に続き、頸部で屈曲し緩く反転して外に開く口縁部に至る器形をなす。外面は縦方向のハケにやや粗いミガキ、内面はハケのちミガキをやや丁寧に加える。3はほぼ完形の甕で、胴部の張りが弱く底部も尖底に近い平底となる。口径16.4cm、器高35.8cmを測り、器面調整はハケを主としミガキは施さない。4は胴部の張りが更に弱く口径より小さく、平底も比較的安定したもので前述の甕より古い様相をもつ。5はやや肩の張る胴部をもつ粗製甕、6は底部外側が僅かに窪む甕の底部。

第128図1は内傾する口縁部に2段の櫛指波状文を施す複合口縁甕。2～4も同様の器形を示すと思われる複合口縁甕の口縁部片でいずれも波状文を描くが、3は波状文の間に竹管状工具による円弧文を加える。5は高坏の脚部で外面と坏部内面に赤色顔料を塗る。以上の土器は胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む地系である。

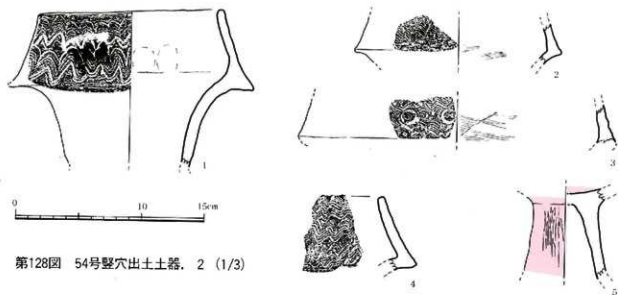
ほぼ完形の甕や甬から本遺構の時期は弥生後期後葉と考えられる。



第126図 54号竪穴実測図 (1/60)



第127图 54号窖穴出土土器。1 (1/3)

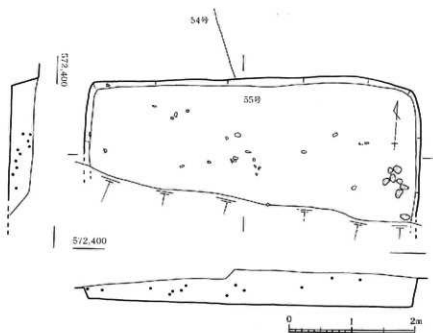


第128図 54号竪穴出土土器。2 (1/3)

#### 55号竪穴 (第129図)

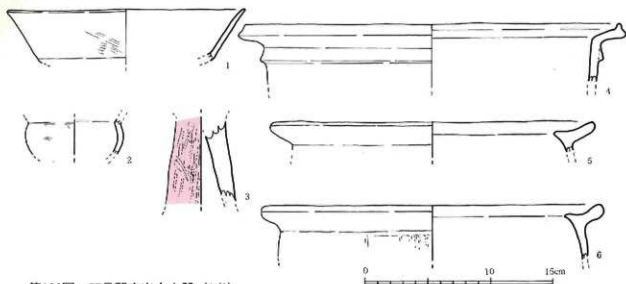
54号の東部を切り形成された遺構であるが、大半を農道により失い残存するのは北側の一部に過ぎない。周辺の竪穴の方位から東西に長い長方形プランと考えられる。現存する東西辺の長さ5.3m、南北辺長2.2mを測り、検出面から床面まで残りの良好な部分で0.4m。壕溝は巡らず、毛柱穴・炉跡・土坑等の施設については不明である。遺物は堀上の中位から若干出土しているが、土器は小片であり遺構の所属時期の決定にはやや躊躇するものの第130図1・2から古墳前期中～後半に考えられよう。

第130図1はほぼ直線的に斜め上方に開く高坏の口縁部で加曲部以下を欠く。2は小型丸底甕の胴部片で外面はハケのちナデによる調整。3は弥生終末から古墳初頭の高坏の脚柱部で、本来54号に帰属するものと考えられる。4～6は弥生中期の甕で4は跳ね上げ口縁を呈し、5・6は黒髪式の口縁部でいずれも混入したものの。



第129図 55号竪穴実測図 (1/60)





第130図 55号竪穴出土土器 (1/3)

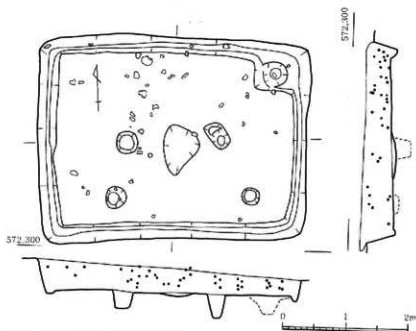
#### 56号竪穴 (第131図)

51号と55号の間に位置する遺構で他とは重複しない。長辺4.3m・短辺3.1～3.3mの東西に長い長方形をなし、検出面より床面までは0.3～0.4mと遺存状態は比較的良好である。壁溝はほぼ全周し、床面積は9.88㎡と小形。中心軸よりやや南側に2本の支柱穴があり、方位はN-88°-W。支柱穴の間に不整形円状の浅い伊路が、東北コーナーには2段掘りの土坑が設けられる。遺物は埋土の中～下位に多く含まれ、第132図1の甕は遺構の北半部10数箇所から出土したもののが接合した。6も同様に6箇所に別れ出土したものであり、埋戻しの途中においてこれらの土器を祭祀に使用し、その後細かく破壊し投棄したものと考える。

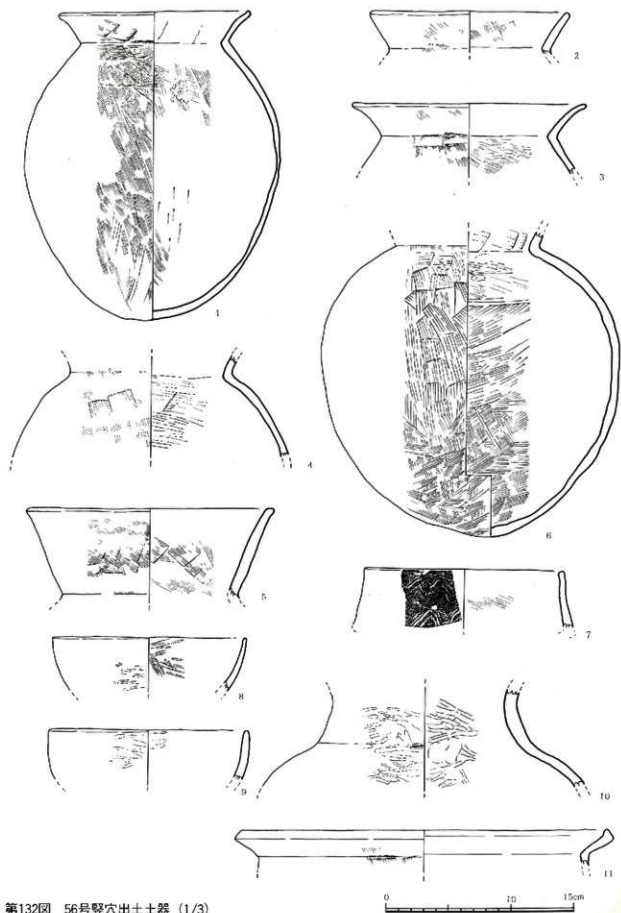
第132図1は口径15.2cm、器高24.4cmを測る甕で、外面縦方向のハケのち肩部に横ハケを加え、胴部内面はヘラケズリのち一部ハケ。2～4は内外面ともハケを主調整とする甕の口縁部と胴部。5は口縁端部を面取りする無頸甕の口縁部で、6

は無頸甕の胴部と考えられるもので大きく球形に張り出す。7は縄描波状文をやや雑に描く複合口縁甕の口縁部。8・9は粗いミガキを加えた碗である。10・11は弥生前～中期の壺と甕で混入品と考えられる。

これらの土器は混入品を除き古墳時代前期中～後半に比定され、本遺構もここに属する。



第131図 56号竪穴実測図 (1/60)



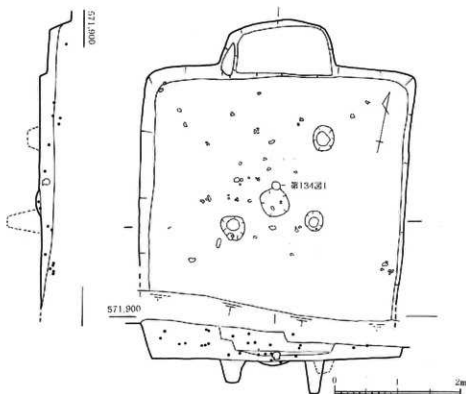
第132图 56号竖穴出土土器 (1/3)

57号竪穴（第133回）

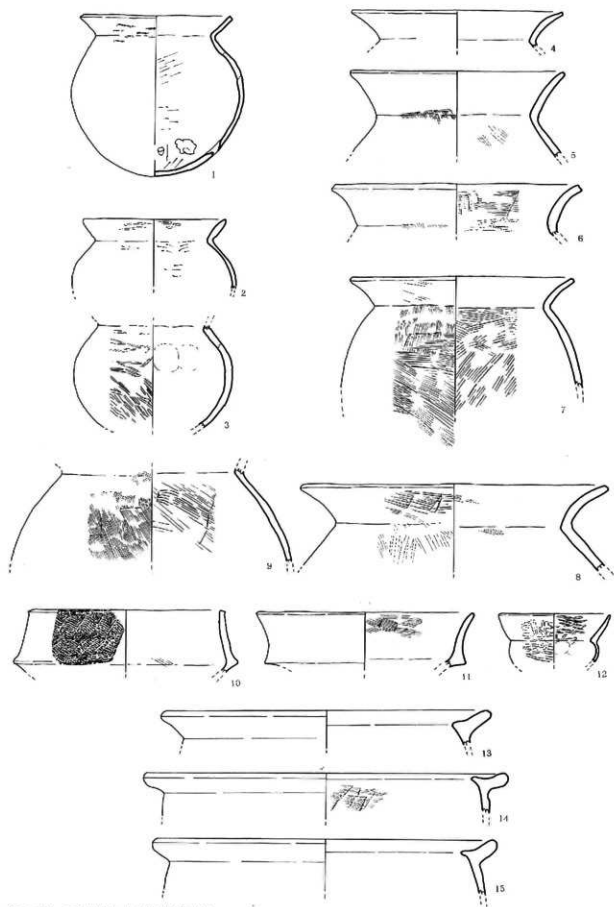
56号の東側に隣接し遺構の南側辺を農道により失う。東半部分は削平を受けるが、検出面から床面まで深い所で約0.6mを測る。東西辺長4.3m、現存南北辺長約4.0mであるが支柱穴の位置から4.3×4.3mの方形に近いプランに復原される。北側辺の中央部に基部幅1.9m、長さ0.6mの隅丸長方形の突出部が設けられ、階段状をなすことから出入口を構成するものと判断される。炉跡はほぼ中央に設けられ、直径0.5m、深さ0.1mの円形を呈する。炉跡の南側に2本の支柱穴が位置し、方位はN-76°-E。西側支柱穴には抜き取りの痕跡が認められ、壁溝は巡らず上土の有無は不明である。出土遺物の中で注目されるのは第134図1に示した鉢で、炉跡の北側から完形のまま倒立させた状態で検出された。これは埋戻しの前に祭祀に用い、底部付近を打欠き穿孔して伏せて置く行為があったことを示唆する。

第134図1はほぼ球形の胴部に直線的に外に開く口縁部を付す鉢、外面は丁寧なナデにより胴部内面はヘラケズリによる調整。底部近くを外からの打欠きにより穿孔する。口径12cm、器高12.8cmを測る小形品。2も小形の鉢で器形も類似するが口縁部がやや肥厚する。3も同様の鉢の胴部で外面にミガキを加え、胎土に金雲母を多く含む。4～9は甕の口縁部と胴部片、口縁部はいずれも緩く反転し外に開く。ハケを主調整とするが、7の外面には横ハケを一部加える。10は櫛柄波状文を施す複合口縁部の口縁部で、口縁部はやや短く内傾して立ち上がる。11は外反転して開く口縁部を持つ複合口縁部で、12は比較的丁寧なミガキによる小型丸底甕。11も金雲母を含むが、この他は在地系胎土による。13～15は弥生時代中期の肥後系甕で、いずれも金雲母・石英・角閃石等を胎土に含む。

1～12の土器は古墳前期前葉でもやや新しい時期に考えられ、本竪穴の時期もそこに置かれる。



第133図 57号竪穴実測図（1/60）



第134图 57号竖穴出土土器 (1/3)

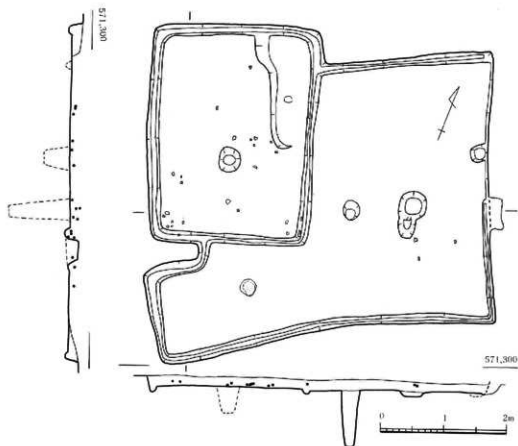
0 10 15cm

63号竪穴 (第135図)

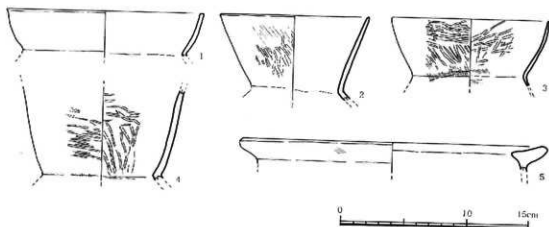
A区の南東部、集川墓の北側に接する不規則な平面形をなす竪穴である。検出時点では2基の重複と思われたが、調査の結果切り合い関係はないことが判明した。削平のため検出面から床面までは約0.1m前後と浅く出土遺物も少ない。北西部分は約2.6×3.5mの長方形をなし一見独立するが、南西部分の内側に舌状突出部を持つ長方形に近いプランの遺構と接続し、壁溝は竪穴東側辺の東北部分を除き連続する。床面積は20.2㎡で主柱穴と考えられる柱穴は中央やや南東寄りに1本認められる。その東側にやや浅い土坑と北西部にも柱穴状のピットが存在するが、跡は確認されず一般の住居跡とは明らかに構造・性格を異にする。このような要則的な平面形や内部構造を示すものは他に類例がなく、県内で知られる所謂花弁型住居跡とも異なると言えよう。本遺構が一つの建物をなすとすれば、北西部はその中における独立した空間と想定される。そして、墓地に隣接することから葬送に關係する施設である可能性も考えられるが、これを裏付ける資料は見当たらない。土器は小片が多く特別な出土状況を示すものは認められなかった。

第136図1は内湾気味に外に開く堦の口縁部片であり、口径は15.6cmを測る。2は口縁部がほぼ直線的に斜め上方に延びる長頸甕で、外面はハケのち縦方向のやや粗いミガキ。3は長頸甕又は小形壺の口縁から頸部片、内外面ハケのち縦・横方向のミガキを施す。胎土に金雲母等の砂粒を若干含むものの精良で器壁の薄い丁寧な造りである。4も長頸甕の頸部片で、前述の上器と同様の調整による。5は弥生中期の肥後系壺の口縁部で混入と考えられるもの。

1～4の上器からすれば、本遺構の時期は古墳時代前期中葉の所産であろう。



第135図 63号竪穴実測図 (1/60)

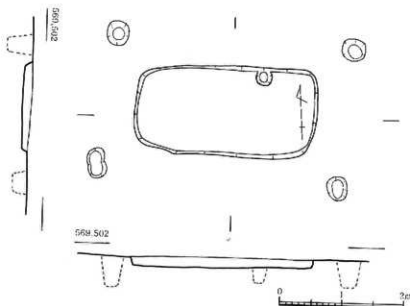


第136図 63号竪穴出土土器 (1/3)

77号竪穴 (第137図)

A区の南端部分の西寄り、75・76号の西側に位置する上坑と柱穴から形成される遺構である。東西方向に掘られた土坑は長辺約2.9m、東側短辺約1.4m、西側短辺約1.2mの隅丸長方形プランをなし、検出面から床面までは0.15mとやや浅い。床面は平坦であり北側壁に接し浅いピットがあるが、その他の掘り込みなどは確認されなかった。四隅の外側に一定の距離を保ち、直径約0.4m・深さ約0.4m前後の柱穴がある。東西方向の中心距離は3.85m、南北方向の中心距離は1.1mを測る。主軸方位はN-84°-Wであり、周辺の竪穴の中では80号と近くなる。その規模からすれば倉庫の可能性が最も高いと言えよう。

本遺構に伴う遺物はほぼ皆無であり時期決定の資料を欠くが、県下において類似する遺構は日出町会下遺跡等において検出されており、弥生中期～後期の所産と考えられよう。



第137図 77号竪穴実測図 (1/60)

## 100号竪穴 (第138図)

A区の中央から南西の緩斜面に位置し、南側には77号や96号が近接するが残りの3方向には空白地が認められ、掘列等は確認されなかったが周辺の空白部も本遺構に付随するとすれば、その専有面積は他の竪穴と比べ非常に大きかったことが窺われる。長辺(東西)10.5~10.9m・短辺8.1~8.4mの特大規模を有し、東側辺の中央やや北寄りに基部幅2.4m、先端幅1.9m、長さ約1mの台形に近い平面形を呈する出入口が設けられる。出入口の深さは約0.4mを測り竪穴の床面からは0.3m高い段が付き、内側の段の中程と基部の両端には直径0.2m前後の規模の小さい柱穴がやや深く掘り込まれている。両基部の柱穴は外側に傾斜することから、これらの小柱穴は出入口を覆う施設を形成していたものと考えられる。

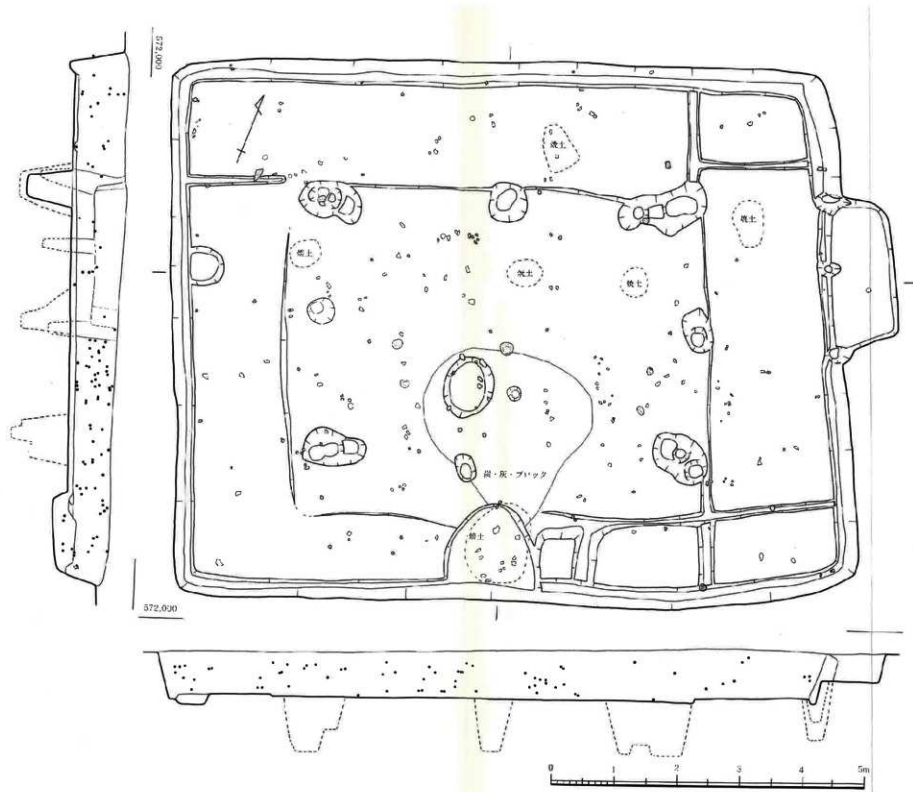
竪穴内部の床面は検出面から0.4~0.8mを測り南側はやや浅いが全体的に残りは良好である。堀溝は全周し床面積は80.1㎡で内部調査を実施した竪穴の中では3番目の規模を有する。四方の壁と平行し東から北側幅約1.8m、西から南側幅約1.4~1mのベッド状遺構が巡る。内部床面との比高差は5~10cm程で全体にやや低く南西から西側は不明瞭となる部分が認められる。出入口の南北西コーナー部分にはベッド状遺構を長方形に区切る小溝が堀溝と直交するように巡り、いずれも内側は東北・東南部主柱穴に接続する。東南部の小溝は南側側のベッド状遺構部分を二つに分割しながら南壁側中程の土坑に近接する所で終息する。これらの溝は直線的であり四方の壁と直・平行することから竪穴内部の仕切りに伴う可能性もあるが、その機能・性格は明らかではない。また、これと同様の溝は西側壁溝から西北部主柱穴の間にも設けられるが柱穴とは接続しない。

相接する2本を1組とする主柱を四隅の内側に設け、各主柱間の中程に補助柱を1本ずつ配置するやや複雑な構造を示し主軸方位はN-70°Eとなる。2本1組の主柱は他に例が認められず、上部や屋根組みが如何なる構造を示すのかわからないが、単なる平厩ではないものと推定される。各主柱の内側にはさらに柱状の掘り込みを伴うが、これらは主柱の抜き取り穴の可能性も完全に否定できないものの、いずれも丁寧に埋め戻され検出面は床面と同様に硬化していたことから主柱の設置に伴う作業穴である可能性が高いと思われる。各補助柱の位置は中心ではなくいずれか一方の主柱に寄り、北側を除き主柱穴よりやや浅いものとなる。中央やや南側に長軸1m、短軸0.8m、深さ0.1mの楕円形の跡があり、東から南側には炭化物や灰のやや広い分布が認められた。南壁側中央の大型土坑は直径約1.5mの半円状をなし、その上部には焼土の堆積が確認された。その他、灰跡の東側と北側の主柱と補助柱に平行する直線上の床面3箇所、及び北側ベッドや出入口側の床面にも床面の焼土化が認められた。これらの焼土・焼土化は、柱抜き取り前の竪穴の廃絶に伴う祭祀行為(飲食儀礼)に起因するものと考えられる。これに使用された土器は内部からは出していない。また、出土土器等は小片が主体を占めるが、東南部の堀溝直上からはほぼ定形の小型丸底壺1個体(第140図1)が倒立した状態で検出された。その他、製塩土器3点、鉄器2点、太梨蛤刃石斧1点等も出土している。以上の内部施設・構造・規模等は本遺跡のみならず当地域全体の一般的住居跡と乖離していることが指摘されるが、これについては後述する。

第139図1~3はI緑部がほぼ直線的に外に開く在来系で、1の側部はやや張り力が弱いものとなる。4~7は外來系又は外來系を模したI緑部をもつ甕で器壁がやや薄い。8・9はI緑部付近が外反する在地系裏の口縁部片。1・5は胎上に金雲母をやや多く含む。10はI緑部上半がほぼ直立する複合口縁部で、外面に3段の櫛歯状文を描く。11も同様の器形を示すと思われる複合口縁部で、波状文はやや複雑な施文となる。12はやや短い口縁の屈曲部に刻目を施す外來系複合口縁部であり金雲母を多く含む。13~14は複合I緑部の頸部から胴部片、いずれも境に三角形突帯を巡らす。16は無頸部のI緑部片と考えられるもの。

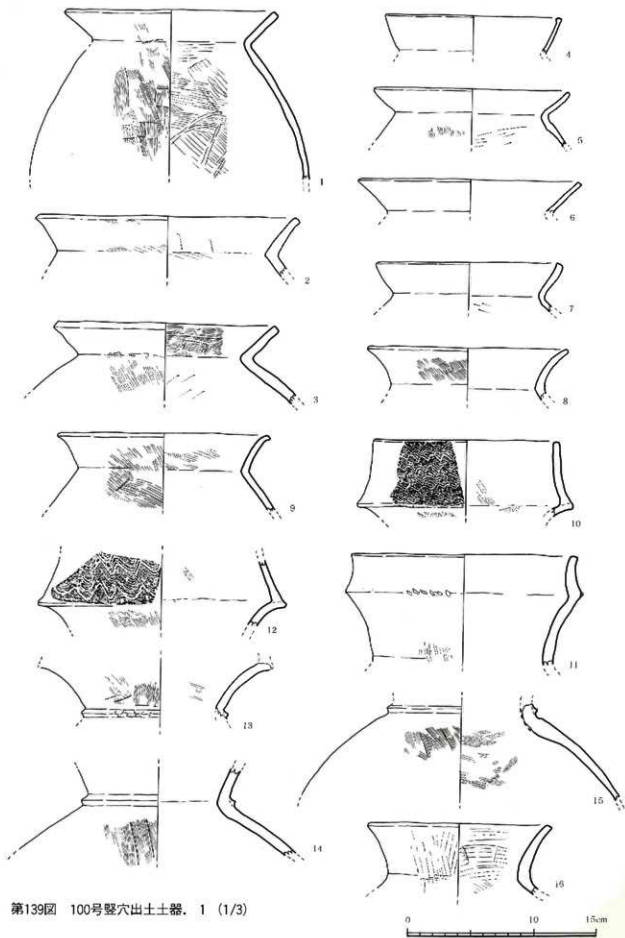
第140図1はI緑部部の数箇所打欠き欠損以外は定形で出土した小型丸底壺、外面はハケとナデにより胎土は在地系。2・3も同様の小型丸底壺であるが口縁部がやや内湾気味に開くもの。4は受部に孔を設ける器台の脚部片、5は口縁部が僅かに屈折して開く小形壺。6は小形の鉢で、7は内外とも丁寧なミガキによる小形直口壺。8は小形壺又は鉢の胴部で外面はミガキによる調整、9はやや複雑なミガキを加える椀。10~14は弥生前期から後期の土器片で混入と考えられるもの。15~17は製塩土器の脚部で石英等の砂粒を多く含む搬入品。

これらの土器の中で混入品以外が古墳時代前期中葉に比定され、本遺構もここに置かれる。

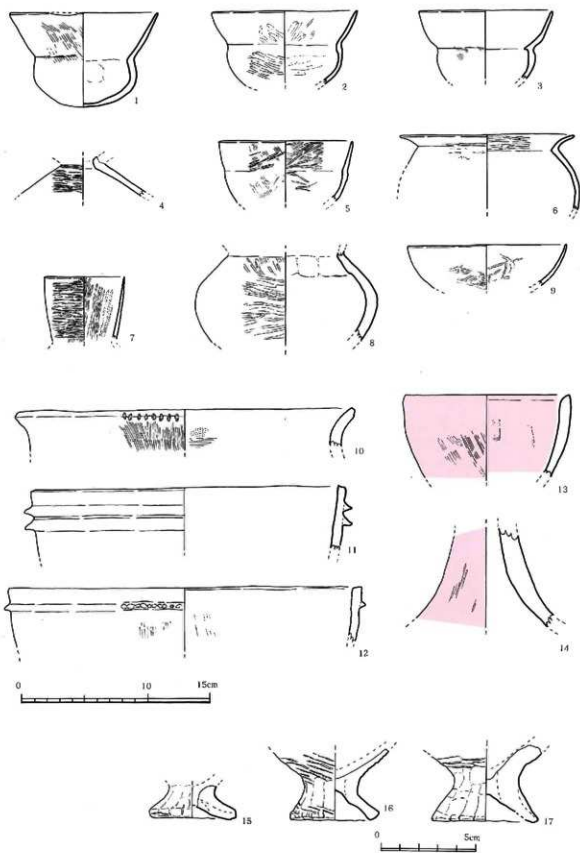


第138図 100号竪穴実測図 (1/60)





第139图 100号竖穴出土土器。1 (1/3)

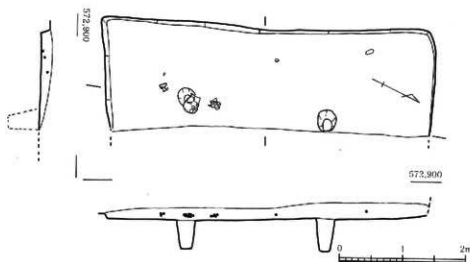


第140図 100号豎穴出土土器。2 (1~14は1/3、15~17は1/2)

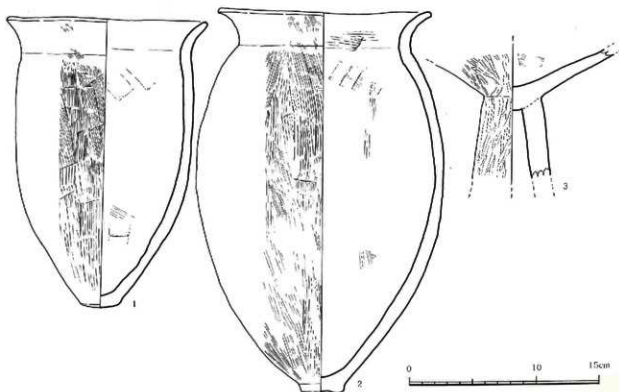
115号竪穴 (第141図)

A区の中央からやや南東にある52号の東側約10mに位置する長方形の竪穴と思われる。水路等による消滅部分が多く、4本主柱の西側内主柱から西側にかけて約1.7mの部分が残るのみである。残存部の最も良好な部分で検出面から床面までは約0.2mに過ぎないが、南側主柱穴の両側から第142図に示した土器が床面と近接し出土した。1は緩く屈曲して開口縁部から殆ど張らない胴部に続き、底部はレンズ状に近い平底を呈する半完形の甕。内外ともハケを主調整とし、口径15.8cm・器高23cmを測る。2はやや低い上げ底の底部から開口縁部より膨らむ胴部に続き、頸部で屈曲し外反しながら開口縁部に至る甕。器面調整は1と同様であり、いずれも胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む地系土器。

3はやや人形の高杯の坏底部から脚部片で外面は縦のミガキによる調整。これらの土器は弥生後期中葉に考えられ、本竪穴もここに置かれる。



第141図 115号竪穴実測図 (1/60)



第142図 115号竪穴出土土器 (1/3)

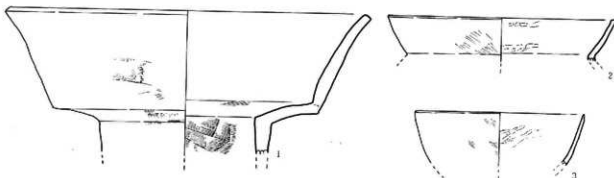
### 171号竪穴 (第144図)

A区の中央やや北側にある大形の竪穴で掘立柱建物と一部重複するが、水田に伴う削平により全体の約9割を失う。床面を保つ部分は北西コーナー付近のみで、その他は5本の主柱穴と南壁側中央上坑と壁溝が断片的に残存するに過ぎない。しかし、主柱穴等の残存遺構から長辺約9.4m、短辺約8mの長方形プランに復原可能であり、推定される床面積約66㎡の大規模な竪穴であることは疑いない。壁溝は全周すると思われるが、北西部を除き削平のため溝底が部分的に検出されたに過ぎず東側は全く残存しない。主柱は中央部と四方の5本であり、柱穴はいずれもやや深く掘り込まれており主軸方位はN-58°-E。東側2本の主柱は明らかに抜き取られたものと考えられる。その規模から集落内部の一般的住居跡とは性格を異にする可能性が高い。

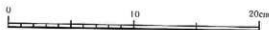
南壁側中央に長さ1.2m、幅約0.7m、深さ約0.4mの不整長方形を呈する土坑が認められ、内部から第143図に示した土器片を始めに刀子等の鉄器2点が出土した。遺物は埋土の中～下位に多く土器に大形破片や明らかに祭祀行為を示す出土状態等は観察されず、土と共に内部に投棄されたものと思われる。しかし、鉄器は竪穴の廃絶祭祀に伴う可能性がある。

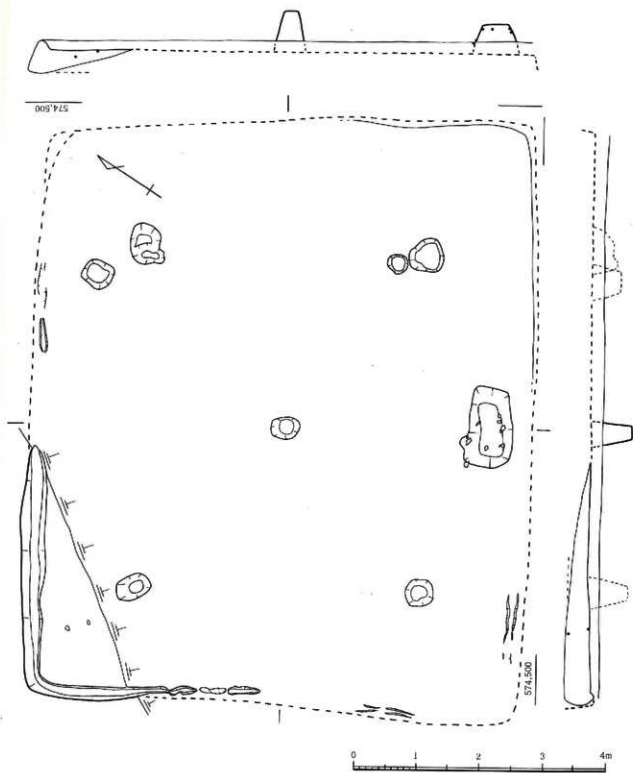
第143図1は当地域では出土例の数少ない大形の畿内系二重口縁甕の口縁から頸部片、内外面とも細かいハケのちナデによる調整。口径29cmを測り、全体に丁寧な造りで胎土に砂粒の少ない搬入品。2は口縁部がやや内湾気味に外に開く甕の口縁部片。外面はハケのちナデ、内面はミガキを部分的に施す。角閃石・灰色粒等を含む在地系胎土であるが、器形は外来系甕を模したもの。3の器面調整は2と同様の碗、口径13.4cmを測り胎土も2と変わらない。

これらの土器は古墳時代前期前葉でも中頃に近い時期と考えられ、本遺構もここに置かれる。



第143図 171号竪穴出土土器 (1/3)





第144図 171号整穴実測図 (1/60)

#### 172号竪穴（第145図）

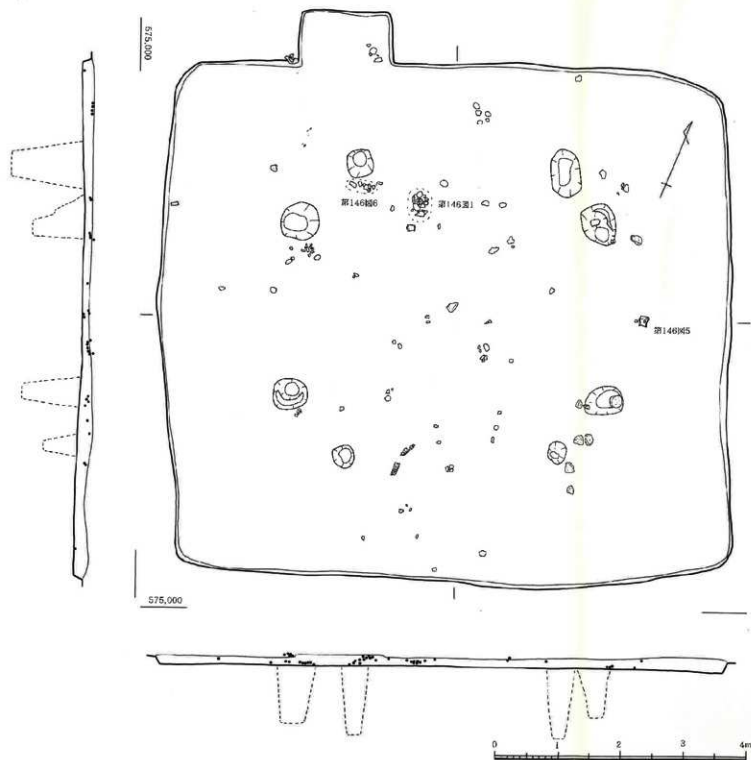
171号の北西にありA区の最も標高の高い場所に位置する。この一帯は畑地として耕作されていたことから遺構の遺存状態が期待されたが、検出面から床面までは0.1m前後と浅い。また、牛・馬の遺体埋設場も複数認められ残りはやや不良であった。長辺（東西）8.8～9.0m、短辺7.6～8.0mの隅丸長方形プランを呈し、北西隅からやや東側に基部幅1.5m・長さ0.8mの長方形突出部が認められる。これに伴う柱穴等は確認されず断定はできないが、出入口の可能性をもつ。懸溝は設けられないが、床面積は69.73㎡と100号に次ぐ規模を有することから前述の171号に先行し類似した性格が推定される。

主柱の構造・配置は38号と同じく各々約1.3mの心距離をもつ柱2本を一对とし、各コーナーの内側の四方に設ける。その中で六つの柱穴には抜き取り痕跡が認められ、東西方向を主軸とした場合の方位はN-68°-E。遺構平面図の中で遺物の分布しない部分は牛・馬埋設場により攪乱を受けた所が多く、痕跡や土坑等の施設については確認できなかった。出土遺物に特異な状況を示すものは無く、土器も小片が多いが第146図1の胴部下半を欠く甕は中央やや北側からまとまって出土した。

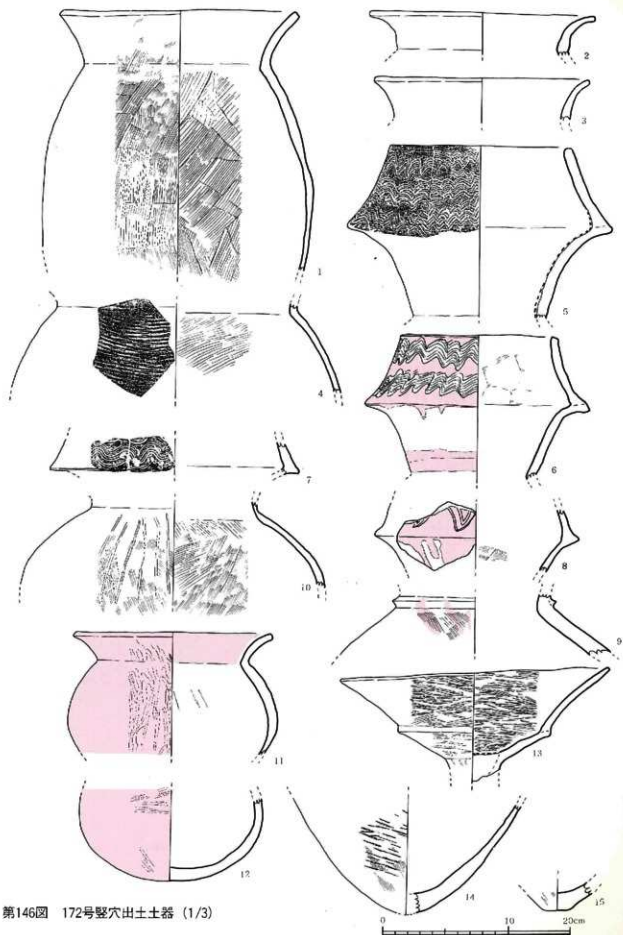
第146図1は縦く反転して開く口縁部から膨らみの弱い長胴の胴部に絞く在地系甕、胴部外面は縦方向のハケにより内面は斜めのハケによる調整。2・3もほぼ同じ器形を呈すると思われる鉢・甕の口縁部片で、2は口縁部の開きが強いもので胎土に金雲母をやや多く含む。4は外面左上がりのタタキによる甕の胴部片で在来系と比べ胴部の張り出しが強く、胎土に角閃石をあまり含まない搬入品と思われるもの。5は内傾する口縁部の外面に3段の櫛描波状文を下から上に描く複合口縁甕。6も同様の複合口縁甕であるが2段の櫛描波状文の空白部と頸部の下位に赤色顔料を塗る。7・8は複合口縁甕の口縁部片でいずれも波状文を描き、8の外面には顔料を塗る。9は複合口縁甕の頸部から胴部片で境に三角形突帯を巡らし、胴部に赤色顔料による文様を施すもの。

10は無頸甕の胴部片と考えられるもので、やや円張る胴部の外面はハケの縦方向のミガキを平行に加える。11は丸張り出す胴部をもつ鉢、胴部内面はハケとナデにより外面は縦方向のミガキを施す。口縁部内面と外面全体に赤色顔料を塗るが、この時ついたと思われる布状の痕跡が一部付着している。12も同様の鉢の胴部下半部で底部は丸底を呈する。13は僅かに反転して開く口縁部から強く屈曲し底部に至る高坪の坪部、内外とも横方向のミガキをやや丁寧に施す。14は甕の底部で尖底に近い丸底を呈し、外面はタタキのちハケによる調整。15は小さい平底をなす甕の底部。5～15は胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む在地系土器である。

これらの土器は弥生時代後期後葉から終末に置かれ、木堅穴もこの時期に営まれたものである。



第145图 172号竖穴夷测图 (1/60)



第146图 172号竖穴出土土器 (1/3)

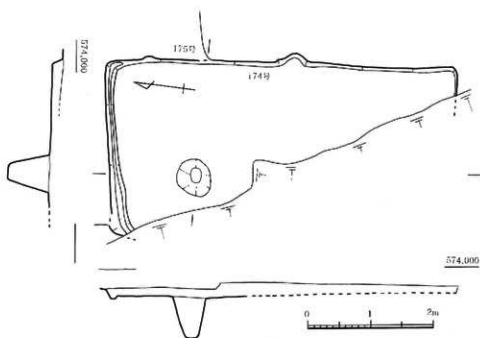


174号竪穴 (第147図)

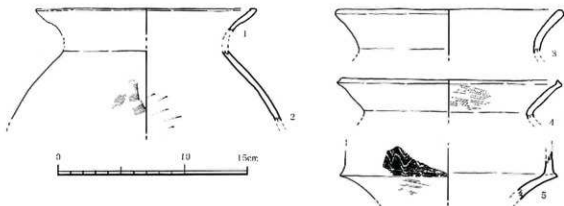
172号の北西約5mにあり北東部付近は175号と重複する。検出時点における先後関係は明らかでなく出土遺物も少ないことから明確ではないが、本遺構が先行する可能性が高い。東西に長い長方形をなすと思われるが遺構の東側が部分的に残るのみであり、中央付近から南側は水田化による削平により消滅する。南北辺5.6m、現存東西辺約2.7mを測り、主柱穴は1本残存する。北側辺には塋溝が認められるが東から南側には設けられず、跡等の施設についても不明である。

第148図1・2は同一個体と考えられる甕の口縁部と胴部。胴部の張り出しはやや強く、外面縦方向のハケのち横ハケを施し内面は右上がりのヘラケズリによる。3は緩く外反して開く在来系甕の口縁部で、4は口縁部内側に短く突出する外來系土器。5はほぼ直立すると思われる口縁部に波状文を挿く複合口縁甕の口縁部片。

本遺構の時期は1の甕から古墳前期中葉に置かれよう。



第147図 174号竪穴実測図 (1/60)



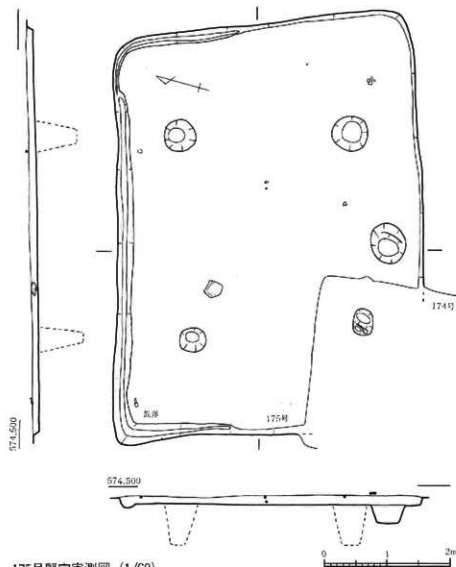
第148図 174号竪穴出土土器 (1/3)

175号竪穴 (第149図)

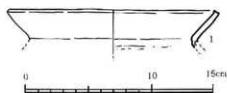
174号の北側にありこれと一部重なる。長辺(東西)6.5m、短辺4.8mの長方形プランをなし、検出面から床面までは約0.1mと浅く遺物も少ないが北西隅部から柄の木質部が残る鉄斧が出土している。壁溝は遺構の北半部分に限定され、床面積は27.9㎡と中規模の竪穴である。4本支柱の方位はN-70°-E、南側の両支柱穴の中心に直径0.6m、深さ0.3mの円形土坑があるが、炉跡は確認できなかった。

第150図1は外米系甕の口縁部片で、2は高坏の口縁部で外面に縦方向のミガキを加える。3は小形の鉢、丁寧な造りで移入品と思われるもの。

上器はいずれも小片で時期決定にやや躊躇するが、古墳前期後半に考えられよう。



第149図 175号竪穴実測図 (1/60)



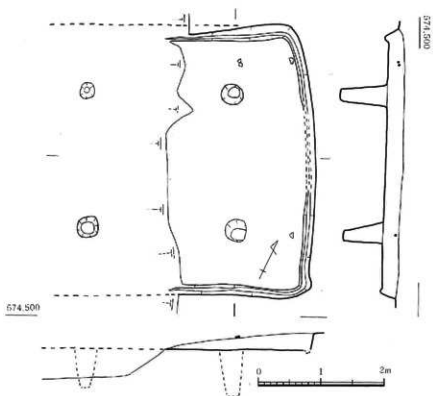
第150図 175号竪穴出土土器 (1/3)

176号竪穴 (第151図)

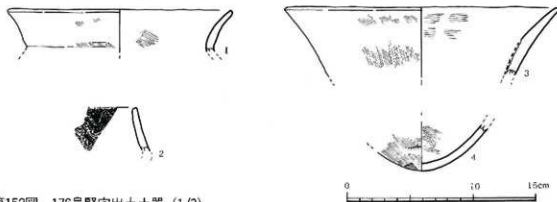
172号の西側約4mにありこれと平行するが側平のため中心部より西側は主柱穴の底付近を除き消失する。南北辺4.3mで、東西辺の現存長約2.4mを満るが主柱穴の位置等から約5mの長方形に復原される。壁溝は全周すると思われるが、東側の一部は後世の掘削を受ける。4本主柱であり主軸方位はN-66°-Eになり172号と近い。竪穴跡や土坑等の施設については不明であり、出土遺物も少数である。

第152図1は在米系甕の口縁部で2は複合口縁壺の口縁部片。3は無頸壺の口縁部片と考えられるもので内外面ともハケを主とする調整。4もハケ調整による甕の底部で丸底を呈するもの。

以上の土器も時期比定がやや困難ではあるが、古墳前期前葉でも中頃に近い時期に考えられよう。



第151図 176号竪穴実測図 (1/60)



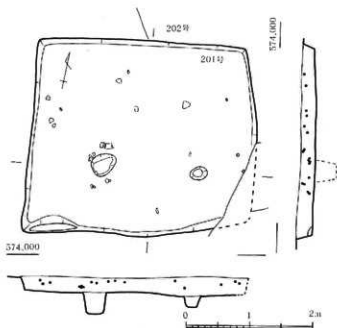
第152図 176号竪穴出土土器 (1/3)

### 201号竪穴（第153図）

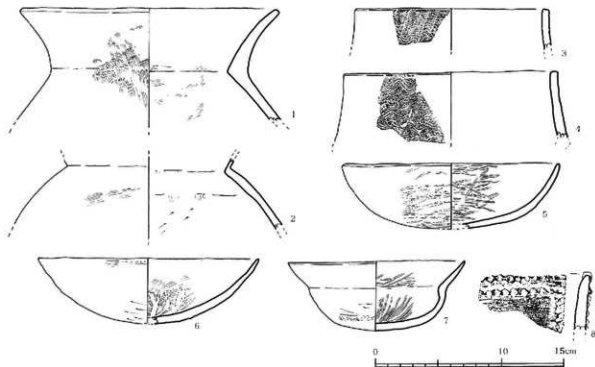
A区の北部、2号竪穴の南側の尾根上に位置し202号の南西部を切って営まれた竪穴である。長辺約3.5m、短辺約3.1mの長方形を呈するが、東南隅部は水路により消滅する。壁溝は無く、復原床面積は9.86㎡の小形の竪穴である。主柱は中心からやや南側に寄り2本設置され、方位はN-84°-E。西側主柱穴には抜き取り痕跡が認められ、土坑やが跡は検出されなかった。出土土器はやや散漫であり、大形破片の出土もなく検出状況にも特別変化は認められなかった。

第154図1は口縁部が緩く外に開き胴部の張りも弱いと考えられる在来系甕、2は甕の胴部片で内面にヘラケズリのちナデを施すもの。3・4はほぼ全面に懸挿波状文を施文する複合口縁甕の口縁部。5・6は丸底の底部からそのまま外に開く口縁部に至る椀、5は内外面とも横のミガキにより6の外面にはケズリが残る。7は丸底の底部から屈曲し外に開く口縁部をもつ鉢で、胴部外面にケズリが部分的に残るが他はミガキとナデによる調整。8は混入と考えられる弥生前期の刻目突帯を施す甕。

1～7の土器は古墳時代前期中葉に比定され、本遺構もここに置かれる。



第153図 201号竪穴実測図（1/60）



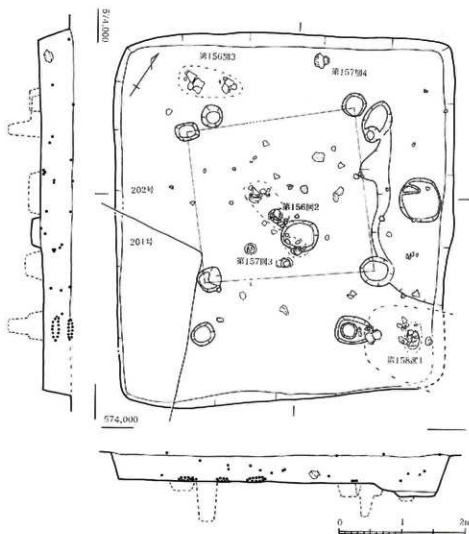
第154図 201号竪穴出土土器（1/3）

## 202号竪穴 (第155図)

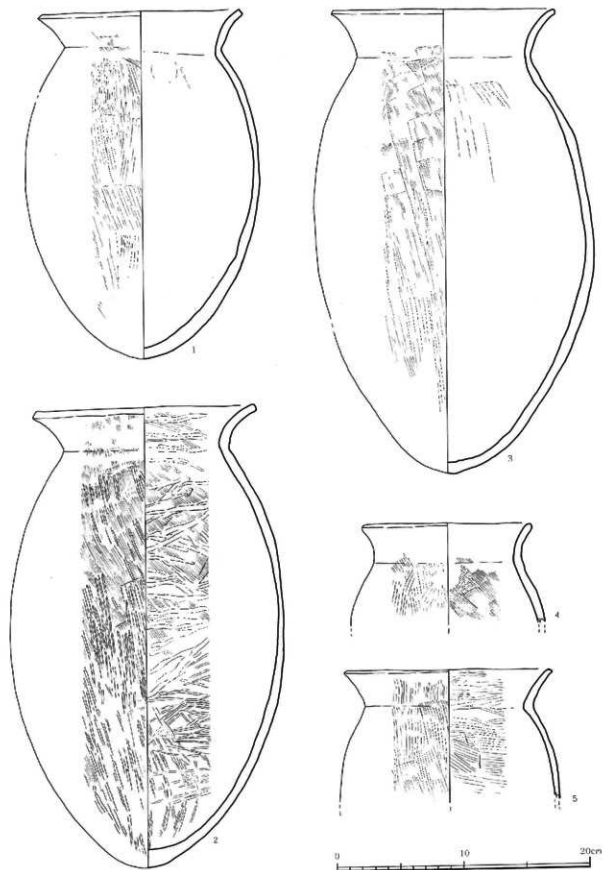
201号の南東部にある長辺5.8m、短辺5.4mの長方形住居跡である。南西隅付近を201号により失い、検出面から床面までは約0.5mと尾根の頂部に位置する竪穴の中では比較的深い。南東隅周辺は古墳時代前期中葉の土坑と思われる遺構により擾乱を受けるが、検出時点においては土坑平面の確認ができず本遺構と同時に掘り下げた。壁溝は認められず、床面積は27.4㎡と中規模に入る。竪穴の掘り込みは中央やや南東にあり、直径0.6mの円形状をなし深さは約0.15mと浅い。東壁側の中程に壁と接し直径0.7mのやや浅い円形土坑が認められ、その西側の柱穴との間の床面は一段低くなる。主柱は4本で立て替えが行われているが、内側の4主柱は浅く四方の壁面と平行しないことからこれが当初の主柱と考えられる。これに伴うと思われるか跡・土坑等の施設が確認されなかったことは構築途中における変更の可能性を示すものか。また、立て替え後の柱間隔は南北方向に長くなり、方位はN-55°-Eで当初に比べ7°余り南に振る。

出土遺物は豊宮であり第156図2・3と第157図2の甕は分割され中央部と北西部の床面から、第157図3～5の複合1杯甕は頸部と胴部の境から取り外された状態で床面よりやや浮いた位置から出土している。これらは竪穴埋戻しの前に行われた祭祀に使用され、その後分割され内部に埋置されたと考えられる。また、東南部のコーナー付近からは第158図に示した土器が出土しているが、これらは古墳前期の遺構に伴うものであり本住居跡には帰属しない。その他、手鎌も出土している。

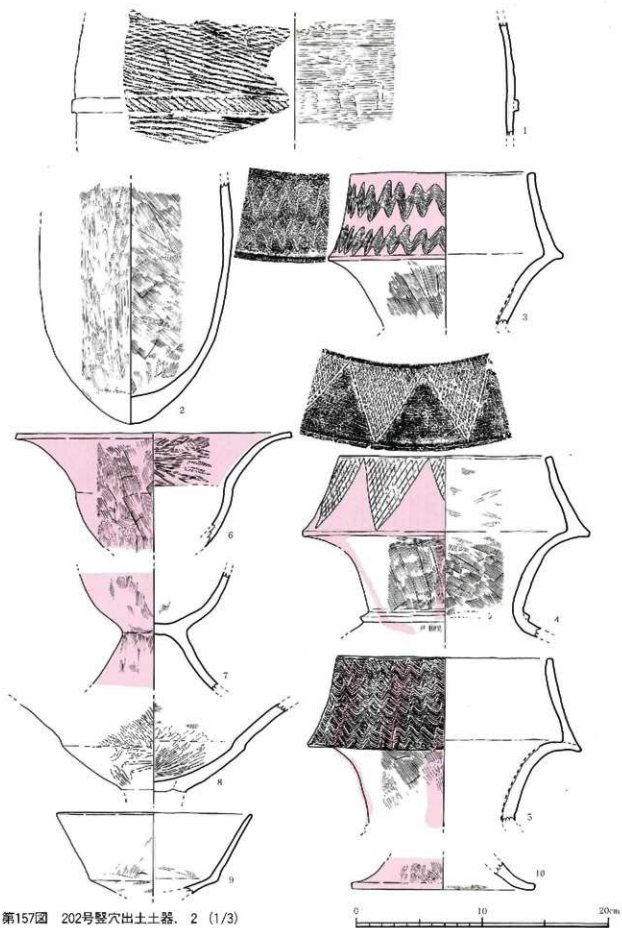
第156図1は縦く外反して開く門縁部からやや膨らみのある長胴の胴部に続き、底部は丸底を呈する完形に近



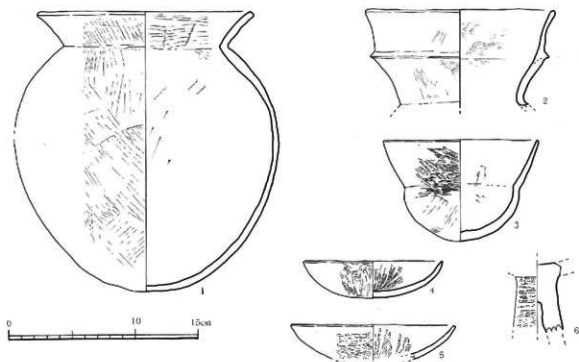
第155図 202号竪穴実測図 (1/60)



第156图 202号竖穴出土土器。 1 (1/3)



第157图 202号整穴出土土器。2 (1/3)



第158図 202号竪穴出土土器。3 (1/3)

い甕。外面は縦方向のハケにより内面はナデを主とする調整、スス・コケが付着しI径16cm・器高27.6cm。2もほぼ同じ器形を示すがI縁部の開きがやや大きく、胴部内面の調整はハケのちミガキ。II径17.6cm・器高36.5cmを満るやや大形の半定形の甕。3～5もこれらと同様の器形・調整による甕であり、いずれも胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む在地系土器である。

第157図1は外面タタキによる傘の胴部、2は上半を欠損する甕の胴部で、底部はやや厚い尖底状の丸底をなす。3は内傾するI縁部の外面に2段の波状文を描き、無文部分に赤色顔料を塗る複合I縁甕で、外面の文様はヘラ状工具により格子文を内部に充填した連続三角文を描くもので類例は非常に少ない。3には金窓母が、4には大粒の石英が含まれ移入品と思われる。5は全面に櫛描波状文を描いた後に顔料を縦に帯状に塗るもので胎土は在地系。6・7は大きく外反して開くI縁部からやや深く丸い坏底部に続く高坏の坏部と坏底部。8は坏底部がやや浅い高坏で、内外面ともミガキを主とする調整。9はI縁部の開きが直線的となる小形の高坏、10は高坏又は脚付鉢の脚部で外面に赤色顔料を塗る。これらの高坏の胎土は甕と大差は無い。

第158図1～6は東南部コーナーの竪土の上位から出土した古墳前期中葉の土器。1は球形に近い胴部をもつ甕で、胴部内面はヘラケズリによる。2はI縁部がやや外に開く複合I縁甕で、3は小型丸底甕。4・5はミガキを主とする碗、6は高坏の脚柱部。

以上の土器は第158図を除き弥生後期終末から古墳初頭に置かれ、本遺構もここに属する。

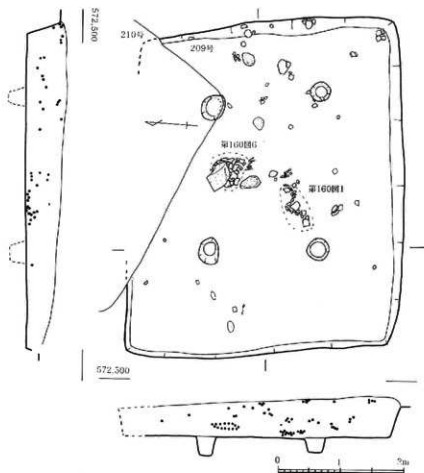


209号竪穴 (第159図)

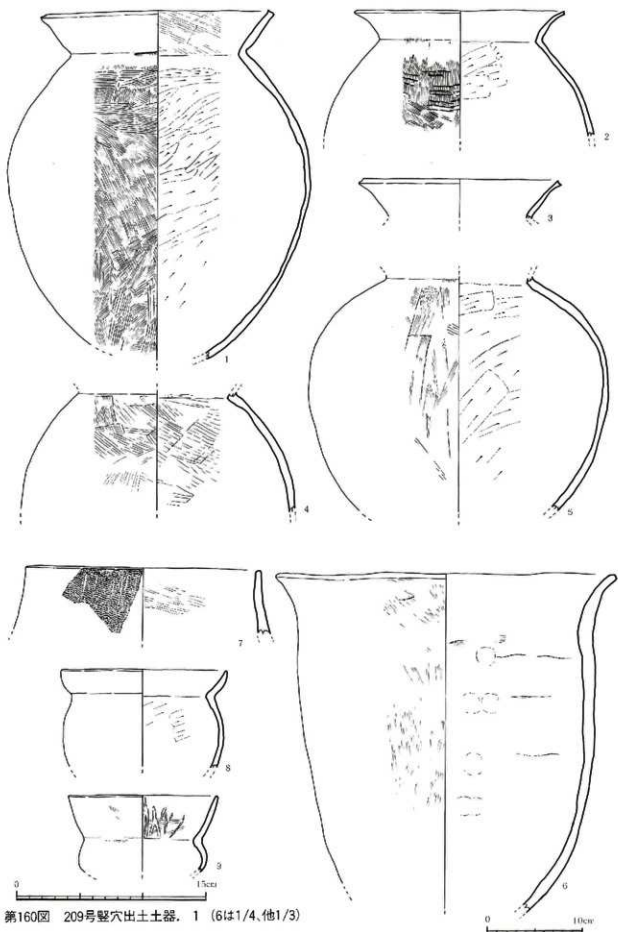
A区の北西部に位置し北東部を210号と重複する遺構である。検出段階では先後関係が不明であったが、本竪穴が先行するものと考えられる。長辺5.2m、短辺4.4mの東西に長い長方形をなし、北東コーナー付近から北側辺の多くを210号により失う。壁溝は巡らず復原床面積は20.16㎡と中規模の中でもやや小さい。4本支柱の方位はN-87°-Eで磁北とはほぼ直交し、各支柱穴の深さは他と比べやや浅い。竪の掘り込みや上坑等は検出されず、一般の住居跡とはやや様相を異にする。出土遺物の中で第160図1の底部を欠く甕は中央南西部の床面からやや浮いた状態で、6の甕は中央の大形竪の下部から各々纏まって出土している。これらの土器は竪穴廃絶に伴う祭祀に使用・埋置されたものと思われる。

第160図1は胴部外面縦方向のハケのち横ハケを部分的に施し、内面は右上がりのヘラケズリによる布留式系甕で、丁寧な造りであり胎土に砂粒を殆ど含まない移入土器。2も移入品と考えられる甕で胴部外面はタタキのち縦・斜め方向のハケによる調整。口縁部は外反しながら開き、胴部の張り出しもやや強い。3はやや小形の甕の口縁部片。4は在来系の甕胴部であり、内外面とも縦・斜め方向のハケによる調整である。5はやや屑の張る甕胴部片で外面は縦方向のハケ、内面は右上がりのヘラケズリ。6は底部周辺を欠損する在来系粗製甕であり内外面とも細かいハケとナデによる調整。7は複合口縁甕の口縁部片で、8は小形の鉢と考えられるもの。9は小型丸底甕で外面はハケのちナデ、口縁部内面はハケのち縦のミガキを加える。第161図は本遺構に混入した弥生前期の土器である。1～3は同一個体と思われる大形甕で肩部に段を設け、外面はハケを丁寧にナデ消す。口径31.5cmを測り、胎土に石英を多く含む移入品。4も甕の底部で外面ハケのちミガキを施すもの。

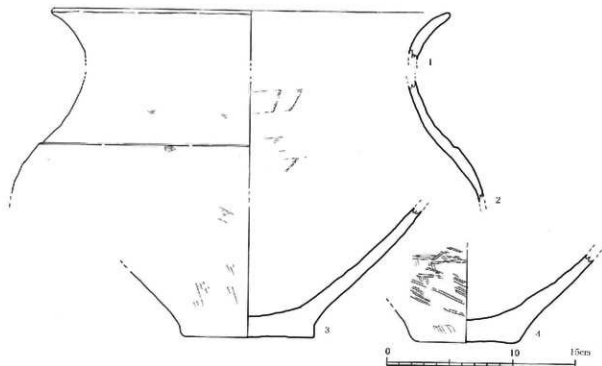
これらの土器は混入したものを除き古墳時代前期中葉でもやや古く置かれよう。



第159図 209号竪穴実測図 (1/60)



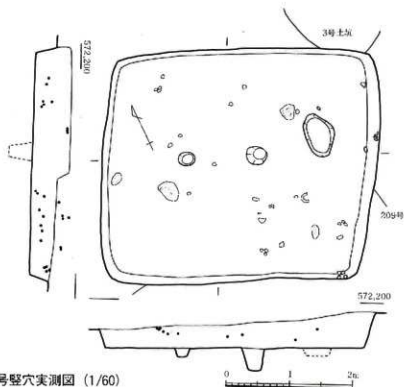
第160图 209号竖穴出土土器。1 (6:1/4, 他1/3)



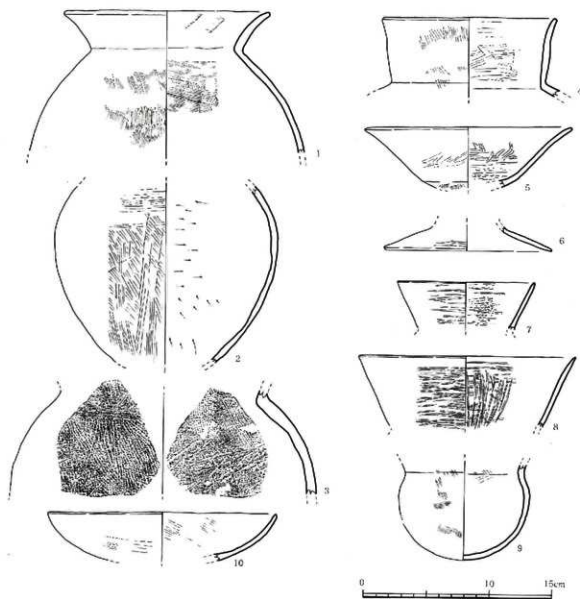
第161図 209号竪穴出土土器. 2 (1/3)

210号竪穴 (第162図)

209号の北側に位置しこれを切って営まれた遺構で、北東部は上坑と重複する。長辺4.2m、短辺3.6mの長方形をなし検出面から床面までは約0.3～0.5m。床面積は14㎡と小形の竪穴で炉跡等の施設も認められず、一般の住居跡とは異なる性格が考えられる。2本主柱の主軸方位はN-66°-W、両主柱穴の規模や深さは一定しない。



第162図 210号竪穴実測図 (1/60)



第163図 210号竪穴出土土器 (1/3)

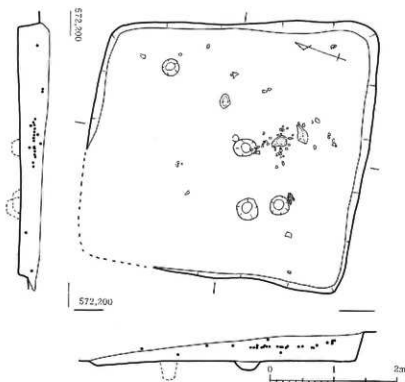
東側土柱穴と東側壁の間の通常とは異なる位置に長軸0.7m、深さ0.1m余りの不定形土坑がある。出土遺物もやや少なく、竪穴廃絶時の祭祀行為を示す土器等は検出されていない。

第163図1は内外ともハケ調整を主とする在来系甕で胴下半部を欠く。2は外面は縦・斜め方向のハケのちり部に横ハケを施す甕胴部片で搬入品の可能性が高い。3は1と同様の甕胴部片。4はほぼ直立する口縁部をもつ無頸甕。5は大きく外に開く口縁部から緩く屈曲して底部に至る高杯の杯部、6は高杯の脚部。7は小型丸底甕の口縁部と考えられ内外面ともミガキを加える。8は小形の長頸甕の口縁部で外面は横のミガキ、内面は横のミガキのちり方向のミガキを暗文状に施す。6～8は全体に丁寧な造りであり搬入品か。9は小形甕の胴部から底部で胎土に石灰を多く含む。10はやや器高の低い丸底の甕。

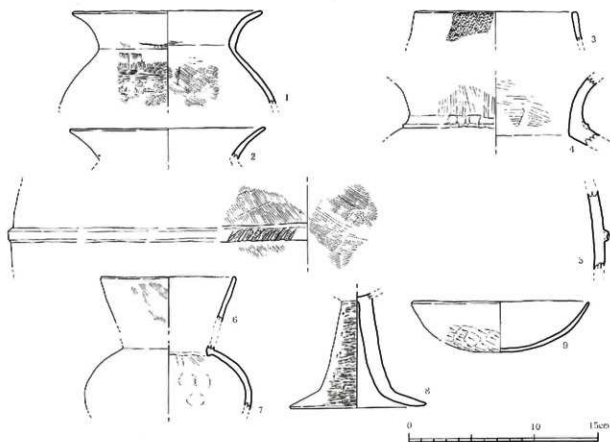
これらの土器から本遺構の時期を決定するにはやや躊躇するが、古墳時代前期中～後半において大過ないと思われる。

211号竪穴 (第164図)

209号の西側約3m、溝森区西端に近い所に位置する。北西コーナー付近は削平により消失するが長辺約4.4m、短辺約4.3mの方形に近いプランをなす。壁溝は設けられず復原床面積は15.96㎡と小規模な竪穴である。中央やや南側に長軸0.35m、深さ0.15mの楕円形の跡と思われる掘込みがある。北東部と南西部にやや浅いピットがあるが明らかに主柱穴と判断される柱穴は検出されなかった。また、上坑等も認められず住居跡とは異なる施設と考えられる。出土遺物は少なく特異な状況も観察されなかったが、混入品の中に完形の石包丁がある。



第164図 211号竪穴実測図 (1/60)



第165図 211号竪穴出土土器 (1/3)

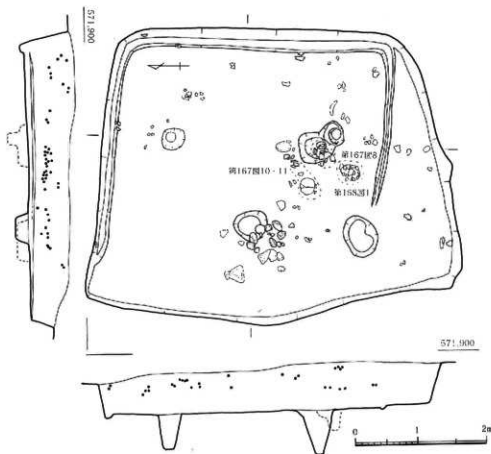
第165図1は竊く外に開く口縁部からやや長胴の胴部に続くと思われる甕で、外面は縦方向のハケのち横ハケを加えるもの。2も甕の口縁部片、3は小形の複合口縁壺の口縁部。4・5は複合口縁壺の頸部と胴部片。6・7は同一個体と考えられる小形長頸蓋の口縁部と胴部。8は高坏の脚部で、外面はヘラケズリののち縦・横のミガキをやや丁寧に施す。9は外面底部周廻をヘラケズリのまま放置する甕。以上の土器に搬入品は無いようである。これらは古墳時代前期中葉に比定され、本遺構もここに属する。

## 212号壜穴 (第166図)

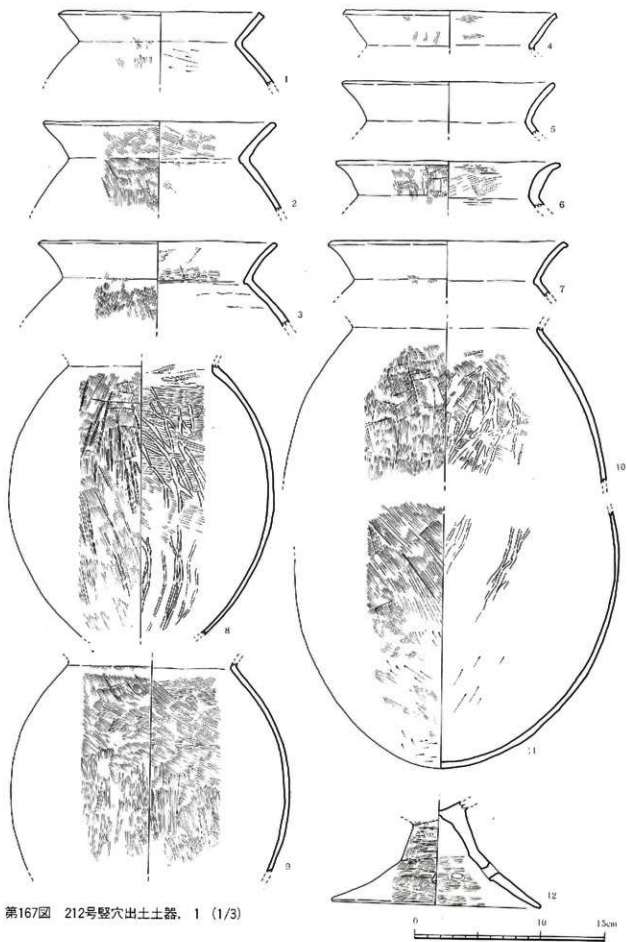
210号の西側に隣接する壜穴である。南から西側にかけての掘込みラインが不明瞭であり不規則な平面形を呈するが、壁溝等の配置から本来は長辺約4.6m・短辺約4.2mの南北に長い長方形プランに復原される。検出面より床面までは約0.3~0.7mを掘り、南側の壁溝から突出する部分は床面より1段高いことから遺構の拡張ではなく埋戻しに伴う可能性がより高いものか。壁溝は西側及び南側の一部は設けられず、復原床面積は約16㎡。

2本土柱であり南側主柱穴には抜き取り痕跡が認められる。主軸方位はN-3°-Eであり竈北とほぼ同一方向となる。如跡や焼土は検出されていないが、土坑は楕円形を呈するものが西側中央(長軸0.5m・深さ0.2m)と南西隅(長軸0.7m・深さ0.2m)に認められる。出土遺物は埋土の中へ上位に多く埋戻しの途中における祭祀行為を窺わせるものが認められる。第168図1の口縁部と胴部下半を欠く複合口縁壺は南側主柱穴と溝の間から、第168図8・10・11の甕胴部片はその北側に集中して出土した。

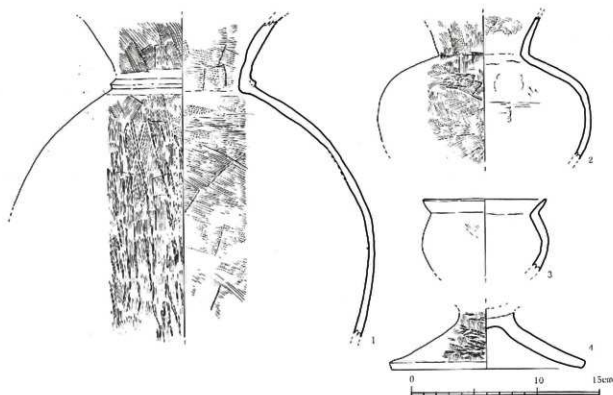
第167図1~7は甕の口縁部、ほぼ直線的に外に開くものが多いが竊く反転する5・6は在米系。1は内面のヘラケズリが頸部まで及ぶが他はハケとナデによる仕上げである。1・2・5は金雲母を含み搬入品の可能性がある。8は半球形をなす甕胴部で、内外面ともハケのちやや粗いミガキを加える。9も同様の器形を呈する胴部



第166図 212号壜穴実測図 (1/60)



第167图 212号竖穴出土土器. 1 (1/3)



第168図 212号竪穴出土土器。2 (1/3)

で調整は内外とも縦・斜め方向のハケによるもの。10・11は同一個体と考えられ、底部周辺はヘラケズリを残すが他はハケを主とし内面にはミガキを加える。9を除き胎土に金雲母を含む。12は高杯の脚部でハ字状に裾が開き半球形の坏底部に続くものと思われる。四方に円孔を穿ち、外面はハケのちやや弱いミガキを横に施す。

第168図1は複合口縁壺の頸～胴部で胴部は卵球形に張り境にやや低い尖帯を巡らす。外面は縦方向のハケのちやや弱いミガキを施し内面は横・斜め方向のハケによる調整。胎土に角閃石、赤・灰色粒を含む在産土である。2は小形長頸壺で口縁部と底部を欠く。胴部は偏球形に張り出し、外面は縦方向のハケのちややより下位に横ハケを加える。3は小形の鉢で球形の胴部に短く屈曲して外に開く口縁部を付す。4はやや人形の鉢の脚部で外面は縦方向のハケにちやや雑なミガキを加える。3には金雲母が含まれるが2・4は1と同様の胎土による。

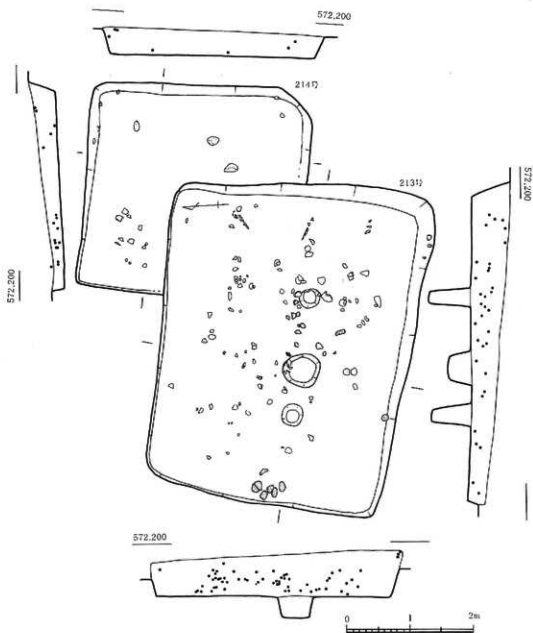
本遺構出土の壺や複合口縁壺の胴部は卵球形又はやや長胴を呈し、内面のヘラケズリも頸部まで及ぶと思われるがその後にはハケやナデ及びミガキによる仕上げを行うものが多いことから、古墳時代前期前半でも中頃に近い時期に比定されよう。



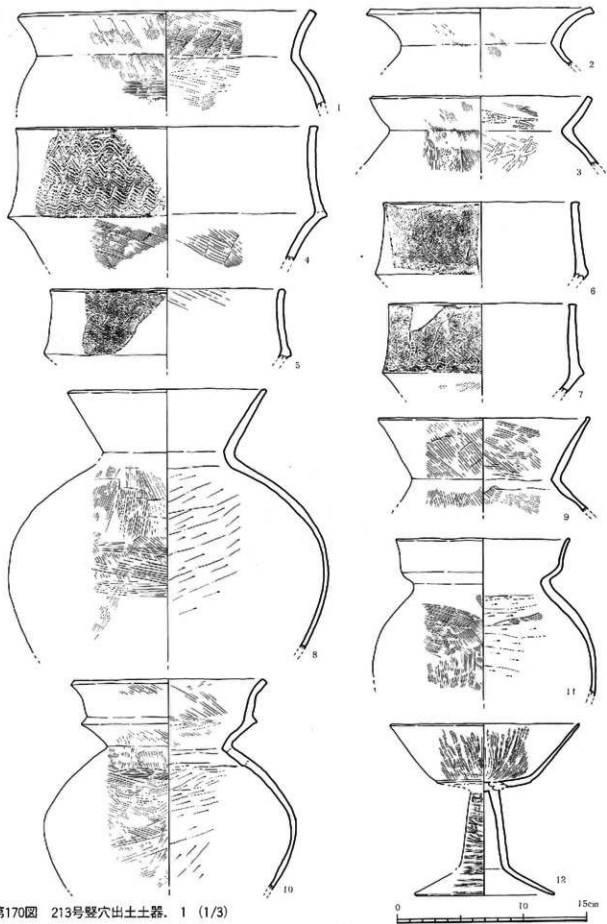
213・214号竪穴 (第169図)

212号竪穴の東側約1mにあり、213号が214号を切り形成されている。213号は長辺5.1m、短辺4.0mの長方形を呈し、床面積17.76㎡の小形の竪穴である。中心線よりやや南側に2本の支柱を配置し、方位はN-78°-W。支柱穴の間に直径約0.5m、深さ約0.35mを測る不整形形の土坑が設けられる。竪穴に伴うものとしてはやや深い異なる性格を示すような遺物等は検出されていない。この他の壁溝や土坑などは確認されなかった。比較的多くの出土遺物は覆土の中へ下層に含まれ、明確ではないが第170図8・10・12の大形破片は廃絶時の祭祀に伴う可能性がある。

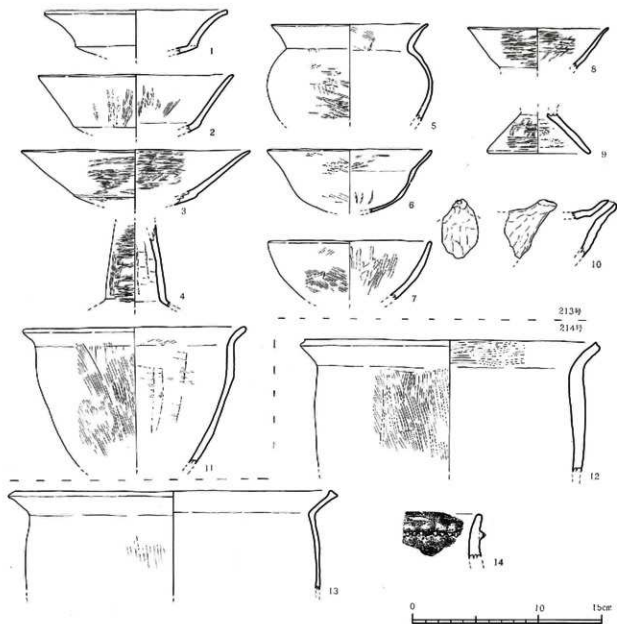
第170図1～3は壘の口縁部片であるが1は大形の鉢の可能性ある。いずれも外面は縦・斜め方向のハケとナデによるが1はその後横ハケを加え、3の内面はハケのちミガキ。4～7は複合口縁壺で口縁部はほぼ直立して立ち上がり、外面全体に櫛歯状文を描く。8は口縁部が直線的に斜め上方に開き、胴部の張り出しの強い無頸壺。胴部内面は右上がりのヘラケズリ、外面は縦方向のハケのち横ハケを中位に加える。胎土に石英や結晶



第169図 213・214号竪穴実測図 (1/60)



第170图 213号竖穴出土土器。1 (1/3)



第171図 213・214号竪穴出土土器 (1/3)

片岩を含み大分平野からの搬入品と思われる。9も同様の無頸甕の口縁部片。10は山陰系の二重口縁甕を比較的忠実に模倣した在地産と思われるもの。11は口縁部が丸く屈曲して立ち上がる二重口縁甕。12は低平な坏底部からやや長脚の脚部に続く高坏で、坏部は縦方向のミガキにより脚部は縦→横のミガキによる調整。第171図1～4も高坏の坏部と脚部、5は球形の胴部をもつ小形の鉢。6は丸底の底部に屈折して開く口縁部を付す小形の鉢。7は丸底の碗で、8・9は小型丸底甕の口縁部と有孔器台の脚部。10は注口土器片。11は214号からの混入と考えられる弥生中期の甕で、これを除く前述の土器は古墳時代前期中葉に比定される。

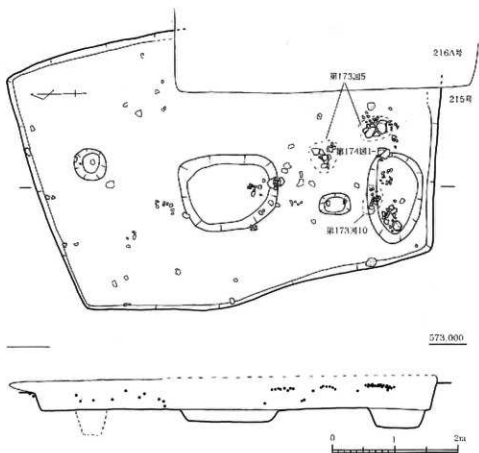
214号竪穴は3.2×3.5mの方形に近いプランを呈すると思われるが、縄文晩期から弥生前期の遺物包含層を掘込み形成されているため平面形は確定し難い。検出面から床面までは0.2～0.4mを測り西南部を213号により完全に失う。内部に柱穴や炉跡等の施設は検出されず住居とは異なるものと考えられる。出土遺物もやや少ないが、北西部の中位から第171図12・13が検出された。12は如意状口縁を呈する在地系甕で、13も甕の口縁部片で兼ね上げ口縁をもつもの。14は刻目突帯を施す下城式の甕で、これらの土器は弥生中期前半代に属せよう。

## 215号竪穴（第172図）

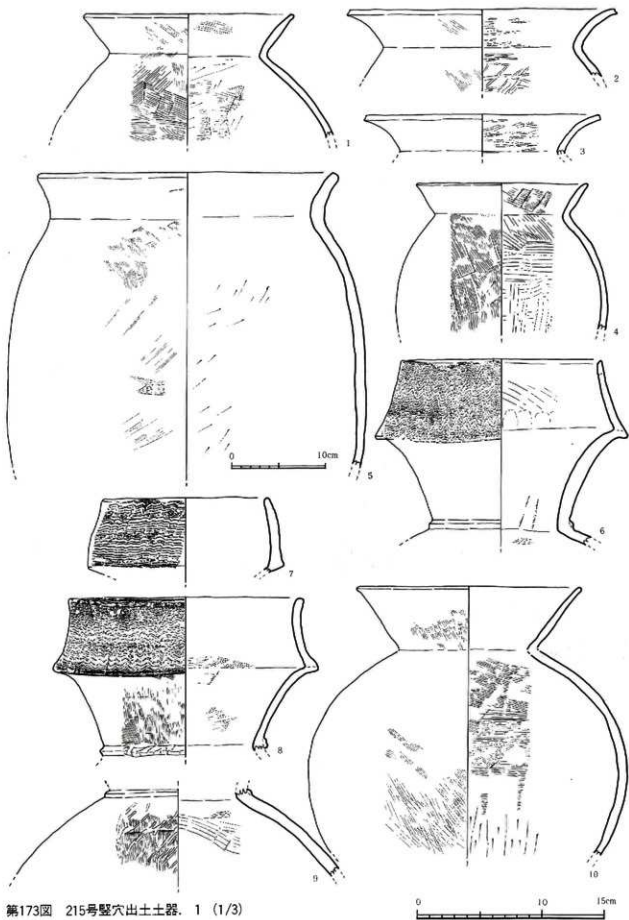
214号の東側に隣接し南東部は216A号に切られる竪穴であるが、木遺構も検出時点における平面プランが不明瞭であり図示したものは本来の形態と若干異なる可能性がある。現状は長辺約6m、短辺約4.2mの不整長方形をなし、検出面から床面までは0.1~0.4mを測り東半部分は深く西側が浅くなる。中央部に長軸1.5m、短軸1.2m、深さ約0.2mの楕円状の上坑が、南西側部分には1.5×0.9×0.3mを測る楕円形土坑がある。中央部の土坑の南北両側に位置する二つ柱穴は主柱穴の可能性を有するが、規模・形態が一致せず断定は出来ない。主柱穴である場合、方位はN-12°-Eとなる。跡や壁溝等の施設は確認されなかった。遺物は中央部土坑から南側に多く、第173図5の粗製甕や10の無頸甕及び第174図1の鉢等は検出面から埋土上位に集中して出土しており、埋戻しの最終段階における祭祀に使用されたものか。また、本遺跡の竪穴からは唯一輪の羽目が出土しており一般の住居跡には見られない大形土坑と併せ工房の可能性をもつものか。

第173図1は直線的に外に開く口縁部から卵球形と思われる胴部に続く甕。胴部内面はヘラケズリのち横ハケを部分的に加え、外面は縦・斜め方向のハケのち横ハケを胴部に施す。2・3は口縁部が外反しながら開くもので内面にミガキを加える。4は長胴気味の胴部に開きの弱い口縁部を付し、外面は縦方向のハケ、内面は横・斜め方向のハケのちヘラケズリを部分的に施す。これらの甕の胎土はいずれも在地系による。5は大形の粗製甕で緩く開く口縁部から張り出しの弱い胴部に続く。内面はケズリとナデを主とし、外面は各方向のハケによる。口縁32cmを測り、胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む。

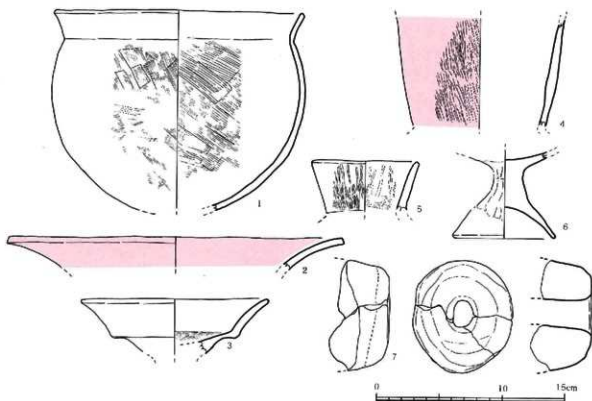
第173図6は口縁部が僅かに反りながら内傾する複合口縁甕で3段の櫛播波状文をほぼ全面に施し、頸部にやや低い三角形突帯を巡らす。7は口縁部が緩く内傾する小形の複合口縁甕で波状文は直線的になるもの。8も6と同様の複合口縁甕であるが口縁部上半はほぼ直立し立ち上がる。9は複合口縁甕の胴部で外面は縦方向のハケのち粗いミガキを加える。6・9には金雲母が、7には石英が含まれる。10は大きく外に開く口縁部から球形に張



第172図 215号竪穴実測図 (1/60)



第173图 215号竖穴出土土器。1 (1/3)



第174図 215号竪穴出土土器。2 (1/3)

り出す胴部に続く無頸蓋、ハケとナダを主調整とするが胴部内面の下半部分にはヘラケズリが残る。

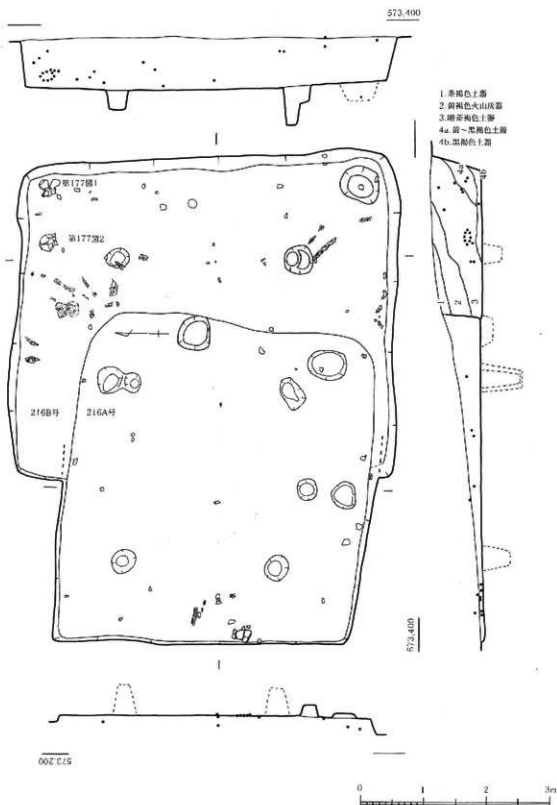
第174図1は開きの弱い口縁部から丸く張り出す胴部に続き、底部は丸底を呈すると思われる大形の鉢。内外面とも斜め方向のハケによるが、外面の中程には横ハケを加える。外面にはススカ付着し、角閃石・灰色粒等を胎土に含む。2は口縁部が反転しながら大きく外に開く高杯の口縁部片で赤色顔料を塗るもの。3は小形の高杯の坏部で、やや強く屈曲する。4は長頸蓋の頸部で、外面はやや丁寧な縦方向のミガキののち顔料を塗る。5は小形の直口壺の口縁部と思われ、縦方向のミガキをやや粗く加える。6はミニチュアの高杯と考えられるもので手づくね成形によるもの。7は籬羽口で先端部には鉄分の融着が認められる。

これらの土器は古墳時代前期前葉の中でも中葉に近い時期に比定され、本遺構もここに置かれる。

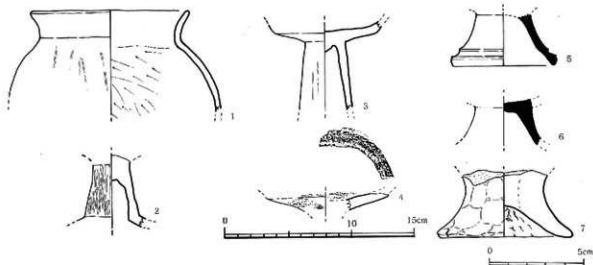
216A・B号 (第175図)

215号の東側にありA・B 2基が重複する。検出時点では先後関係が不明瞭であったため同時に掘り下げたが、B号が先行することが明らかとなった。

216A号はB号の西半部を切り形成された方形の竪穴で1辺約5mを測る。遺構の西半部分は削平を受け残り



第175図 216A・B号竪穴実測図 (1/60)

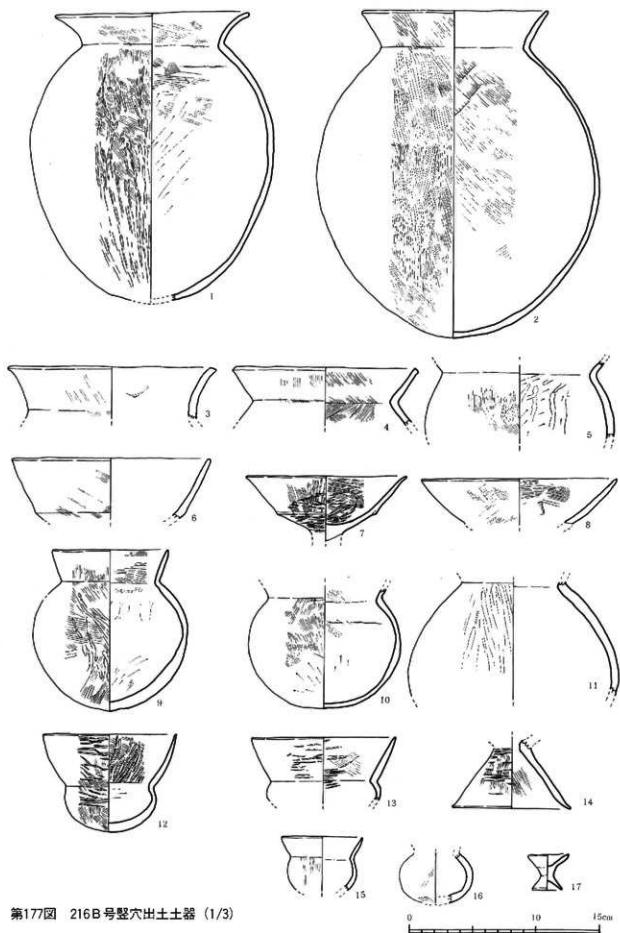


第176図 216A号竪穴出土土器 (7は1/2,他1/3)

は浅くなる。4本主柱であるが南東部主柱穴はB号と一部重なり、方位はN-87°-W。壁溝と臼跡の掘込みは認められず、床面積23.03㎡の中規模竪穴である。南壁側の中央部にやや浅い円形の土坑2基と南東部隅付近にも楕円形の土坑が設けられる。出土遺物は少なく、焼絶祭祀に伴うと判断される土器は無いようである。第176図1は緩く反転して開口縁部からやや締まりの弱い頸部に至り、丸く張り出す胴部に続く壘。胴部外面は縦方向のハケのちナデ、内面は左上がりのヘラケズリによる調整で胎土に角閃石・灰色粒を多く含む在地系。2・3は高坏の脚部片で、4は口縁部との接合面に連続刺突を施す平底部片。5は低脚の高坏(須恵器)の脚部、やや肥厚した脚端部の上に低くシャープな突縁を巡らす。脚部径8.2cmを測り、白色粒を若干含む暗青灰色を呈する。6も同様の須恵器脚部片で脚端部を欠く。7は石英を若干含むが砂粒の少ない製土土器底部、外面には指頭痕が多くタタキは観察されなかった。須恵器は九州須恵器編年の1期に置かれるものと考えられ、その他の土器も古墳時代中期後半に比定されよう。

216B号はA号によりその西半部分はほぼ床面まで失われるが、長辺6.1m・短辺5.1mの南北に長い長方形プランを呈する。東側長辺部分は検出面より床面まで約0.7mと深く覆土中層に黄褐色火山灰が堆積する。壁溝は無く復原床面積は27.36㎡。主柱は4本で西側の2主柱穴はA号と重複し、方位はN-89°-Wとなる。各主柱穴には抜き取り痕跡が認められる。中央部西寄りにある直径約0.5mの不整円形の掘込みは臼跡と考えられ、東南隅部に長軸0.65m、深さ0.3mの楕円形に近い土坑が認められる。内部の覆土は遺物を殆ど含まない1層(茶褐色土層)・2層(黄褐色火山灰層)と3・4層(遺物包含層)に大別される。第177図1・2等のほぼ完形の土器や炭化材など多くの遺物は3層から出土し、埋戻しの途中における祭祀を示すものである。また、炭化材には垂木と考えられる直径10cmほどの丸いものと平坦な板材の二者があるが、いずれも部分的出土であり別の地点で焼却したものを投棄したものである可能性が高い。第177図1は東北隅部分の4層出土の壘。口縁部は反転しながらやや大きく開き、胴部は卵球形を呈する。胴部外面は縦方向のハケのちミガキ、内面はヘラケズリのちナデとハケを部分的に加える。2は直線的に開口口縁部に球形に近く張り出す胴部を付す完形の壘、内外面ともハケを主調整としスヤコゲが付着する。口径15cm、器高25.8cmを測る在地系土器である。3～5は壘の口縁部片と胴部片であり、5の内面はヘラケズリのち部分的ミガキ。6～8は高坏の口縁部片、7は丸い平底部と口縁部との境に三角形の低い粘土紐を張り付け屈曲部を形成する。内外面ともハケのちミガキを加えた「家」な造りである。9・10は小形の短頸壘と考えられ、11は胴部外面縦方向のミガキによる壘の胴部片。12は口縁部がやや内反しながら立ち上がる小型丸底壘。「家」な造りで搬入品と思われる。13も小型丸底壘であるが口縁部は直線的に開く。14は有孔器台の脚部。15～17は各種のミニチュア土器で、A・B号のいずれに属するか明確ではない。以上の土器の殆どは古墳時代前期中葉に置かれる。

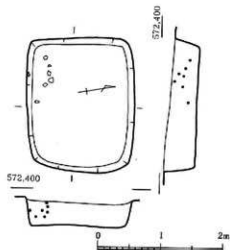




第177图 216B号竖穴出土土器 (1/3)

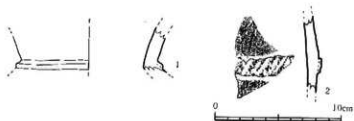
### 217号竪穴 (第178図)

216A号の西側約4mにある小形の竪穴である。長辺2.1m、短辺1.7mの長方形に近いプランをなし、検出面から床面までは約0.4m。床面からは柱穴等の施設は検出されず、周辺にもこれに伴う柱穴は確認されなかった。遺物は南西部の覆土中～上層から若干出土しているが、いずれも小片であり遺構の性格を示すものも認められなかった。その規模・形態からすれば住居の付属施設と考えられよう。



第178図 217号竪穴実測図 (1/60)

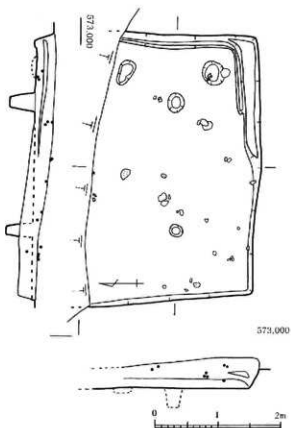
第179図1は複合口縁壺の頸部片で胴部との境に三角突帯を巡らす。2はやや低い帯状の刻目突帯を施す複合口縁壺の胴部。これらの土器から本遺構の時期は古墳時代前期前半の所産か。



第179図 217号竪穴出土土器 (1/3)

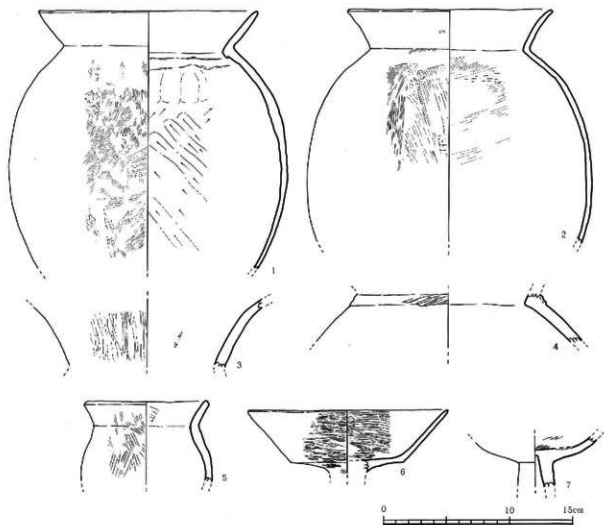
### 218号竪穴 (第180図)

215号の北側約2mに位置する長方形の竪穴であるが、中心付近より北側は水路により完全に消失し、西半部は削平が床面の下位まで及ぶ。東西辺長4.2m、現存南北辺長2.0～2.6mを測り、東側から南側の一部にかけて堀溝が認められるが本来全周していたものと思われる。主柱穴は2本しか残らないが4本主柱と考えられる。主軸方位はN-88°-Eで、ほぼ同時期の216B号と同様である。東南コーナーの内側に直径約0.4m、深さ0.1mのやや浅い円形土坑が認められるが、加跡や他の施設については不明である。出土遺物は東南部土坑上面の土器を除き、大半は検出面からの出土で竪穴に関わる祭祀行為等を示すものは確認されなかった。



第181図1はやや釘の張る卵球形の胴部から頸部で屈折しほぼ直線的に外に開く口縁部に至る甕。胴部外面は縦方向のハケのち横・斜め方向のハケをやや雑に加え、内面は指ケズリとナデによる調整であるが一部粘土の接合痕を明瞭に残す。

第180図 218号竪穴実測図 (1/60)



第181図 218号竪穴出土土器 (1/3)

口径22.3cmを測り、やや大粒の石英と角閃石・赤色粒を含む。2の胴部も同様の器形をなすが口縁部はやや外反しながら開く。外面は縦方向のハケ、内面はケズリのちナデとハケを加える。1と同じく搬入品と考えられる。3は外面縦方向のミガキによる複合口縁壺の頭部で、4は複合口縁壺の胴部片。5は口径10cmを測る小形の甕と考えられるもので、外面は縦方向のハケを主とする調整。6は低平な坏底部から強く屈曲し、直線的に外に開く口縁部をもつ高坏の坏部。外面はハケのち横方向のミガキ、内面も丁寧な横のミガキによる搬入品。7はやや丸みをもつ高坏の坏底部片。

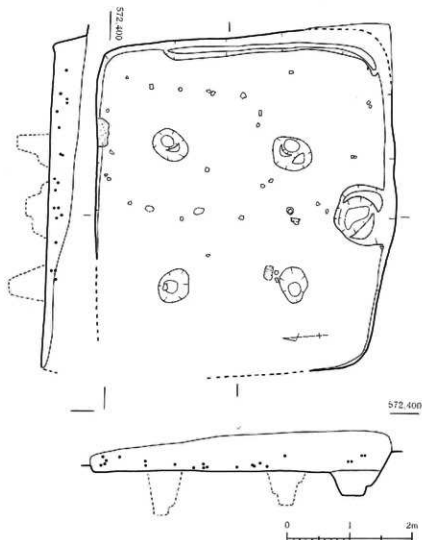
これらの土器にはやや時期幅が認められるが、1・2の甕の調整や器形から本遺構の時期は古墳時代前期中頃でもやや新しく置かれよう。

219号竪穴（第182図）

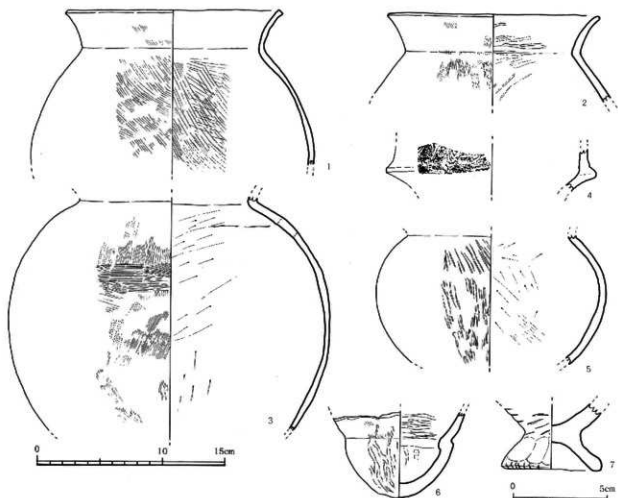
218号の西側約1.5mにある東西に長い長方形の竪穴であるが、倒平のため西北部コーナーとその周辺は消滅している。長辺約5.4m、短辺約4.7mを測り、残りの良い部分で検出面から床面まで約0.6m。東側壁に沿って壁溝が認められるが途中で終息する。推定床面積は22㎡で、4本支柱の各柱穴には柱の抜き取り跡が観察される。主軸の方位はN-86°-Eで周辺の竪穴と近い。炉の掘込みは検出されなかったが、南側壁の中央に接し直径0.9m、深さ0.4m余りの2段掘りの半円状土坑が設けられる。

遺物は埋土の中へ下層に多く、第183図6に示した小型丸底甕は口縁部を打欠き、南側両支柱穴の中間の床面よりやや浮いた所で正置した状態で検出された。これは、埋戻しの前に行われた祭祀に起因するものと考えられる。この他に製塩土器1点も出土している。

第183図1は卵球形の胴部から頸部で屈曲し緩く外反して開く口縁部に至る甕で、口縁部の開きがやや弱いもの。胴部は内外面とも斜め方向のハケによる調整。2は口縁部の開きがやや強く、内面はケズリをナデとヘラミガキにより消す。3はほぼ球形に張り出す甕胴部片、内面はヘラケズリにより外面は縦方向のハケのち層部に横方向のハケを加える。4は複合口縁部の口縁部片で、外面にやや雑な櫛波状文を構くもの。5は小形甕又は鉢の胴部であり、外面はハケのちミガキにより内面はヘラケズリにより一部ハケを加える。



第182図 219号竪穴実測図（1/60）



第183図 219号竪穴出土土器 (7は1/2、他1/3)

6はI線部上半部分をほぼ均一に打欠く小型丸底甕であるが、器壁がやや厚くハケとミガキによる調整も雑な仕上げとなる。胎土に角閃石・灰色粒・赤色粒を含む在地系土器である。7は製塩土器脚部で外面はタタキと指オサエによる調整。胎土に石英や結晶片岩を含み大分平野（海部）産と考えられるもの。

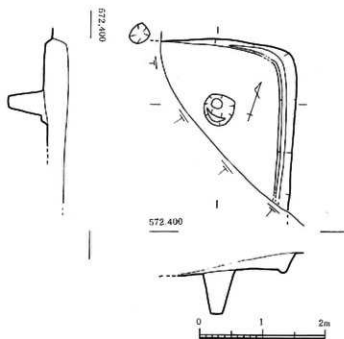
これらの土器は古墳時代前期中頃に置かれ、本遺構もこの時期の所産と思われる。

### 220号竪穴（第184図）

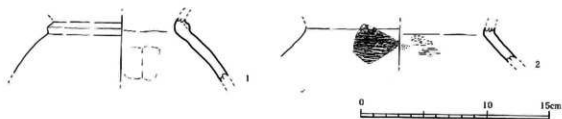
219号の北側約7mに位置するが、水路と削平により現存する部分は竪穴の東北コーナー周辺に過ぎない。現存南北辺長約2.5m、東西辺長約2mで、壁溝は東西辺の途中で途切れるが本来は全周していた可能性が高い。支柱は唯一残る東北部支柱穴の配置位置から4本と考えられるが、方位等は不明である。東北部支柱穴の床面からの深さは約0.6mと深く、柱の抜取り痕跡が観察された。また、炬跡や土坑等の施設についても不明である。

出土遺物は土器の小破片が若干認められるのみである。第185図1は複合口縁章の胴部片で頸部との境に低い三角形突帯を巡らすもので、胴部の張り出しはやや弱い。2は外面にやや細い平行タタキ、内面はハケ調整の裏胴部片。

本遺構の時期を決定するには資料不足であるが、前述の土器から古墳時代前期前葉頃に置かれよう。



第184図 220号竪穴実測図 (1/60)



第185図 220号竪穴出土土器 (1/3)

## (2) B区 (第186図)

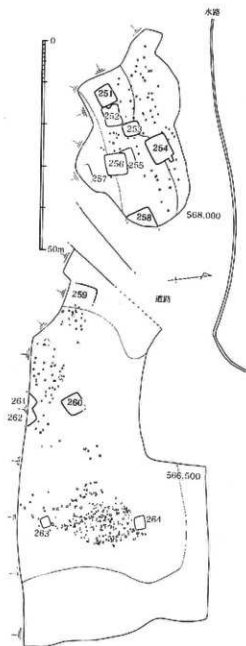
B区はA区から続く丘陵の南側下位にあたり東西長約150m、南北幅約30～45mの帯状の範囲から251～264号の計14基の竪穴と土坑・柱穴が検出された。この中で地下蔵と思われる263・264号の2基と両者の間に分布する柱穴・土坑の殆どは中世の所産と考えられる。

弥生～古墳時代前期の竪穴遺構12基の中で8基は調査区の西側に集中するが、これは調査区の中央を東西方向に横切る道路や水路及び水田化に伴う削平などにより遺構が消滅した結果である。従って、本来はA区と同様にほぼ全面に竪穴が分布していた可能性が高いが、中世の遺構が集中する調査区の東側は竪穴の及ばない空地と推定される。また、現存する竪穴の約半数も削平等により遺存状態は不良であり、周辺に分布する柱穴にも掘立柱建物と認定されるものは確認できなかった。12基の竪穴は弥生中期に属するもの3基、弥生終末1基の他は古墳前期の所産である。

### 251号竪穴 (第187図)

B区の西端部中程の標高257.5m余りの緩斜面に位置し、等高線とほぼ平行し東側は252号の一部を切り込まれる。短辺3.9～4.1m、長辺4.2～4.8mの台形に近いプランをなし、検出面から床面までは0.3～0.5mを測る。壁溝が全周し南西コーナーには明瞭ではないが低いベッド状遺構が認められ、これを含む床面積は15.12㎡と小形の竪穴である。主柱は中軸線より南寄りに設けられた2本で主軸方位はN-68°-E。2本の主柱は廃絶時に抜き取られた痕跡が柱穴に残る。主柱穴の北側に二つの柱穴状のピットが認められるが、いずれも浅いことから補助柱穴か又は主柱の位置を途中で変更したものか明確ではないが後者の可能性が高い。炉の存在は不明であり、南壁側の中央やや東に長軸0.85m、短軸0.6m、深さ0.15mの楕円状土坑が配される。遺物は比較的少ないものの、第188図1の壺は胴下半部を打欠いた後に横倒した状態で検出され、廃絶時における祭祀に使用されたことを窺わせる。

第188図1は西側主柱穴の上位から出土した胴下半部を失う二重口縁壺。外に開く口縁部の屈曲はやや弱く、短く締まる頸部からあまり肩の張らない胴部に至る。内外面ともハケによるが外面には斜・横方向のミガキを加える。口径22.8cmを測る大形の壺で、胎土にあまり砂粒

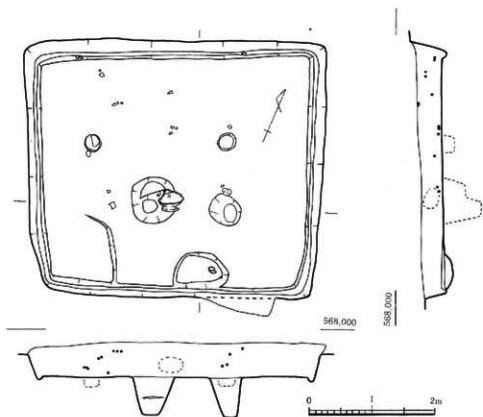


第186図 B区遺構配置図 (1/800)

を含まないが搬入品ではないようである。

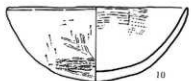
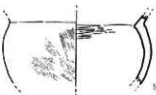
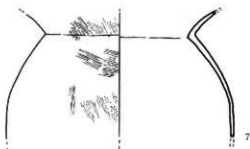
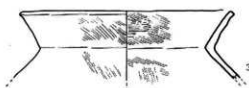
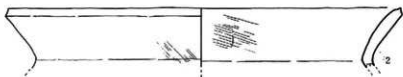
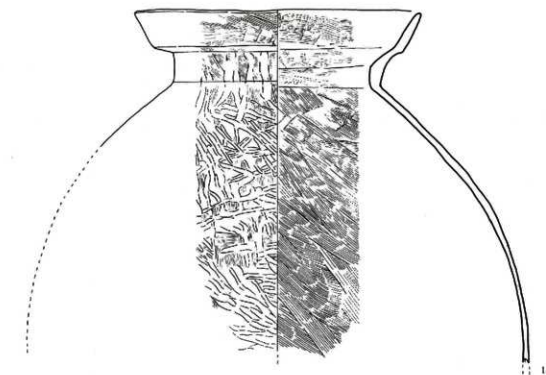
2～6は甕の口縁部片で、2は口径31.2cmを測る大形の甕。2～4はハケとナデを主調整とし、5・6の口縁部内面にはミガキを加える。7は甕の頸部から胴部片で、外面は縦方向のハケに横ハケを一部施す。8は内外面とも丁寧な横のミガキによる鉢の口縁部で胴部は球形をなすものと思われる。9は小形の鉢の胴部で外面はハケ調整、内面はナデと部分的ミガキによる。10は器高約6cm、口径14.5cmの丸底を呈する甕。外面はヘラケズリののちミガキを粗く加え、内面はハケとナデによる調整。11はやや小形の高杯の高杯の坏底部で、12は凹孔を穿つ高杯の裾部。

これらの土器は1の壺から古墳時代前期中葉に置かれ、木遣構もこの時期の所産と考えられる。



第187図 251号竪穴実測図 (1/60)





第188圖 251号整穴出土土器 (1/3)



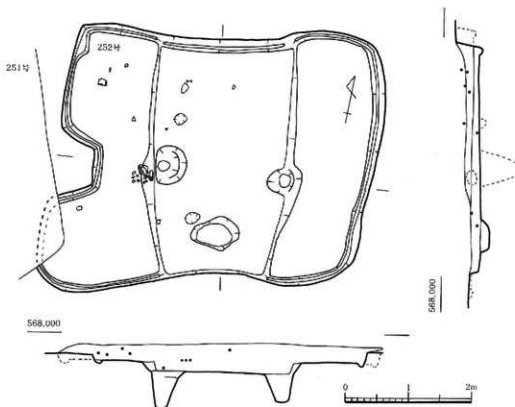
### 252号竪穴（第189図）

251号の東側に接し、南西部を一部これに切られ消失する。長辺約5m、短辺4.1mの東西に長い隅丸長方形プランをなすが、両長辺の中央付近は内側に緩く湾曲し幅が狭くなり東西のベッド状遺構部分が外に張り出す。西側辺の中程にも逆台形状に内側突出部が設けられるが、その延長上に主柱穴が位置することから出入口とは性格が異なるものと考えられる。同様の平面形をなすものは大野川中・上流域において後期中頃に属するものが数例知られていたが、本例はその出現が更に遡ることを示す。

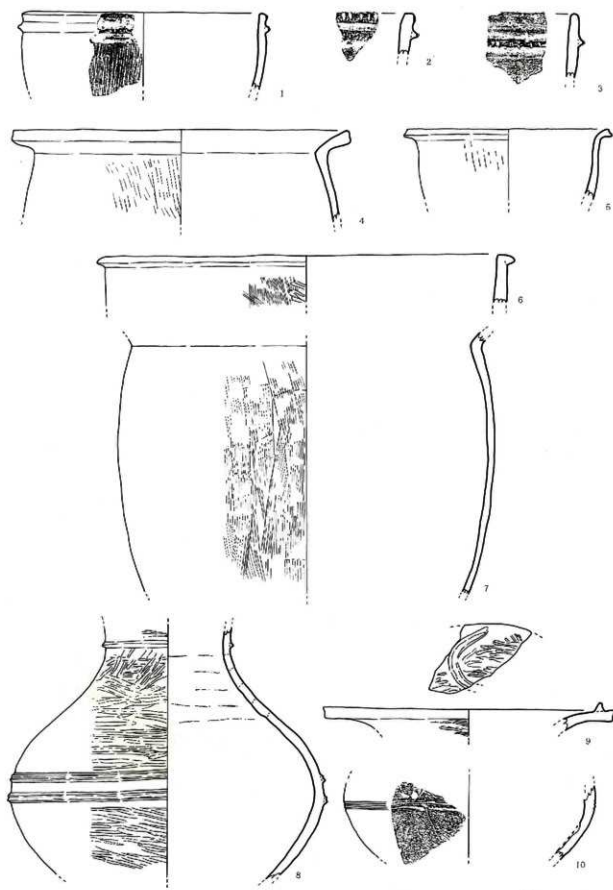
東西の両辺に平行し幅約1.2m、高さ約0.15mのベッド状遺構が設けられ、壁溝は南側中央部床面の他は各壁に沿って巡らされている。主柱穴は中軸よりやや南に寄る2本で、方位はN-84°-E。炉に伴う掘込みは検出されず、中央部南側の壁からやや離れた所に長軸約0.8m、深さ0.15mの不整形円形の土坑が配置される。主柱穴には抜き取り痕跡が認められ、西側主柱とベッド状遺構の間から第190図8の壺が口縁部と底部周辺を打欠き横に置いた状態で検出された。この他の土器片には小片が多いが、甕や壺には多様性が認められる。

第190図1～3は口縁部の下位に1条の刻目突帯を巡らす下城式甕。1・2は口縁端部外側にも刻目を施し、3の突帯はやや下がった位置に設けられる。4・5は口縁部が「く」字状と如意状を呈する甕で、外面は縦方向のハケによる調整。6は口縁端部外側を肥厚させる亀ノ甲式系甕で胴部外面はハケのち部分的ミガキ。7は「く」字状口縁をなす甕の胴部。8は頸部にやや低い三角形の突帯を1条、胴部に2条のM字状突帯を巡らす須玖式系甕。9は外に開く口縁部内側に浮文を貼付する周防系の甕で、10は下城式の壺胴部片。第191図1・2は2条の三角形突帯を巡らす壺の胴部片で、2の突帯には刻目を加える。3はやや短く外に開く口縁部に偏球形の胴部を付す鉢、外面と口縁部内面に赤色顔料を塗る。4はほぼ直線的に内傾する口縁部からやや外に張る胴部をもつ鉢で、外面はミガキのち顔料を塗るもの。

これらの土器にはやや時期幅が認められるが、弥生中期中頃から後半に置かれるものである。

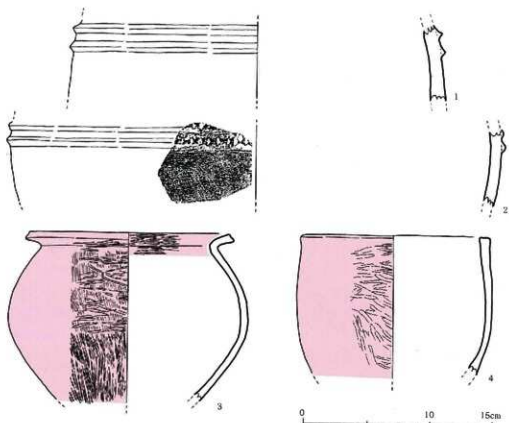


第189図 252号竪穴実測図（1/60）



第190圖 252号豎穴出土土器. 1 (1/3)



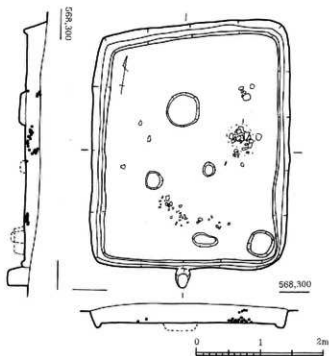


第191図 252号竪穴出土土器。2 (1/3)

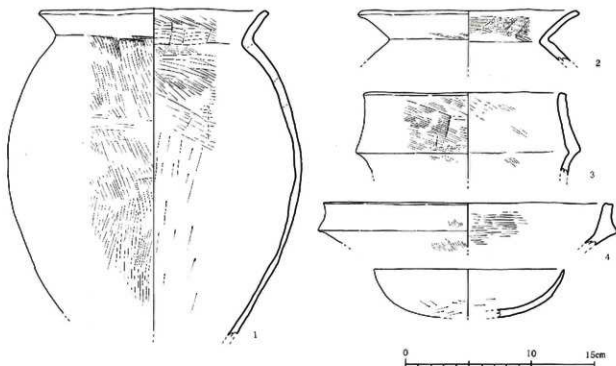
253号竪穴 (第192図)

252号の東北部に近接する遺構であり、周辺の竪穴と異なり等高線に直交する。長辺3.7~4.0m、短辺約3mの長方形に近いプランをなし、検出面から床面までは0.1~0.2mと浅く全体に削平を受けている。境溝は全周し床面積は9.58㎡と小形で、南側に浅く小規模なピット三つが検出されたが主柱穴と断定されるものや知跡は確認されなかった。中央部の北寄りに直径約0.5m・深さ約0.1mの円形土坑が、南東コーナー部分に直径0.4m・深さ約0.15mの円形土坑が認められる。内部からその性格を示すような遺物は検出されていないが一般の住居跡とは異なり、作業小屋・倉庫等の付属施設的性格が推定されよう。

出土遺物は比較的少なく、第193図1の底部を欠く菓は中央東側の床面からまともって検出されたが、これを除きいず



第192図 253号竪穴実測図 (1/60)



第193図 253号竪穴出土土器 (1/3)

れも小破片で特異な出土状況も示さない。

第193図1はやや緩く外に開く口縁部から張り出しの弱い長胴に近い胴部に続く甕で底部周辺は欠損する。口径17.8cmを測り、外面は縦方向のハケに横ハケを中位よりやや上に部分的に加える。内面はヘラケズリののち口縁部から肩部にハケを施す。スヌヤコゲが付着し、角閃石・灰色粒等を含む在地系土器。2は反転気味に大きく外に開く甕の口縁部片。3は内傾する口縁部の立ち上がりやや短い複合口縁部、内外面ともハケを主とする調整である。4は高環の口縁部と思われるもので、口縁部の立ち上がりは短くやや外に開く。内面は横方向のハケ、外面は斜め方向のハケによる調整。口径23cmを測り、胎土に赤・灰色粒を少量含む。5は内湾気味に外に開く口縁部からそのまま丸底の底部に至る椀で、底部周辺は内外ともヘラケズリによる調整。胎土に角閃石・灰色粒・赤色粒等を含む。

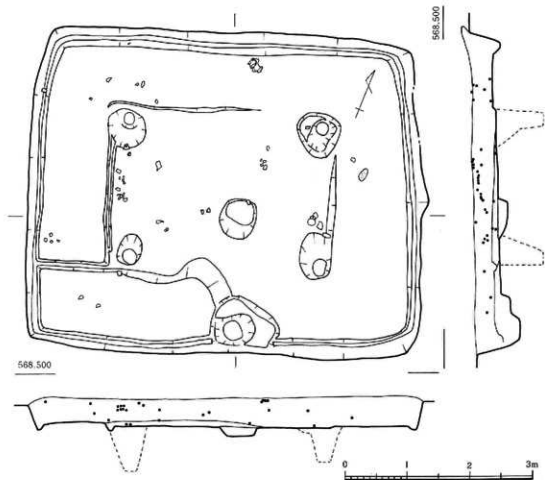
本遺構は、1の甕から古墳時代前期前葉に属すると考えられよう。

### 254号竪穴 (第194図)

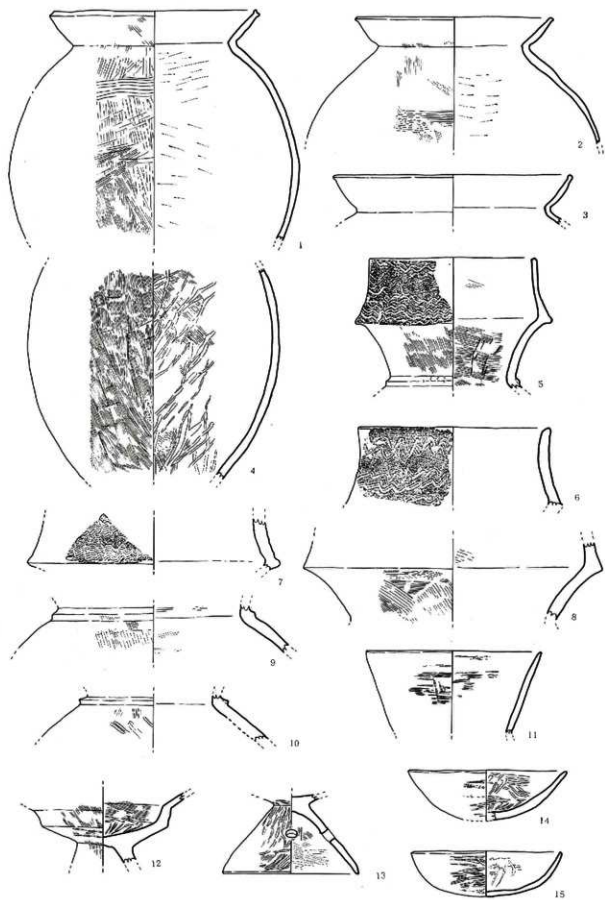
253号の北東約3mに位置し長辺5.8~6.2m、短辺5.0~5.1mの東西に長い長方形プランをなす。北東角からやや南側は後世の土坑と重複し、検出面から床面までは約0.5mと残りは比較的良好である。溝が全周し床面積は25.65㎡の中規模の住居跡である。4本主柱の全ての柱穴に抜き取り跡が見られ、方位は $N-70^{\circ}-E$ 。跡跡の掘込みは中央やや南側にあり、直径約0.5m・深さ0.15mの不整形円形を呈する。その南側の壁に接し2段掘りの不整形土坑が設けられ、長軸1.1m・短軸0.8m・深さ約0.3mを測る。四方の主柱穴の外側にはやや低いベッド状遺構が巡らされるが、不整形土坑から西側の両主柱穴にかけては明瞭であるもののその他は不明瞭となる。出土土器に完形品はないが第195図1の壺等は竪穴廃絶時の祭祀に使用された可能性がある。

第195図1はほぼ直線的に外に開く口縁部の頸部内側を僅かに肥厚させ、頸部で屈曲し球形に近い胴部に続く布留式系甕。外面は縦方向のハケのち一部横ハケを加え、胴部内面はヘラケズリによる調整。2・3は内反気味に外に開く口縁部をもつ布留式系甕で、2の胴部外面は縦方向のハケに横ハケを一部加える。これらの甕の胎土は在地又はその周辺と思われる。5~7は複合口縁壺の口縁部で、5・6は内湾しながらやや長く延びる。帯描波状文は下から上にやや雑に施され、胎土はいずれも在地系。8は大形の複合口縁壺の頸部から口縁部片で波状文は施されないもの。9・10は複合口縁壺の肩部で頸部との境に三角形突帯を巡らす。11は長頸壺の口縁部片で、12は坏部が2段に屈曲する高坏の坏底部。13は器台の脚部で四方に円孔を穿つ。14・15は内外にやや雑なミガキを加える小形の甕。

これらの土器は古墳時代前期中葉に置かれ、本遺構もこの時期の所産と考える。



第194図 254号竪穴実測図 (1/60)



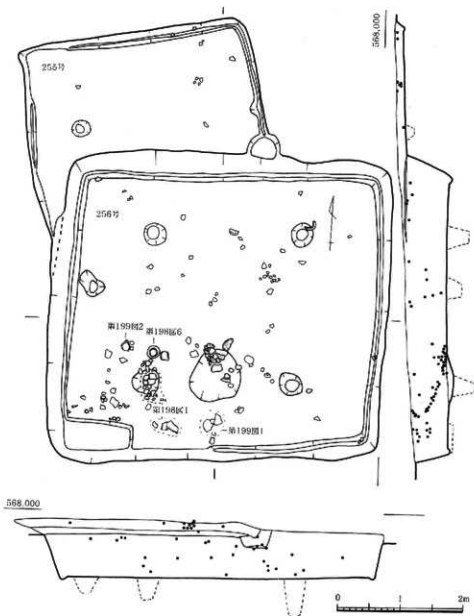
第195图 254号竖穴出土土器 (1/3)

255・256号竪穴（第196図）

254号の南側約3mに位置し2基が重複する。検出段階では削平等により先後関係が明確ではなかったことから両者同時に掘り下げた。このため遺構実測図ではより床面の深い256号が新しく示されているが、実際は255号が後出する。

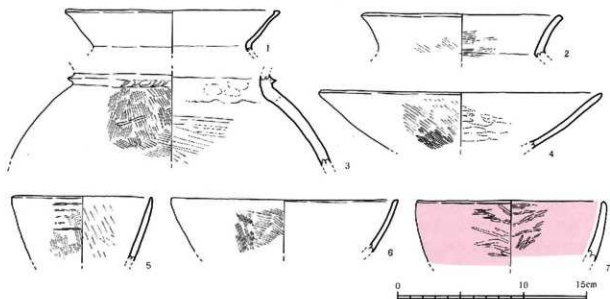
255号は床面まで数cmと浅く、南半部分の掘込みラインは確認できず全体の規模・構造は不明である。東西辺の長さは3.6m、現存南北辺長約3mを測り、北側から東側の壁に沿って壁溝が認められるが、西側は部分的に確認されるに過ぎない。中央やや西寄りに浅いピットがあるが、主柱穴や方礎・土坑については不明で住居跡とは性格を異にする可能性が高い。出土遺物も少なく第197図に示すように土器はいずれも小片である。

第197図1は外束系甕の口縁部片、口縁端部内側が肥厚し器壁もやや厚い。2は在地系甕の口縁部で頸部の縮まりがやや弱く、器面は内外ともハケを主とする調整である。3は口縁部が外反して開く複合口縁甕の胴部と思われる、頸部との境にやや高い三角形の突帯を巡らす。4は高坏の口縁部と考えられ、内面は横方向のミガキにより外面はハケのち部分的ミガキ。5は小形の長頸甕の口縁部片で外面はハケのちミガキを一部加えるもの。6は



第196図 255・256号竪穴実測図（1/60）





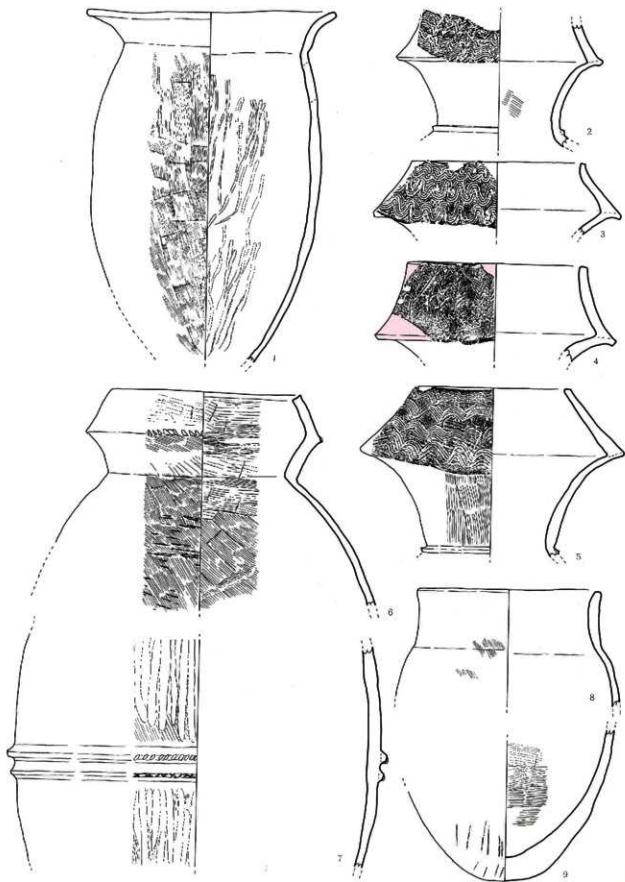
第197図 255号竪穴出土土器 (1/3)

丸底を呈すると思われる碗、7は内外面に赤色顔料を塗る鉢であるが256号からの混入であろう。7を除く他は古墳時代前期中～後半に比定されよう。

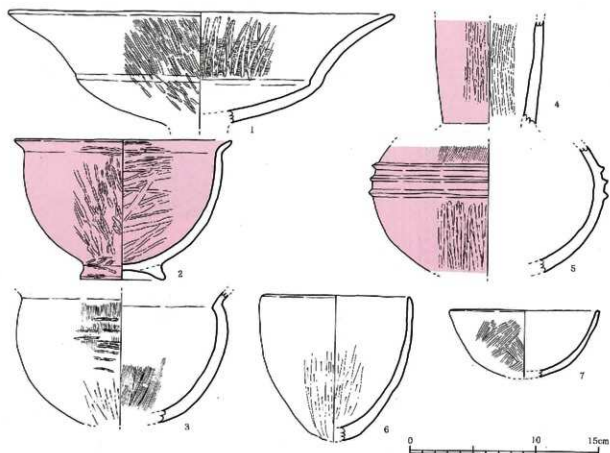
256号は長辺5.3m・短辺4.8mの東西に長い長方形をなす。検出面から床面までは約0.6mとやや深く、壁溝は南側長辺の西半部分を除き巡らされ床面積は19.92㎡。4本支柱の主軸方位はN-88°-Eとなり、南側2本の支柱穴の中間に不整形の炉跡が配置される。炉の掘込みは直径0.8mの不整形を呈し、深さ0.1mの浅い皿状の断面をなす。南西隅の壁面に接し幅約0.5m、長さ約1m、深さ0.1mの長方形土坑が配置される。この他の施設は認められないが、内部からは南半部分を中心に比較的多くの遺物が検出された。これは、南側の壁際から炉跡にかけ最初の埋戻しが行われた後に各種の土器を用いた廃絶祭祀が行われ、終了後に土器を破壊し大形片の投棄がなされたものと理解される。このことは、炉跡の上部から南側壁にかけて第198図1・5・6、第199図1・2等の大形土器片が斜めに連続して検出された出土状況を根拠とする。南側以外の三方において同様の出土状況が観察されなかったことは、廃絶祭祀が竪穴の南側において実行された可能性を示すものか。

第198図1は外反しながら緩く開く口縁部から長胴の胴部に続くまで底部付近を欠く。胴部の張り出しは口径を下回り外面は縦方向のハケ、内面はハケののちナデと部分的ミガキによる。内外にスヤコゲが付着し、胎土に角閃石や灰色粒を含む在産土器。2～5は複合口縁蓋の口縁部から頸部片で、内傾する口縁部外面に櫛波状文を下から上にやや雑に描き、頸部と胴部の境に三角形突帯を巡らす。口縁部の傾きは反りがやや強い2～4とより直線的な5の二者があり、4の外面には赤色顔料を塗る。7はこれらの壺の胴部で張り出しはやや弱く長胴に近く、中位に断面台形の2条の刻目突帯を巡らす。外面はハケのちやや丁寧な縦方向のミガキによる。6は口縁部が僅かに内反しながら内傾する複合口縁蓋で、屈曲部に刻目を施すが波状文や頸部の突帯は見られない。胴部外面はタタキのちハケによる調整で、内面はハケを主とし頸部にはミガキを加える。8は口縁部が僅かに外反気味に直立する短頸蓋であり肩の張らない胴部に続く。9は壺の底部で、やや厚くレンズ状の丸底を呈する。外面のヘラ状工具痕は底部周辺の器壁を薄く整えたことによるものか。

第199図1は高杯の坏部で大きく反転して開く口縁部から屈曲しやや丸みをもつ坏底部に続く。内外面ともハケのちミガキを加えるが、口縁部内面は暗文状に縦に施す。2は口縁部が短く外に開く鉢で、底部に短脚の脚部を付す。内外ミガキのち赤色顔料を塗る。3は口縁部と底部を欠くが同様の器形をなすと思われる鉢、外面はタタキのちハケによるが底部周辺はケズリによる調整。4・5は長頸蓋の頸部と胴部で同一個体と思われるも



第198图 256号竖穴出土土器。1 (1/3)



第199図 256号竪穴出土土器。2 (1/3)

の。頸部はほぼ直線的に立ち上がり、内外ともヘラミガキによる調整。胴部はやや偏球形をなし3条の三角形突帯を巡らせるがその上はハケで下位はミガキにより、その後外面全体に顔料を塗る。6はほぼ直立する口縁部からそのまますばまり丸底の底部に至る鉢で、底部周辺は内外ともケズリによる。7はやや深い丸底の碗で外面の調整はハケによる。

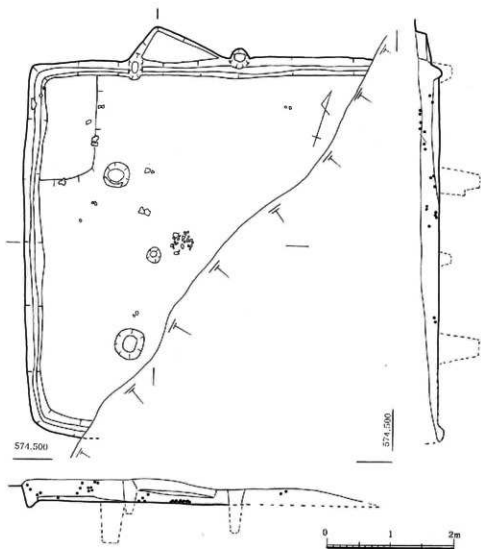
以上の土器は壺・甕・高坏等の特徴から弥生時代後期後葉に置かれ、本遺構もここに属する。

### 257号竪穴（第200図）

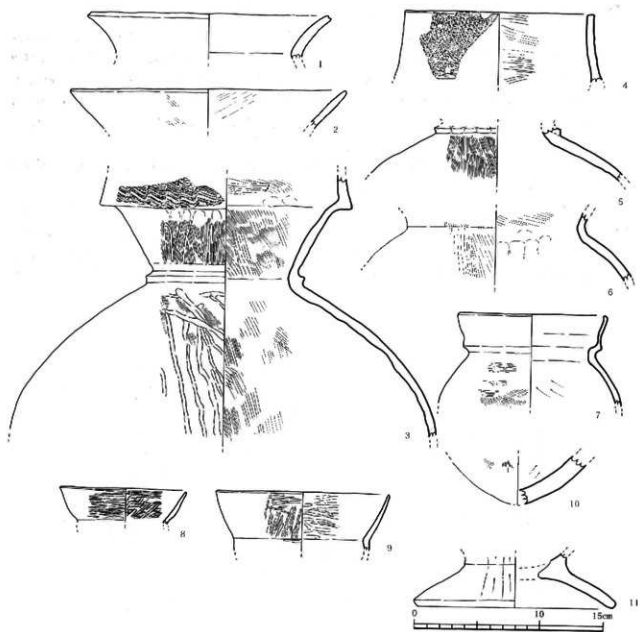
256号の東約10mに位置するが、東北コーナー付近から南西コーナーにかけて大きく削平を受ける。東西に長い長方形プランをなす中規模の住居跡と思われるが北側長辺の現存長は5.4m、西側短辺は5.8mを測る。北側辺には三角形の突出部があり、両基部には柱穴が認められるが出入口の施設に同様の平面形をなすものは無いことから異なる時期の遺構である可能性が高い。4本主柱穴の中で残存するのは西側の2本のみで抜き取り跡が見られ、西北隅部に低いベッド状の高まりが認められるが不明確な造りである。また、壁溝は全周すると思われるが加跡や土坑については明らかではない。

遺物は比較的少なく、中央部や西側の床面に接し第201図3に示した複合口縁壺が小片に破砕された状態で出土している以外に特別なものは認められなかった。

第201図1・2は在地系甕の口縁部片。3は口縁部上半と胴部の中位以下を欠く複合口縁壺。口縁部はほぼ直立し直線的に締まる頸部から大きく張り出す胴部に至る。櫛歯状文は比較的丁寧に施され、内外面はハケを主とする調整で外面にはミガキを一部加える在地産土器で角閃石・灰色粒等を多く含む。4も同様の胎土による複合口縁壺の口縁部片でやや内傾するもの。5・6は複合口縁壺の胴部片と思われ、やや釘の張る胴部をもつ。7



第200図 257号竪穴実測図。1 (1/60)



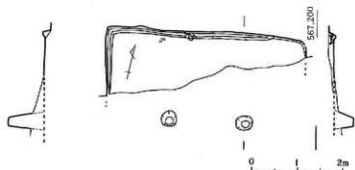
第201図 257号竪穴出土土器 (1/3)

は小形の山陰系二重口縁壺で胴部外面は縦ハケのち横ハケを加え、内面はヘラケズリによる調整。口径11.9cmを測り、胎土に砂粒を多く含まない移入土器。8は口径10.4cmを測る小型丸底壺の口縁部、外面は横方向で内面は縦・横方向の丁寧なミガキにより砂粒をほとんど含まない移入品。9はこれより一回り大きい小型丸底壺で内面は横方向、外面は縦・横両方向のやや粗いミガキによる調整で角閃石・石英を含む。10は壺又は壺の底部で丸底をなすもの。11は鉢の脚部と考えられるもので外面はケズリによる調整。

本遺構は3・7の壺等から古墳時代前期中葉の所産と考えられる。

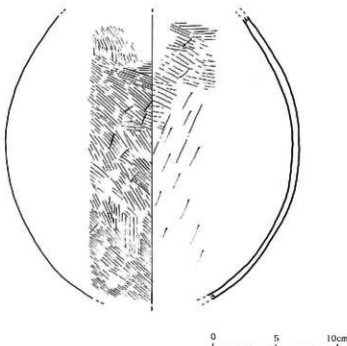
### 258号竪穴（第202図）

256号の南側約5mの緩斜面に位置するが、削平などにより竪穴の北辺とその内部が部分的に残存するに留まる。北辺（東西辺）は長さ約4.4m、東・西側辺の現存長は0.4～1.4mを測るが、東西に長い小形の長方形プランをなすものと思われる。壁溝も東北隅付近で途切れ、刃跡等の施設については不明である。主柱穴は2本と考えられ、方位は $N-80^{\circ}-E$ 。出土遺物も非常に少ないが、中央北側の壁溝の上位から甕胴部片が検出されているのみである。



第202図 258号竪穴実測図（1/60）

第203図は卵球形を呈する甕胴部で外面の調整は斜め方向のハケ、内面は右上がりのヘラケズリののち上位にハケを施す。内面にコゲ、外面にはススが附着し、胎土に角閃石・赤色粒等の砂粒を多く含み茶褐色をなす在地系。この土器は古墳時代前期前～中葉に置かれ、本遺構もこの時期に属する。



第203図 258号竪穴出土土器（1/3）

### 259号竪穴（第204図）

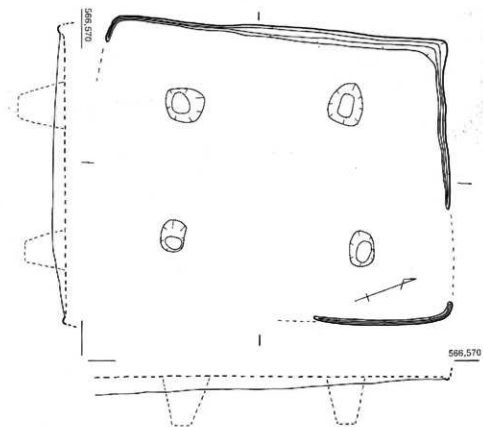
B区の中央部に位置するがほぼ床面まで削平を受け、4本主柱穴の下部と壁溝が部分的に残るのみである。壁溝は南側から東側にかけては消失するが残りのコーナーから、長辺約5.5m・短辺約4.6mの南北に長い長方形に復原される。推定床面積は22㎡程の中規模に属

し、主軸方位は $N-23^{\circ}-E$ 。各主柱は抜き取られたものと思われるが、刃跡等の内部施設については全く不明である。遺物もほぼ皆無であるが弥生後期から古墳前期の所産か。

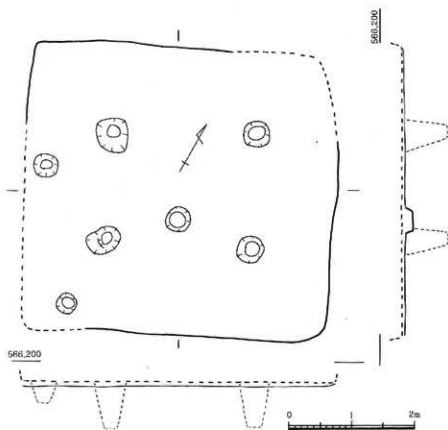
### 260号竪穴（第205図）

259号の東側約10mにあるが本遺構も床面に至るまで削平されている。壁溝は確認されなかったが、西北部と南東部のコーナー周辺が残り、長辺約5m・短辺約4.6mの長方形を呈する。推定床面積は約22㎡で、中央やや南側に直径0.4m、深さ0.1mの円形刃跡が認められる。4本主柱穴の西側2本には主柱の抜き取り痕跡が見られ、主軸方位は $N-62^{\circ}-E$ となる。西側に小規模なピットが検出されているが本遺構に伴う可能性は低い。

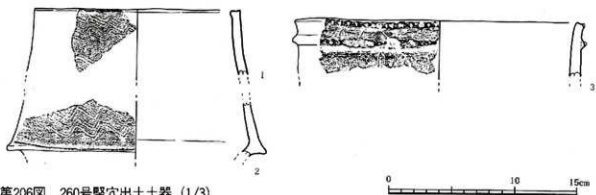
出土遺物は少ないが第206図1・2は複合L線車のL線部片で、3は混入品と考えられる下城式甕。複合L線車の特長から本遺構は古墳時代前期中頃に置かれよう。



第204图 259号竖穴实测图 (1/60)



第205图 260号竖穴实测图 (1/60)

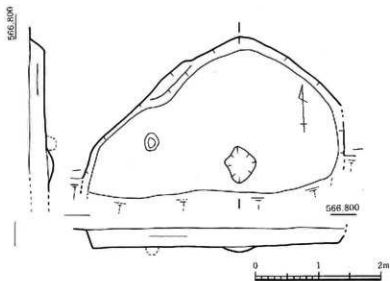


第206図 260号竪穴出土土器 (1/3)

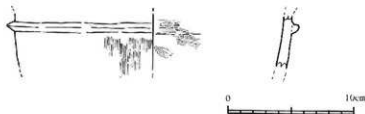
261号竪穴 (第207図)

260号の南側約8mにあり東側を262号と接する。検出面から床面までは約0.2mとやや浅く、南半部分は水出化により完全に消失する。楕円状プランをなすと思われるが全体の平面形と規模は不明であり、ほぼ中央に深さ0.1mと浅い不定形の炉跡が認められる。西側にやや浅いピットがあるが、主柱穴と考えられる柱穴は検出されずその他の施設も確認されなかった。出土遺物も非常に少なく、図示可能なものは1点のみであった。

第208図は口縁部が「く」字状を呈すると思われる甕の胴部片で無刻目突帯を巡らす。内外面はハケとナデによる調整。この土器からすれば、本遺構は弥生中期前半から中頃に置かれよう。



第207図 261号竪穴実測図 (1/60)



第208図 261号竪穴出土土器 (1/3)

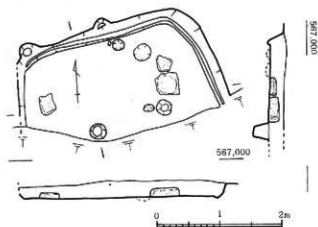


262号竪穴（第209図）

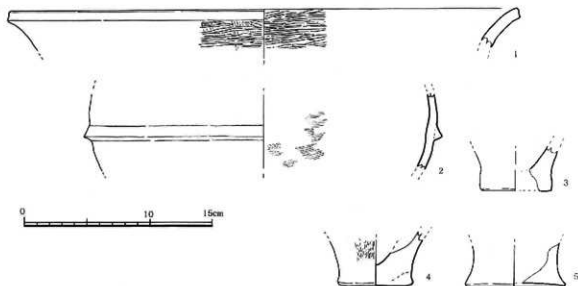
261号の東側に隣接し、互いに重複しないことは近接する時期に形成された可能性が高い。隅丸方形のプランを呈すると思われるが南半部を失うため明らかではない。北～東側壁には壁溝が付設され、南側の2本の柱穴が主柱穴と思われる。2本主柱の場合、方位はN-75°-Eとなる。竪跡・土坑等の施設は確認されず、出土遺物にも特異な状況は観察されなかった。

第210図1は内外面横のミガキによる仕上げの扉縁部で、外面には一部ハケが残る。2は胴部中位よりやや下に三角形突帯を巡らす壺の胴部片。3～5はやや厚い平底をなす甕の底部片、5の胎土には石英が認められるが他は含まない。

これらの土器からすれば、本遺構は弥生中期前半から中頃の所産と考えられる。



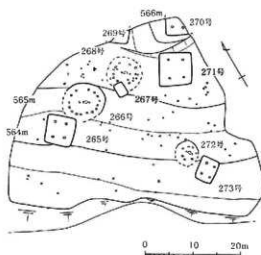
第209図 262号竪穴実測図（1/60）



第210図 262号竪穴出土土器（1/3）

### (3)C区 (第211図)

都野原旧遺跡が立地する丘陵の末端部にあたり、A・B区に先立ち平成7年度末に調査を実施した。調査区は標高573～566mの南に面する緩斜面に位置し東西方向の最大長約50m、南北方向では最大約40mの不整形三角形をなし調査面積は約1,000㎡。内部から弥生時代中期に属する円形堅穴3基、弥生末～古墳前期の長方形堅穴6基の計9基の堅穴を中心とする遺構が検出された。265号を除く各堅穴は水田化による改変のため遺構の残りはやや不良であり、弥生中期の堅穴はほぼ床面まで削平を受ける。また、堅穴の周辺には柱穴が認められるが建物等の施設を構成するものは確認されなかった。中規模以下の各堅穴からは土器・石器を主とする遺物が出土しているが、特に注目される遺物はない。



第211図 C区遺構配置図 (1/800)

### 265号堅穴 (第212図)

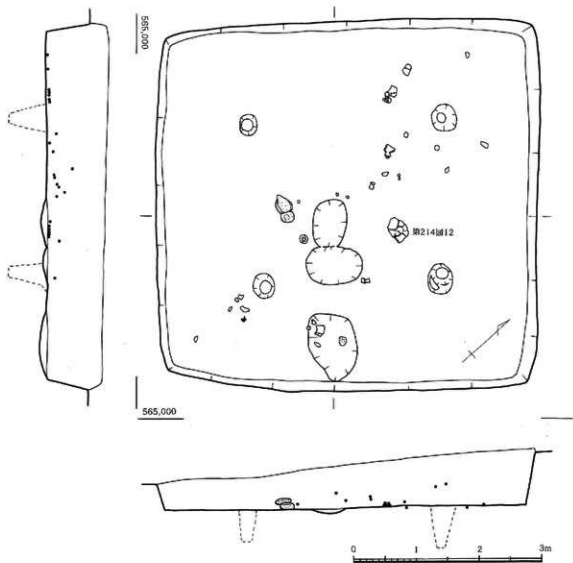
調査区の南西部に位置する長方形プランの住居跡であり、これに先行する266号堅穴の一部を切り営まれている。長辺6m、短辺5.3～5.7m、検出面から床面までは0.4～0.9mを測り北壁側は深く残りは最も良好である。壁溝は設けられず床面積は31.9㎡の中規模に入り、4本柱柱の方位はN-35°-E。北側の両柱柱には抜き取りと思われる痕跡が認められ、中央やや南側に主軸を直交し接する楕円形の浅い溝跡と推定される上坑2基がある。中心に近い上坑の長軸は0.7m、幅0.5m、深さ約0.1mの皿状を呈し内部には炭化物和焼土が混じる。南側の壁と接する不定形土坑は長軸約1m、幅約0.7m、深さ0.1mを測り、その内部から遺物は検出されなかった。

土器を中心とする遺物の中で比較的大形の破片は埋土の下層に多く、この中で第214図5・12に示した壺と粗製甕は床面直上から出土し堅穴埋戻しの前に使用された可能性が強い。

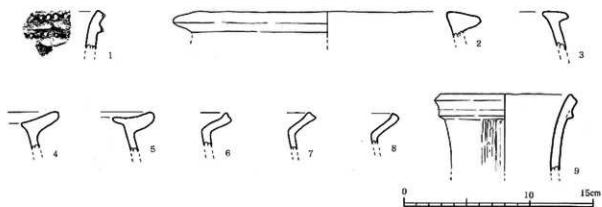
第213図に示した土器は266号からの混入と考えられるもの。1は刻目交帯を巡らす下城式甕の口縁部で、口縁部外側にも刻目を施す。2・3は口縁部外側が三角形に肥厚する甕の口縁部片。4・5は黒雲母の壺口縁部。6～8は口縁部が屈折し外に開く跳ね上げ口縁甕に類するもの。9は長頸をなす壺の口縁部で、三角形交帯を巡らす。1・5には石莖が、2は金雲母が含まれる。これらの土器は弥生中期中頃に置かれるものか。

第214図は本堅穴に伴う土器である。1は直立しながら立ち上がる口縁部の上半がやや外に反転する複合口縁壺で頸部以下を欠く。口縁部外面に2段の櫛描波状文をやや雑に施す。2は口縁部がほぼ直線的に内傾するもので外面に櫛描波状文を2段に描く。3・4はわずかに内傾する口縁部をもつ複合口縁壺で、3は3段の波状文を4は全面に波状文を施す。これらの壺の胎土は在地系である。5は長頸甕の胴部と考えられ、やや楕球形の胴部に丸底の底部を付す。頸部から上は意識的に取り外された可能性を有し、胎土に砂粒をあまり含まない精製品。6は底部の屈曲がやや弱く、脚部は「ハ」字状に開く高杯。外面は斜・縦方向のミガキを主とし、底部の四方に円孔を穿つ。胎土に金雲母を含む外来系土器である。7は坏底部が丸みをもつ在地系高杯で脚柱部は筒状を呈し、胴部に孔を設ける。坏部内面と外面はハケのちミガキによる調整。8も在地系の高杯と思われる。9・10は外来系甕の口縁部片と胴部片で、胎土に金雲母をやや多く含む。11は在地系甕の口縁部。12は口径35cmを測る粗製甕。口縁部は緩く外に開き、やや締まりの弱い頸部から卵球形に近く張り出す胴部に続き底部はレンズ底状を呈する。器面は細かいハケとナアにより、胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む。13・14は粗製甕の胴部片で直線文の下に波状文を描くもの。

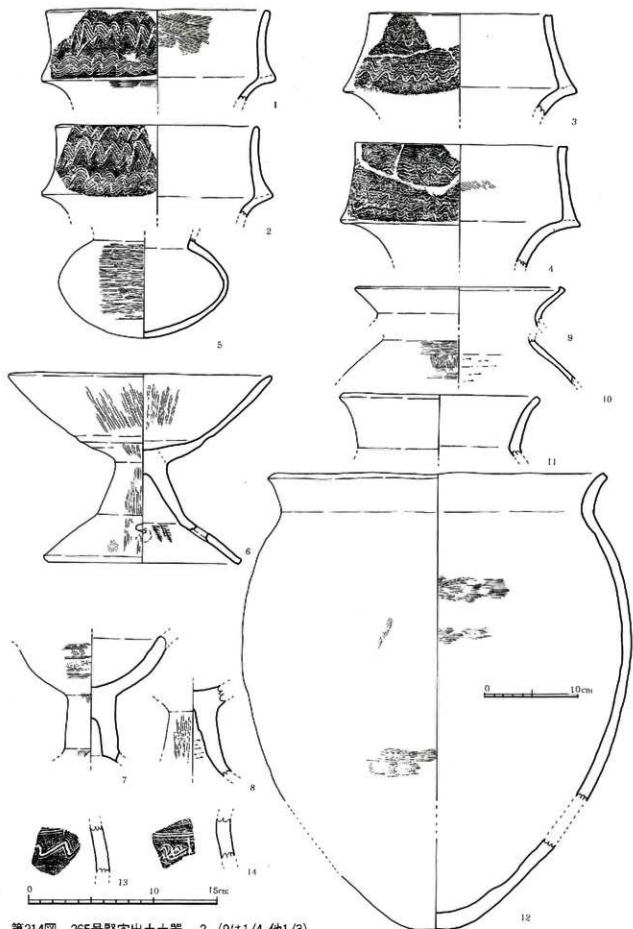
以上の土器の中で、複合口縁壺や高杯・粗製甕等から本遺構は古墳時代前期前葉でも新しい時期の所産か。



第212图 265号竖穴实测图 (1/60)



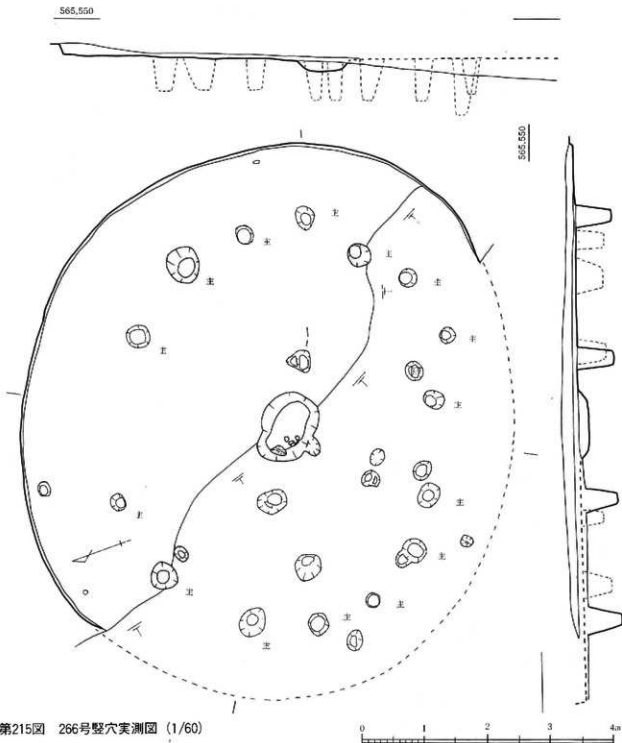
第213图 265号竖穴出土土器. 1 (1/3)



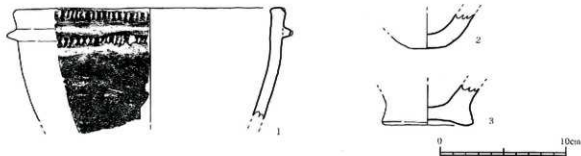
第214图 265号竖穴出土土器。2 (9:1/4、他1/3)

266号竪穴（第215回）

265号の北東部に位置する円形の竪穴であるが、削平のため中央部から南側は床面も残存しない。北半部分は壁の立ち上がりが見え、壁から約1.2～1.5m内側に主柱穴が設けられている。これから本遺構の長軸は約8.8m、短軸約8mの楕円形プランに復原され、推定床面積55㎡と規模の大きい住居跡である。主柱穴と考えられる柱穴は壁に沿った楕円形に巡るもの15本と中央の炉跡の東西の2本を合わせ17本が検出され、壁沿いの各主柱の間隔は1～1.5mとなるものが多いが、炉跡北東部の2本の中心距離は2.6mと広くなりここが出入口と思われる。また、各主柱穴は全体的にやや深く柱の抜き取りが行われたと思われるものも認められる。ほぼ中央に長軸1.2m、短軸0.9m、深さ約0.2mの不整楕円形を呈する炉跡は東西の柱とセットをなす。出土遺物は少ないが第216



第215図 266号竪穴実測図 (1/60)



第216図 266号壺穴出土土器 (1/3)

図に示した土器に加え挟入片刃石斧1点が検出されている。

第216図1は1条刻日突帯を巡らす下城式壺で口縁部外側にも刻目を加える。2はやや小さい平底をなし、3は上げ底状の平底を呈する壺の底部。

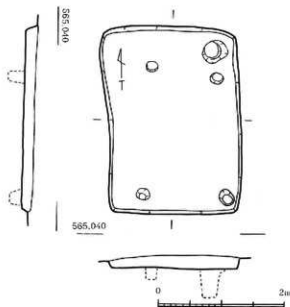
これらの土器と第213図に示した本遺構に木束伴うと考えられる土器を勘案すれば、本壺穴の時期は弥生中期前半から中頃に考えられよう。

#### 267号壺穴 (第217図)

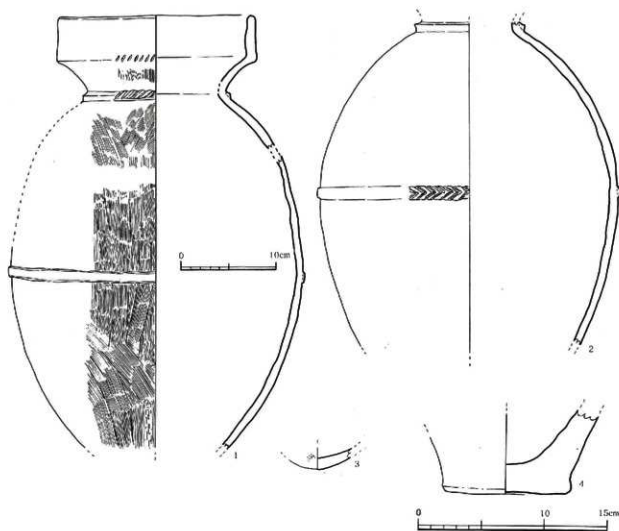
266号の東偏約3mに位置する小形長方形の壺穴で268号と重複する。全体に削平を受け検出面から床面までは約0.2mと浅い。長辺2.9m・短辺2mを測り、南北に長い長方形を呈する。内部からは5本の柱穴が検出されたが、東北隅部の柱穴は268号に帰属するもので、これを除く4本が主柱穴を構成する可能性があるが確実とは言えない。床面積は5.46㎡と小規模で伊跡等も認められないことから倉庫等の住居跡に付随する施設と見なされよう。内部からは人形壺2個体を主とする土器が出土している。

第218図1はほぼ直立する口縁部から屈曲して頸部に続き、胴部はやや長胴部を呈する大形の複合口縁壺。口縁部の屈曲部に刻目を加え、頸部に刻日突帯を胴部中程に低平なベルト状突帯を巡らす。内外面ともハケ調整によるが内面の器面は大半が剥落している。口径20.2cm、胴部最大径30.8cmを測り、胎土は角閃石等を多く含む在地系。2は1に比べやや張り出しの強い胴部をもつ壺の胴部片で頸部から口縁部と胴部下位を欠く。頸部との境には三角形突帯を胴部中位に刻日突帯を巡らし、外面はミガキに近い「寒なナア」により内面はハケと思われるものの、調整は剥落のため不明。胎土は1と同様で胴部最大径は31.6cm。3はほぼ丸底をなす壺の底部。4は弥生中期の平底を呈する壺底部で、268号からの混入と考えられるもの。

本遺構は1・2の土器からすれば弥生後期終末から古墳時代初頭に置かれよう。



第217図 267号壺穴実測図 (1/60)



第218図 267号竪穴出土土器（1・2は1/4、3・4は1/3）

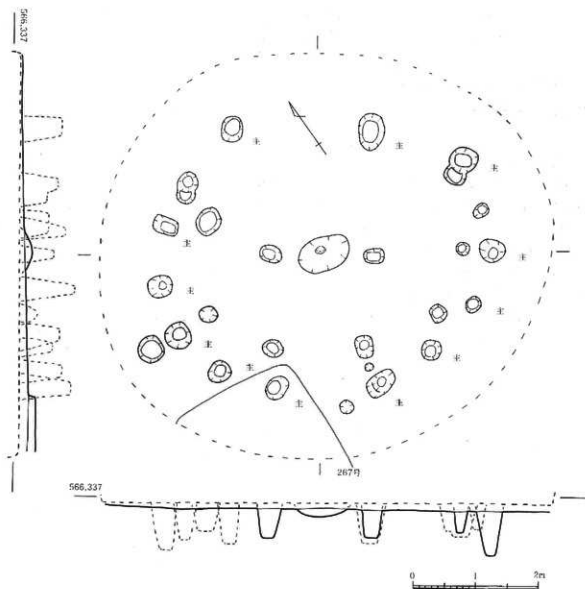
#### 268号竪穴（第219図）

267号の北側に形成された竪穴であるが、耕作による削平と267号により床面の下位まで失う。中央に炉跡とこれに付随する2本の柱穴が、周辺には12本の支柱穴が楕円形に巡る。これらの支柱穴や炉跡の配置及び構成は前述した266号と類似しており、同時期か又は近接する時期の所産と考えられる。各支柱穴の配置から長軸約7.1m・短軸約6.4mの円形に近いプランに復原される。また、炉跡北東部の2本の支柱穴の間隔が2.2mと他より約1m前後広く、この部分に出入口が想定される。復原床面積は32㎡で266号よりやや小さく、炉跡は長軸0.8m・短軸0.6m・深さ約0.1mを測り内部からは砥石が検出された。

出土土器はほぼ皆無であるが、第218図4が本遺構に伴うとすれば弥生中期中頃の所産か。

#### 269号竪穴（第220図）

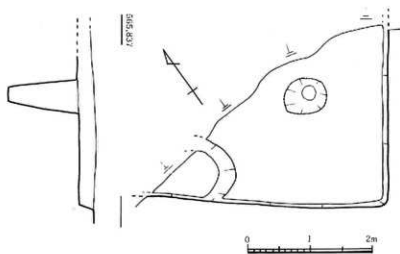
268号の北側約3mに位置し、長方形プランをなすと思われるが土取りのため竪穴の南東部を除き消失する。現存東西辺約3.8m、南北辺約2.8mを測り、土坑や支柱穴の位置から約7×6mの長方形に復原されよう。検出面から床面までは0.2m余りで支柱穴は4本と思われるが南東部の1本のみ現存する。深さ約1.1mとやや深く、柱は抜き取られた可能性がある。楕円形をなすと推定される土坑が南側壁に接し設けられるが、大半を失い内部に遺物も認められなかった。出土遺物（第221図）は少なくいずれも小片に限られる。



第219図 268号壜穴実測図 (1/60)

第221図1は緩く外反しながら開く蓋の口縁部片、外面は縦方向のハケで内面は横のハケ調整による。2は複合口縁部の口縁部片、口縁部はやや内傾し外面の全面に彫摺波状文を施す。3は小形の壺の口縁部で、やや内湾気味に外に開く。調整は内外面ともハケによる。

これらの土器から木遺構は古墳時代前期前半に置かれよう。



第220図 269号壜穴実測図 (1/60)



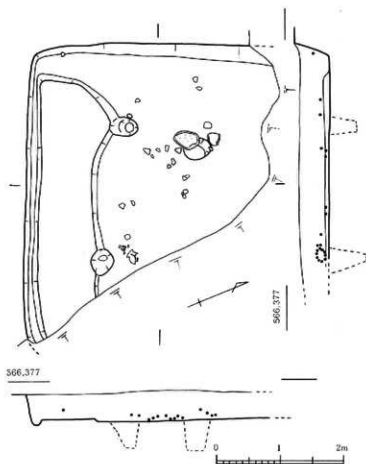


第221図 269号竪穴出土土器 (1/3)

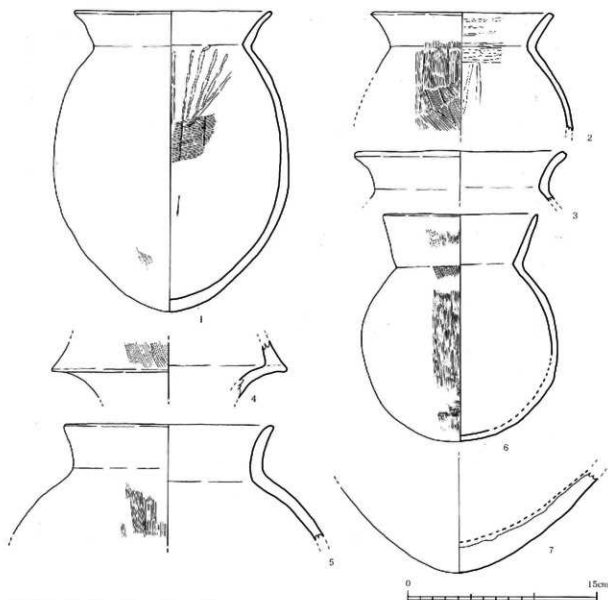
270号竪穴 (第222図)

269号竪穴の約8m東側に形成された竪穴であるが、遺構の北～東側を完全に消失する。現存東西辺は約4.6m、南北辺約3.5mであるが、本来はおおよそ5×6mの長方形プランをなす中規模の住居跡と思われる。検出面から床までの深さは0.3～0.5mを測り、南側から東側にかけてベッド状遺構が設けられる。ベッド状遺構と壁の間には喉溝が巡らされている。主柱穴はベッド状遺構に接し2本が現存するが、南北方向の間隔が長い4本主柱と判断される。柱に伴う掘込みは確認されず、土坑の有無は不明である。出土遺物は覆土の下層に多く、第223図6に示した土器はほぼ床面で横転した状態で検出され、1は全体の約半分が中央西側の床面よりやや浮いた所から小片に別れ出上した。この2点については竪穴廃絶に伴う祭祀に使用された可能性が高い。

第223図1は外に開く口縁の端部付近がやや外反し、卵球形の胴部から丸底の底部に至る在米系甕。胴部外面は縦方向のハケのちナデ、内面はハケ→ナデ→部分的ミガキによる調整。口径15.4cm、器高24cmを測り、内外面には煮炊きによるススとコゲが付着する。2もほぼ同様の器形を呈すると思われる甕の口縁～胴部片で、内面の



第222図 270号竪穴実測図 (1/60)



第223図 270号竪穴出土土器 (1/3)

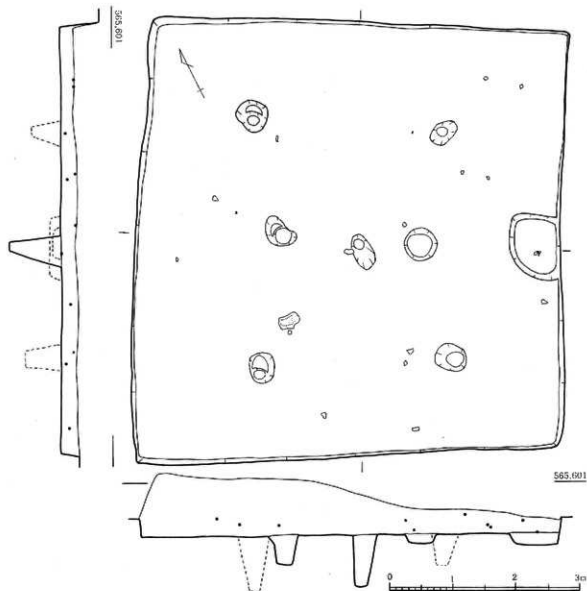
調整はナデとミガキによる。3も在地系甕のI縁部で、4は複合口縁甕の口縁～頸部片。5は開きの弱いI縁部から屈曲し、やや肩の張る胴部に続く短頸甕。6は完形の小形短頸甕で、直線的に開くI縁部にほぼ球形の胴部を付す。外面は縦方向のハケ、内面はナデにより、口径12.2cm、器高18.2cm。7はやや尖底気味の丸底となる甕の底部。

以上の土器から本遺構は古墳時代前期前葉に置かれよう。

#### 271号竪穴 (第224図)

270号の南側約4mにあり、1辺6.6mのほぼ方形に近いプランを呈する。北壁付近は床面まで約1mと深い。他は削平を受け0.2m前後と浅く残る。壁溝は無く床面積は43.55㎡で中規模でも大きい住居跡である。主柱穴は四隅の内側に配置された4本であるが、中央部にも2本のやや深い柱穴が認められ、2本主柱から4本主柱に変更された可能性がある。4本主柱の主軸方位はN-26°-E。竪に伴う直径0.5m、深さ0.15mの円形土坑が中心より1m余り東側にあり、その東側の壁に接し半円形に近い土坑が設けられる。出土遺物は少なく、土器も小片が多いが鉄器3点が検出されている。

第225図1はI縁部がやや短く内傾する複合口縁甕で、外面の全体に磨擦波状文を施す。2は甕の胴部下半で



第224図 271号竪穴実測図 (1/60)

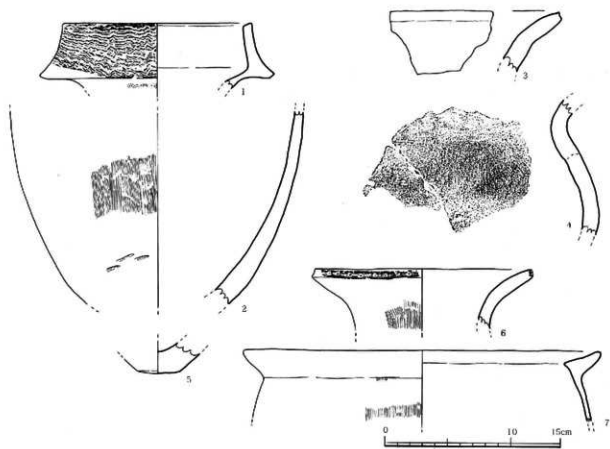
底部近くにタタキが残る。3は粗製甕の口縁部片で4はその胴部片。いずれも器面はナデによる調整。5・6は周辺の竪穴から混入したと考えられるもの。5は口唇部に円形の刺突文を巡らす甕の口縁部、6は黒髪式甕の口縁部片で口唇部の突出はやや短いもの。

1～4の土器から本遺構の時期は弥生後期後葉から終末に置かれよう。

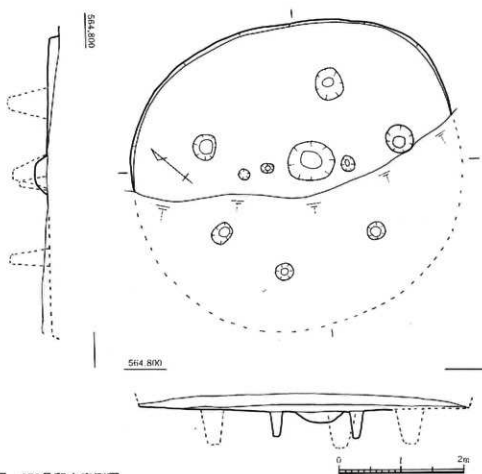
#### 272号竪穴 (第226図)

271号の南側約12mにある円形の竪穴であるが南半部分は削平が床面にまで至る。主柱穴は壁と並行する6本で、各々の配置から長軸約5.4m・短軸約4.8mの楕円形に近いプランに復原される。推定床面積は約20㎡。中央に位置する楕円形の枡跡は長軸0.7m、深さ0.2mを測り、その東西に小さいが一對の深い柱穴を伴う。また、主柱穴の中で北側の2本の柱間隔は他と比べ0.6～1m余り広く、ここに出入口が想定される。

本遺構に伴う遺物はほぼ皆無であるが、竪穴の構造は前述した266・268号と同じであることや東側に隣接する273号竪穴出土の弥生中期の土器から、弥生中期中頃から後半の所産と考えられる。



第225图 271号竖穴出土土器 (1/3)



第226图 272号竖穴实测图

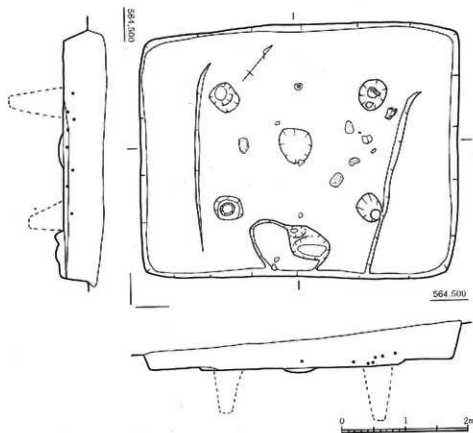
### 273号竪穴 (第227図)

272号の約2m東側にあり、長辺4.9~5.0m・短辺3.6~3.9mの長方形を呈する住居跡である。検出面から床面までは0.3~0.5mで南側は削平のため残りが浅くなる。床面積は18.48㎡を測り、両短辺に沿って低いベッド状遺構が設けられるが東側は不明瞭となる。4本木柱の主軸方位はN-50°-E、各木柱穴には抜き取りと判断される痕跡が認められる。中央部に直径0.5m、深さ0.1mの浅い皿状の炉跡があり、その南側の壁に接し2段掘りの不定形土坑が設けられる。土坑の内部には浅いピット状の掘込みがある。出土遺物の中で比較的大形の上器片は覆土の中~下層に多く検出されたが、明らかに施絶に伴う祭祀行為を示すものは確認されなかった。また、弥生中期に属する土器は272号に本来帰属すると考えられる。

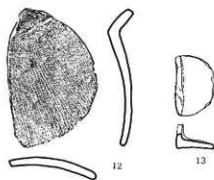
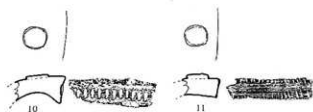
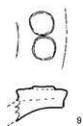
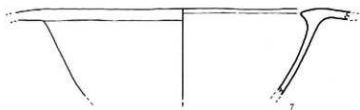
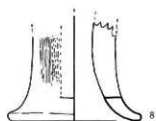
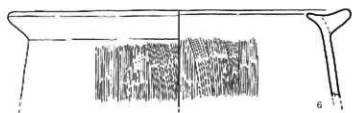
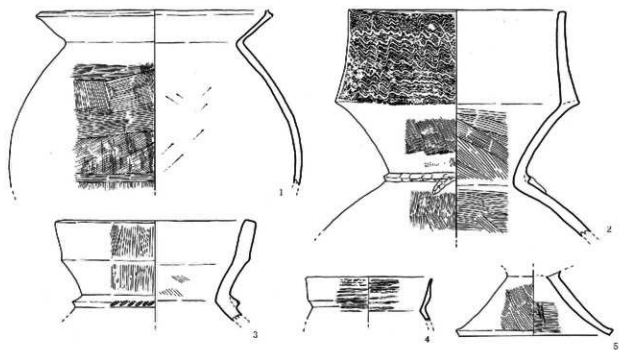
第228図1は口縁部内側を短く突出させ頭部で扇曲しやや張りの弱い肩部に続く甕。胴部外面は縦方向のハケのち横ハケを加え、内面はヘラケズリとナデによる調整。胎土に白・茶色粒を含み、大分川下流域や肥後系とも異なる布留式の模倣甕。2は長く立ち上がる口縁部をもつ在地系複合口縁甕。外面全体に3段の櫛指波状文を下から上に施し、頸部の突帯は本端を下垂させる。3はやや外に開く口縁部をもつ複合口縁甕で、口縁部と頸部が全体に短くなるもの。頸部の突帯にはハケの原体による刻目を加え、外面の調整は縦方向のハケにより胎土に石英を含む移入品。4は内外面ミガキによる仕上げの小形の鉢で砂粒を含まない精製土を使用し、5は内外ともハケ調整を主とする器台の脚部。

6~13は272号からの混入と考えられるもの。6は黒髪式甕の口縁部片で移入品。7は須玖式系高坏で8は長方形の透かしを設ける脚部。9~11は壺の口縁部片で円形浮文を貼付するもの。いずれも石英を含む大分川下流域からの移入品。12・13は甕と壺の頸部から胴部を加丁したメンコ。

1~5の土器から本遺構は古墳時代前期中葉に営まれたと考えられよう。



第227図 273号竪穴実測図 (1/60)



第228图 273号竖穴出土土器 (1/3)

#### (4)集団墓 (第229図)

A区の南東部の丘陵東端部、標高570～571mの緩斜面に形成された集団墓 (51基)は直径約30mの円形の範囲に分布し、その外側には集団墓とやや間隔を保ちつつ63～93号の各堅穴が丸く取り囲みながら展開することから墓域は明瞭に確立されていると見えよう。集団墓の内部に存在する堅穴遺構は82号1基のみであり、39～51号墓はこれを避けながら分布することから82号はこれらに先行する弥生中期～後期前半頃の遺構と考えられる。

第229図に示すように確認された墓は51基であるが、この中で4号小児甕棺墓を除き長方形の平面を呈する大多數の小棺墓と少数の上墳墓により構成される。1号墓の西側に南北に走る溝 (S-D-2)と水田造営による削平により最大10数基が消滅した可能性がある。しかし、墓域中央に残る23～16号の各小児墓の存在からすれば、これらの墓の北部から西部にかけては造墓活動が行われない空白地 (祭祀の場)が帯状に展開していた可能性がある。各墓はその分布から北側のa群 (1～5号)、東半部分のb群 (6～38号)、南西部のc群 (39～51号)の3群に大別される。b群において消滅した墓は少ないものと考えられ、計32基は更に三～四つの小群に分割することも可能である。一方、検出面の長さ150cm以上を成人墓、それ以下を小児墓と仮定した場合、各群は並行する成人墓2基を基本的単位とし周辺に成～小児墓が展開する構造を示す。内部調査を実施した墓からの人骨の出土はないが、各小群は血縁関係を同じくするものか夫婦とその子供 (血縁者)により構成されたものと想定されよう。また、b群の東端部分に位置する11・33・34・36号と26・7・8号、c群の48号の計8基を除き、その主軸方位はN-38°-88°-Wの間に集中し全体に規制が窺われる。

内部調査を実施した墓は1～3号、17・18・22号の6基に過ぎないが、成人墓と見なされるものは組合式の箱形木棺墓り類 (側板が小口を挟むもの)を主体とし、小児墓には土墳墓と箱形木棺墓り類 (小口が側板を挟むもの)が認められた。これらの墓から土器の出土は認められなかったが、成人墓と考えられる3基の墓からは鉄剣が出土しており、その出現と存続の期間は本遺跡の堅穴が急増する弥生終末から古墳前期と時期を同じくすると考えられる。また、14～16号・19号の内部も部分的に調査したがこれらから副葬品等の遺物は認められず、図化も行ってないため省略する。以下、調査を完了した各墓の個別説明と副葬品について述べる。

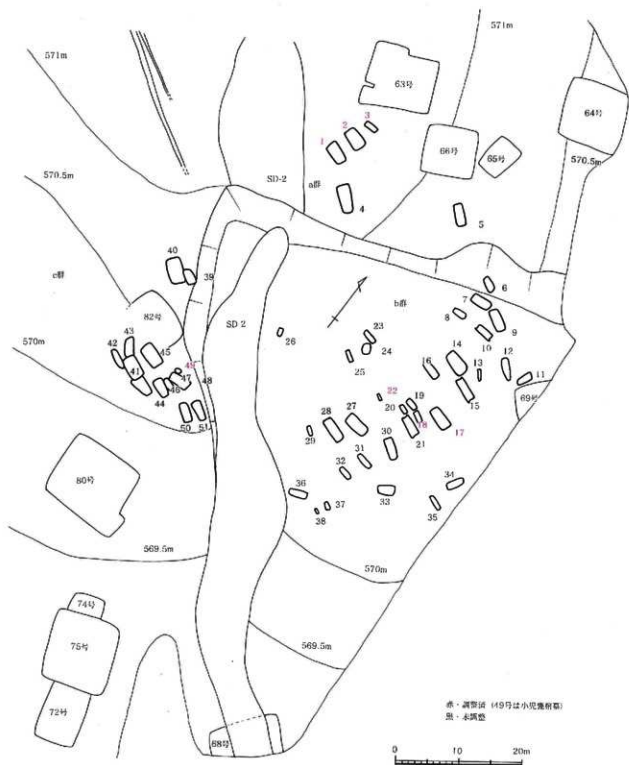
#### 1号墓 (第230図1)

墓域の北部、63号堅穴とS-D-2の間に形成された3基の中で西側に位置する成人墓と思われる木棺墓である。上面の長さとは幅は178×97cmの隅丸長方形をなし、西側幅が東側より約15cm程広がる。掘方に明確な段はないが、検出面から深さ約45cmの所で小口を除く両側に幅15～20cm余りの段が設けられる。床面はこの段から約45cm下にありその法量は131×50cmを測るが、西側の幅がやや広く小口の掘方も大きいことから西側頭位の可能性がより高いものと思われる。床面の規模は成人墓としてはやや長さが短い、膝を折り曲げ埋葬したものか。七体部は、両小口と側板の掘方から側板が小口を挟む組合式箱形木棺墓であり、床面ラインと両側の壁面は一定せず出入りが認められることから側板は2～3枚から構成されていたと判断される。西側頭位である場合、主軸方位はN-73°-Wとなる。

人骨は完全に消滅しているが、西側小口寄りの床面から僅かに浮いた所で鉄剣1口が斜めに置かれた状態で検出された (第232図1)。関部より上に約7cmの部分で折れ曲がり、副葬時の意図的行為を窺わせる。その全長は35.7cm、中央部幅2.7cm・厚さ0.3cm、関部幅3.3cm、葦子長さ4.2cm・厚さ0.25cmを測る。目釘穴は関部やや上の両側と葦部下側中央の3箇所であり、孔の直径は0.2cm。剣身の屈曲部から切先にかけて錆化した布の付着が認められ、抜き身の刀身を布に巻き副葬したことを示すが柄に木質等は認められなかった。その出土状況から切先を上にした剣の剣身を布で包み、遺体の胸の辺りに置かれていたものと考えられる。また、内部からは顔料やその他の副葬品は検出されていない。

#### 2号墓 (第230図2)

1号墓の東側約0.8mに並行して造られた成人墓と思われる木棺墓で、上面は178×105cmと1号とはほぼ同規模



第229图 A区集团墓分布图 (1/250)



である。検出面から約30cm下に幅15～30cmの段が東側を除く三方に設けられ、そこから50cm下位に床面が形成される。床面の東西両側には深さ約20cmの小口の掘込みがあり、床面の全長125cm、幅45～50cmを測り1号とほぼ同規模である。主体部の構造は1号と同じ組合式箱形木棺墓であり、方位はN-71°-Wで1号と2°の差しかない。頭位は断定し難いが、段の配置と副葬品から西側頭位と思われる。棺内副葬品に西側小口近くの床面中央から第232図2に示した鉄剣がある。

鉄剣は全長20.5cm、中央部幅2.6cm・厚さ0.25cm、柄部幅2.4cm・幅0.25cmを測り、葦部の末端より0.5cmの所に直径0.55cmの目釘穴が設けられる。明瞭な関節・葦子は形成されていないことから、これらが欠損したものを再加工した可能性が高い。剣身から切先にかけて布痕跡が付着しているが柄と思われる部分には認められず、1号出土の剣と同じく抜き身の剣身を布で巻き副葬したものである。

### 3号墓（第230図3）

2号墓の東側約0.7mに位置する小児土葬墓と考えられる。上面の長さとは幅は112×51cm余りの長方形をなすが西側短辺が東側に比べ約10cm程広がる。検出面より深さ44cmで床面に至り、西端付近に小口状の浅い掘込みが認められるがこの他に掘込みはなく銅板等の設置痕跡も確認されなかった。床面は83×40cmを測り、西側頭位（N-88°-W）と推定されるが、掘込みはこの部分にのみ板を設置したものか墓標に伴うものが明確に難い。副葬品等の遺物は皆無である。

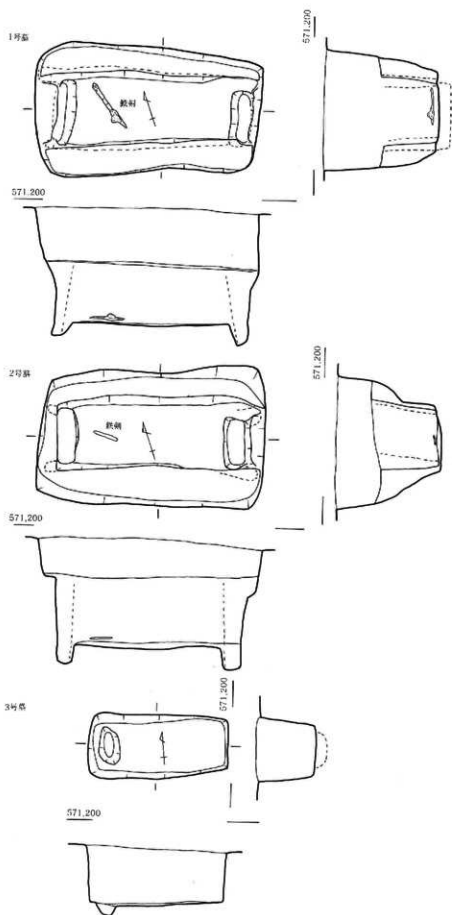
### 17号墓（第231図1）

b群の中心部分に位置し21号と対をなし、主軸を同じくし近接する小児墓18～20号と共に小群を構成する可能性が高い。全体に削平を受けているが上面は189×98cmの隅丸長方形をなし、検出面より約15cm下位に幅10～20cm余りの平坦な段が西側小口を除く三方に形成される。床面に小口や銅板の掘込みはないが、東側の平坦面には両銅板の掘込みがあり、西側の墓壁斜面にも一部銅板の設置に伴う掘込みが認められる。これらから、主体部は銅板（2枚か）が小口板を挟む組合式木棺墓であることを窺わせる。東側の床面は長さ約20cm、高さ6cm余りの削り出しによる平坦な枕が設けられ、その南側には赤色顔料が撒かれていた。従って、1～3号墓と異なる東側頭位であり、方位はN-103°-E。中央北側の床面にも顔料の小さな分布が認められ、その西側の足元と考えられる位置から大小の鉄剣2門が重なって出土した。鉄剣は床面より約10cm程浮いた状態で検出され棺外副葬と思われる。

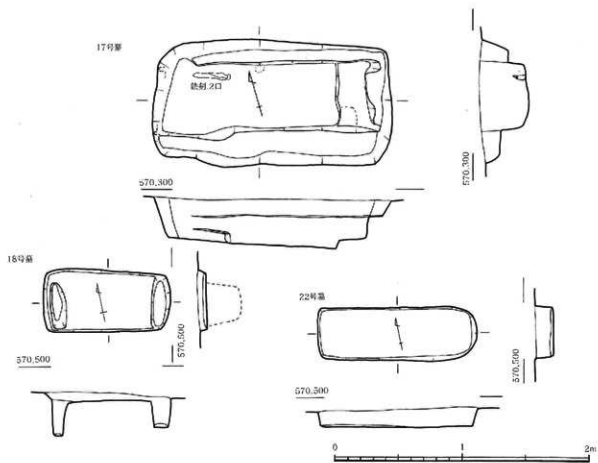
第232図3に示した鉄剣2門は、小形の剣を上に取り身の剣身部分を重ね1枚の布に巻いて置かれた状況を示す。布痕跡は小形剣の剣身上半部分から切先にかけて認められ、関節辺と葦部は巻かれていない。また、柄の木質は認められないが小形剣の基部には布とは異なる放射状の細かい筋が観察されるもののその特定は不能であった。小形の剣は全長16.2cm、剣身中央部幅2.2cm・厚さ0.25cm、関節幅3.0cm、茎部長5.3cm・厚さ0.25cmを測り、関節部の約1cmの中央に直径0.2cmの目釘穴1孔が穿たれる。関節が最も幅広く切先に向かい先細りとなり、茎も尻細となる。大形の剣は全長30.3cm、最大幅3.3cm、最小幅2.7cm、関節幅3.3cm、茎長3.3cm、厚さ0.25～0.3cmを測り、剣身中央付近が細くその前後の身幅が広がる。目釘穴は剣身関節部の西側と葦尻寄りの中央の3箇所に設けられ直径は0.25cm。

### 18号墓（第231図2）

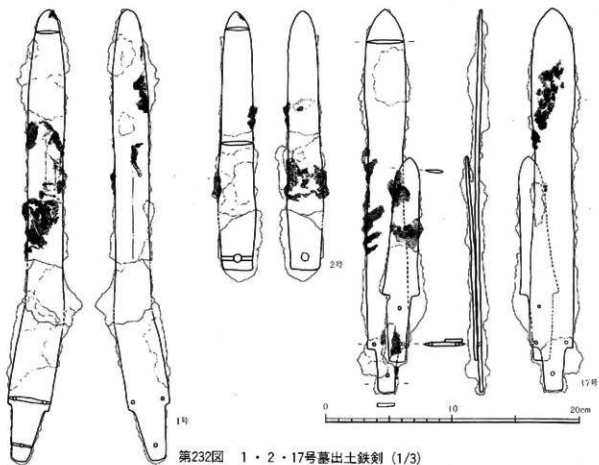
17号墓と21号墓の間に形成された小児木棺墓であるが、削平のため検出面から床面までは5cm前後と遺存状態は良くない。検出面の全長102cm、中央部幅48cm。床面の東西両端に小口板の埋設穴があり、主体部は小口板が銅板を挟む組合式木棺墓である。副葬品等の遺物は無く頭位は明らかではないが、東側の小口の掘方が規模が大きことから東側頭位の可能性もある。この場合、方位はN-102°-Eとなる。



第230图 A区1~3号墓实测图 (1/30)



第231图 A区、17·18·22号墓实测图 (1/30)



第232图 1·2·17号墓出土铁剑 (1/3)

## 22号墓 (第231図3)

20号の西側約1.5mに位置する土壙墓である。削平を受けているが検出面の全長128cm、中央部幅41cmを測り、東側の墓壁掘込みラインは丸くなるが他はほぼ直線である。検出面から床面までは14cm、床面の全長122cm・幅38cmで小皿や銅板の掘込みは無い。上部が削平されているため段の有無は不明であるが、2段掘りの場合は成人墓の可能性も全く否定できないものの小児墓と推定されよう。これに伴う遺物は皆無であった。

## (5) 甕棺墓

A区においては小児甕棺墓が竪穴住居跡の周辺から3基、集団墓内から1基の計4基が検出された。A区北部の東側谷部では10号竪穴の南側約4mに1・2号の2基が、48号竪穴と50号竪穴のほぼ中間に3号が、集団墓西側の48号墓に接し4号甕棺墓が各々営まれている。これらの小児甕棺墓で遺存状態の良いものは大形の複合口縁甕や二重口縁甕を棺として使用し、甕を蓋として利用しているが人骨や副葬品は検出されなかった。

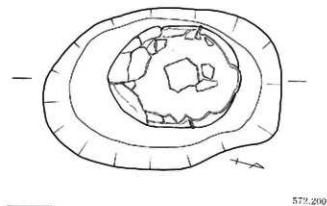
### 1号小児甕棺墓 (第233図)

10号竪穴の南東約4mに位置し、墓壁上面は長軸0.95m、短軸0.65mの楕円状をなし床面までの深さは約0.3mで断面は逆台形を呈する。全体に削平を受け甕棺の胴部上面の一部や蓋は消失し、検出時点では頸部から口縁部にかけては遊離していた。ほぼ中央に複合口縁甕を横位置(南北方向)に置き、土器片を用い蓋をしたものと考えられる。内部からの遺物は認められず、甕棺の主軸方位はN-15°-W。

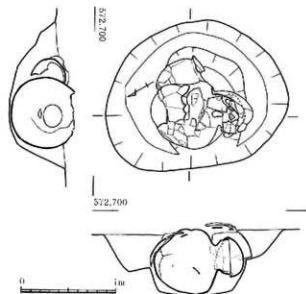
甕(第237図)は胴部を若干欠くがほぼ完形に接合した。丸底の底部からやや長胴の卵球形の胴部に続き、中位より上に低い帯状の刻目突帯を巡らす。頸部の細まりはやや強く、屈曲して緩く内反しながら立ち上がる口縁部に至る。胴部との境に三角形突帯を貼付し、口縁部外面の全面に櫛溝波状文を描く。外面は縦方向のハケを主としやや雑なミガキを加え、内面はハケ調整によるが器面の剥落した所が多い。口径20cm、器高62.6cm、胴部最大径39cmを測り、胎土に角閃石、灰・赤色粒等を含む地系土器である。口縁部が内傾し胴部の張り出しが弱いことから、古墳時代前期前葉に比定されよう。

### 2号小児甕棺墓 (第234図)

10号竪穴の南側約3.5mにあり、上面は長軸0.98m・短軸0.76mの不整楕円形に近いプランをなす。墓壁内部は2段掘りで検出面から約0.15mで幅0.1m前後の段が西側中程を除き形成され、検出面から床面までは0.33m。基底部に完形の二重口縁甕の口縁部を南側に向けて横



第233図 1号小児甕棺墓実測図 (1/20)



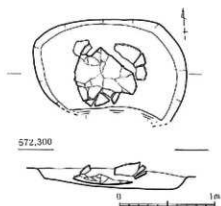
第234図 2号小児甕棺墓実測図 (1/20)

に置き、口縁部は第237図2の壺胴部片で蓋をし更に同図4の壺胴部の約1/3の部分片を用いて蓋の部分を覆う。壺4の残りの大形破片は二重口縁部の東側に置かれ、壺の胴部下半には5に示した口縁部を欠く壺約1/2を貼り付け、小児壺棺蓋としては非常に丁寧な構造を示す。壺の口縁部の方向を頭位とした場合の方位はS-34°-W。壺や蓋の器形・調整等の特徴から10号墓穴と同じく古墳時代前期前葉でも新しい時期の所産と思われる。

壺は口縁部上半が外反しながら開き、強く屈曲し短く締まる頸部に至る山陰系二重口縁部であり、大きく張り出す胴部は肩の張りもやや強い(第237図3)。口縁部から頸部は横ナデを主とし、胴部外面は縦・斜め方向のハケののち肩部から下は横方向のハケを加える。その後、淡い黒色の塗料を用い幅1~2cm余りの帯状文様を斜めに平行するように描くが、残りが悪く塗料に何を使用したものかは不明である。胴部内面下半は左上がり、上半分部分は右上がりのヘラケズリによる調整。口径20.9cm、器高41.3cm、胴部最大径38cmを測り、全体に造りは丁寧であり胎土に石英を多く含む雑入品である。壺の胴部東側と蓋の外側に二分された壺(第237図4)は、卵球形の胴部にやや反転しながら外に開く口縁部をもつ在地産で底部周辺は検出されなかった。胴部外面は縦方向のハケと部分的な縦ミガキによるが、下半部に一部タタキの跡が残りこれが最初の調整であったことを示す。内面は斜ハケののち下半にヘラケズリと部分的ミガキを加えるが、器壁はまだやや粗い在地産産物である。蓋として使用された壺2は口縁部と底部周辺を打欠いたもので、ほぼ球形に張る胴部の外面は縦方向のハケの後に肩部に横のハケを加え、内面は左上がりのヘラケズリによる調整。胎土に角閃石等を含むが布留式系の移入品である。

### 3号小児壺棺墓(第235図)

48号墓穴の東側約5mに位置するが割平のため床面に接する壺の胴部が部分的に残るに過ぎない。墓壁は槽円形を呈するが南側は後世の土坑により消失し、現存長は0.83m、幅約0.5mで床面はほぼ平坦となる。棺として使用された複合口縁部の肩部から口縁部と底部付近は完全に失われているため方位も不明であり、内部や周辺からの遺物も認められない。第238図に示した壺は胴部が卵球形に張り、最大径よりやや上位に帯状の刻目突帯を巡らす。突帯から上には赤色顔料による施文が残るが全体の文様構成は不明である。外面は斜め方向のハケによるが内面の器面は割落する。胎土に金雲母や角閃石・赤色粒を含み移入品の可能性がある。古墳時代前期前半に属するものか。

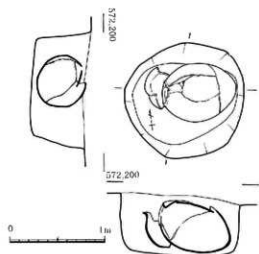


第235図 3号小児壺棺実測図(1/20)

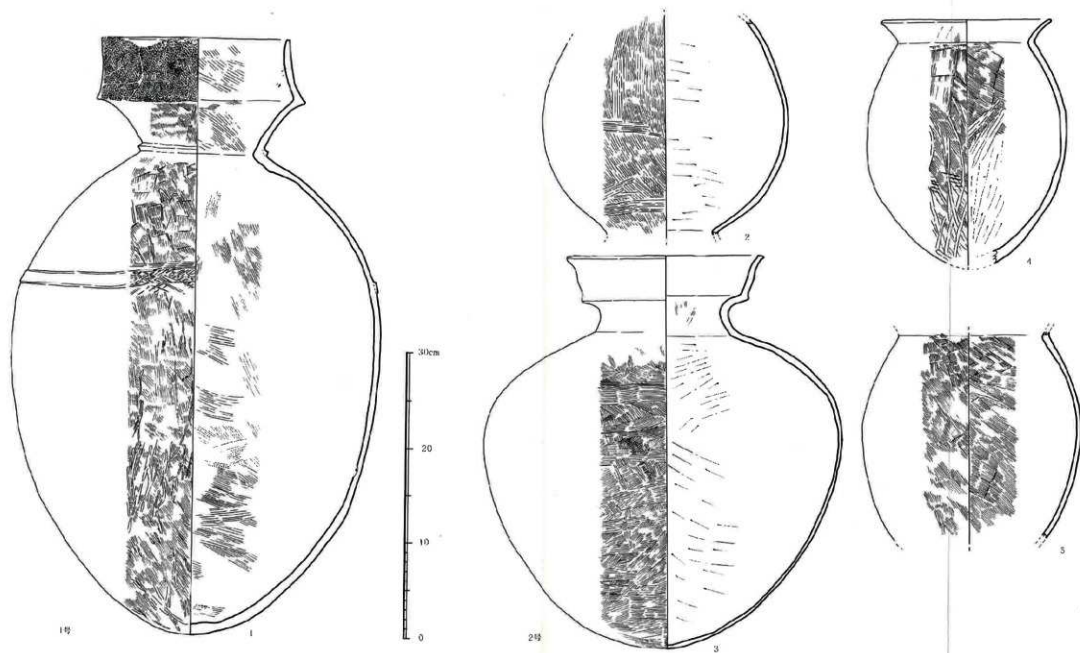
### 4号小児壺棺墓(第236図)

A区集団墓の中で西南部に位置する47号墓に接し形成されている。墓壁上面は直径0.68mの不整形円形を呈し、床面までの深さは約0.3mを測り断面は逆台形に近い。頸部から上を取り外した複合口縁部の底部を東寄りに横に置き、縦に半分に分割した壺で蓋をしたものと考えられる。方位はN-87°-Wとほぼ西を向く。

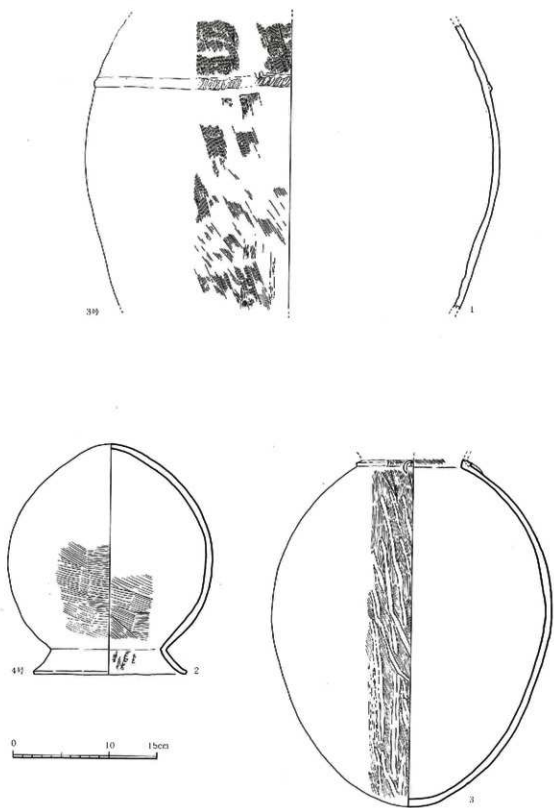
複合口縁部は卵球形の胴部から丸底の底部に至る在地系土器(第238図3)で、頸部に三角形突帯を巡らせその末端を短く垂下させる。外面は縦方向のハケのちミガキを粗く加え、内面はハケとナデによる調整。壺は尖底に近い丸底の底部から大きく球形に張る胴部に続き、口縁部はやや外反しながら開く(第238図2)。内外面はやや荒いハケによる調整を主とし、口径16cm・器高22.4cmを測る。これらの土器は古墳時代前期前葉でも中頃に近い時期と思われる。



第236図 4号小児壺棺実測図(1/20)



第237图 1·2号小兒嬰棺案測圖 (1/4)



第238图 3·4号小兒瘞棺土器実測図 (1/4)

## (6)条溝 (第239・240図)

A区の北部は、それまで比較的傾斜が緩やかであった丘陵の上面が谷によりやや急に陥れ、条溝はこの谷部の南側をほぼ東西方向に直線的に走る。本来は丘陵全体を分断していたと考えられるが、残存するのは尾根の頂部から東側部分であり、頂部より西側は水田と水路により消失する。溝幅は尾根の頂部で約1.2m、標高の低い谷部で1.9mを測り、谷部がやや広く頂部に向かい輻狭となる。その断面は頂部付近では逆台形に近いが、谷部では集落に面する南側の傾斜が緩いのに対し北側は急に立ち上がり三角形の断面をなす。深さは0.3～0.5mと全体にやや浅く、外側に土塁を伴う可能性があるが、その規模・構造からは防衛的性格よりも区画性の強いものと理解されよう。内部の上層は上・中・下の3層に分けられ中層出土の遺物が多い。その掘削は弥生後期後葉と考えられ、弥生終末から古墳初頭に埋戻されたものと思われる。しかし、その後これを切る竪穴が存在しないことは溝に代わる欄干等の施設が設けられた可能性が高く、18・20号竪穴と条溝の間に柱穴5本が列状に並ぶ部分も認められた。調査を実施した部分は頂部より東側の約35mの部分とその延長部の約10mの範囲である。また、平成10年度に行われた大塚遺跡の調査により、本条溝より北側約240mの所により規模の大きい条溝の存在が確認され集落の北側は二重の溝により区画されていたことが判明している。

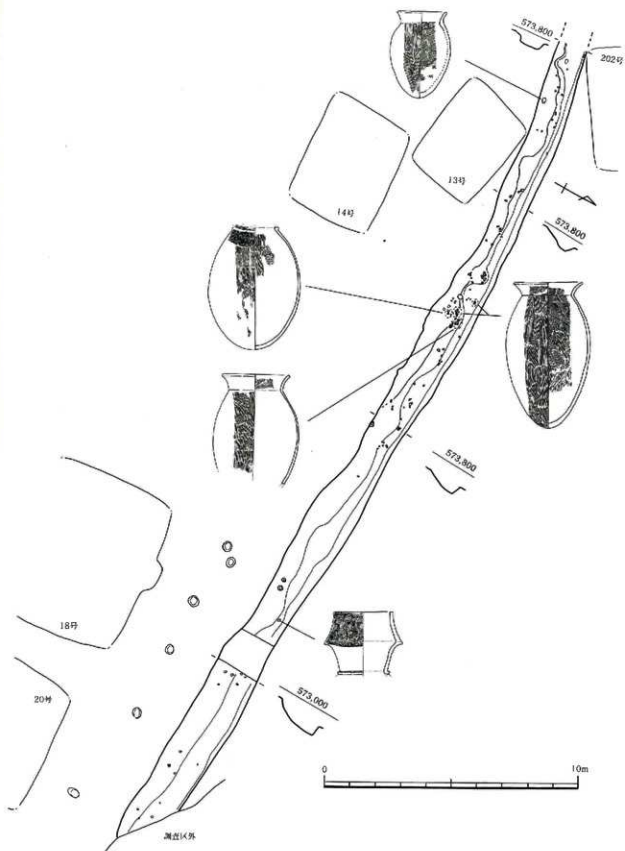
溝内部からは第241・242図に示した土器が検出されたが、完形品や大形破片は頂部より東側の約15mの部分に限られ、遺物集中部も1箇所認められた。この他の部分では小片であり出土状況にも変化は観察されなかった。

第241図は頂部より東側約2.5mの所で検出された完形の在り地系甕、1縁部は緩く外に開き胴部はやや長割に近い。全体に器壁もやや厚く、外面は縦方向のハケによる調整で口径12cm、器高20.8cm。2も在り地系甕で遺物集中部から2箇所に分れて出土した。口径部の開きはより強く胴部は長胴を呈し、内外面とも縦方向のハケを主とするが内面には部分的にミガキを施し、口径16.4cm、器高35cm。3も2とほぼ同様の胎土と器形をなすが底部周辺を欠き、胴部内面はナデによるもので集中部東側の出土。4もこれと器形・調整等と同じくする。5は条溝内部



第239図 条溝の位置



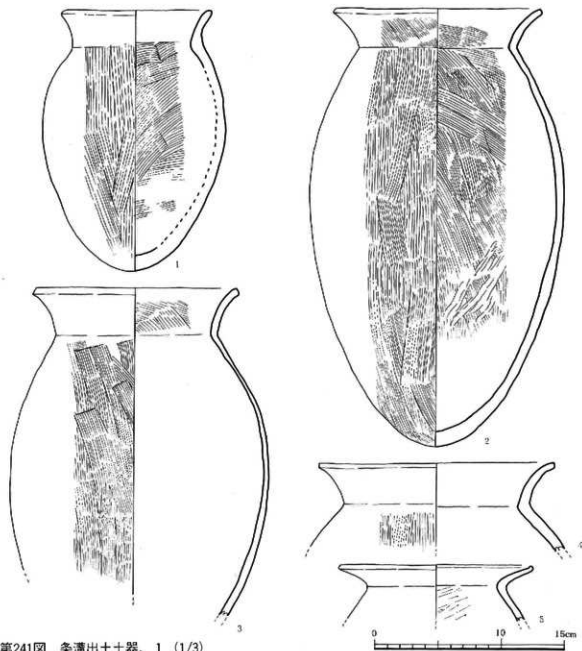


第240图 条沟实测图 (1/100)

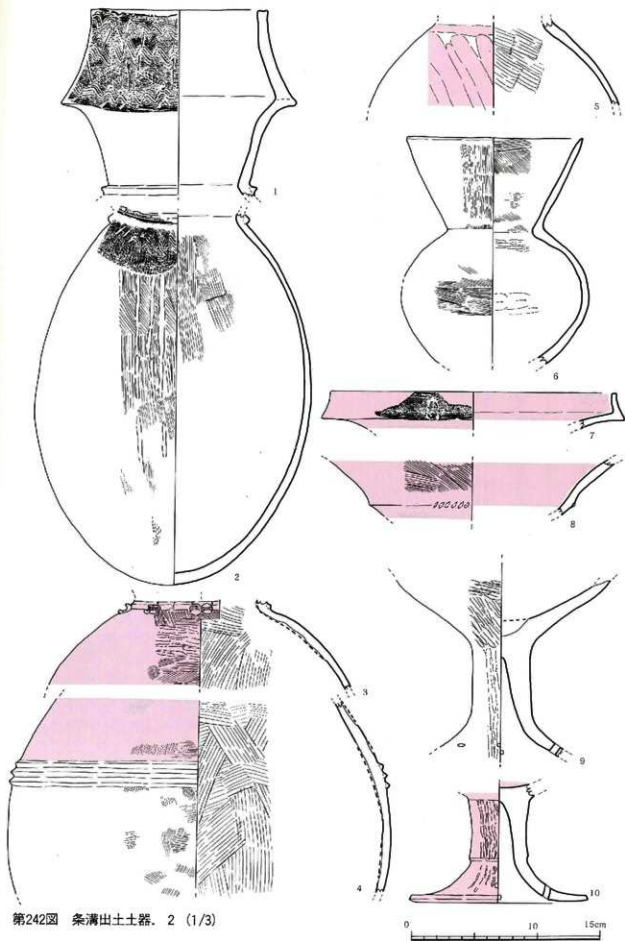
の柱穴から検出された外來系甕で溝埋設後の施設に伴うと考えられる。I 縁部は屈曲して大きく外に開き端部が肥厚する。胴部内面はヘラケズリにより胎土は白色をなし金雲母を含む。

第242図1は複合I 縁部の口縁から頸部片、やや反転しながら内傾し立ち上がるI 縁部外面に4条の波状文を3段に描く。胎土に金雲母と小粒の石英を含む移入品。2～4は土器集中部出土の壺胴部である。2は頸部突帯から底部にかけての欠損はなく、頸部から上は意識的に打欠くものか。また、突帯の下位に櫛描波状文を施すもので類例は少ない。3・4は同一個体と思われるもので、頸部突帯の下側に2個一対の浮文を貼付し、やや張りの大きい胴部の中程より上に3条の三角形突帯を巡らす。5も壺の胴部片で外面に赤色顔料による帯状の施文を描く。6は球形の胴部にやや長く外に開く頸部とI 縁部を付す小形長頸壺、外面は縦方向のハケによるが胴部の中位には横ハケを加える。7・8は内外面に顔料を塗る高杯の口縁部で、9は杯底部から脚部片。10は筒状の脚柱部から反転して裾部が張り出す高杯の脚部。杯部内面と外面はミガキの赤顔料を塗る。

以上の土器の中で第241図5と第242図6は古墳前期前葉（新）に置かれるが、この他は弥生後期後葉から終末に比定される。完形品や大形破片は溝の埋戻しに伴う祭祀に使用・廃棄されたものと考えられよう。



第241図 桑溝出土土器。1 (1/3)



第242图 桑清出土土器. 2 (1/3)

## (7) 土坑 (第243・244図)

各調査区からは10数基の土坑が検出されたが、内部調査を行ったものや時期が明らかとなったものは少ない。ここでは弥生後期から古墳時代前期遺物を伴う3基を示すが、1・2号土坑はA区2号竪穴の東側にあり、3号土坑は210号竪穴の北側に重複する。

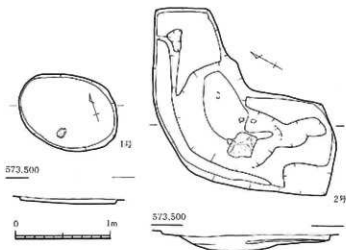
### 1号土坑 (第243図)

楕円形を呈する土坑であるが削平のため検出面から床面まで最も深い所で約0.1mしか残らない。長軸約2.2m、短軸約1.6mを測り、床面は浅い皿状に窪む。内部出土の遺物は少なく、土器は器面がやや摩耗しており後世の混入の可能性がある。第245図1は長頸壺の口縁部片で、2は小形の鉢の胴部。これらの土器は古墳時代前期中頃に置かれる。

### 2号土坑 (第243図)

平面はL字状に近いプランをなす土坑で一部2段掘りとなる。検出面から床面までは0.25~0.5mを測るものの、床面の形状は一定せず人為的なものではない可能性も残しその性格については不明。内部からは大形礫と若干の上り片が検出されたが、出土状態に変化は観察されなかった。

第245図3は高杯の坏部片で、4はやや平坦な丸底を呈する椀である。いずれも器面はやや摩耗するが、古墳時代前期中頃に置かれるものである。



第243図 1・2号土坑実測図 (1/40)

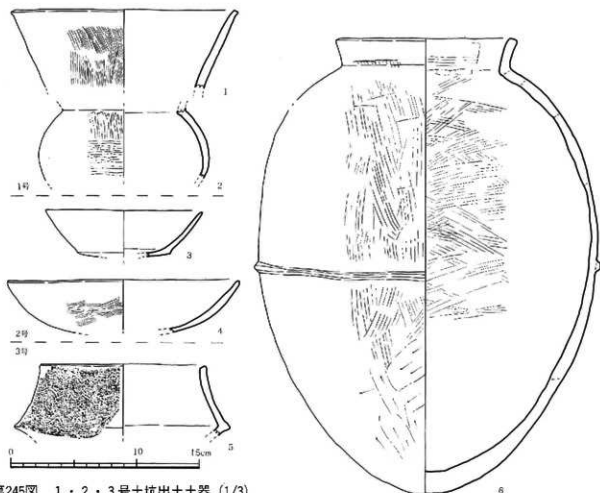
### 3号土坑 (第244図)

A区210号竪穴の北東部にあり、古墳時代前期中~後半の竪穴により南東コーナー付近を切られ消失する。隅丸長方形のプランを呈し、長さ1.3~1.6m・幅1.2~1.3mを測り、検出面から床面までは0.3~0.5mと比較的遺存状態は良い。床面はほぼ平坦となり掘方と平行するが、周辺や内部に柱穴等の施設は設けられない。その形態や規模からすれば貯蔵穴に近い性格が考えられよう。内部からまともに出てきた第245図6は、ほぼ完形に復原された壺で、破壊ののち投棄されたものと推定される。

第245図5は複合口縁壺の口縁部片、やや反転しながら内傾する口縁部外面の全面に3段の櫛描波状文を施す。胎土に角閃石や赤・灰色粒を含む在地系。6はやや厚いレンズ状の底部から球形形の胴部に続き、短く屈曲し外に開く口縁部をもつ短頸壺。突帯を胴部中位に巡らせ、外面は縦方向のハケによるが底部周辺はケズリによる。内面は横・斜め方向のハケにより、胎土は5と同様である。口径14.4cm、器高35.4cmを測り、内外面にスズヤコゲが付着。これらの土器から本土坑は弥生終末から古墳初頭に属すると考えられる。



第244図 3号土坑実測図 (1/40)



第245図 1・2・3号土坑出土土器 (1/3)

### (8) 掘立柱建物跡

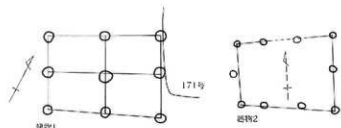
第246図に示したようにA区から7棟の掘立柱建物跡が確認された。これらの建物は各堅穴との重複が少ないことから存在が明確となったが、削平により消失したものと堅穴と重複するものを考慮すれば、本来の建物数は10数棟と推定されよう。建物の配置はA区の尾根の中心付近に位置するものが5棟、東端部に形成されたものが2棟であり規模の大きい建物は中心付近に立地する傾向が窺われる。各建物の主軸方位は一定しないが小規模な建物は南北方向に建てられ、規模の大きいものは東西棟となり建物の性格により方位が異なることが考えられる。身舎面積は最小の建物7が約5.6㎡、これと同様の性格と思われる建物4～6は約10㎡。最大の建物3は約70㎡の規模をもち、本遺跡の中でも重要な位置を占めると考えられるがその在り方は住居より倉に近い。



第246図 掘立柱建物の分布

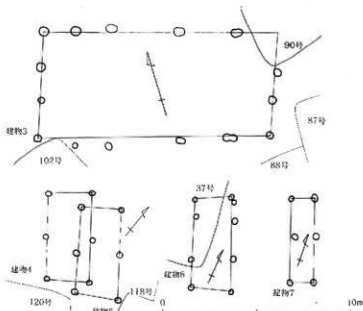
### 建物 1 (第247図)

A区の中心部に位置し171号と重複する梁行2間、桁行2間の倉庫と考えられる縦柱建物である。各柱穴の直径は約0.5mと大きく、桁行間隔は3mと一定するが梁行は西側が1.9m、東側2.2mとやや幅が認められる。身舎面積は約24㎡で、方位はN-61°-E。古墳前期前葉の171号を相互に意識した配置であり、これに前後する弥生終末頃か古墳前期中頃に形成された可能性が高い。



### 建物 2 (同)

A区の中央やや南側、100号と121号竪穴の間に位置し梁行2間×桁行3間の建物である。梁行は西側が3.2m、東側が4mを測り東に向かい広くなり、桁行は両側とも5mとほぼ一定する。身舎面積は約18㎡を測り、方位はN-89°-Eと磁北と直交する。本建物は竪穴と重複しないことから、古墳前期後半から中期の所産と推定される。



第247図 掘立柱建物1～7実測図(1/200)

### 建物 3 (同)

A区の南西部にある90号と102号竪穴に挟まれた所に位置し、梁行3間×桁行5間で身舎面積約70㎡を測る大形建物である。東北隅の柱穴は90号と重なりその位置は明確にならなかったが、これを除く柱穴は明瞭であり西側の梁行5.6mで柱間隔もほぼ等しい。桁行は南側で12.5mを測るが、柱間隔は中央間が約3.8mと広くその両側の各柱間もやや間隔を異にする。方位はN-74°-W。90号を含め周囲の各竪穴はいずれも時期が明らかでないが、建物内部を大きく切る住居跡が存在しないことから建物2と同時期か。

### 建物 4・5 (同)

2棟重複する小規模な建物であり、建物2のやや北側、119・120号竪穴に接する位置に形成される。柱穴はいずれも明瞭で規模もほぼ変わらない。建物4は梁行1間、桁行2間の南北棟建物で、梁間2.2m、桁間は2.3～2.5mを測り、身舎面積は9.7㎡。方位はN-38°-W。建物4の東側に重複する建物5も同様の柱間隔を有する。その方も変わらないことは、機能を同じくする倉庫等の建物が連続した時期に設けられたことを示す。所属時期については建物2・3と同じと考えられる。また、建物1～3がより集団的性格が強いとすれば、建物4・5は周辺の一竪穴に付属する可能性が高いと言えよう。

### 建物 6・7 (同)

A区の中央東端部に位置し、2基近接する。建物6は37号竪穴により切られ、梁行1間×桁行3間の小形建物である。梁間は2mであるが、桁間は1～2mの幅で一定しない。主軸方位はN-24°-W。その東北にある建物7は梁間1間×桁間2間で梁行は1.2m、桁行は2mと2.5mであり規模は最小となる。方位は建物6と同じであり、いずれも弥生後期後葉から古墳前期前葉の住居に付属する施設と思われる。

## (9)遺構出土の石製品・石器 (第248～252図)

A～C区の内部調査を実施した各壘穴や他の遺構からは各種の石製品・石器が出土した。石製品で最も注目される遺物として石鏡片2点があり、この他に勾玉1点・管玉2点・紡車玉1点が検出された。石器の中では砥石が最も多く次に磨石・台石類が続き、少数ではあるが柱状片刃石斧・太形給刃石斧・石廬丁・石鏃・石匙等の石器も注意される。

### 石製品 (第248図)

#### 石鏡 (第248図1・2)

1は古墳時代前期前葉の25号壘穴の検出面から出した黒色頁岩製と思われるものである。全体の約1/4程の破片で斜面は匙面状をなし周りに幅1mm前後の細い刻みを加え、側面は1段凹帯となる。体高1.5cm、内径6.0cm、外径7.6cm、重さ8gを測り、匙面は8面残るが全体では29面に復元される。側面に外側から内径2.5mmの小孔を穿ち、孔上端の石側は紐ずれと思われる摩滅痕が観察される。その右側破断面には研磨痕が残るが左側破断面には認められないことから修復を目的とした穿孔ではないと考えられる。従って、本来は半分程度の大きさと両端付近に紐懸けの小孔が穿たれており、鏡片と同様の使用方法が考えられよう。また、刻目や側面の沈線内部には赤色顔料が見られ全体に塗布されていたと思われる。

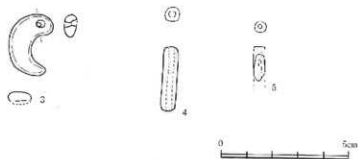
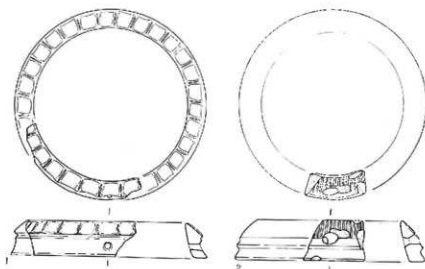
2は古墳時代前期中葉の34A号壘穴出土で緑色凝灰岩製。斜面に連続刻みを施し、側面は2段凹帯を呈する。現存長は2.4cmの小片であるが、内径5.6cm、外径7.5cmに復元され、体高は2.6cmを測る。斜面から1段目の凹帯に内外両方向からの孔を穿ち摩滅痕は確認出来なかったが、左側破断面は僅かではあるが摩滅している。顔料も観察されなかったが1と同じ性格と考えられよう。

#### 勾玉 (第248図3)

1点のみであるが古墳時代前期中葉の37号壘穴から出土。滑石製で両面は平坦で暫と内側は丸みをもつもので道の中央に両側からの穿孔がある。長さ2.4cm、最大幅1.0cmを測る小形品。

#### 管玉 (第248図4・5)

4は51号壘穴から、5は52号壘穴からの出土でいずれも古墳時代前期前葉の時期に属する。4は両側穿孔の滑石製で両端部は丸みを帯び長さ2.5cm、直径



第248図 遺構出土石器。1 (3/4)

6mm、孔径3mmを測る。5は片側の端部付近が残り現存長1.4cmの碧玉製で、直径5mm、孔径1.5mmの小形品。

#### 紡垂車（第249図10）

弥生終末～古墳初頭の271号竪穴から1点出土している。全体の約半分しか残存しないが、直径5.6cm、孔径6mmに復原される。滑石製で両面とも平坦をなし孔は片側穿孔と思われる。

#### 石器（第249～251）

##### 石鎌（第249図1）

姫島産黒曜石の木製品と考えられるもので周縁に押圧剥離を施すが丁塚ではない。長さ2.3cm、最大幅1.7cm、厚さ0.6cm、重量1.8gを測り、古墳時代前期中葉の251号竪穴に混入。

##### 石匙（同図2）

チャートを使用した横形の石匙で、刃部は一部しか残らない。現長2.2cm、柄み部までの幅2.2cm、重さ2.5gを測り、古墳前期中葉の100号竪穴に混入。

##### 打製石斧（同図3）

古墳時代前期中葉に属する16号竪穴から1点混入して出土。やや扁平な輝石安山岩を素材とし周縁を剥離により短冊形に整えるが片面には自然面を残す。長さ11.8cm、幅4.5cm、重さ145.3g。

##### 柱状片刃石斧（同図4・5）

4は弥生終末～古墳初頭の54号竪穴出土の柱状片刃石斧の刃部片で頁岩と思われる石材を利用している。基部を欠くがやや身幅の厚い大形の部類に入る。5は弥生中朗前半～中頃に属する266号竪穴出土で前主面と基部を欠損するが横断面は薄鉢形をなすものと思われる。頁岩製で背部は敲打のち研磨により整形した比較的丁塚な造りである。破損品を再加工した可能性が強く、その後には竪穴に混入したものか。

##### 太形蛤刃石斧（同図6）

6は古墳前期中葉の100号竪穴出土（混入か）で、体部は敲打痕が残るが研磨により平滑に仕上げる。横断面は楕円形をなし厚さは約4cmを測る。玄武岩製と考えられ刃部先端と基部を欠き、重量は444.8g。

##### 石庖丁（同図7・8）

7は両刃の外湾刃石庖丁で刃部中央が尖り気味となり、直線的な背部と合わせ三角形に近い形態をなす。背部より体部が僅かに厚く、鋸の造り出しは弱い。粘板岩を石材とし両側穿孔で長さ14.9cm、最大幅6.4cm、厚さ0.7cm、孔の内径は0.6cm、重さは91.9g。古墳前期中葉の211号竪穴からの出土であるが、弥生前期の所産と見られる。8は背部から孔周辺までの破片で一部研磨痕が残る。粘板岩製で古墳前期中葉の37号竪穴出土。現存長5.5cm、厚さ0.6cm、重さ16.9g。

##### 石剣状石器（同図9）

比較的緻密な砂岩を石材とし、台形状の基部に先細りの刃部を造り出す。刃部は刃端がやや尖るが他は楕円形の断面を呈する。現存長9.5cm、基部最大幅5.1cm、重さ194.9g。石剣状石器としたが形態と石材から砥石である可能性もあり断定し難い。古墳前期中～後半の26号竪穴出土。



#### 砥石（同図11～26、第250図1～5）

第249図11～25は小形の砥石で、その中でも11～16は重量も軽く4から6は各側面を使用することから手持ち用と考えられる。11は古墳前期中葉の56号堅穴出土で30.5g。12は前期後半の20号出土で63.6gを測り、上下両面に×状の線刻と直線の刻みを入れる。13も同時期の45号からの出土で70.2g。14は弥生終末から古墳初の172号出土で69.5g。15は古墳前期中葉の37号出土で91.9g。16は古墳前期中葉の37号出土で56.2gを測る。11～13・15・16は頁岩製、14は砂岩製である。17～23は小形平置と考えられる砥石で片面又は両面の中央付近が使用により浅く窪む。18・22・23は頁岩、19は結晶片岩、17・20は砂岩、21は安山岩。17は古墳前期中葉の37号出土で4面使用。完形に近い18は弥生中期の262号出土で55.6g。19は古墳前期中葉の34A号出土で21.2g。20は古墳前期後半の22号出土で41.3g。21は古墳前期前葉の38号出土で198.4gと重量がある。22は古墳前期中葉の18号出土で110.9g。23は古墳前期中葉の272号出土で60.1g。24は100号、25は30号出土の小形砥石破片。26は完形の長方形中形砥石。幅5.8cm・長さ10.8cm・厚さ4.1cmを測り側面と背面には鉄製工具のケズリ痕を残し、古墳前期中葉の16号堅穴出土。

第250図1～4は大形の砥石で重量が1kgを越すもの。1は下半部分を欠くが側面4面を使用し重さ585.8g、古墳前期中葉の32号出土。2は弥生終末から古墳初の4号出土の砂岩製、3も同時期の172号出土の頁岩製砥石で上下を欠くが重さ875.1g。4は安山岩を利用したもので重さ1125.4gを測り、古墳前期中葉の37号出土。以上の砥石は鉄器に用いられたものであるが、5は木製製作・加工等に使用されたと考えられるもの。上面に幅1～2cmの帯状の使用痕が残り、弥生終末から古墳初めの14号堅穴出土。

#### 磨石・蔽石（第250図6～15、第251図1～3）

6・7は丸みをもつ先端付近に赤色顔料の部分的付着が認められ、ベンガラ類の粉砕具（石杵）として使用された可能性が強い石器である。6は粘板岩製磨石製石斧を転用したもので重さ168.5gを測り、古墳前期中葉の49号出土。7は安山岩を利用し弥生後期後葉の30号出土で重さ571.3g。

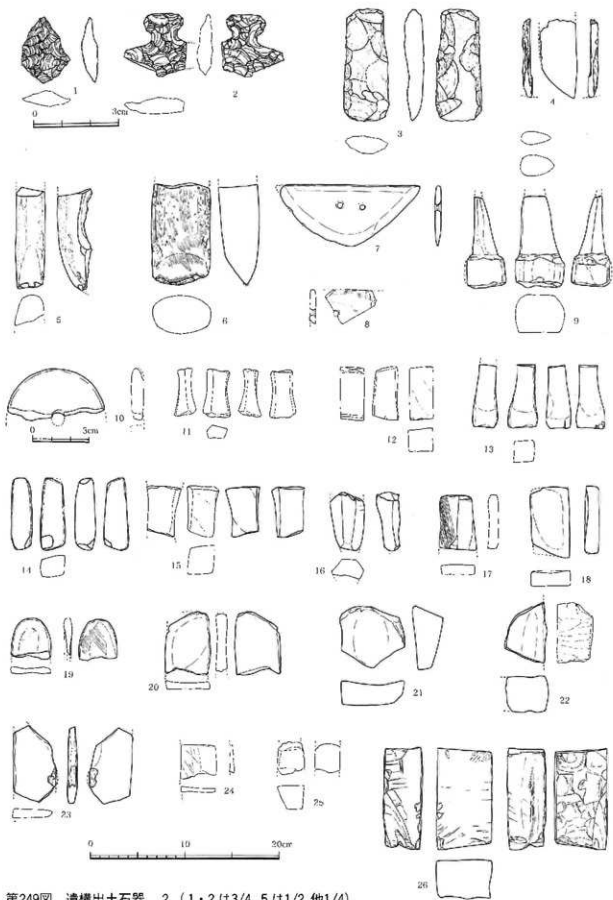
8～15は安山岩製の磨石で片面及び両面を使用する。8・9は弥生終末～古墳初の202号出土、10は古墳前期中葉の32号、11も同時期の2号、12は弥生終末～古墳初の267号、13は古墳前期後半の47号、14は弥生終末～古墳初の19号、15は古墳前期前葉の10号からの出土。

第251図1～3は磨石兼蔽石として使用されたものである。いずれも安山岩製で平坦面は磨石として利用し、1・3は上下に2は下に敲打痕跡が残る。1は弥生後期後葉の30号、2は弥生終末～古墳初の19号、3は弥生中期の262号からの出土である。また、この他にも10数点が出土しているが省略した。

#### 台石（第251図4～8、第252図）

本遺跡の東側を流れる市川の河原等から採取された安山岩を利用する。図示した他にも台石として使用された可能性を有するものも少なくないが、明らかな使用痕が観察されなかったことから割愛した。その殆どは屈折の少ない平坦面を使用するが、小形の台石には2面利用のものも認められる。

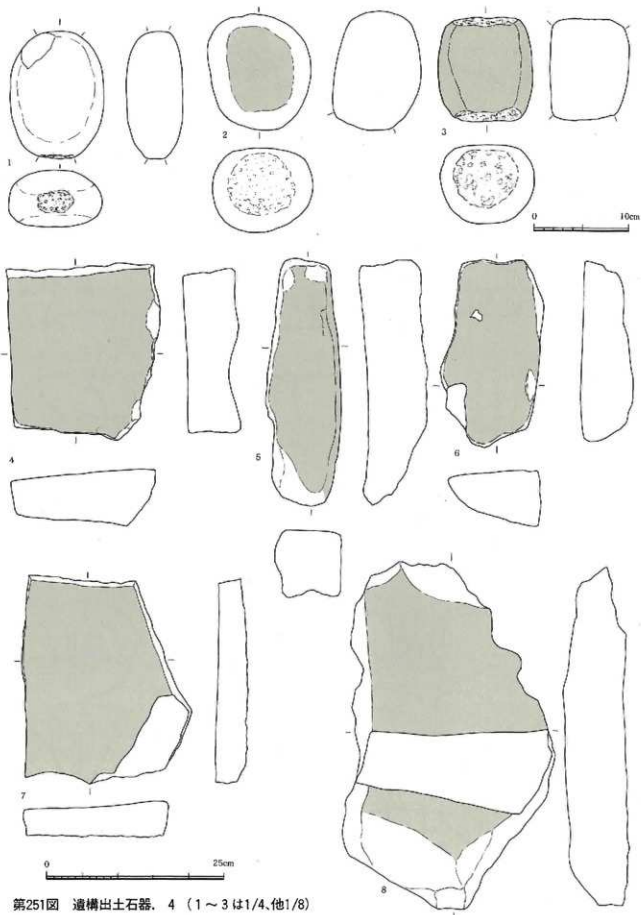
また、第252図5は1例のみではあるが赤色顔料が部分的に付着し前述したベンガラ類の粉砕具の台として用いられたものである。第251図4・7・8は各々古墳前期中葉の12・31・34号堅穴出土。5は時期不明の29号、6は弥生終末～古墳初の30号出土。第252図1・2は古墳前期中葉の37号と43号の出土である。3は古墳前期後半の175号、4・6は弥生中期の262号、5は弥生終末から古墳初の256号出土。



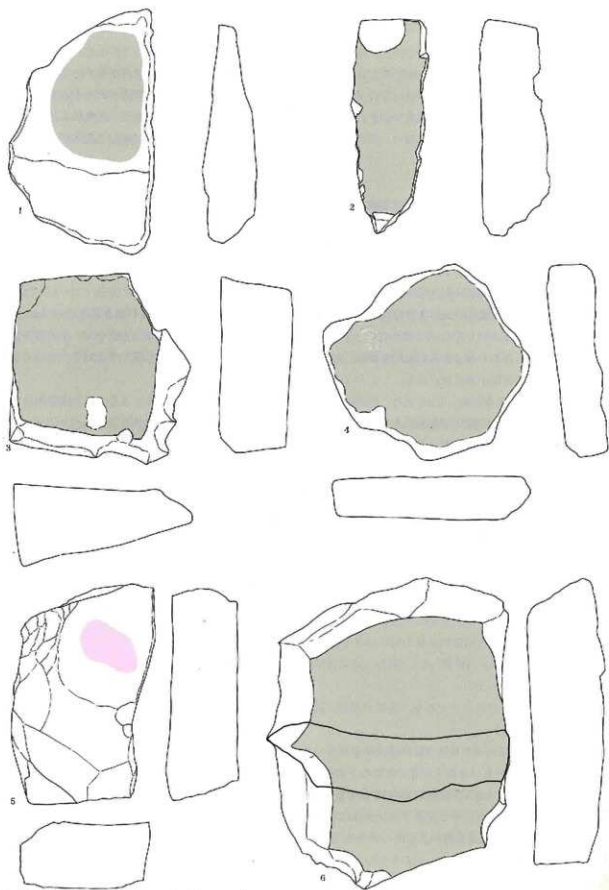
第249図 遺構出土石器。2 (1・2は3/4、5は1/2、他1/4)



第250图 遺構出土石器。3 (1/4)



第251図 遺構出土石器。4 (1~3は1/4,他1/8)



第252図 遺構出土石器. 5 (1/8)

## (10) 遺構出土の鉄器 (第253～255図)

各堅穴からは鉄鏃21点を始め、刀子10点、鉈4点、手鎌8点、斧2点、鎌1点、直刀1点などが出土した。その多くは本来の形状を保っていないが、これは発掘時点の破損に主原因があるものと思われる。従って、廃棄の段階や埋没後の腐食による破損・変形は少なく、ほぼ定形のまま堅穴内部に投棄又は埋置されたものと考えられる。また、この他にも器種不明の鉄片や215号堅穴(古墳前期前葉から中葉)からは輪刃口が検出されており、鍛冶道具の出土はなかったが集落内部で小鍛冶が行われていた可能性がある。以下、器種毎に説明する。

### 鐵 (第253図)

無葉と思われるもの1点以外は全て有茎鐵である。有茎鐵は鐵身の形状が柳葉形を呈するものや直頭・円頭斧箭式等に細分可能であるが、そのいずれとも判別し難いものも少なくここでは非頭式鐵として一括する。全長が10cmを超えるもの(1～3)と5～8cmの小形(7・14～16)に分けられるものの全形を保つものは7点と少ない。

1は長さ10.1cm、鐵身部の最大幅2.4cmを測る柳葉形に近いもので古墳前期前葉の51号出土。2～4もほぼ同じ形状をなし、2は全長10.4cm、鐵身部幅2.3cm。3の鐵身部幅は3cmと最も広く、4の鐵身部幅は2.5cm。2は39号、3は19号、4は34号堅穴からの出土でいずれも古墳前期中葉に属する。5は身の先端を欠くが円頭斧箭に近いもの。6は三角形の鐵身から直線的な個部に続くことから無葉の可能性のあるもの。5は34号、6は2号出土で両堅穴は古墳前期中葉に置かれる。

7は全長7.4cm、鐵身部幅1.6cmを測り、円頭に近い鐵身の最大部より直線的にすぼまるもので古墳前期前葉の41号堅穴出土。8・9は鐵先端部を除き楕円形に近い鐵身部をなし葉尻を欠く、鐵身部幅は1.9cmと1.8cmを測る。8は弥生終末から古墳初の31号、9は弥生後期後葉の271号堅穴出土。10は完形品で全長7.5cm、鐵身部幅2.2cmを測り鐵身最大部よりやや内湾しながら茎部に至る。古墳前期前葉の215号堅穴から出土。11・12も同様の器形を呈するもので、11は44号から12は38号堅穴から出土しいずれも古墳前期前葉に属する。13は鐵身の先が丸みを帯びるもので古墳前期中葉の37号出土。14は鐵身部の先が三角形をなし最大幅部よりやや急にすぼまる完形品、全長6.1cm、鐵身部最大幅1.8cmを測り弥生後期後葉の54号堅穴出土。15も同様の器形をなす完形品で全長5.3cm、鐵身部幅1.9cmで古墳前期中葉の18号出土。16は鐵身部最大幅が葉部に近い所にあるが明瞭な関は形成しない。古墳前期中葉の42号出土で、全長4.9cm、鐵身部幅1.4cmを測る。17・18はいずれも古墳前期中葉の100号、2号から出土。19は古墳前期前葉の38号出土。

20～24は鐵の葉部で24は大形品に入る。20は古墳前期後半の53号、21・23は弥生後期後葉の271号、22は古墳前期中葉の2号、24は古墳前期前葉の44号の各堅穴から出土。

### 刀子 (第254図1～10)

10点の全てが直背の葉刀子であり、関部が刃部に直角に形成されるもの(第254図2)とこれ以外の斜めに形成されるものがある。

1は全長9.1cm、茎部長2.0cm、関部幅1.2cmを測る完形品である。関部は斜めに造られ茎部には柄の木質が残る、茎尻側に直径0.3cmの丸い目釘穴が設けられる。古墳前期前葉の171号堅穴の上坑内から出土。2も完形品であり全長6.3cm、葉部長2.5cm、関部幅1.1cmを測る小形の刀子で古墳前期後半の210号堅穴出土。3は古墳前期前葉の38号出土の完形品、茎部がやや細長となり全長8.1cm、関部幅1.2cm、葉部長3.1cmを測る。4は茎部長が1.2cmとやや短く、関部幅は1.1cmを測り、刃部の切先を欠く。古墳前期後半の53号出土。5・6は切先と葉尻を欠損するが、5は関部に最大幅(2cm)があるもので6はやや細長の葉部に木質が残る。いずれも古墳前期中葉の39号出土。7・8は刃部の中程から茎部を欠き、刃部幅は0.9・1.2cmを測り両者とも古墳前期中葉の37号からの出土。9はやや丸みを帯びた切先と目釘穴をもつ葉部が残るもので、古墳前期前葉の44号出土。10は鋭くすぼまる関部

から刃部にかけて現存し、古墳前期中葉の32号から出土したもの。

#### 鏃 (第254図11~14)

刃部片2点と茎部片2点が出土している。11は鏃と裏すきがあり刃部断面は三角形に近い、現存長3.8cm、幅1cmを測り古墳前期前葉の44号堅穴出土。12は弥生後期後葉の54号の出土で、刃部に鏃が設けられず断面が三日月形に近いもの。現存長2.7cm、幅1.2cm。13・14は断面が長方形で板状をなす身の部分で、13は古墳前期中葉の100号から14も同時期の26号出土。

#### 手鎌 (第254図15~22)

15は長方形の鉄板の両端を折り曲げ、その間に別造りの鉄製当具を挿入するは定形の久住型手鎌である。刃部の全長5cm、幅1.5cmを測り刃部先端付近を欠く。当具の幅は中程で1.3cm、厚さ0.5cmを測り断面は楕円状を呈する。両端は細く突出し、刃部への陥没を防ぎ中央に小孔を穿つ。古墳前期前葉の213号堅穴出土。

16は両端を折り曲げその中に木製の背部を挟む一般の手鎌。全長5.2cm、幅1.4cmを測り、弥生終末から古墳初の202号出土。17~21もこれと同タイプの手鎌片で、17は銹着のため右側刃部の折り曲げは不明であるが全長7.1cm、幅2.3cmを測り、古墳前期中葉の273号出土。18は古墳前期中葉の39号。19は古墳前期前葉の171号、20は古墳前期後半の55号、21は古墳前期中葉の2号堅穴からの出土。22は片方の突出部を欠くが、久住型手鎌の当具と考えられるもの。古墳前期中葉の39号出土で現存長7.4cmを測り、1よりやや大形となる。

#### 斧 (第255図1・2)

1は柄の一部が袋部に装着されたままの状態での出土した完形の袋状鉄斧。袋部から刃部にかけてやや幅広い楕形の平面形を呈し、全長7.1cm、刃部幅4.0cmを測り、袋部は長方形に近い形態をなす。古墳前期後半の175号堅穴から出土。2は鉄斧の刃部周辺と考えられるが、刃先と両側縁等を欠損するためはっきりしない。古墳前期中葉に置かれる13号堅穴の出土。

#### 鎌 (第255図3)

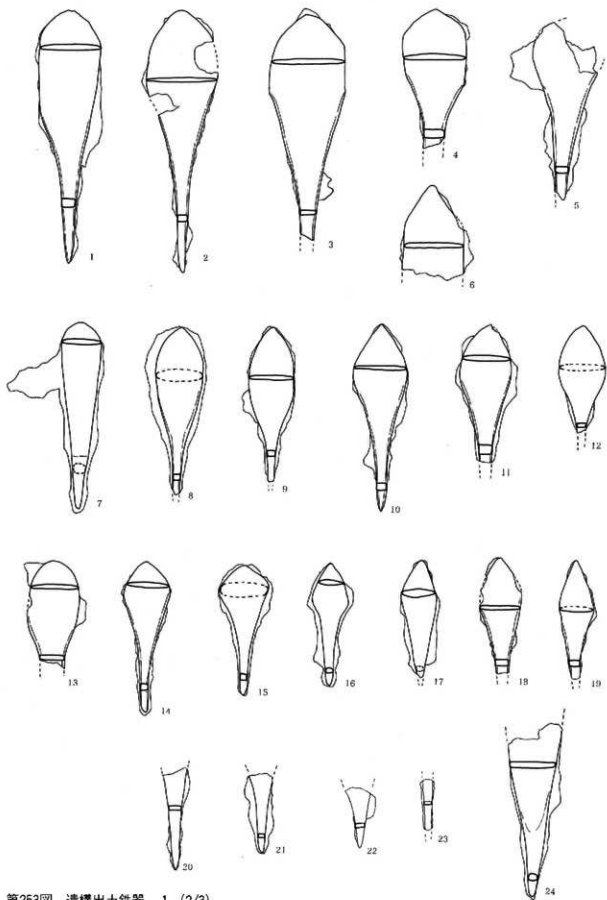
3は長方形の鉄板の一端を折り曲げて柄着装部を形成する完形の直刃鎌である。刃部先端は背部にかけて短くなり、刃部中央付近は使用のため僅かに摩滅する。古墳前期中葉の56号堅穴の出土で全長11.9cm、刃部中央の幅2.5cmを測る。

#### 直刀 (第255図4)

4は切先から刀身中程の破片で関や茎部を欠く直刀。現存長24cm、刃幅1.7cm、背幅0.4cmを測り、古墳前期後半の23号堅穴の壙に接し出土したものである。

#### 器種不明の鉄器 (第255図5~12)

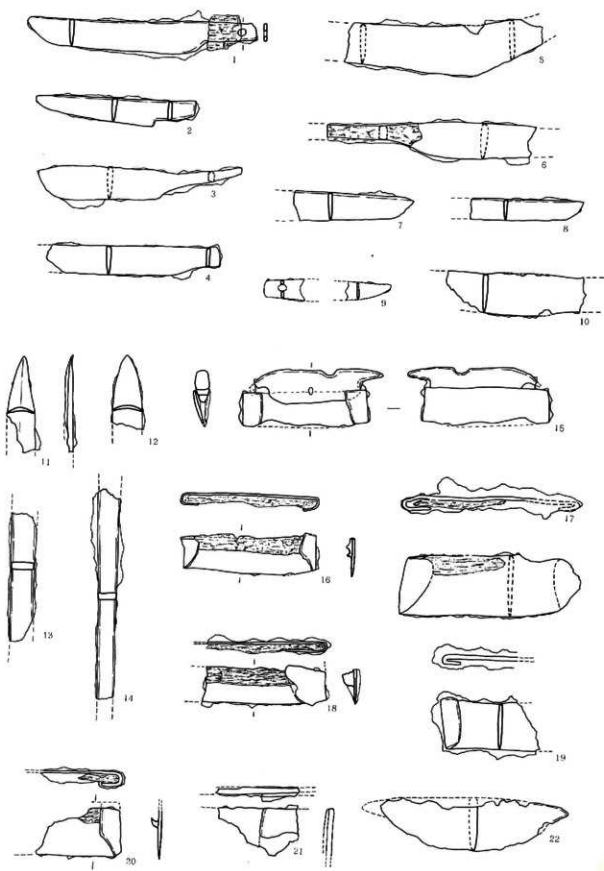
5~13は小片のためその器種を明確にし難いものであり、中には製作段階に不要となったものも含まれよう。5は幅2.6cmの鉄板の一端を折り曲げるもので、手鎌の可能性をもつがはっきりしない。6~9は幅1.1~1.5cmの板状鉄片で、10は先端鋭い三角形に尖るもの。11は不定形の小孔が開けられ、12は厚さ0.25cmの針金状の鉄線を折り曲げたものである。5は弥生終末から古墳初の31号、6は古墳前期中葉の37号、7は古墳前期前葉の38号、8は条痕溝、9は古墳前期前葉の213号、10・11は古墳前期後半の47号、12は古墳前期後半の175号からの出土である。



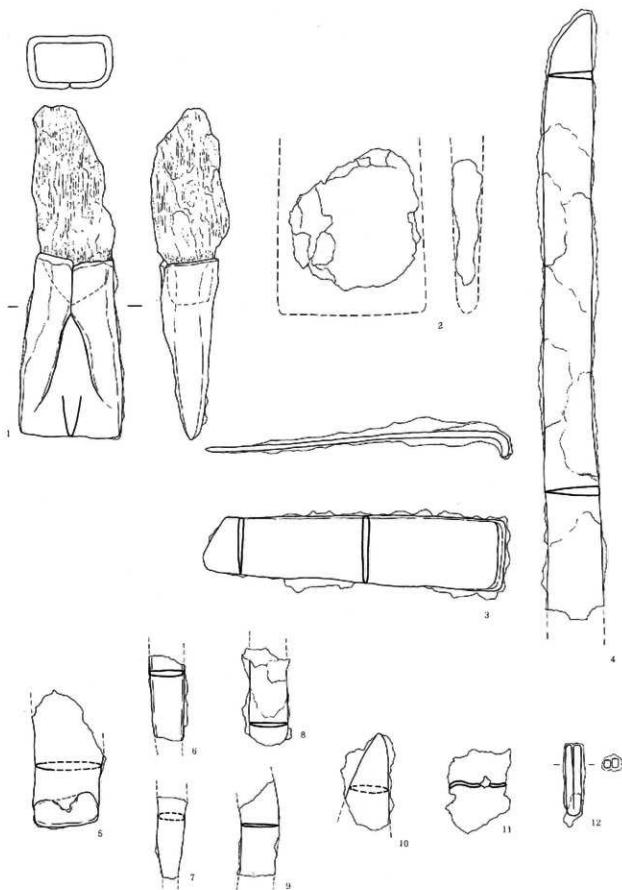
第253図 遺構出土鉄器。1 (2/3)







第254図 遺構出土鉄器。2 (2/3)



第255図 遺構出土鉄器. 3 (2/3)



## (II) A区未調査の竪穴採取土器 (第256-271図)

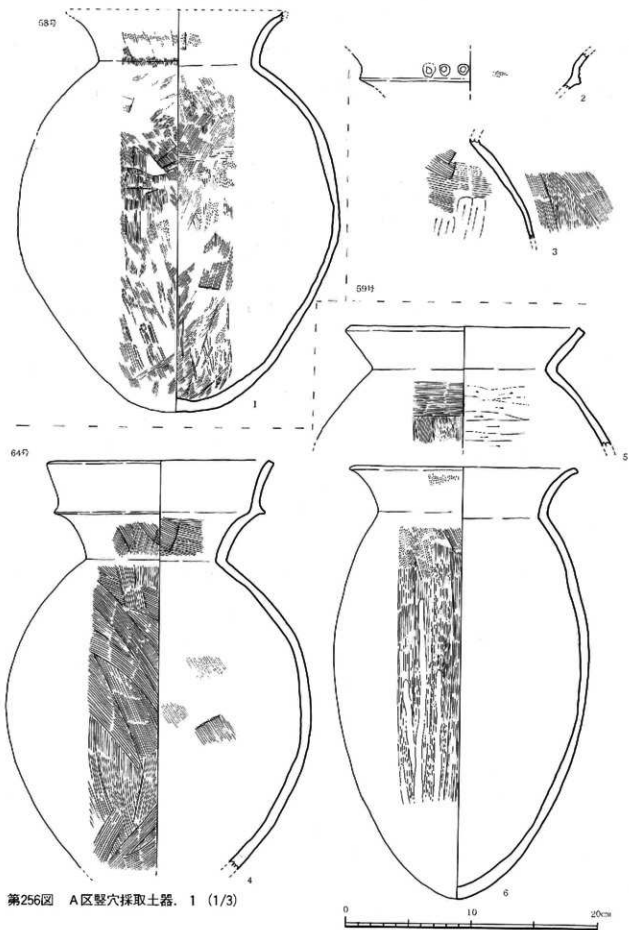
A区において検出された230基の竪穴のうち未調査の竪穴は147基を数える。この未調査の竪穴の検出面に現れた各々の形成時期を示す土器類はほぼ全て採取した。その結果、時期把握が可能となった竪穴は51基に上り、調査済の竪穴の中で時期不明の2基を除く計78基、B区の12基とC区の9基を併せ150基の所属時期が判明したことになる。

第256図1はA区南東部に位置する大規模竪穴(約9×7.5m)である58号から採取した長頸壺と思われるもの。やや張出しの強い胴部から不安定な丸底の底部に至り、内外面とも縦・斜め方向のハケによる調整。胎土に角閃石等を多く含む在地系土器で古墳時代前期前葉に置かれよう。2・3は58号の東側にある中規模の59号(約5.5×4.5m)に伴う二重口縁壺の口縁部片と甕の胴部片である。壺の屈曲部外面には半截竹管状工具による凹文を施し胎土に砂粒をあまり含まない搬入品と思われる。甕の内面はヘラケズリのちハケを部分的に施す。この2点は古墳前期中葉に置かれよう。4～6は59号の南東側にある64号から採取された壺と甕である。4はI口縁部がやや外に開き、胴部の張る複合I口縁壺。5は布留式模倣甕で胴部外面は縦方向のハケのち肩部に横ハケを加え、内面はケズリのちナデ。6は反外しながら開くI口縁部に長胴の胴部を付し底部は丸底となる在来系甕。6は弥生後期末末から古墳初に置かれるが、5・6は古墳前期中葉と考えられ64号もこの時期の所産と判断されるが、本竪穴の東側は調査区の外に続き時期重複の可能性がある。

第258図1は64号の南西部、集団墓地の北を区切る位置にある66号(約4.5×4m)に伴う脚付鉢。脚部内面を除き赤色顔料を塗り弥生後期後葉に置かれよう。2は集団墓の東限にあり調査区の外に続く67号採取の底部、丸底をなす甕又は壺の底部であり弥生終末から古墳初に比定されよう。3・4はA区南端において南北に3基重複する竪穴の中央に位置する73号(約6×5.5m)採取の壺と高坏である。壺口縁部の内傾はやや弱く、高坏の坏部は緩く屈曲することから弥生終末から古墳初に考えられる。5は73号の北側にありこれに先行すると判断された74号竪穴採取の甕底部片。平底を呈することから弥生後期後葉に置かれよう。6は複合I口縁壺のI口縁部で7は偏球形の胴部に僅かに外に開くI口縁部を付す鉢、73号の西に位置する中規模の75号(約5×5m)に伴うもので古墳前期前葉に置かれるものか。8・9は74号の北、集団墓の西南を区切る位置にある80号(約5.5×6m)採取の土器である。8は弥生中期後半の須玖式系甕で混入と思われるが、9は弥生後期後葉頃の複合I口縁壺の胴部片で肩の張りがやや弱いもの。9から80号の所属は弥生後期後葉を中心とする時期に置かれよう。

第259図は80号の西にある81号(約6×4m)採取の土器。1は肥後系黒雲式の、2は北部九州系の跳ね上げI口縁の甕。3は鋸先I口縁をなし上面に凹浮文を施す須玖式系の壺I口縁部で4は外面片塗りの壺胴部。5・6は広I口縁の口縁部と胴部で同一個体と思われるもの。7と8も人形壺の胴部片で、7は上半にM字状を中位に三角形突帯を巡らせ、8は中位に三角形突帯を施す。これらは胎土にいずれも石英を多く含む。以上の土器は弥生中期後半に比定され、81号竪穴の時期もここに置かれる。

第260図1は集団墓と一部重複する82号竪穴採取の壺の口縁から頸部片。同竪穴の上面プランは不明確であるが、石英を多く含む壺は弥生中期前半と考えられ円形竪穴の可能性はある。2は82号の西に位置する小形の83号竪穴(約3×2m)から採取された甕で、口縁部の延びは比較的短くわずかに肩の張る胴部に続く。この土器の時期比定はやや困難ではあるが、本遺跡では数少ない弥生後期前半から中頃と考えられよう。3・4は83号の西側で4基が重複する中の86号竪穴(約6×5m)から採取したものである。3は小形の甕のI口縁から胴部片で、4は長頸壺の頸部から胴部で胴部は卵球形に近いものか。4の外面はタタキのち縦方向のハケ、内面は縦・横方向のハケによる調整である。胎土はいずれも在地系と思われ、弥生後期末末から古墳初に置かれよう。5は古墳前期中葉の小形の鉢と思われるもので、83号の西北に位置する91号竪穴(約6.5×6m)から採取した。6は83号の北にあり、95号と重複し凹浮文をなすと考えられる92号竪穴(直径約8m)に伴う小形壺。底部はやや厚い平底をなし、外面はミガキによる調整で弥生中期前半に置かれよう。7は92号と58号の間に位置し、2基重複する竪穴の南側にある93号(約5.5×4.5m)採取の複合I口縁壺のI口縁部片であるが、小片のため弥生後期後葉か



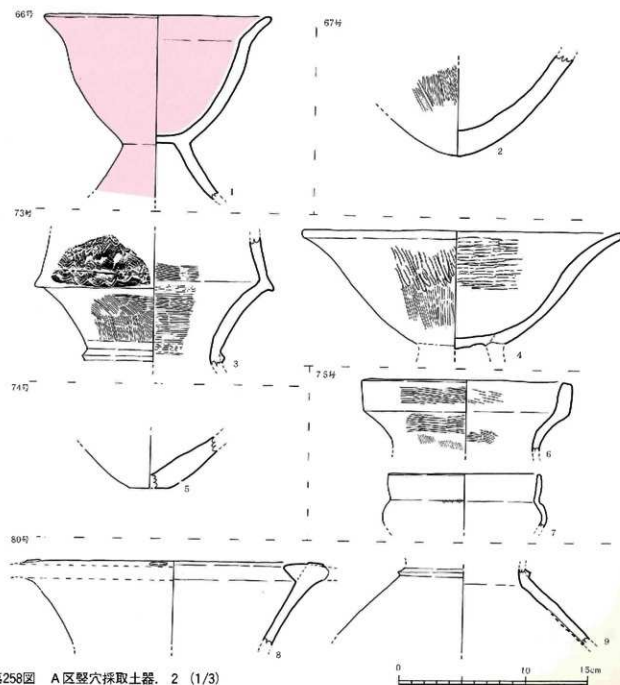
第256图 A区竖穴采取土器. 1 (1/3)

ら古墳前期前半のどの時期かは明らかにし  
 難い。

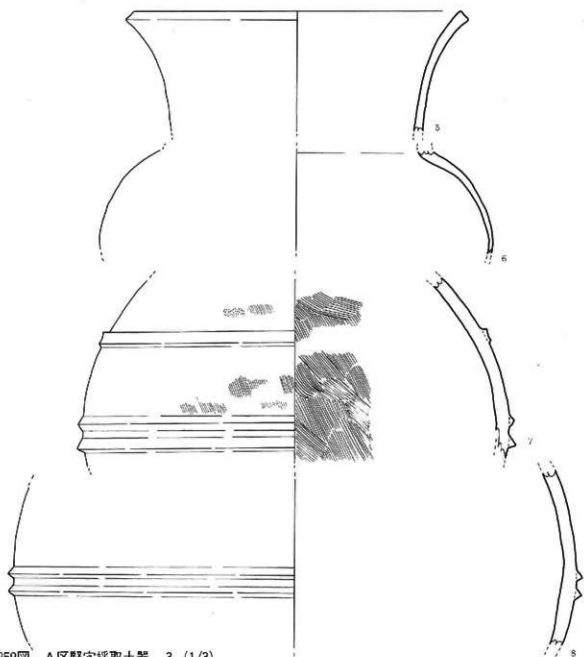
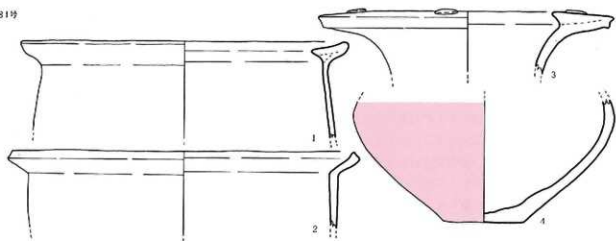
第262図1・2は92号の北部を切り形成  
 された大形の95号堅穴(約8.5×6.5m)か  
 ら採取した粗製甕と甕の底部である。1は  
 緩く反転して開く口縁部からやや張りの弱  
 い胴部に続き底部は丸底を早する。ナデを  
 土調整とし、口径29cm、器高32.8cmを測り  
 胎上に角閃石等を多く含む。これらの土器  
 は弥生終末から古墳初に置かれよう。3は  
 内面ミガキ調整で短い脚部を付す鉢、A区



第257図 土器採取堅穴の位置。1



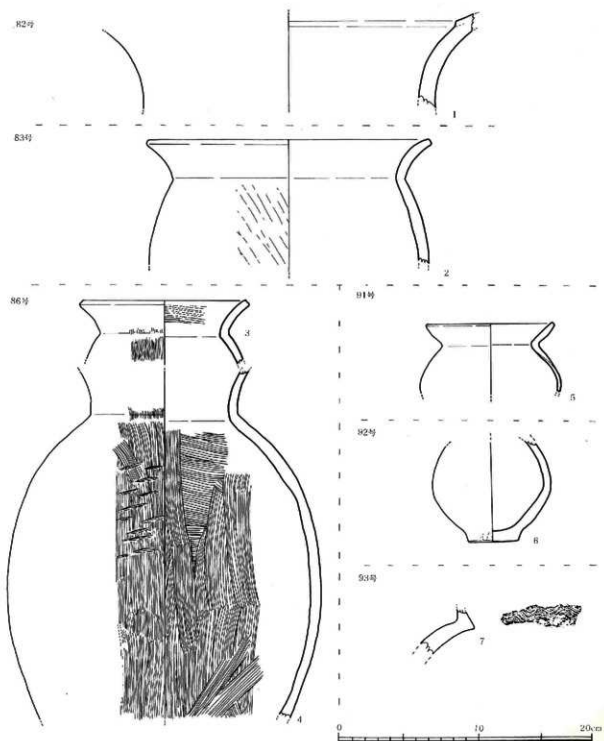
第258図 A区堅穴採取土器。2 (1/3)



第259图 A区竖穴採取土器。3 (1/3)



中央西寄りの小規模竪穴110号（約4×4m）から採取、古墳前期前葉頃と考えられる。4・5は110号の東側にある112号竪穴から採取した。112号は同様に小形の111号・113号竪穴と重複し、平面プランは約3×3mの方形と思われたが重複するものも含め確実ではない。4はやや上底気味の平底を呈する甕の底部、5は下城式の甕の口縁部でいずれも弥生中期前半に置かれる。6・7は113号採取の鋤先口縁をなす高坏の口縁部と黒炭式と思われる甕の口縁部片、いずれも胎土に石英を含む搬入品であり弥生中期後半でも置く置かれるものか。8・9はA区中央やや南側にある116号竪穴（約6.5×6.5m）に伴う甕の胴部と底部。胴部の内面はケズリのちハケを部分的に加え、外面は斜め方向のミガキによる。9は丸底の底部中央が僅かに窪むもので金雲母を含む。これらは弥生



第260図 A区竪穴採取土器。4 (1/3)

終末から古墳初に置かれよう。10は116号の北西に位置する117号竪穴（約5.5×4m）に伴う高坏の脚部、脚部は長脚をなし外面は縦方向のミガキによるもので弥生終末から古墳初に置かれるものか。11は胴部と口縁部の境にやや低い三角形突帯を巡らす甕の破片、116号の西側に位置する119号竪穴（約6.5×5m）採取。屈曲部の締まりが弱いことから弥生後期後葉に比定されよう。12は口縁部の開きが浅く胴部の張りも弱い小形の甕で、119号西側の120号竪穴（約5.5×4m）から採取。胴部外面の調整は横ハケを主とし内面は弱いミガキ、古墳前期後半に置かれるものか。



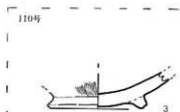
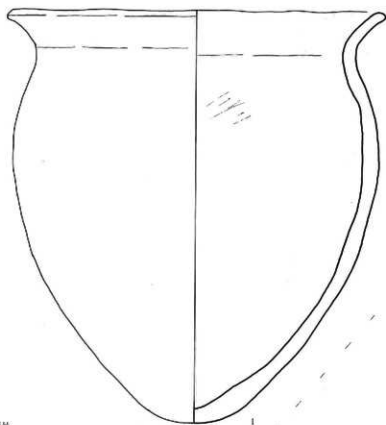
第261図 土器採取竪穴の位置(2)

第263図1～3は110号の西北にある中規模の126号竪穴（約6.5×5.5m）採取土器。1は口径32cmを測る大形の複合口縁甕で口縁部はやや短く内傾し、外面に3段の横溝波状文を下から上に描く。2は116号部の開きがより直線的となる無頸甕、3は外面の調整がタタキによる丸底の甕底部である。これらの土器は弥生終末から古墳初に比定される。4は長胴の胴部から丸底の底部に至る甕で外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケによる調整。126号の北側に127号竪穴（約6×5m）の採取で弥生終末から古墳初に置かれよう。5・6はA区のほぼ中央に位置し大小2基重複する中で小形の131A号竪穴採取の甕。5は完形で口縁部付近が外反気味に屈折して開き、胴部から底部は球形に近く張り出すが頸部の締まりはやや弱い。外面は縦・斜め方向のハケ、内面はヘラケズリののち一部ミガキによる。口径14.8cm、器高22cmを測り胎土は在地系と思われる。6も同様の器形と調整を呈する甕で口縁部を欠く。これらの甕は古墳前期後半に比定されるものである。7はこれに先行すると考えられる131B号（約7×6m）出土の甕の口縁から胴部片。外反しやや強く外に開く口縁部から頸部で屈曲し肩の張る胴部に続く。外面は縦・斜め方向のハケ、胴部内面は縦方向のハケののちミガキを粗く施すもので石英を多く含む弥生後期前半に比定される。

第264図1はA区西側中央にあり竪穴5～7基（134～139号）が重複すると思われる中で南東に位置する135号から採取した甕。口縁部は直線的に斜上方に開き、胴部から底部は卵球形をなす。外面は粗い斜め方向のハケ、内面はヘラケズリののち肩にハケを施す。口径14.4cm、器高25cmを測り、古墳前期中葉に置かれよう。2・3はその北西部にある137号竪穴採取である。2は丸底をなすやや深い甕で外面は横方向のミガキによる。3は外面は縦方向のミガキ、内面はケズリによる高坏の脚部で短脚を呈すると思われる。これらは古墳中期前半の所産か。4は137号の北部に位置するが複雑に重複するためプランは不明確である148号竪穴採取の甕口縁部。跳ね上げ口縁をなし弥生中期後半に置かれる。5・6は139号竪穴（約6×5.5m）採取の複合口縁甕と甕の底部。甕の口縁部は内傾して立ち上がり横溝波状文を施す。底部はやや厚い丸底をなし、外面はケズリとタタキによる調整でこれらは弥生終末から古墳初に置かれよう。7・8は139号の西に位置し小形の竪穴2基が僅かに重なる中で西側に141号（約3.5×3m）採取の甕。7は狭く開く口縁部から長胴の胴部に続き、底部は丸底をなす。外面はやや粗いミガキ、内面はハケのちなデによる調整。口径14.2cm、器高33.2cmを測り胎土は在地系。8は同様の口縁部をなすと思われるが口縁部を欠き、胴部は下膨れとなり底部は尖り気味の丸底を呈する。これらは弥生後期後葉と考えられる。

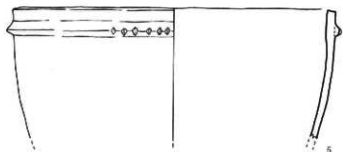
第265図1はA区西端部にあり143・144号の2基重複する中の144号採取の甕頸部。頸部の締まりはやや弱く、胴部との境に三角形の刻目突帯を巡らし、弥生後期後葉に属するものか。2は丸底の甕で144号の東側に位置する145号（約6×5m）採取。器高はやや低く外面はハケ、内面はハケのちミガキによるもので古墳前期中葉に比定される。3～5は148号の東側にあり重複する3基の竪穴（150～152号）の中央にある151号から採取した土



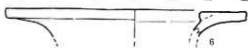


95号

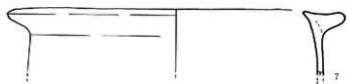
112号



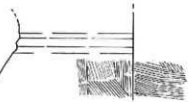
113号



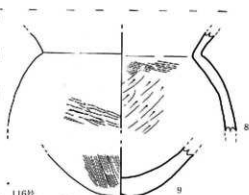
6



119号

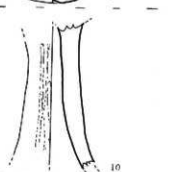


11

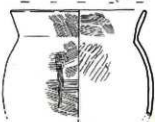


116号

117号

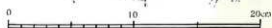


120号

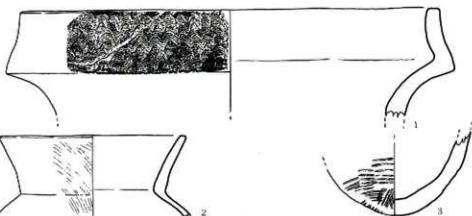


12

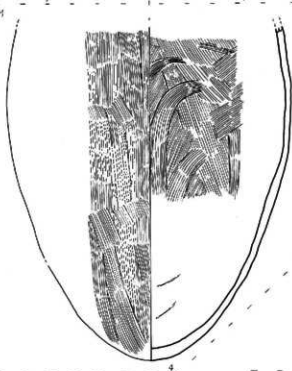
第262图 A区竖穴探取土器. 5 (1/3)



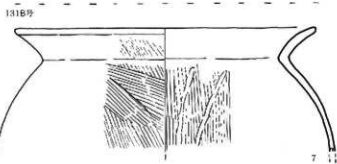
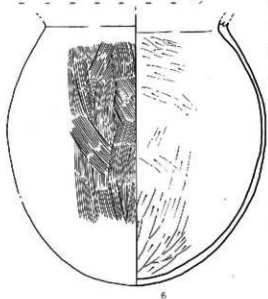
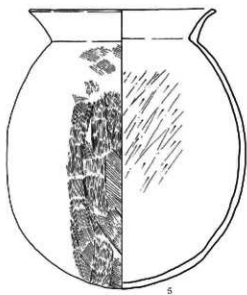
1269



1274

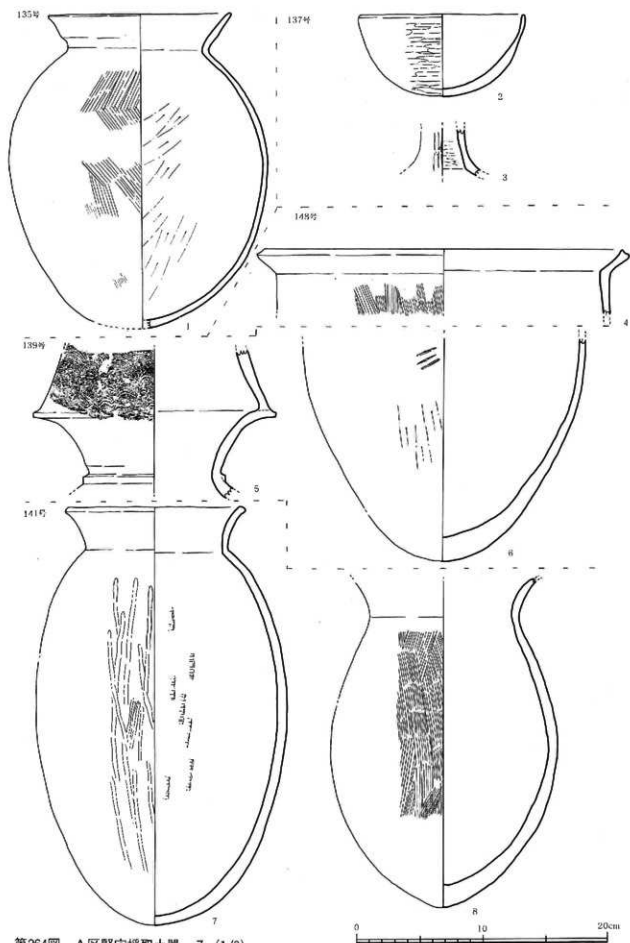


131A号



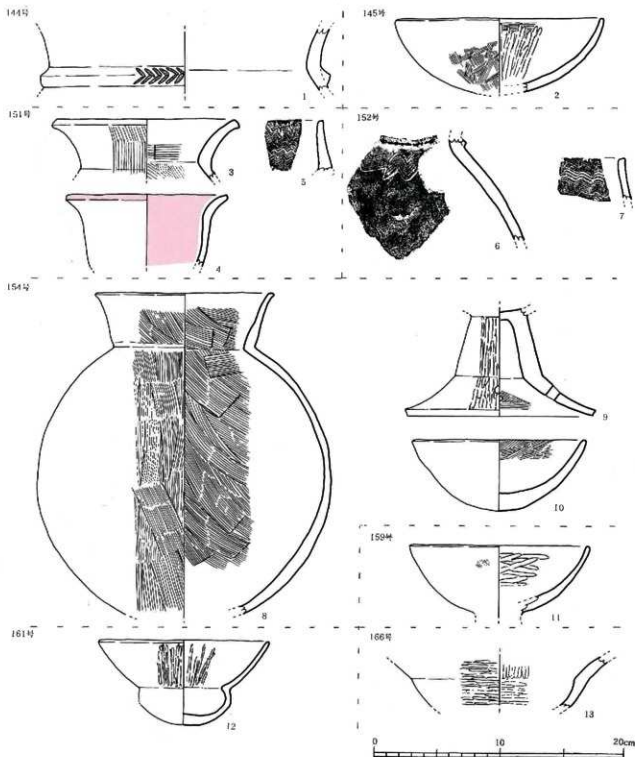
第263图 A区壁穴采取土器。6 (1/3)





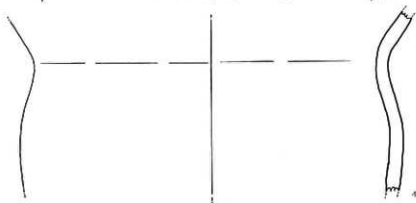
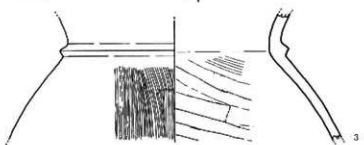
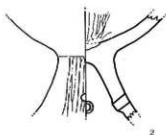
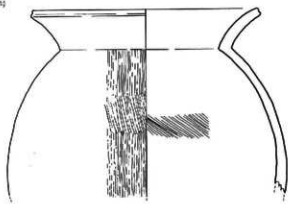
第264图 A区竖穴采取土器。7 (1/3)

器。3は内外面ともハケ調整の壺口縁部、4は高杯の杯部で口唇部から杯部内面に赤色顔料を塗る。5は口縁部が内傾する複合口縁壺の口縁で、これらの土器は弥生後期後葉に置かれるものか。6・7はその南側に重なって検出された152号から採取された壺の胴部片と口縁部片。6は胴部との境に三角突帯を巡らせ、その下位に櫛描波状文を施す。7は口縁部の延びが大きいと思われる壺の口縁部。時期決定にやや躊躇するが弥生終末から古墳初に比定することとする。8～10は145号の北西に位置する小形の154号(約4.5×3m)から採取した土器。8はほぼ直線的に開く口縁部に球形の胴部を付す無頸壺で内外面ともハケによる。9は外面縦方向のミガキによる

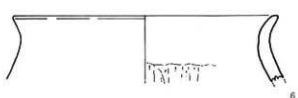
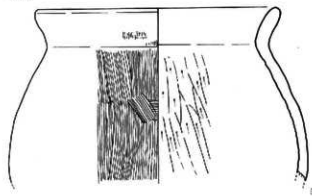


第265図 A区壁穴採取土器。8 (1/3)

177号



181号



187号



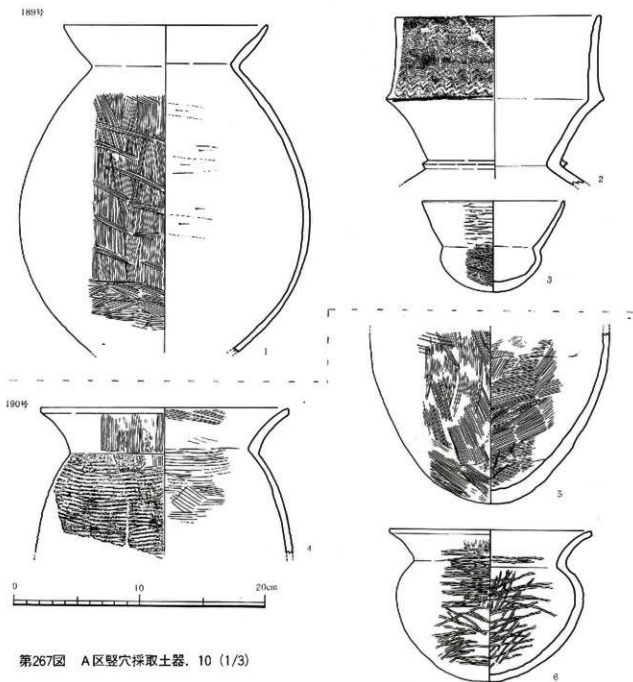
第266图 A区整穴采取土器。9 (1/3)



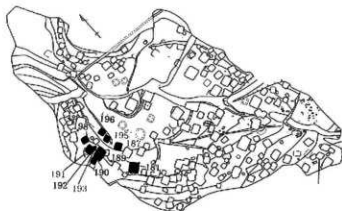
る高坏の脚部で裾部は屈曲して開く。10はやや厚い丸底をなす椀。これらは古墳前期前葉に置かれる。11はその北に位置する中規模の159号（約6.5×5.5m）に伴う器台の受部と考えられるもの。受部は碗状を呈し内面ミガキ調整で、古墳前期前葉に比定されるものか。12は159号の東にある161号（約5.5×5m）から採取された小型丸底壺で古墳前期中葉に置かれよう。13は高坏の坏部片で、A区中央において4基（164～167号）重複する中で最大の166号（約9×7.5m）採取。内外面ともミガキにより、弥生終末から古墳初に置かれるものか。

第266図1～4は177号（約5.5×5m）採取の上器で1は長胴と思われるがやや胴部の膨らむ甕、2は坏底部が丸みをもつ高坏。3・4は甕の胴部片で、これらは弥生終末から古墳初に置かれよう。5・6は大形の181号（約8×7.5m）に伴う甕である。口縁部はやや短く反転して開き、いずれも頸部の締まりが弱いもので古墳中期に比定される。7は弥生終末から古墳初の高坏の坏部で187号（約7×5.5m）から採取したもの。

第267図1～3は187号の西北にある大形の189号（約10×7.5m）採取。1は胴部がややド膨れの球形をなす甕



で、外面は縦方向のハケののち横ハケを部分的に加える。2はほぼ直立し長く延びる口縁部をもつ複合口縁壺、3は精良な胎土による小型丸底壺。これらは古墳前期中葉の典型例の一つと言えよう。4～6は189号の西に接する190号（約5×4.5m）採取の上器。4は丁寧なタタキによる甕で、5はタタキののちハケを施す甕の底部。6は小形の鉢で内外面ともミガキによる仕上げ。これらは弥生終末から古墳初に置かれよう。



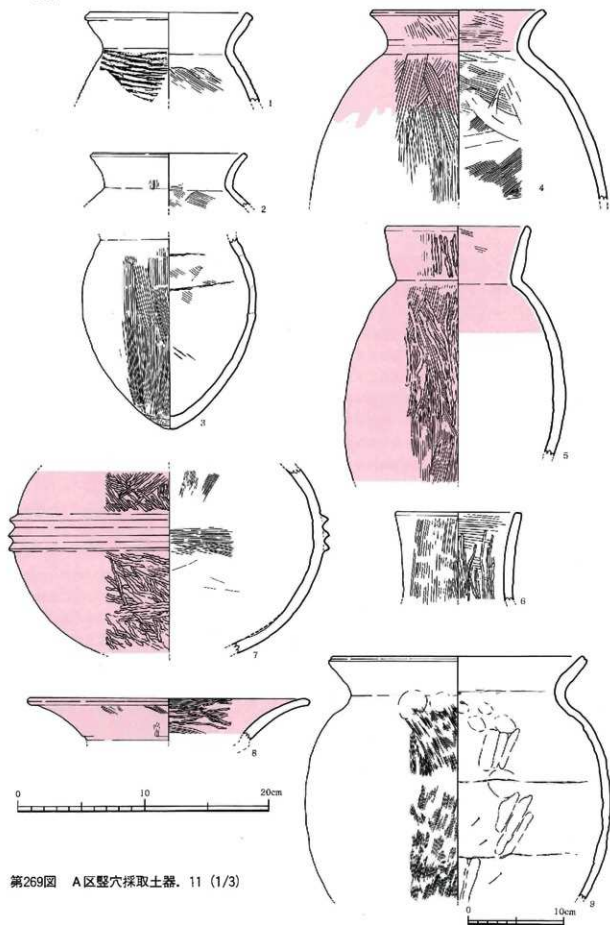
第268図 A区未調査壺穴の位置(3)

第269図1～9は189号の北に接し重複する3基(191～193号)の中で西側に位

置する191号採取土器であるが9は192号に本来伴う可能性が高い。1～3は甕の口縁部と胴部で、1はやや幅の広いタタキが見られる甕入品で、3は僅かに窪む小さな平底をなし石炭を多く含む。4は口縁部が緩く反転して開く無頸壺、5は膨らみの弱い胴部に口縁部を付す短頸壺。6は長頸壺の口縁部片で、7は同様の壺の胴部と思われるもの。8は外反して大きく開く高坏の口縁部。9は粗製甕の口縁から胴部で、胴部のやや膨らむもの。4～9は在地系の胎土であり、これらの土器は9を除き弥生後期後葉と思われる。

第270図1～4は192号壺穴採取土器である。1は僅かに窪む底部から膨らみをもつ長胴の胴部に続き口縁部は緩く開く甕で、外面は縦方向のハケにより内面は粗いミガキによる。2は口縁部付近が反転して大きく開くほぼ完形の無頸壺。胴部の膨らみは大きく、底部は丸底をなす。胴部外面は縦方向のハケののち底部周辺にミガキを加え、胎土に角閃石・灰色粒等を多く含む在地系。3は卵球形に近い胴部をもつ複合口縁壺で金窓母を多く含む。4は大形の在地系複合口縁壺で口縁部は内傾しながらやや長く延び、卵球形の胴部中途に断面台形の刻目突帯を巡らす。これらの土器は弥生終末から古墳初に置かれよう。

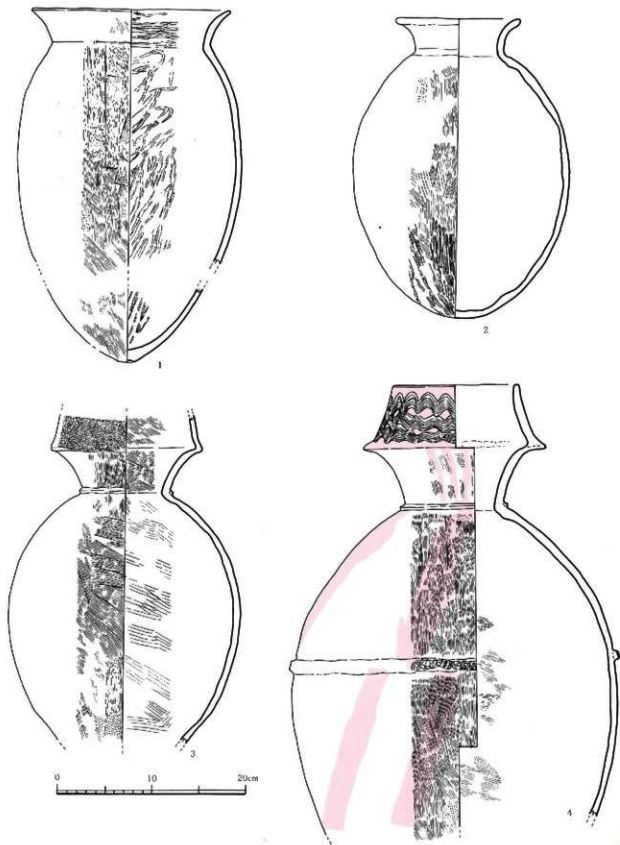
第271図1～5は193号採取の土器であるが5は木道構に伴わない可能性がある。1・2は無頸壺で1の胴部内面はヘラケズリにより、2はより直線的に開く口縁部をもつ。3は直線的に外に開く甕の口縁部で、4は小形の丸底を呈すると思われる鉢で内外にミガキを加える。5は高坏の脚部。胎土はいずれも在地系であり、1～4は古墳前期前葉に置かれるものか。6・7は195号（約5.5×4.5m）採取の高坏脚部と複合口縁壺の胴部片。脚部は反転しながら大きく外に張り出し、壺の胴部はやや長胴の胴部の上位に刻目突帯を巡らせその上部に窓状の彩文を描く。これらの胎土は在地系であり、いずれも弥生後期後葉に置かれよう。8～12は195号の北に近接する196号採取の上器。8・9は複合口縁壺の口縁から頸部で8は口縁部の内傾がやや弱く、9はより内傾するもの。いずれも3段の勝波状文を施し、8は在地系胎土であるが9には石炭が多く含まれる。10は脚付鉢で金窓母を含む。11・12は高坏の坏底部と脚柱部。以上の土器は弥生終末から古墳初に置かれよう。13は192号の北側にある198号（約6×5m）に伴う甕。斜めに開く口縁部から頸部で屈曲しほぼ球形の胴部に続く、角閃石や灰色粒を多く含む在地系胎土による。古墳前期後半に置かれるものか。



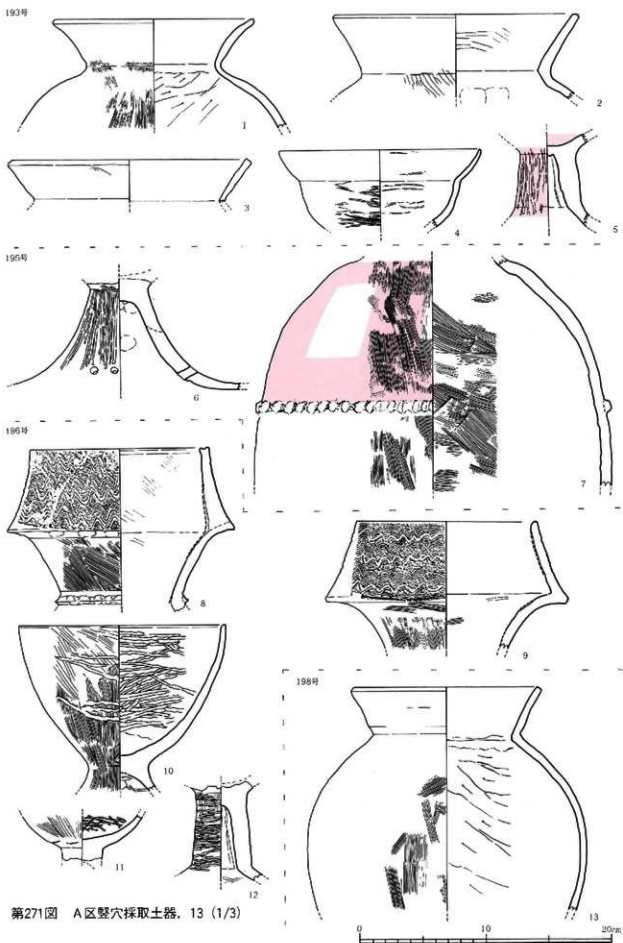
第269图 A区整穴采取土器. 11 (1/3)



192号



第270图 A区竖穴探取土器. 12 (1/4)



第271图 A区竖穴採取土器. 13 (1/3)

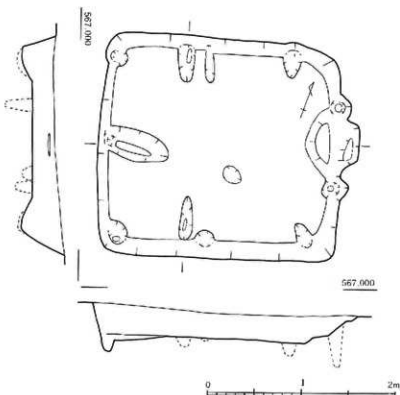
#### 第4節 中世の遺構と遺物

中世の遺構にはB区東側において検出された堅穴遺構2基と柱穴群がある(第272図)。柱穴は密集し数棟の掘立柱建物を形成すると考えられるが、明確な建物としては把握されなかった。堅穴は当初263・264号と番号を付したものであるが内部調査の結果、中世の所産であることが判明したことから中世遺構1・2に変更する。また、A区では平安期に遡ると推定される溝2条が検出された。これは用水路と見做されるもので牛馬骨・歯等も出土したが内部の掘り下げは部分的に止まることから省略する。



第272図 中世遺構の位置

中世遺構1(第273図)はやや東西に長い隅丸長方形プランをなし長辺2.5m、短辺2.3m、検出面から床面までは約0.3mを測る。西側辺の中央部には2段の階段状施設が設けられ、その両脇には一対の柱穴が伴うことからここが出入口と考えられる。床面はほぼ平坦となり東西の両隣の4箇所にはやや浅い柱穴が、西側床面の三方に壁から中心に向かう長楕円状の掘込みが認められる。この掘込みは柱穴の掘方とは異なり内部の区画又は彫穴内に設けられた棚等の施設に伴う可能性が高いものと思われる。内部からの遺物はほぼ皆無であるが、埋土は古墳時代から弥生時代の遺構内部の土と色調や土質において明らかに異なる。規模や構造等から倉庫(地下蔵)と見做されよう。

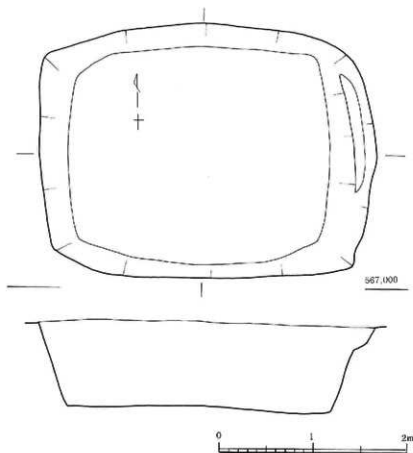


第273図 中世遺構. 1 (1/40)

中世遺構2(第274図)東西に長い長方形プランをなすが両長辺と東側短辺はやや膨らみをもち外側に張り出す。長辺3.2~3.6m、短

#### 中世遺構2(第274図)

東西に長い長方形プランをなすが両長辺と東側短辺はやや膨らみをもち外側に張り出す。長辺3.2~3.6m、短



第274図 中世遺構 2 (1/40)

辺2.2～2.7m、深さ0.9mを測る。やや外に張り出した東側短辺には上面より深さ約0.2mの所で幅0.1m余りの段が認められるが出入11に伴うものが明確ではない。床面はほぼ平坦となるが柱穴等の遺構は全く検出されなかった。内部から遺物の出土は無いが埋土の状況は中世遺構1と類似し、これと同様の性格が考えられよう。

### 中世遺構3 (第275図)

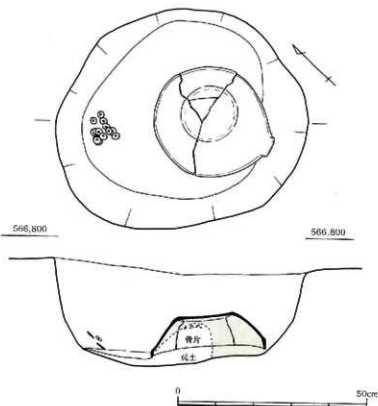
前述の2基の竪穴の間には多数の柱穴と小土坑が分布するが、本遺構はその中央部の南西にある直径0.67m余りの不整形形をなす土壇である。土壇を中心とする直径約3mの範囲は柱穴の分布しない空間地が認められる。土壇内の南東部からは完形の片口瓦質摺鉢が伏せた状態で、その西側には29枚の銭貨がまとまって検出された。銭は布等の袋に入れて一括埋納したと考えられ、一部(7枚)遊離したものの以外は密着状態で出土した。摺鉢の内側全面は炭状の炭化物に覆われており、その内部の西半部分には細かい炭化物を含む高さ約0.1mの焼上の高まりが検出された。

焼上の頂部には頭骨の部分骨と思われる薄い骨片が認められたが、いずれも細片であり焼けて脆い状態のため取り上げ中に粉末化した。また、焼土は土壇の西側床面にも薄く分布している。これらの所見から、別の場所で焼かれた人骨の部分骨(頭骨か)を焼土と共に炭状の植物の茎に包み摺鉢に入れ、摺鉢は初め土壇床面の中央から西側に伏せて置いたものを壁側にずらしたと判断される。これにより摺鉢内の焼土は一部が西側床面に残り、摺鉢内部では片寄った地積となった。その後、空間となった所に銅銭29枚を副葬したものと考えられる。銅銭は全て敲打と磨きを受け薄く銭文が不鮮明となり、11枚はほぼ完全に銭文が消滅する。このような埋葬処理及び銭貨の副葬は特異な事例であり、被葬者は一般死ではなく異常死したものと推定されよう。

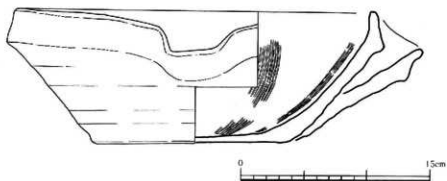
第276図に示した摺鉢は平底の底部から斜めに開く体部に続き、口縁部との境で屈曲しほぼ直立する口縁部の一部を押し出し片口の注口部分を設ける。体部から内底部の外側に8条1単位の溝目をやや間隔を置き計

10単位を施す。体部にはロクロ目が残る。黒・灰色粒をやや多く含む淡青灰色を呈する。胎上・色調は東播系に近いが類例に乏しく産地については不明。口径28.8cm、器高15cmを測り、15世紀後半～16世紀前半に置かれるものか。

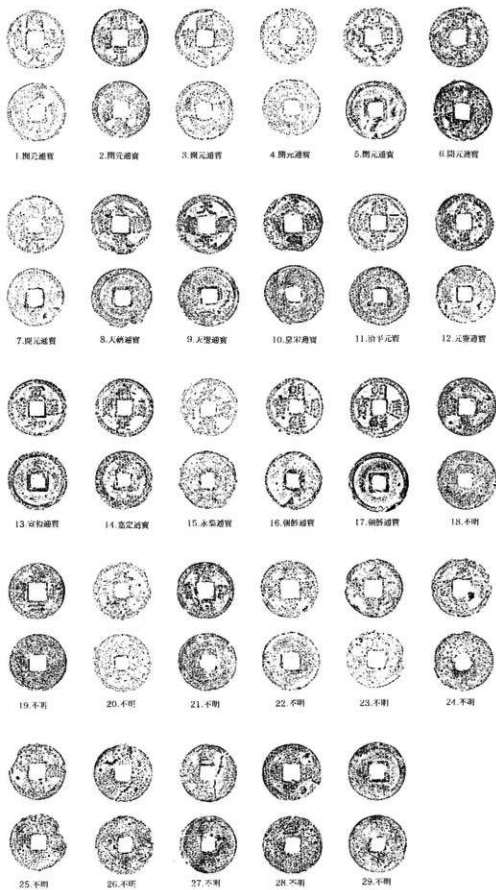
29枚の銭貨(第277図)は、銭文の判読可能なものは17枚であるが潰れにより不鮮明となるものが多い。この中では唐の武徳4年(621)初鑄の「開元通寶」7枚を最古とする。これに続く北宋銭には、「天禧通寶」、「天聖通寶」、「皇宋通寶」、「治平通寶」、「元豊通寶」、「宣和通寶」の各1枚の計6枚がある。南宋銭としては珍しく「嘉定通寶」1枚が認められる。この他、明銭には「永樂通寶」1枚、高麗の世宗5年(1423)初鑄の「朝鮮通寶」が2枚ある。銭文が潰れた12枚には21・25に示した「元符通寶」と思われるものもあり、その大半は北宋銭と推定されよう。



第275図 中世遺構 3. 実測図 (1/10)



第276図 中世遺構3出土摺鉢 (1/3)



第277圖中世遺構。3. 出土錢貨 (2/3)

No	国名	名称	初铸年(西暦)	備考
1	唐	開元通宝	武徳4 (621)	真書体
2	*	*	*	* 円孔×2
3	*	*	*	*
4	*	*	*	*
5	*	*	*	* 背文(月文上縁)か?
6	*	*	*	*
7	*	*	*	* 背文(星)か?
8	北宋	天禧通宝	天禧元 (1017)	*
9	北宋	天聖通宝	天聖元 (1023)	*
10	北宋	皇宋通宝	宝元2 (1039)	*
11	北宋	治平元宝	治平元 (1064)	篆書体
12	北宋	元豊通宝	元豊元 (1078)	真書体
13	北宋	宣和通宝	宣和元 (1119)	*
14	南宋	嘉定通宝	嘉定元 (1208)	*
15	明	永楽通宝	永楽6 (1408)	*
16	高麗	朝鮮通宝	世宗5 (1423)	*
17	*	*	*	*
18	不明	不明	不明	
19	*	*	*	
20	*	*	*	
21	*	*	*	元符通宝(北宋・元符元(1098)～)か?
22	*	*	*	
23	*	*	*	
24	*	*	*	
25	*	*	*	元符通宝か?
26	*	*	*	
27	*	*	*	
28	*	*	*	
29	*	*	*	

## 第Ⅲ章 総 括

---



### 第三章 総 括

#### 1. 竪穴の構造と変遷

都野原遺跡は、標高565～575mの独立性が高く上面は緩やかな斜面を形成する丘陵上に位置し、全長約400m、最大幅約150mの細長い丘陵のほぼ全面に弥生時代中期から古墳時代中期に及ぶ住居跡等の竪穴遺構が展開する。A～C区の総計約35,000㎡の各調査区から検出された竪穴は251基を数えるが、耕作により消滅したものと未調査の区域の竪穴を含めるとその数は350基を超えらると思われ。

A区において検出された230基の竪穴のうち調査を実施したもの83基、B区の12基とC区9基を合わせ計104基の竪穴を完掘した。A区の3基(27～29号)は削平等のため時期不明であり、B区の中世に属する2基の計5基を除く99基の竪穴は所属時期と規模・構造等がほぼ明らかとなった。また、A区の未調査の竪穴147基の中で採取された土器から時期判定が可能となった51基を加え合計150基、全体の約6割の竪穴は形成された時期が把握されたことになる。これらの竪穴は当然のことながら時期により形態・規模・構造や集落構成に違いを見せる。以下、床面積が20㎡以下を小、20～50㎡を中、50～80㎡を大、80㎡以上を特大規模の竪穴として区分し、各々の竪穴の時期毎の変遷とその概要を述べる(第278～280図)。

##### 弥生時代中期(第278図)

この時期から竪穴の出現が確認されたが、A区では縄文晩期末から弥生前期の土器も一定量出土しており更に溯る可能性があるものの、やや狭い範囲における比較的小規模なもの存在が想定されよう。弥生中期に属する竪穴は15基でその分布は主に遺跡の中心から西側に点在し集中しない。重複または近接する場合でも2基に止まり同時期に竪穴1～2基を単位とする集団(1家族か)2～3単位が相互に距離を置きながら展開し明確な集落構成が見られない所に特長が認められる。調査を実施したのは7基(214・252・261・262・266・268・272号)でありその全体規模や構造が判明したものは4基に留まる。平面形が円形をなすもの7基(92・168・169・190B・266・268・272号)、変則長方形を呈するもの1基(252号)、花卉形に近いもの1基(113号)、小形方形をなすと思われるもの1基(214号)の他は重複のためプランは不明である。

その中でも円形プランの竪穴は、いずれも浅く残りがやや不良であるが本来掘込みは浅かったと思われる。C区の3基に代表される様に中央に楕円形の炉跡とその外側に2本の柱穴が配され、主柱穴は壁と並行して6～10数本設けられる。これらは所謂松葉型<sup>3</sup>の範疇に入り、相伴する土器が少ないため断定はできないが弥生中期前半から中頃に属し得よう。竪穴は床面積が30㎡前後となるものが多いが、50㎡を超える大形の竪穴も認められる。これに伴う壟は現状では確認されておらず、竪穴を区画する溝等の施設もないようである。土器は下城式の甕と甕を主体とし、これに北部九州系や金堂母を多く含む肥後系の甕が含まれる。下城式土器には石英を多く含むことから大分川下流域産と判断されるものが多く、在地産の土器は少数に過ぎない。

次に出現するものが変則長方形及び花卉形を呈する竪穴で、これらに小形方形の付属施設と考えられる竪穴も伴う。弥生中期後半の所産で全体が判明したものはB区の252号の1基に過ぎないが、当該期の竪穴は本遺跡の南東約600mに位置するトグウ遺跡<sup>4</sup>と同様であるが、小形方形の竪穴の出現は機能分化の確立を示す。床面積が20㎡前後の中規模以下の主柱穴は2本となるものが多く、小形方形の竪穴の主柱は壁際に設けられる。252号は変則長方形で内側に突出部をもち、トグウ遺跡4号竪穴や上屋敷遺跡11号B竪穴は10本の主柱穴と中央に長さ1m前後の大きな炉跡が配され花卉形の1種と考えられる。これらの竪穴に伴う土器は須玖式系の甕・壺・高環・鉢と黒雲式系の甕や壺の搬入品が中心をなし、在地系の甕や下城式甕は非常に少なくなる。これは北部九州、大分川下流域、肥後地方との交流と人の移動が活発に行われたことを物語る。また、最近調査が行われた脇遺跡<sup>5</sup>では中



第278図 竪穴の変遷図. 1 (1/2,000)

期後半の堅穴住居跡10数基が確認されている。ここでは花卉型2基と変則長方形または方形の堅穴からなり、一時期3単位を超える中核的集落と考えられる。南九州において盛行する花卉型は県下では大洞町の舞田原遺跡、玖珠町陣ヶ台遺跡、日田市祇園原遺跡など内陸部で確認され、九州内陸部を南北に結ぶ情報伝達網がこの時期に活発化したことを示す。

#### 弥生後期前半～中頃（第278図）

この時期に属する堅穴は少なく、A区の中央付近に3（83・115・131B号）基存在するに過ぎない。本遺跡全体で5・6基前後に止まると考えられ、周辺でも石田遺跡の6・7号の2基が知られるのみである。従って、一時期1～2基の堅穴がかなりの距離を保ちつつ散発的に存在したことが想定される。前段階に比べ堅穴数は明らかに激減しており、これは単に集落の立地移動によるものではなく当地域全体の人口減少に起因するものと思われる。

調査を行った115号は長方形をなすと思われるが削平のため明らかではない。83号は約3×2mの小形方形、131B号は7×6mの長方形を、石田遺跡の6号は床面積6.2㎡の小形方形、7号は床面積が90㎡を超える特大の隅丸長方形をなし、堅穴の構成には以前と変化はない。これらの堅穴出土の土器は、在地系の甕や壺から構成され搬入品や外来系が前後の時期に比べ少ないようであり、交流の低下を示す。

#### 弥生後期後葉（第279図）

この時期に置かれる堅穴は方形又は長方形の18基が認められた。19・20号や30・33号のように2基前後（1単位）が一定の距離を置きつつ丘陵のほぼ全面に展開し、標高が最も高いA区中央北側の周辺には分布しないことから広場的空間であった可能性が高い。また、19・21号より北には堅穴が形成されないこと等から条溝もこの段階で掘削されたと推定される。これと同じく集団墓地の内部にこの時期以降の堅穴が分布しないことから、墓域の形成と若干の造墓が行われた可能性がある。従って、堅穴の配置や区画（条溝）および墓域の形成など集落構成の諸要素が揃うと共に高い計画性が窺える。そして、この段階より当地域の中核的集落の一つとなるが、これと同規模の集落は西側約2kmの板切遺跡群や西北約1kmにある小城原遺跡においても確認されている。また、これらの中核的集落の周辺には原田第Ⅲ遺跡など分村的集落や一時期2基前後からなる小規模遺跡の存在も知られる。よって、ここから当地域全体における人口の急増と集住化が始まると考えられよう。

調査を実施した堅穴は8基（19・21・30・33・46・54・256・271号）と少ないが、全体では大規模堅穴1基と中規模堅穴14基、小規模堅穴3基の計18基の構成となる。これに未調査の堅穴を考慮すると30基前後がこの時期に営まれていたと想定され、後期後葉を二分した場合でも6～7単位が同時存在したと考えられる。各堅穴の支柱は2又は4本で平面形はほぼ長方形・方形に統一される。大規模の54号を除き各堅穴の規模と構造に大きな差はなく、中規模の堅穴は全体的により等質的であると言える。54号（4本支柱）はその後の堅穴の重複と削平のため有力者の住居跡か集会場の性格か否かは明らかでないが、首長層の住居が本遺跡内に存在する可能性は否定し得ない。出土土器は大野川流域の粗製甕を含め在地系の胎土による甕・壺・高杯・鉢等が中心を占めるが、甕や壺には大分川下流域や肥後等からの搬入品と判断されるものが再び一定量認められるようになる。

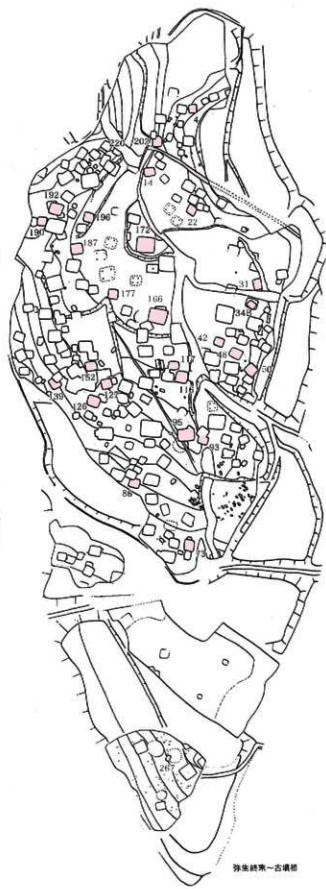
条溝・広場・墓地を含め集落の計画的配置と集住化現象は、これを指導・強固する権力の発揮を物語る。それまでは比較的緩やかであったと思われる権力の強化は、決して内在的なものではなく外的要因に起因するであろうことは、再び増加する外来系土器や搬入土器からも窺い知ることが出来る。

#### 弥生時代終末～古墳時代初（第279図）

堅穴は更に増加し一部は条溝の北側にも進出する。調査を実施したのは4・14・22・31・34B・42・48・50・172・202・220・267号の12基であるが、大規模2基、中規模21基、小規模5基の28基がこの時期に属し、全体では40基程度が存在していたと推定される。中規模堅穴の分布は前段階と同様であり2基前後を単位とするこ



弥生後期 (佐野)



弥生前期—古墳期

第279図 罫穴の変遷図。2 (1/2,000)

変わらず、前時期の堅穴を意識しその近辺に継続して営まれた可能性が高い。これは堅穴配置に規制が強く働いていることを示し、この規制は古墳前期後半に至るまで引き続く。集落の構成単位は更に増え9～15単位が同時存在したと考えられ、人口もこれに比例すると見られる。条溝はこの時期までは機能していたと判断されるが、大塚遺跡で確認された本遺跡の外周条溝の掘削はこの段階で行われた可能性がある。また、原田第Ⅲ遺跡や小城原遺跡、板切第Ⅱ遺跡等においても当該期の堅穴が認められるが、板切遺跡を除き現在整理中でありこの間の実態解明には今少し時間を要する。

中央北側の最も高い場所とその南側に大規模堅穴（172・166号）が形成され、両堅穴の周囲に他の堅穴は近接しない。この空間は後期後葉の広場が踏襲されたと見做されるが、その中央に設けられた大規模堅穴が一般の堅穴と性格を異にすることは明らかであろう。調査を行った172号は、四方に2本一對の主柱を配する8本主柱から構成され上層構造そのものが4本主柱の一般の堅穴と異なる<sup>20</sup>と考えられる。

各堅穴に伴う上層の器種構成は前段階を踏襲し在地系土器が主体を占めるが、甕・壺・高環には大分川下流域や肥後系及び北部九州系と思われるものが少なからず存在する。また、器面調整にタキキが出現することも新たな変化の一つであり、以前に増して交流の活発化による人と物の流入が看取される。

### 古墳時代前期前葉（第280図1）

堅穴の増加は止まらず、32基が前代の堅穴分布を引き継ぐように中央の広場を除く丘陵の全面に展開する。条溝の北側には7基が営まれ条溝は完全に埋没したと考えられるが、内側の堅穴がこれと平行することから溝に替わり掘削が設けられた可能性が高い。調査を実施した堅穴は25基であるが、全体では40基を超える堅穴が存在したものと推定され、集落の構成単位も20前後かなり集伴化が進み、大規模集落としてのスタートを切る。堅穴の構成は、特大1基（38号）、大2基（58・171号）、中18基、小11基からなる。小規模堅穴は集落の北辺部に集中する傾向を示し、その増加現象は集落内における各種の生産・加工活動が進んだことを示すものか。また、集団墓地における造墓活動も4号小児甕棺墓の存在から推定されるように活発化したことはほぼ疑いない。

特大の38号は広場の東側に位置し床面積約85㎡と本遺跡2番目の規模を有する。172号と同じく2本一對の8本主柱の構造をなし中央やや南に大形の丸跡が設けられ、鉄器が4点とやや多い以外は他の堅穴と出土遺物に差はない。大規模堅穴171号は、前段階の172号の南東に接し明らかにこれ意識した位置にある。主柱は四方と中心部の5本から構成され、四方の柱の柱間間隔は4.5・5.3mで一般の堅穴の約2倍程の距離がある。炉跡は削平のため不明であるが、土坑から土器と共に刀子が出土している。58号は未調査であるが検出面で9×7.5mの規模をもち、A区の中央やや東に位置する。これらの堅穴の特長は単に規模が大きだけでなく、その形成される場所と主柱構造にあるが出土遺物に明確な格差がないことは各時期を通じ変わらない。

内部調査を実施した各堅穴出土土器の基本構成は在来系の甕・壺・高環・鉢等を中心とし、赤色顔料を塗る各種の小形土器も依然として一定の割合を占める。しかし、甕・壺の胴部には球形化の傾向が現れと共に調整にタキキや内面に一部ケズリを施し器壁もやや薄くなるものがあり、前時期と同様に大分川下流域・肥後・北部九州からの外來系土器の流入と影響は継続して認められる。また、25号堅穴出土の石銅、51号出土の滑石製管玉、52号出土の碧玉製管玉、3号出土の製塩土器はこの段階から新たに出現するものである。これら出土する堅穴は比較的小形であり堅穴の規模との相関性は薄いが、新たな文物の流入は時代の変化に即応し得る当地域勢力の存在と他地域勢力との密接な関係を示すものと考えられよう。そして、この時期でもやや新しい段階で本遺跡と強く繋がる仏原千人塚1号墳（前方後方墳）が造営されたと推定される。

### 古墳時代前期中葉（第280図2）

本遺跡のピークにあたり、特大2基（39・100号）、大2基（41・189号）、中20基、小15基の計39基の堅穴からなるが、集落全体では50基以上の堅穴がほぼ全面に営まれていたものと推定される。A・B区における各堅穴の分布は前期前葉の堅穴と重複することもなくこれを意識しその周辺に形成される。集落全体の構成は依然として



計画的であり広場・集団墓地の在り方も前段階と基本的に変わず、当地域全体の大規模拠点集落として機能したものと考えられる。各堅穴は2基前後を単位とし、全体では20～25単位から構成されていたと考えられる。そして、この時期以降に再び大規模集落がこの地域に出現することはない。

39号堅穴は東半部分を失うが復原床面積は105㎡で本遺跡最大の規模をもつ。主柱は四方に2本一対と中心の1本の計9本からなり、中心柱の南側に2基の炉跡が平行して設けられる。100号は39号の南側40mにある長方形の大規模堅穴(80.1㎡)で東側短辺には出入口が突出して設けられる。主柱の構造は他と全く異なり、四方に2本1組とその間に1本づつの合計12本から構成される。内部のベッド状遺構とこれを区画する小溝は計画的に配置されること等も他に類例は認められず、一般の堅穴と大きく様相を異にする。

調査を実施した堅穴26基から出土した土器はこの時期に至り大きな変化を示す。甕や壺の胴部の球形化と底部の完全な丸底化、器面調整におけるヘラケズリの流行、高坏・鉢等における赤色顔料の消失である。この変化は布留式系甕や畿内系二重口縁甕及び山陰系二重口縁甕に代表されるように外的要因に大きく起因し、在来系土器もその影響を受け変化を来すと共に伝統的複合口縁甕もこの段階でほぼ最期を迎える。外来系には前期前葉と同様に大分川下流域を主に肥後系・北部九州系があるが、23号出土の蓋に代表される産地不明の土器も存在する。この他、注目される遺物には34A号出土の石罫や37号出土の滑石製勾玉などがあり、製塩土器もこの時期に最も多く見られる。これらの遺物に示されるように当地域の勢力はさらに成長し、私原千人家2号墳(前方後円墳)がこの時期に造営される。

#### 古墳時代前期後半(第280図3)

堅穴の急激な減少が始まる。特大・大規模堅穴は見られなくなり中6基、小7基の計13基と前段階の1/3前後となる。遺跡全体でも20基以内と推定され、集落の構成単位は6程度に減少したと考えられる。A区においては中央のやや広い空間を挟み南側に5基、北側に6基と大きく二分され以前の堅穴と異なる展開を示す。A区の南半部やB・C区では堅穴がまとまって形成されることなく、存在した場合でも1～2基が点的に分布するに過ぎないものと思われる。この急な減少は、それまで本遺跡に集中して営まれていた堅穴の半数を越える数が市川左岸流域の河岸段丘部や丘陵裾部に移動・分散したことに主因があると考えられる。この結果、集落としては中規模となり、地域の中心的集落としての位置・機能も失った可能性がある。

調査した堅穴の中で最も大きい175号の床面積は27.9㎡であり中規模堅穴が全体に小形化する傾向が認められる。このことも人口の更なる減少を物語ると考えられ、それまで集落を構成していた人の移動に伴い集団墓地内における造墓活動も終息した可能性が高い。

内部調査を行った10基の堅穴出土土器の構成は在地を中心とするが、大分川下流域と思われるものを始め外来系土器も一定量認められ、他地域との交流・交易に断絶はないが前段階よりやや低下した可能性がある。また、中原方形周溝墓はこの時期の所産と思われるが、墳墓に高塚墳は確認されていないことから在地勢力の後退も想定されようか。

#### 古墳時代中期(第280図4)

この時期に置かれる堅穴はA区の西側に3基(137・181・216A号)が点在し確認されたのみである。全体でもさらに3基前後の増加しか想定できず、一時期1又は2単位の散村的存続と考えられる。集落としては終焉を迎え、再び本遺跡に人の生活の痕跡が見られるのは中世後期になってからである。216A号出土の初期須恵器は他地域との交流・交易が依然として活発であったことを示す。また、古墳時代中期から奈良時代の集落は前述したように、市川の流域に点在することが部分的ではあるものの調査により確認されている。そして、地域全体として前段階と大きな格差がなかったであろうことは湯ノ上古墳<sup>185</sup>の存在からも窺える。同古墳は本遺跡の西側の丘陵に位置する円墳で石棺2基を主体部とする。これを最後に高塚墳の造営は見られなくなり、小規模な石棺墓や横穴墓等が散見される程度となる。



この間、本丘陵の大半は畑地として耕作されていたと考えられるが、奈良時代末から平安時代には尾根筋に沿って水路が開かれる。同様の水路は板切第Ⅱ・Ⅲ遺跡等においても確認されており、当地域の広い範囲で開発が行われた可能性が高い。

以上、堅穴を中心に本遺跡の変遷について述べて来た。さらに集団墓や土器・石器・鉄器・玉類などの遺物についても記述する予定であったが、これらについては紙数が尽き他日に期することとする。最後に本調査によって明らかになった点を箇条書きにし終りとしたい。

- 1、都野原川遺跡は標高570m余りの丘陵上に営まれた集落跡である。全長約400m、最大幅約150mの台地状の丘陵のほぼ全面から弥生時代中期～古墳時代中期の長期間に及ぶ堅穴住居跡が確認され、これほど長期間に及ぶ集落遺跡は県下においても他に類を見ない。各時期の堅穴は2基前後を1単位とする。
- 2、弥生時代中期から後期前半においては2～3前後の単位が散在し計画的展開は認められない。時期による堅穴の増減はあるが集落としての明確な計画的・独立性は見られず、墓地についても不明である。
- 3、弥生時代後期後葉に至り、桑津・広場・集団墓地が設けられると共に堅穴の計画的配置が認められる。堅穴は規制のもとに全面に展開し、集住化が始まり地域の拠点集落の一つとなる。
- 4、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけて集住化が進み、古墳前期中葉にピークを迎え数百人からなる大規模集落を形成する。各堅穴は規模による性格の違いが想定され集落の首長宅とも考えられる大規模堅穴も設けられる。そして、前期前葉には集落から見下ろす位置に前方後方墳（仏原千人塚1号墳）が造営され、中葉になり前方後円墳（同2号墳）が営まれる。
- 5、古墳時代前期後半になると集落規模は縮小し、堅穴の分布にも偏りが認められ堅穴も全体に小形化する。
- 6、古墳時代中期に至り再び2単位前後からなる散片的分布を示し、古墳時代中期以降の集落の中心は市川左岸流域に移動したものと考えられ、丘陵上部は畑地化した可能性が高い。
- 7、集団墓は集落の中央部東側に位置し、直径約30mの円形範囲の中に約50基が確認された。その大半の主体部は木棺墓と考えられ、これに少数の土槨墓と小児甕棺墓が伴う。これらは分布からa・b・cの3群に分けられ、各群は並行する成人墓2基を基本的単位としその周辺に成人～小児墓が展開することから血縁関係を同じくする集団の造営と考えられる。内部調査を実施した成人墓3基からは鉄剣が出土し、被葬者は集落内の有力構成員とその血縁者と推定される。その出現は弥生後期後葉に溯る可能性があるが、造墓活動が活発になるのは古墳時代に入ってからと考えられ、古墳前期後半には終了したものと思われる<sup>110</sup>。
- 8、土器を始めとする出土遺物には、各時期を通して大分川下流域・肥後・北部九州地域との交流及び交易と人の移動が看取され、当地域が九州の東西南北を結ぶ情報の中継基地としての役割を果たしていたと考えられる。
- 9、古墳前期の堅穴から出土した石鐮2点は破断面の研磨と穿孔から鏡片と同様に垂飾品として使用された可能性が高い。
- 10、弥生後期後葉から始まる集住化は、古墳時代前期中葉～後半まで認められるが、この現象は何らかの社会的緊張状況を反映しているものと考えられる。

集落としての継続性の高さは、本地域の豊富な水を背景とした弥生前期からの水稲耕作の安定性に基づくと考えられる。本遺跡を含め当地域の歴史解明のキーワードは、水と交易（情報）そして古墳時代以降これに馬が加わりと見られ、この地を掌握することは時の権力にとって大きな意味をもっていたと言えよう。



- 註1 松海里型の中でも石野博信氏の言う北牟田型に入る。石野博信「西日本・弥生中期の二つの住居型」『論集日本原史』1985
- 2 樺浦幸徳編『市第IV遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡』2000 久住町教育委員会。
- 3 後藤一重編『小路遺跡・上屋敷遺跡』2000 久住町教育委員会。
- 4 久住町大久住字青柳に位置し、平成11年度に久住町教育委員会が調査。
- 5 清水宗昭他編『舞田原遺跡』1986 大飼町教育委員会。大野川中流域にあり中期中頃～後半の花弁型が2基検出されている。
- 6 坂本嘉弘編『陣ヶ台遺跡』1999 玖珠町教育委員会。
- 7 土居和幸編『平成8年度 日田市埋蔵文化財年報』1998 日田市教育委員会。
- 8 宮内克己・高橋信武編『市第I遺跡・石田遺跡』1996 久住町教育委員会。後期初頃に営まれたと考えられ、7号竪穴からは小型韓鏡が出土。
- 9 \* 『板切遺跡群・小原田遺跡』1999 久住町教育委員会。
- 10 平成9年度の調査により弥生中期から古墳前期の竪穴約100基が検出された。
- 11 大野川中・上流地域の台地においてもこの時期から竹田市石井入口遺跡や千歳村鹿道原遺跡に代表される大規模集落の出現や中・小規模集落が多数認められ、集住化と人口の増加が指摘されている。しかし、この現象は爆発的增加ではあるが古墳時代前期前葉に至るといち早く終息し、以後台地上のみならず地域全体に集落の存在は希薄となる。ここに当地域の集落の在り方と大きく異なる点がある。
- 12 弥生後期後葉から古墳時代前期の当地域の土器編年については註9の板切遺跡群の編年に基づく。
- 13 本遺跡周辺の調査において首長層の住居跡と推定される竪穴・施設は確認されていないことから、この時期までの大・特大規模竪穴はその有力候補と見られる。
- 14 本遺跡の西側丘陵、湯ノ上古墳に隣接する位置にある。平成10年度の調査により、1辺約20mの規模もち箱式石棺を主体部とすることが判明した。
- 15 賀川光夫・鳥飼孝好『湯ノヒ古墳』1969 久住町教育委員会。
- 16 a群では1～2世代、b群では最大で4世代、c群では3世代の造墓活動が考えられる。b群の造墓は最も長い場合で約100年と推定されよう。

本書の校正中、別府大学名誉教授賀川光夫先生がご逝去された。賀川先生には発掘調査指導のみならず、本遺跡の保存についても多大のご尽力をいただいた。先生の深い学識に心から感謝申し上げ本報告書を捧げるとともに、ご冥福をお祈りいたします。合掌。

竪穴一覽表 1

号	長辺	短辺	床面積	柱柱	主軸方位	伊	土	法	壁	床	ベツト	時期	備考
1	(4.0)	(4.1)	21.6	2	N-65°-E	—	—	—	—	—	—	古前・新集	
2	5.6	4.4	23.10	4	N-64°-E	—	—	—	—	—	コ字形	古前・中集	部分発掘 埋没断記
3	4.7	4.3	16.53	4	N-72°-E	楕円形	南壁中央	—	全面	—	—	古前・前集	
4	5.0-5.3m	方形	15.21	4	N-57°-E	平壁形2箇所	—	—	—	—	—	古前・前集	埋没断記 出入口 (ハンゴ) ?
5	3.4	2.8	8.91	2	N-26°-E	楕円	南壁中央	—	—	—	—	古前・中集	
6	4.7	3.6	15.75	2	N-39°-E	—	—	—	—	—	—	古前・前集	埋没断記・途中断記
7	4.2	(3.2)	—	4? ?	—	—	—	—	—	—	—	古前・前集	
8	3.1	2.8	7.00	2	N-57°-E	—	—	—	—	—	—	古前・前集	
9	4.2	2.9	11.48	2? ?	N-13°-E	—	—	—	—	—	—	古前・前集	
10	5.7	4.9	24.84	4	N-60°-E	中央 円形	南壁中央	—	—	—	—	古前・前集	
11	2.8	2.5	5.25	0	—	—	—	—	—	—	—	古前・中集	
12	3-3.2	方形	7.15	1	—	—	—	—	—	—	—	古前・後集	
13	3.8	3.0	9.80	2	N-66°-E	中央 楕円状	南壁中央 3	—	—	—	—	古前・中集	埋没断記
14	5.4	4.1	24.90	4	N-43°-E	中央 やや南 楕円形	南壁中央 不整形 1	—	—	—	—	古前・中集	埋没断記
15	4.6	3.5	14.32	2	N-88°-E	中央 不整形	伊の北西 1	—	—	—	—	古前・前集	埋没断記
16	4.2	3.7	14.76	2	N-83°-E	—	—	—	—	—	—	古前・前集	埋没断記
17	4.5	3.1	12.80	4	N-88°-E	中央 小楕円	—	—	—	—	—	古前・前集	
18	6.1	5.2	24.85	4	N-80°-E	中央 やや南 不整形	南壁中央	—	—	—	—	古前・中集	入口あり
19	4.9	4.6	21.15	4	N-82°-E	中央 不整形	東壁中央	—	—	—	—	古前・中集	部分発掘
20	5.2	4.2	17.48	4	N-87°-E	中央 円形	十東所, 西側 3	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
21	5.0	4.5	20.16	4	N-86°-E	中央 楕円	南壁中央 楕円状	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
22	4.6-4.9m	方形	21.80	4	N-88°-E	中央 やや北	—	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
23	3.6	3.4	9.00	1	—	—	—	—	—	—	—	古前・中集	3号に切られる 埋没断記
24	3m	方形	8.40	0	—	—	—	—	—	—	—	古前・中集	5・小刀
25	(3.6)	(1.8)	—	2	N-68°-E	中央 楕円	不明	—	—	—	—	古前・前集	石壁
26	2.6	2.3	5.00	—	—	—	—	—	—	—	—	古前・中集	埋没断記・小楕円
27	5.6	(4.0)	(20.40)	4	N-76°-E	不明	不明	—	—	—	—	不明	
28	3.6	3.4	(10.88)	2	N-79°-E	中央 円形	北壁中央 不整形	—	—	—	—	不明	
29	(3.3)	(2.6)	—	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	不明	
30	(5.2)	5.6	—	2	N-74°-E	中央 南側 楕円状	不明	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
31	(4.2)	3.2	—	(4)2	不明	中央 南側 楕円状	不明	—	—	—	—	不明	
32	5.4	4.7	22.68	4	N-68°-E	中央 やや南側	南壁中央 楕円 2	—	—	—	—	古前・中集	埋没断記
33	5.2	4.5	(22.40)	2	N-79°-E	不明	不明	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
34A	6.0	4.9	27.36	4	N-80°-E	中央 楕円	南壁中央	—	—	—	—	古前・中集	石壁・装束 2
34B	4.2	3.4	12.48	2	N-8°-E	不明	不明	—	—	—	—	古前・後集?	
35	3m	方形	7.56	2	N-10°-E	—	—	—	—	—	—	古前・中集	装束 1
36	3.8	3.0	10.08	2	N-84°-E	中央 不整形	南壁中央 1	北西側 1	—	—	—	古前・後集	
37	7.5	6.8	46.72	4	N-77°-E	中央 やや南 不整形	南壁中央	—	—	—	—	古前・中集	装束 4
38	9.4	9.0	84.80	8	N-71°-E	中央 南側 円形	南壁中央	—	—	—	—	古前・前集	装束 4 埋没断記
39	10.8	(10)	(108)	9	N-69°-E	中央 やや南 楕円 2	不明	—	—	—	—	古前・中集	最大規模 装束 4 柱穴内断記
40	6.1	(4.2)	(36m?)	4	N-64°-E	不明	不明	—	—	—	—	古前・後集	
41	8.6	6.7	54.40	4	N-71°-E	中央 やや南 不整形	南壁中央 長方形	—	—	—	—	古前・前集	柱穴内断記 埋没断記
42	4.9	4.3	16.28	4	N-80°-E	中央 不整形	南壁中央 やや南	—	—	—	—	古前・中集	
43	4.8	4.0	16.20	2	N-65°-E	?	ナシ	全面	—	—	—	古前・中集	装束 1
44	5.2	4.4	21.42	4	N-81°-E	中央 やや南 円形	南壁中央 半円	—	—	—	—	古前・前集	出入口 埋没断記
45	(4.5)	3.0	(11.34)	2	N-73°-E	中央 円形	—	—	—	—	—	古前・中集	
46	4.5	(3.8)	(13.26)	2	N-15°-E	不明	不明	—	—	—	—	古前・後集	45号・46号に切られる
47	(5.5)	4.2	(17.26)	4	N-81°-E	中央 楕円状	ナシ	—	—	—	—	古前・中集	装束 3 装束 穴内 埋没断記
48	5.9	4.9	24.06	4	N-86°-E	不明	南壁中央 半円状	—	—	—	—	古前・後集	
49	7.5	6.4	47.25	4	N-60°-E	楕円状 2	南壁中央	—	—	—	—	古前・前集	埋没断記
50	5.6	5.4	28.60	4	N-16°-E	楕円 ナシ 裏 穴付	東壁中央 不定形	—	—	—	—	古前・後集	柱穴内断記
51	4.9	3.8	16.90	4	N-6°-E	中央 円形	東北側 楕円状	—	—	—	—	古前・前集	50号に切られる
52	(3.2)不明(6)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	古前・前集	出入口 埋没断記
53	9.9	4.6	19.35	4	N-81°-E	中央 楕円	南壁中央 楕円	—	—	—	—	古前・後集	火山灰 埋没断記
54	(8.0)	(6.5)	不明	4	N-28°-E	—	—	—	—	—	—	古前・後集	
55	5.3	(2.2)	不明	不明	不明	不明	不明	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
56	4.3	3.3	9.88	2	N-66°-E	中央 不整形	東北側 楕円	—	—	—	—	古前・後集	埋没断記
57	4.3	(4.0)	(16m?)	2	N-76°-E	中央 円形	ナシ	—	—	—	—	古前・前集	出入口 埋没断記

竪穴一覽表 2

号	長さ	幅	深	土柱	主軸方位	伊	土	坑	竈	溝	ベツド	時期	備考
63	(5.5)	(4.2)	20.20	1	—	ナシ	ナシ	ほぼ全周	ナシ			古新・中葉	不定形竪穴
77	2.8	1.4		4	N-84°-W	ナシ	—					—	遺棄?
100	10.7	8.2	80.19	8	N-84°-E	中央やや南 横円	半円状	全周	四方			古新・中葉	入口 小型瓦葺き 1 裏掘土
105	(1.7)	5.3	不明	4?	不明	不明	不明	ナシ?	不明			弥生・中葉	埋戻前部記
171	(9.8)	(8)	(56.00)	5	N-88°-E	不明	南壁側中央 長方形	全周?	不明			古新・前葉	土坑内葬記
172	8.9	7.8	69.73	8	N-68°-E	不明	不明	ナシ	ナシ			弥生終葉~古墳初	入口?
174	(2.7)	5.8	—	4	不明	不明	不明	北側のみ	不明			古新・中葉	
175	6.5	4.8	27.90	4	N-70°-E	不明	南壁側中央 円形	北半部	不明			古新・後半	跡群 1
178	(2.4)	4.3		4	N-66°-E	不明	不明	全周?	不明			古新・前葉	
201	3.5	3.1	9.86	2	N-84°-E	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ			古新・後半	202号を切る
202	5.8	5.4	27.40	4	N-55°-E	中央 円形	東壁側中央 円形	ナシ	ナシ			弥生終葉~古墳初	手掘 1、埋戻前部記
209	5.2	4.4	(20.16)	4	N-88°-E	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ			古新・中葉	埋戻途中部記
210	4.2	3.6	14.00	2	N-66°-W	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ			古新・後半	209号を切る
211	4.4	4.3	15.96	ナシ	—	中央やや南 横円	ナシ	ナシ	ナシ			古新・中葉	石巻丁 1
212	(4.6)	(4.2)	(16)	2	N-3°-E	ナシ	東壁側寄 横円	西から裏側一面のみ	ナシ			古新・前葉	埋戻前部記
213	5.1	4.0	17.76	2	N-78°-E	中央 円形	ナシ	ナシ	ナシ			古新・中葉	埋戻途中部記
214	3.5	3.2	(10.00)	不明	—	—	—	ナシ	—			弥生・中葉	
215	6.0	4.2	不明	2?	不明	不明	不明	不明	不明			古新・	編み口、埋戻前部記
216	5.0m	方形	23.03	4	N-87°-E	ナシ	南壁側中央 円形 2	ナシ	ナシ			古新・後半	
217	6.1	5.1	27.36	4	N-89°-E	中央やや西	南西隅 横円	ナシ	ナシ			古新・後半	部分積層、天竺次、埋戻途中部記
227	2.1	1.7	3.00	不明	—	—	—	ナシ	—			古新・前葉	土坑
218	(2.6)	4.2		4	N-88°-E	不明	不明	全周	不明			古新・中葉	
219	5.4	4.7	(22.00)	4	N-86°-E	ナシ	南壁側中央	東壁側のみ	ナシ			古新・中葉	跡群 1、埋戻前部記
220	(2.5)	(2)		4?								古新・前葉	
251	4.6	4.0	15.12	2	N-88°-E	中央やや南 円形	南壁側中央	全周	南西隅			古新・中葉	埋戻前部記
252	5.0	4.1	18.25	2	N-84°-E	ナシ	—	ほぼ全周	東側・西側			弥生・後半	定形長方形、埋戻前部記
253	3.9	3.0	9.58	ナシ	—	—	—	円形 2	全周			古新・前葉	
254	6.0	5.0	25.65	4	N-70°-E	中央	南壁側中央	全周	四方			古新・中葉	
255	(3.8)	3.0	不明	不明	不明	不明	不明	ほぼ全周	不明			古新・後半	
256	5.3	4.8	19.52	4	N-88°-E	中央寄寄	南西隅	全周	ナシ			弥生・後半	埋戻途中部記
257	(5.8)	5.4	不明	4	不明	不明	不明	全周	北西隅			古新・中葉	
258	4.4	(1.4)	不明	2	N-80°-E	不明	不明	全周	不明			古新・中葉	
259	5.5	4.6	(22.00)	4	N-23°-E	不明	不明	全周	不明			不明	
260	5.0	4.6	(22.00)	4	N-82°-E	中央やや南	不明	ナシ	不明			古新・中葉	
261	—	—	—	—	—	不定形円形	—	ナシ	—			弥生・前葉	
262	(1.5)	3.0	—	2	N-75°-E	不明	不明	北寄壁	不明			弥生・中葉	
265	6.0	5.5	31.90	4	N-35°-E	中央やや南 横円形	南壁側 不定形	ナシ	ナシ			古新・前葉	埋戻途中部記
266	円形	(55.00)	17	—	中央 横円形	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ			弥生・前半	狭入片 刃石群 1
267	2.8	2.0	5.46	4?	不明	不明	不明	ナシ	ナシ			弥生終葉~古墳初	
268	円形	(32.00)	14	—	中央 横円形	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ			古新・中葉	
269	(3.8)	(2.8)	不明	4?	不明	不明	南壁側中央	ナシ	不明			古新・後半	
270	(4.6)	(3.5)	不明	4?	不明	不明	不明	南壁側のみ	南側と壁			古新・前葉	埋戻前部記
271	8.6	6.6	43.55	4	N-26°-E	中央やや南 円形	南壁側中央 不定形	ナシ	ナシ			弥生・後半	
272	円	(20.00)	8	—	中央 横円形	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ			弥生・後半	
273	5.0	3.8	18.48	4	N-50°-E	中央 不定形円形	南壁側中央 不定形	ナシ	南西隅			古新・中葉	